

21世紀フォーラム

No.78

特別号「いま、地域に生きる」といふこと

財団法人政策科学研究所

2001年6月

各 位

財団法人 政策科学研究所

『21世紀フォーラム』送付のご案内

拝 啓

入梅の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より当研究所の事業につきましては、格別のご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、当研究所にて制作発行をいたしております文化広報誌『21世紀フォーラム』特別号をお送りいたします。今回は21世紀フォーラムの中で最も長い活動歴をもつ加藤秀俊先生を座長とする「日本の村の将来」研究会の研究記録の中から、今後の地域経営のヒントとなるものを厳選し、さらにこれまでの活動を振り返っての総括座談会を加えて1冊にとりまとめました。地域の活性化問題にとどまらず、「暮らしのあり方」、「美しい日本」の景観保存のあり方、伝統や文化の継承・再生・再創造へのヒント、さらに、今後の日本のゆくえ、日本人の生き方を考える一助となれば幸いです。何卒ご高覧いただきますようお願い申し上げます。

今後とも、末永くご愛読いただきますようお願い申し上げます。

敬 具

裏面のアンケートにお答えください。

アンケート回答者 お名前 _____

ご所属 _____

●21世紀フォーラム・特別号 読者アンケート●

この度は、(財)政策科学研究所文化広報誌「21世紀フォーラム・特別号」をお読みいただき、ありがとうございました。今後の編集方針の参考とさせていただきたく、下記のアンケートにお答えいただければ幸いです。お手数ではございますが、本用紙をご記入後、下記FAX番号までご送信いただけますようお願い申し上げます。

(1) 本誌をお読みになったご感想をお聞かせください (内容・体裁等)。

--

(2) 本誌に対するご意見、ご要望、掲載を希望されるテーマなどがありましたら、お教えください。

--

●現在の住所変更または送付先を変更されたい方は下記にご記入ください。

お名前：	ご所属：
ご住所：〒	お肩書き：
電話番号： ファックス番号：	E-mail：

【FAXの宛先】21世紀フォーラム制作事務局 担当：小浜・藤澤・高取

FAX : 03-3581-2143

まえがき

世紀の敷居を越えたいま、日本および日本人はどこへ向かおうとしているのであろうか。

二十一世紀フォーラムは、一九七八年、二十一世紀の日本人の針路を多方面から議論する有識者懇談会として発足した。エネルギー、外交問題、思想・哲学、また教育問題等を分科会形式で議論してきたが、なかでも最も長い活動歴を持ち、またそのユニークな議論の切り口で世評も高く運営されてきたのが、加藤秀俊氏を座長とする「日本の村の将来」研究会である。

この研究会は当初、社会学の加藤秀俊氏、民俗学の宮本常一氏、文化人類学の米山俊直氏の三人で始められ、その後、農業経済や人類学、民俗学の研究者が次々に加わり、活発な議論を展開してきた。

活動の中心は、地方の活性化で実績を上げている実践家やリーダーをゲストに迎え、東京で議論を行うものと、年に一回、地域運営の好例の現場を訪問して、現地見学、ヒアリング、討論を行うものとの、二段構成になっている。

今回、これらの研究会記録から今後の地域経営のヒントとなるものを選び、また巻頭にこれまでの活動を振り返っての総括座談会を加え、「二十一世紀フォーラム」誌特別号として編集することとなった。この記録を見れば、過疎や衰退を言われつつも、地域の再生を念じ日本の村で数え切れないほどの真摯な試み、工夫が行われていることがわかる。さまざまな営み、高いところさし、また、こんな人がいたのかという発見もあるであろう。町や村の活性化問題にとどまらず、「暮らし」のあり方、「美しい日本」の景観をどう保存するか、伝統や文化の継承と再生・再創造へのヒント、またさらには、今後の日本のゆくえ、日本人の生き方を考える一助となれば幸いである。

平成十三年三月

財団法人 政策科学研究所

■加藤秀俊部会メンバー

加藤秀俊

(中部高等学術研究所所長)

安達生恒(故人)

川喜田二郎

(東京工業大学名誉教授)

神崎宣武

(宇佐八幡神社宮司)

佐々木高明

(国立民族学博物館名誉教授)

須藤護

(龍谷大学教授)

高橋潤一郎

(慶應義塾大学教授)

舛田忠雄

(山形大学教授)

宮田登(故人)

宮本常一(故人)

宮本千晴

(マンダローブ植林行動計画スタッフ)

米山俊直

(大手前大学学長)

永野芳宣

(財)政策科学研究所所長

小浜政子

(財)政策科学研究所主席研究員

目次

21世紀フォーラム「いま、地域に生きるとういふこと」

I

座談会 「村の将来と日本人」

5

加藤秀俊・川喜田二郎・神崎宣武・須藤 護・舛田忠雄・
宮本千晴・米山俊直・永野芳宣・小浜政子

II

むらからの声、まちからの声

宮本常一の民俗学と農村振興

35

神崎宣武・宇佐八幡神社禰宜

農業に明日はあるか

49

〔秋田県羽後町貝沢集落の取り組み〕高橋良藏・農業作家

深みある町づくりをめざして

58

〔岩手県藤沢町の実践〕佐藤 守・岩手県藤沢町町長

博多万能ねぎと地域活性化

68

〔福岡県朝倉町の試み〕

森部賢一・福岡県朝倉町農業組合次長

夢と誇りの持てる雪国山村の創造

77

〔山形県朝日村のイベント地域づくり〕

清野美智夫・山形県朝日村企画課博物館センター係長

過疎山村の再生

87

安達生恒・社会農学研究所所長

情報化による農業の再生

96

田上隆一・農業情報利用研究会事務局長

水清き杉のふるさと

110

〔山形県金山町の町づくり〕岸 宏一・山形県金山町町長

III

ふるさとに生きる (現地見学会)

土着の精神に根ざして

〔秘境 秋山郷はいま〕 高橋彦芳・長野県栄村村長

127

生活の器としての町づくり

中西 通・丹波古陶館館長、兵庫県篠山町商工会会長

140

情報発信地としての農村

〔秋田県大湯村の村づくり〕 宮田正旭・秋田県大湯村村長

151

漁業と観光のはざまでの町づくり

〔伊豆・松崎町〕 山本源一・静岡県松崎町助役

162

土と炎と緑のふるさと越前陶芸村

〔福井県宮崎村〕 岩原 昇・福井県宮崎村村長

177

農業に新しい風を

宮本慶一・(有)グリーンクラブ代表、鶴山正行・AGCAI農園

185

ふるさと金山町に生きて

岸三郎兵衛・林業家、渡部俊治・大工職人、
栗田和則・「暮らし考房」主宰

198

星と神楽の里

〔岡山県美星町〕

杉原 昇・岡山県美星町町長、神崎宣武・宇佐八幡神社禰宜

212

神楽とワインの里

〔岩手県大迫町〕

村田柴太・岩手県議会議員、元大迫町町長、(株)エーデルワイン代表取締役

225

白山ろくの農民の知恵と樹皮文化

織田寛嗣・石川県立白山ろく民俗資料館館長

238

激動期の農業と農村を見つめて

〔第六次産業の創造〕 坂本多旦・(有)船方総合農場代表取締役

252

「日本の村の将来」研究会全リスト

266

● 関連年表

270



I

村の将来と日本人

座談会

■出席者

加藤秀俊

(中部高等学術研究所所長)

川喜田二郎

(東京工業大学名誉教授)

神崎宣武

(宇佐八幡神社宮司)

須藤 護

(龍谷大学教授)

舛田忠雄

(山形大学教授)

宮本千晴

(マングローブ植林行動計画スタッフ)

米山俊直

(大手前大学学長)

永野芳宣

(財)政策科学研究所所長)

■司会

小浜政子

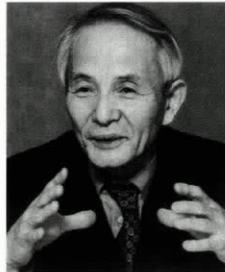
(財)政策科学研究所主席研究員)

百年の計は地方にあり?

小浜 百年の計は地方にありというの
もいささか大げさな物言いですが、地方
の時代と言われて久しい割には、その言
葉が空回りをしてきたということがずつ
とあったかと思うのです。それが昨年よ
り、長野県や栃木県のように多選知事が
新人候補に敗れるという構図が現れ、地
方に新しい風が吹き始めたのではという
期待がもたれています。また、様々な病
弊が噴出した観のある日本の閉塞状況を
変えるものが地方から生まれるのではな
いかと期待されている向きもあるように
思います。こうした新風が巻き起こった
のがたまたま世紀の転換期にあたりまし
たので、「百年の計」という柱をまず考
えてみました。

この「日本の村の将来」研究会の中
でも、文化や物資の交流、生活の単位区分
として旧藩や旧村へもつと目を向けて
は、という話がたびたび出ております。
もちろん今後国民国家という枠組みが

消失するわけではありませんし、また二
十一世紀は地域が主導権を取るというよ
うな単純な言い方はできませんが、これ
までの研究会を振り返りますと、たとえ
ば岩手県藤沢町の佐藤町長さんのお話
に見られるように、非常に進取の気性、創
意工夫に満ちたベンチャー精神をもって
町の経営にあたっておられるところが少
なからずあり、こうした例が社会全体に
風穴をあける期待は大きいと思うのです
が、まずこの点からいかがでしょうか。



米山俊直氏

米山 国全体が非常に大きな転換期に
来ているということは間違いないと思う
のです。たとえば中央省庁の再編です。
また、銀行は銀行で、商社は商社とい
うように護送船団を組んでいるというこ

れまでの護送船団方式で動いてきたものが解体した。そこで、いたるところでほころびが出てきて、警察官が万引きをしたり、消防団員が放火をしたりという話があちこちから出てきている。こうした末端のモラルの崩壊は相当部分国家体制そのものの変化に由来していると思いません。

金融についても、バブルエコノミーの崩壊、それに連動した様々なリストラが進行している。また、世界的に見てもソビエト連邦の崩壊により、社会主義や共產主義が描くバラ色の未来というものが完全に虚構だということが明らかになった。共産党はまだ健在ですが社会党は凋落し、したがって、従来の労働界、労働組合組織というものもほとんどアウトになっている。

教育も同様です。独立行政法人化により、旧帝国大学ですら抜本的な改革を迫られている。末端の初等教育でも従来型の詰め込み教育では限界がきているということは最近よく言われますが、といっ

て代案はなく、依然としてまだ競争的な環境が支配的です。

つまり社会全体が非常に大きな転換期、移行期の混沌状況にあると思うのです。

私はこうした状況を説明するのに、このごろ、よく福澤諭吉の「一身ニシテ二世ヲ経ルガ如シ」を引用しています。福澤諭吉の「二世」は封建時代と文明開化の時代の二つですが、われわれは一身にして三世を住むのではないか。戦前、戦後、それから今後は——情報革命と呼ぶのが正しいかどうかはよくわかりませんが——情報格差が開いてしまうような、高度に情報化された時代になっていくことは間違いないでしょう。そうなる、といわゆるコミュニティもかなり変質してくると思うのです。

コミュニティというのは基本的にはフェイス・ツー・フェイスで成員の顔がわかっている、身近な範囲を指しますが、そうではなくなって、インターネットによって面識のない人、遠方の人と緊密な

関係を結ぶことがいまや不可能ではなくなっています。それも世界的に起きていくということになると、たいへんな転換期にあると言えます。

そこで話を村に戻しますと、村そのものがこうした変化を受けてこれからどういうふうになっていくかというところに結びつけて考えなければいけないのではないかと感じがします。



川喜田二郎氏

川喜田 米山さんは非常に本質的なことを言っておられる。要するに座標軸の転換が目下進行中ということです。この点はぜひ話題の重要な中心として強調したいと思います。

米山 また、国に対してのイメージも戦前われわれが軍国青年・少年だった頃

とは全く違ってきています。民主主義下で半世紀ずっとやってきたわけですから。

かつては万世一系の、つまり「天皇を中心にした神の国」ということが常識だったわけで、一般庶民の国についての意識はそうしたものだっと思えます。ところがそうではないということがだんだんわかってくると、網野善彦さんにならえば、日本という国名そのものが、ある時から「つくられたもの」だというふうにもなります。

さらに、三内丸山遺跡の大発見がありました。日本文明が三内まで遡行できるとすれば、日本列島には古代オリエントと同じく五千年前から文明があったという事になります。今のわれわれが知っている歴史がそっくりそのままに乗っかるブラックボックスが出てくる。そうしたブラックボックスが開けば、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』でおいまいになって行き詰まっていた箇所に一気に展望が広がって、歴史学者、民俗学者は

ものすごく喜ぶのではないのでしょうか。新しいジエームズ・フレイザーが出てくるかもしれません。それまで柳田国男や南方熊楠あたりが「ああでもないこうでもない」と推論していた仮説が、三内丸山につながって、ものすごく面白いことになるのではないか。これは現在のところあくまで想像の世界ですが、私はそういうふうと考えています。

「コミュニケーションの疲弊



加藤 秀俊氏

加藤 コミュニティの話題に戻りますと、いま私は東京を離れて埼玉県浦和で仮住まいをしています。ものすごく最近の体験から言いますと、何という違いかと驚いたのは、やはり近隣組織の強さと

親しさです。二、三回しか会ったことのない人たちが大部分なのですが、町内会が健全に動いていますし、驚き且つ嬉しかったのは、先日、夜に散歩していたら、ほんの二、三回しか会ったことがない近所の人が、「散歩ですか、一杯やりに行きますか」と言っただけで声を掛けてくれたことです。朝会えば「おはようございます」と言うし、道で会えば「こんにちは」と言う。これは当たり前のことかもしれませんが、私の東京都内での生活では過去二十年間そういうことはありませんでした。

京都市内ですと、「おはようございます」「こんにちは」、また、夜ばったり会って「ちよつと一杯やりに行きませんか」というやりとりはまだありますね。

私は、決して、地域社会の元気はなくならないと思うのです。元気がなくなっていると思っているのは、大都市、とりわけ首都圏に住んでいるインテリの頭のなかでそう構築しているだけであって、実際、私は地域社会というのは相当

強固に存在していると思います。

また、村レベルで日本の民衆が不幸であるかといったら、私は決して不幸であるとは思わない。不幸だと思うのは、われわれがそう思っているだけであって、デパートもない、映画館もない、オペラがないなどと言われますが、実際に幸せかどうかと問われれば、地域社会、村社会の人のほうが自ら幸せだと思つていると思います。一人当たりの収入は少ないかもしれませんが、そんなことは幸福とはあまり関係がない。こういつたことを最近の体験から思うようになりました。

米山 コミュニティが生活しているという事です。

神崎 ただ、十年前、二十年前と比べてみると、日本の村は明らかに疲弊しているところが多いと思います。AのコミュニティとBのコミュニティを比べれば、一方より他方がもつといきいきしていると言えるかもしれませんが、それは比較の問題であつて、一つのコミュニティ

イを取りあげて過去へ遡つてみると、やはり疲弊していると言わざるをえないように思います。

もしかしたらインターネット的な新しいコミュニティが自然発生するのかもしれませんが、旧来のコミュニティ、すなわち片仮名の「ムラ」で表わされるところの共同体組織は後退していると思うのです。



神崎宣武氏

この場で言う村のコミュニティの基本は江戸時代にあります。江戸の二百数十年の内国政治は世界的に見ても例外的だということはこれまでも言われてきていますが、江戸時代のコミュニティの単位というものは、合併、分割、離散がほとんどおこなわれていないのです。行政組織

であれ、あるいは自治組織であれ、コミュニティは二百数十年安泰な状態で継続している。ですからそこでコミュニティというの是非常に強固で、逆に言うとは排他的にもなる。こうした状況であつたのが、明治以降緩やかに変わつてきて、いまやかなり急速に変わつてつあるというふうに見ることが出来ます。

加藤 それはおっしゃる通りだと思います。私が申し上げたのは同時代的な違いですが、歴史軸で見るとたしかにコミュニティは疲弊していると思います。

風景としての農村、
風景としての漁村はあるが…

神崎 江戸時代という日本の特殊な歴史を考えると、閉ざされた中での文化的な醸成期間があまりにも長かつたために、そこから村のコミュニティなるものの概念が生じたのでしょね。共同幻想のようなものかもしれない。ですから、コミュニティの組み替えは、時代に即し

て当然進んでいいはずです。

日本の町村合併が非常に大きく進んだのは、昭和二十七年から三十三年ぐらいのあいだです。そこで組み替えをされて合併した町村が、やつといま一つのコミニティとしての機能を持ちました。その姿は江戸時代からの流れからみると後退、衰微でしかないかもしれませんが、新しい融和としてやはり評価しなければいけないと思います。世代交代に三十年かかったわけです。学校も合併して、その卒業世代が壮年層に成長しているという事です。

このようにちやうど成熟してきたのに、最近ふたたび広域合併の話が持ち上がっています。すると、また新たなコミニティづくりの努力をしなければいけない。こうした繰り返しが必要かどうか、経済合理的の論法もさることながら、政治はもつと考えなければいけないと思います。広域合併の問題は、これからしばらく、日本の村にとつていちばん大きな検討事項になるような気がします。



舛田忠雄氏

舛田 私は山形にいて県内あちこちに
出かける機会が結構ありますが、山形市
を離れると見渡す限り田んぼが連なり、
庄内の海岸に行けばまさに漁村としての
風景があるわけです。しかし村の中へ入
つてみますと、風景としての農村はある、
風景としての漁村はあるけれども、そこ
に住んでいるのが農民なのか漁民なのか
というと、全く違っているというのが事
実です。

かつて庄内の漁民は北海道まで出稼ぎ
に行くというような大変優秀な技術をも
っていたのですが、今はもうそういうた
技術は完全に廃れてしまっている。何を
しているかという、近場の大きな町へ
仕事に行っているという状況です。

ですからコミニティをその構成員の
面から考えてみますと、地域での人間関
係を充足していくことは、青年たちには
もう期待できない。若者が地域のなか
にほとんどいませんし、外に勤めに出て
いる三十代、四十代層というのはほとんど
地域に対するアイデンティティを持って
いません。山形で、地域のなかで元気に
動いているのは、農村、漁村を見てい
かぎり、じいさん、ばあさんたちである
ということが言えます。

また、コミニティとしての地域のま
とまりをどの範囲に求めていくかとい
うと、小さな集落単位でしかまとまりき
れないというのが今の状況です。

かつて社会教育の必要性が叫ばれたよ
うに、今さかんに生涯学習が喧伝されて
いますが、そうした流れのなかでクロ
ズアップされるのは町の公民館あるいは
地区の公民館というよりはむしろ、集落
の公民館、集会所であつて、これをどう
活性化していくのかということに焦点
が据えられるべきでしょう。

私などが山形を見ると、「元氣ないな」というのが実感としてあります。

神崎 コミュニティの活力を維持する方法には、日本のみならずいろいろな民族の社会で言えるのでしょうか、一つは祭りがあると思うのです。これが戦後著しく変わってしまいました。

ここで変な理屈を戦後の文化人、学者が付け過ぎたと思います。どうということかというと、祭りが宗教行事であるから云々。ということ、日本の村社会を考えたらありえないことなのです。たとえば、どういう神様を祀つてあるか知らなくて神輿を担ぐわけですから。これは宗教行事とは別の解釈で認めていかなければいけないし、それを堂々と伝承していかなければいけないはずです。それを言うことに後ろめたさを感じるところが問題です。

結果的に、その空隙を埋めるように、クリスマス、パレンティンデーなどがより盛大になる。それが悪いとは言いませんが、一方で村のコミュニティの核にな

る祭りを非宗教行事として位置付けていく努力を怠つた。それがコミュニティの衰退の一因と言えます。

もう一つ大きな維持・活力源になったのは消防団だと思えます。この自衛消防団というのが日本の村落社会で非常にうまく機能しておりました。これは江戸期まで遡れば若者組にも通じ、明治以降軍隊の組織法も取り入れて変形発展したものです。

この自治消防団組織について、軍国主義的な強制訓練だという妙な理屈がはびこることになり、いま大きく崩れようとしています。確かに、今の若い人たちはあんな窮屈な訓練をされるなんてかなわん、と思うこともあるでしょう。が、私などが田舎へ帰つても発言権が弱いのは、一つには消防団の共同体験をもっていないためです。消防団は、やはり村を維持する大きな力だとあらためて思うわけです。

実際に消防団が消火活動をする、そんな機会はめつたにあるものではありません

ん。が、消火活動以外にも何かあった時に動ける力として大いに頼りになるのです。たとえば、古い話ではありますが、八丈島の若者組が八丁櫓を漕いで館山まで船を寄せたような機動力。こうした機能の崩壊が、村が疲弊、後退する原因の一つとしてあるような気がします。

「村資産」を食いつぶした日本のゆくえ



須藤 謹氏

須藤 私は日本の村はわりと元氣があるなど見ているのです。そのもとには、放送教育開発センターにいた時代に、沖縄の公民館を調査したことがあります。縄は元氣があるなどというのが実感です。まつりごとが完全に地域の人たち

の手にあるんですね。

一月から十二月まで年申行事があつて、それらに芸能や歌がついている。練習のために公民館を非常に活用しているんですが、公民館を建てる時に文部省から補助金はもらわないケースが多い。文部省からの補助金をもらうと、教養講座や料理教室をやれ、あるいは俳句をやる人に教室を持たせるとか、半ば強制的に指示が来るらしいのです。

自分たちでお金を集めて公民館を建て、運営も自分たちでしていくというところが調査では見えていました。このように、祭り、年中行事をこなしていくことが「地域の運営」を非常にスムーズなものにしています。文化は補助金に頼らず自前ですといった意識が非常に高い。

これは沖縄だけにみられる特殊な事例かもしれません。実際に綱引きの行事の時や盆踊りの時期に行つてみますと、毎日、夜遅くまで何時から何時までは婦人会の練習、何時から何時までは子どもの太鼓の練習などというように、公民館

が地元の祭りの練習にフルに利用されているという印象が強かった。

こうした公民館の運営ひとつとっても、年中行事をいかに維持しているか、あるいは先ほどのお話のように祭りをどういうかたちで支えてきたかということと密接に関係しているように思われます。つまり本来の意味での「自治体」として機能しているコミュニティは元気があるのだと思います。

加藤 いま須藤さんがおっしゃったことをもう一つ別の私の体験事例から言いますと、富山県のある集落の公民館のケースです。これも集落が自力でつくっているのですが、公民館正面に大きな仏壇が鎮座しているんです。

須藤 富山県というと、浄土真宗の檀家が多い地域ですね。

加藤 そうです。これがもし公的機関がつくつた公民館だったら大問題になるところです。地域にはキリスト教徒も、他の宗教の信徒もいるでしょうから。この仏壇に私は度肝を抜かれ、「これでい

いんですか」ということに近いことを言つたら、「うちとこはみんな門徒です」(笑)、という返事がかえつてきた。そういった自治体なんです。

神崎さんが最前おっしゃった、徳川時代に動くことのなかった村というのは、社会学という自然村に近いものだと思いますが、その数は七万ぐらい。お話のように、そうした単位で物事が動いているところも結構あると思いますが、それが現在どうなっているのか、また、どうなりつつあるのかについては疑問が残ります。

消防団のお話が出ましたが、消防団に入るのを断る最大の適当な理由は、「消防は消防署がやる」ということです。自治ではなくて行政、おカミがやってくれるから必要ないという言い分なんです。ところが、そこから、いい意味での自警団もなくなつたし、「火の用心」などの夜回りもなくなつたし、今度は消防団もなくなるということなんです。

神崎 消防団の解体というのは村の変

化の象徴的なことで、「村八分」というような言葉で表現されていたような暗黙の了解事項まで崩すことになるのです。火事になっても加勢に出なくてもよいということにもなりますから。



宮本千晴氏

宮本 ここで問題になっている、コミュニティは崩壊したか否かという問いは、いま日本の社会全体が崩れつつあるのかという問いかけとまったく同じ、ないしはその前提となるものであると思います。日本はいわば「村資産」を食いつぶした状態にあると思います。

村資産の最大のものは何だったかという、国民の一人ひとりが持っている社会観、ある共通集団のなかでの価値基準ないしは行動基準だと言えます。そうい

うモラルがどこで培われていたかという、全体を見通せるところ、いわゆる旧村などと呼ばれるコミュニティにおいてであって、神崎さんが言うように、安定したサイズのなか、安定した暮らし方のなかで長い間培われてきた世界観であった。それが共有財産としてあったから、日本は国としても何とかがやってこられたのだと思います。そのサイズが小さかったので、時々変なことにもなったり、世間知らずの動きをしたりもしましたが、それでも国として維持してこられたのは、ひとえに村で培われた社会観が基盤になっていたからだと思うのです。

これがある時期から崩れ始めたわけです。田中角栄さんが列島改造をやり始めたころ、私はしばしば感じ、且つ、考えたものですが、みんながお行儀よくしていなければいけない、ここまでは守るべきだと思っていることを、すれすれのところまで乗り越えたやつが得をして、の上がってきたというのが田中以降の歴史だと思うのです。要するに、みんなが質

実剛健にここまでは分を守らなければいけないと思っていることを超えてしまふ、ある種の抜け駆けです。

こういうやり方に対して、場合によっては、「清濁併せのむ」という肯定的な評価もできますが、「清濁併せのむ」が成り立つためには「清」がなくてはいけない。それをいつのまにか忘れて、「濁の面白さ」にのみり込んでしまったのが今の状態だと思います。そうすると、どこにも基準がなくなつて、一人ひとりのなかにもどつちを向いて生きていったらいいのか、どうやったら社会的に安定感を持つていられるのか、誰にもわからなくなつてしまつている混乱した状態だと思います。

しかしこの状態は見方を変えると、将来に向けた準備、調整期間と言えるかもしれません。私はいま、熱帯途上国の海沿いのマングローブ地帯をよく歩いていきます。そこは狭い海岸域なのですが、「フロンティア」、つまり大西部と同じなのです。いろいろなところから人間が流

れこんできて、泥棒行為も多いですし、狡賢いこと、人を出し抜くことが日常茶飯におこなわれ、まだコミュニティとしてのまとまりや安定したルールがないのですが、一方、フロンティアなりの面白さがあって、泥のなかを這い回って暮らしていたような集落が、次の年に行ってみると、一山当って御殿が次々にできてきたりする変わりようがある。

あるいは、今の日本というのも、そこへ向かう境目にあるのかも知れません。みんなが共通の資産、すなわち精神的な資源を失ったために、それを今から作り出そうとしている地点にあるのではなからうかと楽天的に考えることもできます。

では、人間を育てるのにふさわしいサイズの社会というのはどの程度の規模なのか。それが模索されなければならないように思います。

たとえば私はインターネットが始まる前のパソコン通信時代にいくつものフォーラムをつくって、カンカンガクガク面

白い経験を何年間かやりました。そこで感じたのは、ネット上でのコミュニティは可能なのですが、やはり前提として、村社会の一員と同じような価値基準をみんなが持っているないと收拾がつかなくたってしまうのです。

とすれば、人間サイズの基盤を置くのはどこか。やはり人は空間的に居住をしているわけですから、一つの基準は地域社会になってきます。たとえば、環境問題についても、公害のような部分は別として、自然環境に関しては、その現場は全部「地域」なのです。国としての環境問題といっても結局はすべて、特定の箇所、すなわち具体的な家の前や後ろにある自然に帰するわけです。誰にとっても離れるわけにはいかない「空間」がある。しかし、適当な構造とサイズがどういうものなのか、そこがなかなか見えてきません。

永野 なぜ、先ほどのお話のように江戸時代に七万の自然村があったかという点、これは必要から生じていた。前近代



永野芳宣

的な社会においては、村が生産の単位、また、家族が労働の単位であって、一緒に暮らすことで教育もおこなわれるというように、村は極めて重要な存在だったからです。そういう意味で言いますと、都市へ労働力が流出し近代化したために村は壊れていくわけです。

さらに、消防団から抜けるという話にあるように、西洋文化的なものを学んだ人が「自衛消防団なんか時代錯誤的だ」と言って、個人主義のよくないところばかり影響を受け、それを村へ持ちこんで、村を破壊するというような傾向もあると思います。ところが、日本人の心というのは西洋人とはまったく違うわけで、都会の人もお盆休みや正月には田舎へ帰っ

て、そこで昔のことを思い出し、村の心性に染まる。しかしそれもまた都会に戻ると忘れてしまう。近代はこの繰り返してやってきたのではないかと私は解釈しています。

「百年の計は地方にあり」という問題ですが、今後の世の指導原理となるものが地方から出るのか、あるいは従来通りやはり中央主導となるのかは未だはつきりとしませんが、いずれにしてもこれから百年のことを考えると大変な問題が村に生じるのではないか。というのは、百年先には日本の人口は半分になってしましますが、これはいまだかつてなかったことなのです。その打撃は都会より農村のほうが大きいのではということが言われています。

今後十年ぐらい経済はなお発展し、人口は増えていきますから、村の問題もそう大きな問題としては出てこないかもしれません、さらにその先をも考える百年のスパンだと言うのであれば、コミュニティのことを根本的に考え、また、村

のあり方を考えないとたちゆかない時代にさしかかっているのではないかと思えます。

今回収録分が一番古い記録は一九八八年に宮本常一さんについて議論されたものですが、その頃の人口は、一九五〇年の八千万人強からどんどん増えていった時期で、だいたい一億二千万人を超過してしまっていた。現在はさらに増え、二〇〇七年にピークを迎え一億二千七百万人という人口推計が厚生労働省から出ています。今から五十年先には人口がなんと一億人、百年先には七千万人になると言われています。

地域の問題をこれから議論する場合、まして今後百年を語るならこの問題を抜きにしては語れないと私は思っています。

村—その精神的な遺産、物質的な遺産

共有財産の食いつぶしという話ですが、これは精神的な意味での共有財産だけではなくて、水利組織や共有の山林といったものを物理的に食いつぶしてしまっていることも非常に深刻な問題だと思っております。

たとえば水利権は工業用水などといったいろいろなかたちでどんどん村から奪われてしまっているという状況がある。つまり、精神的基盤だけではなく物質的な基礎があれば、村の人たちも、この水はわれわれの水だから、あるいは、この山はわれわれの村のマツタケ山だからというように大事にする意識があったと思うのです。

ところがそれら物質的基盤、よりどころも、住宅開発、道路整備などによりどんどん消えつつある。その結果、よほど頑張らないと伝統的な水利権のようなものはなくなってしまう。なくなってしまう時に知恵者がいて、うまく対応すれば立て直すこともできますが、そうでなければ本当に都会のミニチュア版になっ

米山 先ほど宮本さんがおっしゃった

てしまします。

愛媛県今治市のそばに大西町という町がありますが、その下水課長の河野正文さんがこのあいだバリ島の民族芸術学会で報告をされました。村の水利権がどういうふうな確保されたかという一種の成功例です。

それによれば、一つの水系について延々と議論を重ねたということです。今治の都市公園計画には古墳が出てくるものがあるのですが、それも保存し、また、溜池の一つもちゃんとその中に抱え込んで、しかも水利はきちんと確保するということができています。水が来なかつた時のために、逆流するような極まできちつと残して、うまく上の方の田んぼに引けるような仕掛けを残しておくというものです。

大西町の宮脇地区のなかには団地ができていて、たくさん新住民が住んでいる。いわゆる混住地帯なんです。そのなかで村としてどういうふうなサバイバルして伝統的な水利権を確保していくかという

ところで、何人かの知恵者がいたのだと思います。

バリ島では、水利寺院や柵田も見学しましたが、バリの水利権は王様でさえ従わなければならないという非常に厳しいもので、メンバースhipも非常に厳格なのだそうです。エントロピーが最小の水が流れるようになっていて、溜池がほとんどなく、一番汚くなったものが海に行くという構図のようです。日本でも本来は同じような構造が伝統的にはあったのではないかと思います。

かつては、村の組織の基盤に水利権や共有財産があつたわけで、それがあつたらメンバースhipを失わないでおこうという動機づけにもなつていた。しかし、そうした基盤がなくなつてしましますと、もうどこへ行つたつて構わない、お墓なんて別にここになくても出ていっただ先につくればいんだという考え方になつてしましますから、村はバラバラに解体していくと思うのです。

永野 そういったシステムは前近代的

な組織においては絶対に必要なんです。そこでは加藤先生が感銘を受けられたような、非常に親しみのある関係が残っているわけです。しかし、近代合理主義や西欧的な市場主義が入ってきた都会においてはそうした価値は通用しないのです。二つの文化の葛藤が今後ずっと続いていくのではないのでしょうか。

加藤 どうなんでしょうか。私は都市と農村というふうな二分法がすでに間違つていると思います。

川喜田 同感です。

永野 だんだんなくなっているとは思いますが。

加藤 というより、すでに明治からないんです。幕藩体制が成熟するにつれて農業の商業化がおどろくべきスピードで展開していましたから。

永野 しかし、農村に“心”が残っているわけです。そうした心は地域に行かないと感じられない。これから人口は減りますが、減つて残った人口というのは非常に高齢化していますから、やはりそ

ういった人々の精神の拠り所として村の風景に代表されるような自然というのは非常に重要だと私は思うのです。

米山 むしろ、そういった自然に近しい意識を持った人が高齢化するということとは、そこで世代交替が起きるといこととです。ということは、その次の世代の人がもうちょっと別の意識でやっていくということになるのではないのでしょうか。多少楽天的に考えていたほうがいいと思うのです。次世代の人たちにも「やはり自然は大事だ。下水じゃだめだ、水はきれいにしておかなければ」という意識は残っていくと思います。ですから、七千万人に人口が減った時にも、世代は変わって、われわれよりももっと賢いお年寄りが増えているのではないかなという感じがします。

永野 文化遺産や村文化を育てていくようなお年寄りが地域に帰ってこれるといいわけです。

加藤 第十八回の記録を見ると、神崎さんが宮本学と農村振興というテーマで

話されていますが、今回読み直したところ、宮本常一先生は農地解放は果たしてよかったのかというたいへん大胆な疑問をお出しになっているんです。お年寄りの話になりましたが、結局年寄りのなかにリーダーシップを取れる人がいないわけです。かつては、村のなかに旧地主層に代表される顔役がいて、その人がだいたいコーディネーションをしてくれた。それがもういない。行政村になった村長は顔役ではないですから。

川喜田 ちょっと話がジャンプするようですが、個人的な体験を交えて言いますと、どうも根本的に、世界観の切り替えが必要だという感じを私は持っているのです。結論から言いますと、この世のなかに生きているのは個人だけ、尊厳があるのは個人だけだという西欧的な、特にアメリカ的な考え方が拡がっていることに問題がある。この世界は生命の多重構造でできているわけです。

ですから、村も生き物という認識が重要なのです。リーダーシップという点か

らは、そういう意識に目覚めた人間が村長に立ってほしいし、あるいは「どの村も生きてほしい」という願いをもって宮本常一さんのように村から村へ渡り歩く人も必要である。

地域の問題は、村一つとっても、ものすごく生命力がある村もあれば、生命力の弱い村もある。ですから、こうした現状を率直に認めた上で、個々の村を賦活する方途を考えればいい。私がヒマラヤへ行って村おこしに協力しているのもそのためです。

宮本 村というのは“特定多数”からできているんですね。

川喜田 それが命を宿しやすいコミュニティのあり方というものなんです。そこをはずすと、人工的なからくりや変な仕掛けといったいやらしいものがこびりついてきて、なかなか生命体にまで成長したい。村というのは支配したい生命体なのに、とかく支配者というのは支配を考えたがっていない。

加藤 いま川喜田さん、永野さんのお

つしゃったことから思い出すのは、きだみのるの事です。

米山 そうそう、私もいま同じように思っていた。

加藤 きだみのるの「気違い部落」の連作ですが、彼はたいへんな愛情を持って書いているのです。ところがあれを映画にした人たちがその周辺は、本当に気違い部落だと思ったわけです。きださんがあれだけ愛情を込めて描いた村の人たちの生き方を、どうしてああ曲解して、反民主主義的な封建的村落社会というふうに流布させたのか。つくづくあの時代というのはよくない時代だったと思えます。きださんはみごとなフィールドワークを残した人物でした。

祭りの復活とコミュニティの活力

須藤 先ほど人間を育てるのにふさわしい社会規模というお話がありました。小さな話ですが、こういうものがあります。

何年前に、ゼミの合宿で丹後半島の弥栄町という町へ行きました。そこは山間の村と平野の村が合併して三十年たった、まさに先ほど神崎さんのお話にあつたような村です。

第二十八回の記録のなかで安達先生が過疎の話をされた時、島根県の石見地方で集落が山の奥からだんだんドミノ倒しのように消滅していくさまを述べておられました。弥栄町でも、現在までに集落が四カ所ほど消えて廃村になっていきます。みんなやはり下へ下へとおりてくるわけです。

それでも、奥のほうでかろうじて留まっているところがある。その人たちはこのままでは自分たちの村も、集落も消滅してしまうという危機感から、もと林野庁に勤めておられた方が、定年退職で辞められて、今はなくなつてしまつた祭りを復活しようということをはじめた。

ところが人材、特に若い人がいない。子どもも小さい子どもは非常に少なくなつている。指導者もないわけです。そ

こで、村から外へ出ていった人たちのなから、たとえば笛の名手や太鼓の名手が賛同してくれまして、祭りの前になると京都や園部からやってきて、子どもたちには太鼓や笛を教え、いろいろなものをつなぎ合わせてようやく祭りが復活したのです。

そうしましたら、それまで細々と祭りをやっていた下の村もまた元気が出てきて、さらにその下の村もというように、三つの村が協力して一つの祭りにしようということになった。盛大とはいいますが祭りが継続しています。

先ほど、米山先生が水利の問題を出されましたが、水利や共有の里山などが崩壊していった時に、もう一つ支えになるのが祭りを中心にした人間関係ではないか。弥栄町では、田楽踊りも子どもたちがやりますし、剣舞いといって真剣を使つた舞や獅子舞いもやります。今ではもう、子どもたちがみんなそれを身につけていまして、それは素晴らしいものです。

米山 昔の祭りを復活させたわけです。

ね。

須藤 これは昔からそうなんです、子ども組があつて、小学校六年生や中学生が大將になります。獅子舞いなどをやると投げ銭が出ますし、あるいは、その家の安泰をお祈りして踊りを踊ってお祝儀をもらう。そうしたお祝儀は子どもが自由に使えることになっており、その分配の仕方でも自分たちで決める。おとなは口出しができません。大將はたくさん取る代わりに、「こうやって笛を吹くんだよ、こうやって舞うんだよ」と下の子どもたちを教えます。子どもも年齢が上にあがっていくにつれて、お祝儀の取り分が増えていくシステムになっています。

子どもたちを見ていますと、一つの伝統を守ろうという気持ちよりも、むしろその活動のなかで、礼儀作法や技術、生活するための知恵などが自然に身につけてきています。プラスお小遣いももらえるわけですね。私はそのへんが村の活性化に大きく寄与したのではないかという

気がしています。

宮本 今の須藤さんの話を聞いていて思い出すのは、広瀬信子さんの奥三河の三十年近くになる活動です。あの地方一帯の花祭りを復活させましたね。ほとんど絶滅に向かっていたものがなぜ復活できたかという、最大の理由は伝統そのものが個人にとつて依然として大きな価値を持っているということに尽きると思えます。

一見そうは見えませんが、現代では、それに賭けるに値するだけの価値を持つものが求められている。それは現実的な価値かもしれないし、あるいは歴史的な誇りかもしれないが、一生懸命になつてやることで他の生き方では真似のできない何かが実現できるという手応えが、祭りにはものすごくあるのだと、このあいだ広瀬さんが言っていました。

誰かがそれに気づかせて、やって見せて、「格好いいでしょう、見事でしょう」と教えなければならぬ面もあるわけです。気がつく、いったん町へ出ていっ

た連中が結局皆町を引き払って帰つてきて、花祭りを一生懸命にやり始め、村のなかで新しい仕事をつくり出すところまでことが進んでいったのが奥三河だったんです。今の社会情勢、経済情勢のなかで、村でそういったことをやるのは昔と違って非常に大変だと思ふのですが、それぐらいの価値、求心力はやはり祭りにはあるんですね。

加藤 たとえば、おわら風の盆とか山鹿踊りなどの隆盛はここ十年ぐらいの現象ではないですか。米山さんは祇園祭、天神祭という都市の祭りをずっと調査してこられました。祇園や天神はいわば全国区の名物だったわけですが、おわら風の盆に何万人という人間が行くようになったのは新世相ですね。

米山 その意味では、地方は元気がないと言われますが、実はものすごく元気のある部分もあるんですね。全国的に祭りが復活していますが、これは先ほども神崎さんが言われたように、神事とは関係がないのです。

祇園祭はそもそも、日吉大社が今年は神事は止めると言ったので、その末社の祇園社もそれにならったところ、下京の町組が六十六町みんな集まって祇園社へ押しかけ、「神事これなくとも山鉾渡したく」という宣言を突きつけたことが発端です。今の人もそれを自慢していて、極端に言う、「私たちは神さんはどうでもいいんだ」という雰囲気です。

実は昨日、五年間続いた「三都夏祭り」の幕引き座談会がありました。

三都の夏祭りというのは、九五年、阪神・淡路大震災で神戸まつりが中止になったのを、二十五回は欠番にして二十六回からということにして翌年から復活、それを支援しようと、関経連が思いついたものです。

川上哲郎関経連会長（当時）が、祇園祭、天神祭に呼びかけて、三都夏祭りにしようと頑張った。神戸まつりは震災前は五月だったのを、七月二十日の海の日ができたので、それをきっかけにして夏祭りに移動させた。祇園祭が十七日、二

十日に神戸まつり、二十五日が天神さんですから、三都夏祭りだということで、JRもピラなどをつくって宣伝しました。

座談会席上、山鉾連合会長さんは深見茂先生というドイツ語の先生なのですが、その人が言うには、初めは神戸まつりのほうは及び腰だった。私もその意見をきいたことがあります。京都は千年の伝統を持つ横綱ですし、天神祭も築城四百年なのに、神戸はたかだか二十五年、幕下付け出しみたいだからとても一緒にということなんです。

私は震災後、神戸まつりを復活するかどうかの検討会で、そんなことはないと言った。二十五年たったら二十五年、三十年たったら三十年の伝統があるのだし、百年たてば大イベントになるからやりましょうとおだてて、神戸まつりを復活させました。

そうした話をしていて気がついたのですが、やはり祭りはそれぞれのところと非常にさかんになってきています。たとえば大阪の場合は、愛染さんの祭りから

住吉の祭りまで夏祭りというのがずっと一連ある。また岸和田など周りにもたくさんありますから、天神祭だけ突出させるわけにはいかない。祇園祭の場合でも同じことで、祇園祭も今でこそ全国区扱いですが、実は下京の祭りなのでありまして、今西錦司先生などは全然行ったことがないと言っていますね。

加藤 今西さんは西陣ですからね。

米山 ともかく、町の人たちは一生懸命なんです。私が祇園祭の調査を始めた頃は二十九だった山鉾がいまは三十一になったように、古いものを復活させている。応仁の乱の前は五十八あったのを明応九年（一五〇〇年）に三十六まで復活させてからは、ほとんどがそのまま動いています。それはやはり町衆の意気込みというか、コミュニティの力なんです。ふだんはしょっちゅうコミュニティで喧嘩している人たちが、祭りのことになると結束する。

川喜田 山形県のある町で、途絶えていた獅子踊りを復活したんです。それは、

獅子踊りをやめてからどうもあまりよくないことが起こる。それでもう一回やらないといかんということになった。こういう話も結構ありますよ。

新しい祭り、地域の「うた」の発信力

神崎 皆さんおっしゃるように、町衆にしても村衆にしても、民間のエネルギーは強力ですし、そうした蘇生力は私も信じているところです。ただ、そこへ行政が介入しているかどうかということの実態を整理してみる必要があります。

ほとんどのデータが村おこし、町づくり、あるいは祭り、イベント、これらを同列で並べていますが、これは問題ではないでしょうか。補助金のもとに行政が主導するのか、自然発生的に民間が結束してするのかというこのふりわけをした上で、今の日本の村社会はどちらの力により期待すべきかという議論をしなくてはならないように思います。

名前は挙げませんが、ここに文部省系

のある助成金枠のリストを持ってきました。助成しているものを見ていくと、全部で百十二件、七千五百万円ぐらいですが、ほとんどがカタカナの劇場公演、オペラやミュージカルなどなのです。果たしてこれらが持続性のある地域活性化になるかどうかということをも、もう一度、見直さないといけない。地域の自主性と地方の持続性という視点から、われわれが問題視して発言していかなくてはならないと思います。

というのは、日本の村が疲弊したもう一つの原因は、補助金制度にもあると私は思っているからです。目的意識がしっかりしていないところへ無条件とまでは言いませんが、ある時期は撒き助成がおこなわれた。そうすると補助金が前提の体質になってしまいますから、本来の自治力とか蘇生力が後退することになる。お金がなければ、行政にすがらなければ、地域社会で何かを興すことができなくなりす。

交付金が少なくても、補助金が少なく

ても、そこを我慢して何かをやらなければならぬという力をどう引き出すか。村の人に自助努力を期待する所以です。

これにもう一つは、外から来てそうした村の潜在力を引き出す宮本常一先生やきだみのるさんのような世間師の役割が大きいと思うのですが、今は絶望的なまですらういった人がいない。私たちの周りでも大橋力さんがバリで、川喜田先生がネパールで活躍されていますが、そういうたぐいの人々がどれだけ日本の村を歩くかということにかかってくるのではないか。極論すれば、そういう部分に寄与しなければ民俗学の将来もないと思います。

私は最近になってやっと、宮本常一先生が、民俗学は体験の学問、実践の学問とおっしゃっていたことの意味が「そういうことだったのか」とわかってきました。何かを提言する、あるいはお金を持つてくるといったことも大事でしょうが、いちばんよいのは、可能性があるコミュニティに親戚付き合いをするぐらい

頻繁に通うということだと思えます。親戚が一人より二人という構図ができればなおよいですね。

米山 今言われた文化事業の助成のリストの話ですが、このごろは対象になるものが都市、全国に広がっていき、そのなかで顕著なのがコーラス活動、特におかあさんコーラスなどというのがかなり日本中に広がっています。そういう流れも無視できないわけで、伝統的な太鼓や剣舞も結構ですが、同時に、新しいものも認めて伸ばしていくようにすべきではないか。

サントリーの地域文化賞の選考委員を七年ぐらいやっていたんですが、各都道府県から、まずNHKの地方局と地方新聞推薦で上がってきて、その上で選考します。おばあちゃんのコーラスとか、それも結構モダンなものがあります。もちろん古いものもありますし、ジョイントでは「よさこいソーラン節」みたいなものもある。あれは一人の学生が呼びかけたのが始まりで、札幌で大イベントにな

った。表彰という場合、新しいものも拾わないと、古いものばかりを顕彰するのバランスがよくありません。

須藤 しかし、村おこし、町おこしということになるかどうか。

神崎 誤解のある偏った表現だったかもしれないませんが、第九の合唱や市民ミュージカルというのはやはり都市が母体なものです。もちろん、古いものが新しいかたちで復活してもいいのです。また、創作もよろしいんですが、村落社会での持続となると問題が様々ある、と思います。

米山 『きつねの嫁入り行列』というような、題材は古いが全く新しいかたちにしたものもあるんですよ。

神崎 それに関してもう一つ言いますと、伝統芸能の現代語訳での劇場公演ということが、日本の演劇プロデュースにおいて欠けている分野であると常々思っています。

去年、一昨年と、私は韓国でずいぶんそのたぐいの問題について話をしまし

た。韓国は日本と事情が違い、どう数えるのか知りませんが、二百五十数回の戦乱で伝統的なものが度々焼き払われたから、その時々には傳承を集合したかたちで再現、あるいは創作しています。

文化財として名高い仮面劇でさえも、かろうじてその実演を覚えてお年寄りかいて面が残っただけのものを、一九七二年に再編したものが、民俗文化財として指定の対象になっています。韓国は戦乱でかなりを消失している国ですからこういったやり方もいたしかたないということもありますが、しかし、日本ではなぜこのような伝統芸能の新しい展開が考えられないのでしょうか。旧態然と保存を唱え、なしくずしに変化もやむなしとしています。

舛田 伝統芸能、祭りの復活の問題があり、一方でまた、新しい祭りをつくるという課題は確かにあると思います。その際、新しい祭りをつくるのは、どちらかという村より町だというのはそのとおりだと思います。ところで、問題は祭

りをつくったあとなんです。

山形でも、たとえば花笠踊りなどは、夏の蔵王を活性化しようと、ある人がつくりだしてきた祭りであって、それが今までずっと続いているものです。また、たとえば寒河江では大江公入部四百年ということ、太い綱をどこから持つてきて町の中心街でわっしょいわっしょい綱引きをする。その時はたいへん盛り上がるのですが、祭りが終わると、その綱は市役所の車庫の片隅にとぐろを巻いて一年間放ったままになってしまっています。

一方、われわれが訪れた金山町の稲沢というところの番楽ばんがくはあのあたりの修験道から出ている祭りで、子どもたちに伝えていくことによって一つの大きな村の行事になり、学校教育のなかにまでとり入れられていくという継承をきちんとおこなっています。

イベント、祭り自体はいいことなんです、それをどう位置付けるか、あるいは他のことと関連させて村のなかにどう

定着させていくのかについてしっかりと方針がないと、祭りであつと盛り上がり、終わればまたスーッと静かになってしまふということが毎年毎年繰り返されるだけになってしまいます。

先ほど加藤先生から風の盆の話がありました、かつてこの研究会で、秋田の湯沢の隣、羽後町はつごから農業作家の高橋良蔵らうざうさんに来ていただいたいてお話を聞いたことがありましたね。

その羽後町の西馬音内しうまおんないというところにこれまたたいへん人気のある西馬音内盆踊りというものがあります。機会があつて私は三回ぐらい続けて見に行きました。

最終日は十二時まで踊ります。十時少し過ぎぐらいまでは観光客が踊っているのですが、それ以後はだんだん本物の衣装を着た人たちが登場します。端縫いという今言うパッチワークの着物が衣装で、絹製の一着二十万円ぐらいもするきれいなものです。それを着て編み笠をぐつと目深にかぶつて踊る、たいへん艶のある踊りですが、そういう装いの本格的

な踊り手たちが踊り出すと、もう観光客は恥ずかしくて踊ってられない。一人抜け、二人抜けして、十二時に近づく頃には、全員が端縫いの着物を着た男たち、女たちと化していきます。

その踊りを踊るために、町を出て他所で生活している人たちがみんなが帰つて来るわけです。それだけ集まり得る地元の力があるのですが、それをどういうふうに生かしていくのかということがまだ見えていない。

加藤 地元の潜在力というと、あつと驚いたのが、山形県のサクランボ農家のおじさんが「孫」という歌を歌ってミリオンセラーになったことですね。

舛田 河北町の大泉逸郎さんです。

加藤 これは本当に地場から自然発生的に出てきて、演歌の世界にびたつとはまり込んで大スターになったわけでしょう。いままで事例がない。しかも単独個人でしょう。

須藤 「おやじの海」が瀬戸内の香川県、直島なほじまですから、二例目ぐらいではな

いですか。

神崎 民俗芸能の意欲的な再生では、やはり沖繩を評価しなければいけないと思いますね。韓国の人たちがジャパニーズポップスというものはない、アメリカンポップスの翻訳だと言っているけれど、やはり沖繩のポップスは、創作的なジャパニーズポップスだと思います。

加藤 喜納昌吉の「すべての人の心に花を」はアジア全域に広まりましたものね。

現代「ふるさと」考― 都市・地方往還



小浜政子

小浜 祭りが都会から地方へ帰ってくる流れの一つをつくるといってお話でした

が、より広く、都市と地方の往還ということが重要なポイントとして考えられます。

日本人にとって、自分の先祖のお墓のある田舎に一年に一、二回帰るとするのは年中行事化しています。それは、アメリカ人が感謝祭やクリスマスに家族のところへ戻るといっても引越しの多い流動的な社会を反映して、ホームタウンというより両親が現在いる家へ帰るということと、全く違う「ふるさと観」があると思います。ふるさと、また、都市と地方の行き来の問題を少しお話いただきましたと思います。

米山 いま都市生まれの都市二世、都市三世という人々が、東京などを考えるதாகさんいるわけです。そういう人たちに故郷を尋ねても、「世田谷です」ということになってしまふ。ですから逆に、彼らが自分の楽しめる場所として、たとえば、「山形の何々村の踊りが好きで、その盆踊りの時には必ず行きます」というようなかたちで、第二のふるさとを見

出していくというのが今後の流れではないのでしょうか。そこで生まれた人たちでなければ「ふるさと」にしてはいけないというのではない、流れですね。

加藤 統計ではなく勘で見ている限りなんです、盆、正月の帰省ラッシュとマスコミは騒いでいますが、だんだん帰省人数自体は減っていると思います。

米山 帰省ラッシュのテント村なんて今はなくなっちゃったものね。

加藤 帰るべきところが無い人が増えてきたらなんです。その代わりに何が増えているかというと、海外旅行、温泉旅行、スキーなどです。

この前から大正時代の人の伝記、日記などをバラバラで見ているのですが、だいたい明治末期から東京市民、江戸っ子のなかで多少お金に余裕のある人たちの記述に、「毎年私の家では伊豆の○○温泉の○○旅館に泊まる習わしでした」といったようなくだりがある。つまり、その時点でもう「ふるさと喪失」なんです。その代わりに、そこへ行けば先代から顔

見知りの女将さんがちゃんと迎えてくれる。帰省ラッシュもそろそろなくなりそうですね。

米山 同感ですね。

加藤 お墓も同様です。宮田登さんが亡くなってもう一年になりますが、「つくばが都市になるかどうかは結局のところ墓ができるかどうかにかかっている」と言っていました。

このごろは、都市の新住民で墓を新しくつくる世代が増えてきた。そもそも先祖代々之墓などともっともらしく書かれています。実はいわゆる先祖代々墓というのは明治以降の産物でしょう。先祖代々にしておく、お寺さんに払うお金が少なくて済むからなんで、単に地代の問題なんです。新しく墓をつくらうという人間がこれだけ増えてきたということ。は、ふるさと喪失と言えるし、そもそも喪失という言葉も適当ではないと言えます。ふるさとというものがもうないんですから。

須藤 共同墓地の抽選に当たるのも大

変という時代になってきましたね。

小浜 この研究会で過疎の話聞いた時に、かつては、過疎化した集落の移動の話があっても、お墓を見捨てていくことができないと強い反対があったということも聞きましたが、現代人の祖先観も随分変わってきたことですね。

ただ、都市の新住民もいずれは自分のルーツ探しということで、再度、祖先の出身地や墓に目を向けるのではという気もします。日本人はあまり家系図などに興味を持ちませんが、アメリカのような歴史の浅い国ですと、趣味で祖先のルーツを調べてファミリー・トゥリーをついたり系図学に凝ったりする人が結構いるように、逆に失ったものに郷愁を覚えるようになるのではないのでしょうか。

神崎 お墓をつくるというのは「元祖先祖」になることですが、もう一つ、そこから新しい故郷をつくる動きが出るかもしれません。

たとえば、作家の玉村豊男さんが長野のみよまた小県郡に住んでもう二十年になりま

す。そこで農業をし、陶芸をし、東京ではホテル住まいをするというかたちは、都市住民とも村民とも言えないものです。それでいて、村の人たちには彼の存在が誇りになってきている。先ほど民俗学のゆくえんについて触れましたが、こうした生き方がうまく機能すれば、「新村人」も村を活性化する機能を担いうと思います。

ただ、それを旧来の村社会が構成員として受け入れるかどうかは別の話です。それでも、何か面白い話をしてくれる、何か面白い情報を持ってきてくれる人が身近にいるということは、村の人にとつて気分的にいい状態、見捨てられていないという程度の支えにはなるだろうと思います。

加藤 昔の村でも定住を許されたのがまず医者でしょう。それからあとは寺子屋の先生です。インテリについては語弊があるかもしれませんが、多少除け者にはされるけれども特殊な技能を持った人は村の構成員にでもらえた。今はそろ

そろそろこうした傾向が始まっているような気がしますね。水上勉さんなどもそうですね。

神崎 第二のふるさとをつくる、あるいは、掛け持ちのふるさとをつくるという方向は、都市側からの村へエールを送るということでしょう。フィールドワークで定点観測するやり方も含めて、緩やかな村の応援団というかたちが見えるような気がするのです。私自身も、何と岡山に年間百日近く三十年通ったのです。

米山 ギネスブックに載るね(笑)。

神崎 やはりこれだけ通うと、村の人の受けとめ方も違ってきます。私の場合は生まれ育った郷里ですが、お互いに遠慮しながらいい関係ができてきているような気がしています。

舛田 その意味では、墓をつくるということもその地に定住する一つの条件になってくるのではないのでしょうか。

私の先生がもともとは東京の生まれのかたなのですが、「おれも仙台に墓をつくらないと皆に信用されない」という言

い方をしみじみされたことがありました。

神崎 墓もそうですが、村の側からすると、私と玉村さんの信用の違いは、玉村さんは税金を長野県の小県郡に落としているということですね。そこに自分のプロダクションを設け、税務処理をするから、村にとっては有名人が来ているというだけでなく同時に何がしかの収入になる。私は、東京で税務処理していますから、墓はあるし、生まれ育ったところという利点はあるても、その部分での信用はないです。

素通りの流動人口と、行ったり来たり
の半定住人口のバランスも見極めないと
いけないのではないかと。むしろ、墓より
も今は税金を納めているかどうか、地
域との絆を左右すると言えるのかもしれ
ません。

新しい都市コミュニティの形成

宮本 都市と地方の往還、「第二のふ

るさと」や「半定住」の話をしてきたなかで、それでは「どんな関係があればある個人にとってコミュニティと言えるのか」というところがまた問題になると思います。今は物理的にせまいなかだけで生きることは不可能だし、昔ながらの村ふうなコミュニティを維持しろと言っても無理で、元からいた人たちだけではたこつば状態になってしまつて、にっちもさっちもいなくなつていきます。私の田舎、山口県の東和町などを見ているとそう思います。

現代のコミュニティはコーラスクラブ
かもしれませんが、いろいろなかたちで
外とのネットワークが形成されていま
す。そのように、人の社会的な基盤をつ
くるコミュニティというものの姿が変わ
りつつあるのは確かです。

ところが、都市でそういうゆるい、ある意味であやふやな関係だけでつながっていますと、やはり非常に落ち着きが悪いし、人間として非常に偏ったかたちで生きていっているような気がしてしょうがな

い。人間はやはり自分のコミュニティというか、全体が見通せる何らかの視点を持つていなければならない。

これまで村の側のこと为主に問題になっていますが、町のほうも昔に倣って季節節には特定のどこかへ出かけて行くなり、田舎帰りをしなければいけないのではないか。

というのは、私個人が持っている自然のイメージはどこかといったら、結局せまい郷里の風景なのです。非常に限られたものではあるんですが、「人が幸せに生きている」、「健康に生きている」という原風景がそこにある。それを基準にして他の世界を理解しているのです。イメージ自身は限られたものなのに、それが国内でも国外でも結構いろいろな場合に通用する。つまり、そうした原点みたいな部分を抜きにしては、やはり人間として人類を運営していくことができないのではないかと思うのです。

それぞれの人にある種のふるさとを必要であって、何かいい具合に交流がおこ

なわれ、それがもう少し進めば新しいコミュニティになっていくことができるのかなと思っています。

加藤 そうかもしれませんね。

都市のコミュニティということですが、私はこのごろ面白いことを発見しました。江戸期を調べてみると、コミュニティをつくる場所が銭湯（風呂屋）、床屋、寄席、この三つで、これは公民館みたいな役割を果たしているわけですね。銭湯はほとんどなくなりましたが、床屋のほうはかろうじてまだ残っているの、床屋で知り合った友達というのはずいぶんいます。床屋というのは半径一キロぐらいの範囲内の人が顔を合わせるでしょう。

そこに新しく加わったのが、年をとってきて最近わかったことなのですが、病院です。

米山 病院コミュニティですね。

加藤 病院に行くときと本当に顔なじみになりますね（笑）。私などはあまり社交的ではないほうだから、そういうところ

では黙って本なんか読んでいます。が、おばあちゃんたちの会話を聞いてみると、「お久しぶりね」「お宅、お孫さんどうした、〇〇大学受かった？」などと、言っている。媒介の場所として、銭湯の代わりに病院というものができて、これが案外都市コミュニティになっているなとこのごろ考えはじめました。

須藤 壬生狂言が節分と春と秋におこなわれますが、その練習風景を毎年見せてもらっています。公演する日は決まっているので、顔見知りの人たちが結構集まるんです。狭い観客席なので、そのなかに観光客もおりますが、去年はこうだったとか、その前の年はこうだったとかという話をしており、やはり一つのコミュニティみたいな連帯意識がある。

京都、滋賀にはこういった年中行事的な祭りがあって、それがコミュニティ内外の核になっているといった現象もあります。

宮本 私は三十七年前に府中新町に移り住んで、そこで結婚して、最初に気が



ついたのは、幼稚園、小学校などが少なくとも若い女の人たちにとつては最初のコミュニティづくりの拠点だということ

です。非常に重要且つ機能している。

このごろ気が付きはじめたんですが、府中新町で生まれた若い人たちが最近嫁さん、婿さんをもたらったりし始め、その人たちのつながりというのは驚くほど強いことです。

近くに遊び場も少ないので、道や路地が全部子育ての場所になっている。三代後半のお嫁さんからごく若いお嫁さんまで、夕方になると群がって、保育園の延長のような感じで集まっています。雪が降るとみんな雪かきをしてくれたりもするわけです。

加藤 最近よく言われるお母さんたち

の公園デビューというのも、一種の都市コミュニティですね。公園で同年輩の子どもたちが遊んで、そこでお母さんたちが知り合つて、ある種のコミュニティを形成する。それに不適合だったのが一年の音羽の幼女殺人事件の場合です。

公園デビューがどれだけようずにできるかというのが一つの関門なんですね。亡くなった和崎洋一さんが女の三十八度線という説を立てられたことがありましたが、あれはPTAの役員になるのが三十八歳であることを指して言っているんです。

永野 伝統文化をベースにしたもの、あるいは、新しいものとして加藤先生がおっしゃったような自然にできてくるコミュニティならいいのですが、町議会や村議会があるにもかかわらず、外から都会的、政治思想的なものを持ちこんで、是非は別として住民投票をやらせるような新コミュニティの形成は、私は村の破壊につながるのではないかと危惧しています。

加藤 行政を前提にしているからこそ住民投票があるわけで、あれはおかしなものですよ。

永野 それはさつき神崎さんがおっしゃった、行政がどう主導するのがいいのかという問題につながると思いますし、また、行政というよりむしろ政治の問題ではないかと私は思います。都会から政治の手法だけを持ちこむというようなやり方は、これからよほど気をつけないと、ますます変な方向になっていくのではないかと思います。

神崎 自然保護や動物愛護の団体が村へ入っておせっかいするようなケースも、それと似た部分があります。

小浜 先ほど、環境問題が帰するところは結局、家の前、後ろという具体的な地域、現場であると言うご指摘がありました。確かに、足もとを疎かにして環境問題を取りあげると、非常にイデオロギー的なものになってしまう危険があると思います。

川喜田 岩手県の北上山地に岩泉町と

いう、こんな僻地があるかというようなところがあります。そこを活性化しようとして、KJ法を使って徹底したフィールドワークと自由討論を村人と一体になってやったことがあります。ここまでは大成功だったんです。非常に盛りあがった様子を見た行政と一緒にやろうと声を掛けました。

そして、お宅にこうやって協力しますよと結果的には天下りをしてきて、一遍でダメにしてしまった。もう立ち上がれませんよ。そういった例をみていると、行政と村の人たちの間にひどい断絶があるのが分かります。

“美しい日本”の風景は残っているか

小浜 ここで、今回の再録集にあたり、地方部会での思い出についてお話をいろいろお聞きしたいと思えます。

永野 私は途中からの参加ですので、いくつか行かせていただいたところに限定した感想で言いますと、それぞれの町

や村に素晴らしいリーダーがいらつしやることです。それが町、コミュニティの活力にも通じるのではないかなという気が強くなりました。たとえば金山町の岸さんと、美星町の杉原さん、大迫町の村田さんといった、それぞれに村を愛しておられて育てていこうという立派なリーダーがおられるというのが非常に印象に残っています。

舛田 またその一方で、町長、村長という立場でやっていく人たちの対極にある方々もいました。熊本の八代の宮本さんのように、ポート型のプランターでトマトをつくっているというような、自力でユニークな発想でどんどんやっていくケースが印象的でした。そういった両極が私にとっては実に新鮮でした。

須藤 両方に言えることは、過疎で出稼ぎが多くなり、地域で生活する、生産活動に携わることに対して自信をなくしてしまっただけ。それを吹き払ってしまうようなエネルギーと知恵を持った方々が自信を持って事業を進めてこられたという

のが共通しているし、印象に残っています。

舛田 いずれにしても地方へ入って見ると、どこへいってもすごい人がいるということだけは確かです。

加藤 金山町の岸さんとか大迫町の村田さんは、町長、という立場にいながら、町の人から批判が出ないんです。役場と町民とが割合に密着して動いているのです。ところが大潟村はそうではなかったですね。役場で聞いた話と、減反を無視して見事な大邸宅を建てた農家の話との間には、ものすごい乖離がありました。

須藤 先ほど水利の話をした時にそれ以上話題にはしませんでしたが、一つ重要なものに里山の問題があります。里山は水利同様の



わゆる共有の「入り会い」で、資源のたいへんな宝庫として、いま活用が始まっています。たとえば炭は発電用エネルギーとして見直されています。また、水や空気を浄化したり、腐敗を防いだりする機能が人気をよんでいます。

また、里山の木を切って炭を焼き、整理することによって下草が生え、そこが子どもの遊び場、ひいては教育の場になっていくという発想が各村々で起こっています。それに行政がかかわると○森林村や展示館になってしまいますが、それでもいづゆるコミュニティの場、教育の場、資源活用の場として、子どもたちが学校から送り込まれてきます。そこでは植物や動物の専門家が待機していて、いろいろ案内してくれる。滋賀県ではそうやって非常にうまく回転している里山が三、四カ所ぐらい出てきていました。

加藤 入会地の処分問題を境に村の盛衰は左右されましたね。入り会いというのは慣行であって、法規上は村有地であ

るのか私有地であるのかをめぐって、岩手県で戒能通孝先生がかかわられたたいへんな裁判がありました。

舛田 小繋ですな。

加藤 私の知っているある森林組合は結局、入会地を分割して共同所有の村有地にし、それを別荘地にして売ってしまった。そこは衰退しましたね。一方、入り会いの慣行をそのまま保持し続けてスキー場として残したのが妙高山麓にいくつかあります。入会地をどうしたかというところが村の分かれ道ではないですか。

須藤 航空写真を見ますとはつきりとそれが出てきます。お宮の森を中心にして入会地を残した村と、ゴルフ場として売った村が隣り合わせになっている写真を見たことがあります。一方は風景としてはもう見られないほど醜いものになっている。入り会いを残したほうは非常に美しい風景として村が残っています。はつきりしていますね。

私たちが訪問させていただいた村は、入会地を残している村が比較的多いので

はないでしょうか。

舛田 多いですね。金山町も町営のスキー場は昔の町有林をそのまま使っているものです。夏はキャンプ場やテニスコートになっている。そして町が設置しJRが経営する宿泊施設を建てて、大々的に運営しています。町有林をそのまま使うとうかたちですが、そういうところが成功する例が多いでしょうね。

宮本 あまり日本各地を歩いていないので教えていたきたいのですが、今でも家々のたたずまいや野山のたたずまいが非常に美しいという村はあります。

須藤 よく行くのは丹後半島ですが、丹後半島はものすごく美しい村が多いと思います。

宮本 それはやはり昔の姿を維持しているからなのでしょう。

須藤 そうかどうかはわかりませんが、いわば日本のふるさとへ帰ってきたというような印象です。わらぶきの屋根はもうほとんどなくなりましたが、伝統的な民家が維持されています。今は多少

荒れてしまっていますが、背後には裏山、竹やぶを持っており、また周りには屋敷の畑がある。その前に水田が広がり、小川がずっと流れているといった、ふるさとへ帰ってきたというような非常に美しい風景を何カ所でも見ます。

神崎 しかし、そうした風景が少なくなったことは事実ではないでしょうか。私は、絶望的に日本の風景は汚くなったと思います。これは自動車交通の問題、また、山の手入れをしていないことが原因としてあると思います。いわば散髪しない頭と同じような状態になっている。確かに、瞬間的にある場所が美しいと思うことはありますが、私はがっかりするほうが多いですね。

加藤 どうやら道路を含めた都市計画、基盤整備事業、それと安手の建築屋が入ったことが元凶です。遠野なんて五十年前と今と比べたら見られたものではないですよ。

神崎 遠野でさえも、ですか。
加藤 遠野だからだと思う。安手のべ

ンションのようなものがたくさんできて、駅前に河童の彫刻ができたりした。

須藤 比率からいくとそういった町が圧倒的に多いでしょう。

米山 有名になったところがよくないですね。
永野 美しいと思われるところというのは、そこに住んでいる人も割合に律儀で徳があり、訪れた人に対しても親切というような町なんでしょうか。それともまったく関係がないですか。

須藤 密接に関係していると思いますね。
舛田 景観、美しさの問題ですが、私は庄内を歩いていて、ある意味でしかたがないのかなと感じるところがあります。

庄内は本間家を中心とする大地主が数多くいました。したがって、小作もきわめて多かったです。そして農地改革の後に、自作農になった彼らが一体何をやったかというところ、住宅の改築なんですか。何でこんな小さいところに庭を造るのかと思う

ような庭造り、また白壁の土蔵をつくるんです。要するに地主文化というか地主のシンボルへの憧れみたいなものです。

それに、昭和三十年代半ばぐらいになつてくると、都市文化への憧れが加わってくるわけですね。だいたいそのころに、農家で、土間、作業場が切り離されて、住居スペースと仕事場が分離していくようになっていきます。そこに出現してくるのが、いわゆる都市と全く同じタイプの新建材の住宅です。しかも使い方がよくわからないので、一番いい場所に応接間をつくっても結局物置になってしまいうようなことがあります。

小作から自作になった、農民のさもしさというところも叱られるかもしれませんが、そういう精神構造が住宅、したがって景観そのものにも、集落としての景観にも影を落としているような感じがします。

加藤 地場の大工がだんだん働かなくなつた。というより、今の舛田さんのお話のように嗜好が変わったために仕事を失って、その代わりにミサワホームやパ

ナホームといった住宅産業がどんどん進出していった。また、そこにデザインという付加価値を付けたいものだから、応接間にシャンデリアをぶら下げたりしたわけです。東北の村へ行くと、実際にシャンデリアがぶら下がって、皮張りのソファが置いてあったりする。

永野 わかるような気がします。

加藤 ですから、もう民家論というのは成立しないんです。

須藤 私は武蔵野美大の相沢韶男あじざわのぶさんと一緒に大内（福島県南会津郡下郷町）でいろいろ調査をさせてもらいましたが、あそこはもともとは草屋根なんです。それにトタンを被せ、次は新建材というようにだんだん醜くなっていく。相沢さんといろいろ話し合った時に、私を含めて多くの日本人は、都会への憧れや新建材、シャンデリアなどといったものを一回通過しないと、いわゆる本物のよさというのを再認識できないのではないか。それを体験するにはもうちょっと時間がかかるのではという印象を受けまし

た。

宮本 しかし、旧に戻そうとした時には、もう技術的に戻せる棟梁がいなくなるのではないのでしょうか。

加藤 戻せない理由の一つは建築基準法でしょう。

宮本 そうした意味で、安達先生のような、村のことをよく知っていらつしやる方の存在というのは非常に大きかったですね。亡くなられてとても残念な気がします。

川喜田 今日はいろいろ教わり、本当に有益でした。とりわけ、コミュニティの価値は、今後ますます見直されるべきです。

加藤 振り返ってみると、日本の村はこの五十年でずいぶん変化しました。この研究会はその変化をずっと見てきましたが、これからも勉強をつづけてゆきたいと思います。

（二〇〇二年一月二十五日）
於 ホテルニューオータニ
撮影 橋本保

II

むらからの声、
まぢからの声

宮本常一の民俗学と農村振興

●講師 神崎宣武・宇佐八幡神社禰宜／現宮司

〔出席者〕 加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 川喜田二郎／中部大学教授 高橋潤二郎／慶應義塾大学教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／筑波大学教授 宮本千晴／(株)砂漠に緑を 米山俊直／京都大学教授

■民俗学の課題と農村振興

神崎 宮本先生の民俗学は実践的なものだという評価が、かなり広くなされていますが、そのなかで、先生が農村振興に関係されたところ、情熱をそがれたところを、今日はお話したいと思います。これは、今でいう“地域おこし”に、直接、間接のつながりがあるのではないかと思えます。

「宮本学の意味」——農村振興への寄与」というテーマですが、宮本先生自身がフィールドを歩かれ、絶えずそうしたものを考えに考えていた。歩いた先の村、あるいは接した相手の人々が、いかにしたら幸福になるかというようなことを、先生

自身はいつも頭に置かれていたように思われます。

ここにいらっしゃるご長男の宮本千晴さんが、いわゆる大学の学問的な活動とは少し違って、幅広く、また、少し面白がってやってみようということで先生が創立された日本観光文化研究所の事務局長を長くなさっていたのですが、その時代（昭和四十一年～五十二年）に、私の知っているかぎりでも、いくつかの実績があります。たとえば、新潟県の雪深い山村、山古志村で、錦鯉を地場産業として振興する一方、絶えて久しかった闘牛を復活し、錦鯉と闘牛をセット化して、よそからのお客さんと呼ぶというような“村おこし”がありました。

これは、もちろん先生一人の力ではありませんが、ちょうど村の気運がそういう状態になっていたところに、われわれの間が調査で入り、その指導で先生がいらっしゃって、最終的にそういう方向を示唆されたというような経緯があります。

佐渡の鬼太鼓についても、山口県の周防猿まわしについても、同様に再生の手伝いをされています。これは小沢昭一さんや永六輔さんも手伝ったのですが、先生の後ろだてが当事者たちにはたいへん力強いものであった、と聞いています。

そうした宮本先生の活動歴としては、まず昭和二十年、二十

一年あたりを問題にしなければいけないと思うんです。

この場にいらつしやる安達先生は、農業指導により、実践的な学問と実際の地域社会を結びつける役をずっと果たされていますが、民俗学のなかでは、意外とそうした動きは少ないと思います。

宮本先生は、この時期に、戦後の食糧補給のための農業技術の開発、あるいは農業政策の提言を、非常に本気でなさっています。昭和二十一年に新自治協会に入られ、地主層を中心とした土地制度の調査研究をおこない、農業技術、農家経営の指導と生活改善運動にあたられているのです。新自治協会は、戦時中の篤農協会が戦後模様替えした名前です。そういうところで、戦後の日本をどう考えるかを、農村を基盤に実践せざるを得ない立場で考えられていたことが、以後、宮本先生の話されることのなかに生きてくるのではないかと想像しています。

たとえば、著作集『民俗学への道』のなかに、「日本民俗学の目的と方法」という文章があります。

「民俗学はただ単に無字社会の過去を知るだけではなく、その伝統が現在どうつながり、したがって将来に向かってどう作用するかを見極めなければならぬと思う。停滞し、固定しているものとしての無字社会の伝統を見るのではなく、なお生きて流動しているものとしてとらえたいものである。

単なる異物、異風の調査ではない。民俗伝承は一見消えているように見えても、実はかたちを変えて生きているものも多い。

というよりも、むしろそれが新しい方向を推進していく力にもなっている。」

そして、事例がいくつか挙げられています。若い人たちがリュックサックを背負って野山を歩くということは、かつての背負い籠を背負って野山を歩くその習俗が、材質を変え、かたちを変えただけで伝えられているのではないかというようになると。また、蓑をかけて歩いていたのが、マントやインパネスという、洋装とも和風ともつかないものにつながっていくのではないか、などというような、習俗の断続性の問題を書かれています。

その最後のまとめで、以下のようにあります。

「このように考えてくると、民俗文化の体質が世界的に見てもどういうものであるか、どの点が融和が容易であり、また、融和しにくいものは何であるか、それがなぜであるかも明らかにできるのではないかと思う。もし、それが十分答えうるものを持つことができれば、民俗学は現在の学問であると言えることができる。」

この部分は、昭和二十年代に一度書かれたものを、この著作集をまとめる時に改めて書き直された文章ですから、先生が少しこだわっていた部分だと思えます。

民俗学に対しては、常に方法論を持たない学問であるとの批判がありました。ここにおいで宮田先生は、都市民俗学については方法論を展開すべく問題を提示してくださいましたが、

全体ではまだ十分ではありません。これから民俗学に興味を持つ人々には、そうした問題をどう展開するかという命題があるように思います。

ひとつには、私の予感ではありますが、そういう方法論が、農村振興という、将来までも予測する、あるいは設計するという姿勢のなかで、もしかしら出てくるのではないか。そういう予感というか、期待があります。

ちょっと大げさになりますが、そんな理由もあって、この機会に、宮本先生の著作集のなかから農村振興に関係する前向きな提言の部分を取り出して整理してみたいと思いました。

最近の“地域おこし”のシンポジウムなどでは、「地域おこしは人づくりである」というのが、コーディネートが最後にまとめる常套語のようになっていきます。ところが、どういう手順をもってそれを成してゆくかについては、ほとんどふれられない。特に、若者対策が講じられない。宮本先生のそれは、非常に具体的な提言として出てきます。

私は田舎から出てきて武蔵野美術大学で宮本先生に出会うのですが、いちばん最初の頃によく言われた言葉ですが、「君たちは田舎のお金を吸い上げるとかたちで高等学校まで田舎で育っている。それをまったく返さない状態で、このまま東京に居続けるのか」ということでした。

ここに、こんな文章があります。

「では地方に人材をとどめ、また地方にとどまる人材を養成

するためにどのような手段が講ぜられているのであろうか。それは皆無にひとしいと言っている。今日僻地へは医者が行きたがらなくなった。地方自治体ではそれが問題になっているところが少なくない。自治体としてはギリギリ一杯の最高線を出しても来ようとする者はない。ところで私は地方在住の医者の一にきいたことがある。娯楽教養の設備が少しもないことが最もつらいという。財産の居食いのようなもので、自分をのばして行く余地がほとんどないとなげいていたが、このなげきが医者や地方にとどめさせぬよりも大きな原因となっていると思う。医者はかりでなく、若い人びとの足をとどめなくしてしまっているのである。」（『日本列島にみる中央と地方』——『日本』昭和三十九年）

そのあたりも、宮本先生は非常に思い切ったことを書いていたり言ったりしておられます。もちろん、若い者を吸引するのは娯楽施設がすべてではないわけですが、そのことを、さらに島根県の江津の問題にからめて話された記憶があります。

江津は、石見焼の産地であります。当時（昭和四十年代）は、そういう石見の窯業の過渡期にありました。

その時に、今日でいう“地域おこし”のような運動が江津市を中心に行われました。過疎で若い人が出ていく。それに歯止めをかけなければいけない。そのためにも、当時の最先端窯業技術を導入して地場産業の近代化を図り、若い人たちの足止めをしなければいけない。というような意見が大勢を占めていた

か、と思います。

その時に宮本先生はそんなことで若い者の足は止まらない、というある種の民俗学的な、つまり、そんなことは昔から繰り返してきたのではないか、という見解を示された。一男や三男であれば、兄夫婦と同居させないようにする。そうした配慮が問題なのだ。血気さかんな若者は、昔から若者宿に代表されるように、特に兄嫁と動線を交わらせないかたちでの隔離対策があつたのだ。いまさら若者宿とは言わないが、やがて二男、三男の人たちも結婚するに違いない。ところが、そういう人たちは分家させる余力は今の農村にはない。分家させるのではなく、そういう人たちを市営住宅とか町営住宅へ吸収するように、家を確保してやるのが大事なのだ。

分家すべく家を確保するのが大事なのであつて、職場と同時に住宅をつくっていかねければいけないというようなことを、さかんにおっしゃつたことがあります。宮本先生は、そういう具体的な方向性を絶えず提案された人でした。

■遊歴者への期待

戦後の農地解放、地主制度の解体に対しても、宮本先生は非常に疑問を持たれていました。もちろん、家の格差や差別の構造を是認したわけではありませんが、一方で地主層がかつての農村社会でどういう役目を果たしたかという事実の正当な評価

を、書いたり話したりされたことがあります。

その地主層が何をしたかという点、ここから先は私なりに類推するところを含みますが、中央から絶えず一方的に流れてくる人や文化を、直接、農村社会に下ろさないで、地主層の人たちがとり継ぐなり、あるいはそこでとどめるなりするという操作をしていたのではないか。農村社会と、中央の政治、経済とのクッションの役目を、地主層が果たしていたのではないか。

戦時中の篤農協会、それから戦後の新自治協会で、先生が篤農家（地主層）の人たちと付き合つた経験のなかで、たくさんの「人物」がいた、といわれている。

また、これは、多分に先生が旅をする立場での自己弁護的なところもみられますが、次のようなことも書かれています。

「その時代には地域を横につなぐ絆もあつた。地方ボスの間には連合の精神も見られ、ボスとボスの間を遊歴しつつお互いの間をつないでいく遊歴者も少なくなかつた。それは一種無用の人であつたが、そういう無用の人を村里のなかにおく余裕も古い村のなかにはあつた。

その古い姿にいまの地方を戻そうとするのではないが、そうしたゆとりと地方相互の交流のなかから中央への抵抗の精神は生まれて来るのである。しかもそのことなくして僻地性の眞の解消はなしとげることができない。」（前掲書に同じ）

中央からすべてが流れるとはかぎりませんが、よそから来た人たちが、地方に潜在的にあるエネルギーをきちんとしたかた

ちによみがえらせる。その役目があるのではないかということ
を、ほかにもいろいろなどところで言われています。

私が先生から聞いたところでは、絵師や書家の例があります。

文人墨客の旅は、およそ地方の地主層をスポンサーとして頼りながらおこなわれており、その一宿一飯の恩義ということで掛け軸を描いたり、襖絵を残したりしたわけです。狩野派、あるいは北斎や春信あたりから筆を受けた弟子たちが、その一部にしる地方を遊歴して流れ歩く。その人たちを一カ月でも半年でも逗留させる。それが、地方に一種独特の、中央にほとんどひけをとらない筆力のある絵や書を残していることを、具体例として津軽のねぶた絵や土佐の芝居絵などを挙げながら話されたことがあります。

つまり、そういう役目の人たちが、日本の地域社会を孤立化させない、僻地ということでコンプレックスを持たせない、結果的にそんな働きをした。遊歴者がただで飲み食おうという魂胆を持っていてくれたおかげで、地方が開発されている点が多いのだ、というようなことを前の文の続きに書かれています。これはまさに自己弁護的などころがあるのであって（笑）、先自身がいるところをそれをやっているんです。

■「地元弘法」の評価

具体的に先生が指導の成果を上げたということでは、佐渡の

八珍柿があります。

「たとえば佐渡の場合、八珍柿の栽培を通して“むら”が活気づいたという一例があるわけですが、それはそこに優れた指導者がいたからです。杉田清さんという栽培技術者で、たいへん立派な方です。ただ、はじめのうち佐渡の人たちは、杉田さんが八珍柿をすすめても、なんだ農協の指導員じゃないかという程度でした。杉田さんのことを受けとめなかつたんです。これは、日本の地域社会の特徴というか、非常に悪い態度なんです。つまり、その人がどんなに優れていても、優れた面を評価しないで、欠点のほうで評価する。

しかし、ある優れた知識を持っている人がいたら、みんなその人をもりたてていかなくはない。私は、杉田さんという人を神様のように思っていたから、どこへ行っても杉田さんのことを話す。この人は佐渡を救ってくれる神様だという話をし続けた。そうしているうち、いつの間にか地域の人たちみんなが杉田さんを尊敬してくれるようになり、杉田さんのいうことが通るようになったんです。それが佐渡で八珍柿を成功させた大きな原因といえるでしょう。」（「宮本常一 その地域論」——『地域開発』二〇一号 昭和五十六年）

こういうことを書かれています。宮本先生は、自分で啓蒙的なアイデアを投げかけるだけではなく、その土地で何かに集中して孤軍奮闘している人がいると、それを東京から行った学者ということ側面からもりたてて、神様だ、神様だと応援し

てあげる。そうしたことが遊歴者の役目ではないか、と一方では思われていたのではなからうか。

西日本の各地で昔から言われている象徴的なことわざで、「地元の弘法」というのがあります。

四国八十八カ所巡りを模したかたちで中国山地などには方々に四つ堂がある。

つまり、四国まで行けない人はそこで接待の勤めをすれば利益が受けられるという仕組みだったはずなのですが、必ずしも地元の人たちが利用しない。地元弘法大師ではありますが、苦しい日程を割いて四国まで行き、よその土地の弘法大師をありがたがる、というような意味です。

今、私などが非常に限られた経験で地方を歩いてみても、地方の役場あたりで本気に将来のことを考えている人が結構います。しかし、本気で考えて何かアクションを起こそうとすればするほど足を引つ張り合う、認め合わない、という風潮があります。

ある人の言葉に、「日本の地域社会は大根と盆栽が名物だ」というのがあります。つまり、足を引つ張ったり、芽を摘んだりするということです。

そうであれば、よそから行った人がそういう人たちを孤立させないようにしなくてはならない。地方を孤立させないと同時に、そうした人間の芽を孤立させないような側面協力をしなけ

ればいけないのではないか。私も、このごろ二、三の地域おこしに関係してみて、そう実感しています。

■岡山県美星町の場合

宮本先生は、先を非常によく読んでおられました。そして、先ほどの石見の窯場の将来展望について話された頃、次の文章を書かれています。

「高齢者を大事にするということは、実はその人たちの持っているものを誰かに継承させるということが大事なことであり、高齢者対策は同時に若者対策でなければならぬ。かつての地域社会には高齢者と若者が結びつく場があった。それは家であることもあったし、祭りの場や共同作業の場など、様々な場合があったが、今ではそういったものが分解している。」(山村の地域文化保存について「昭和五十年」)

ということで、特に伝統文化の保存、継承ということは、現在持っている技術者に対して保護対策をするのではなく、それを継承する若者を対象に考えなければいけないという問題を、ここで投げかけられています。

以下は自分のことで恐縮ですが、岡山県小田郡美星町という吉備高原上の小さな山村、私の郷里に、自治省のリーダーイング・プロジェクトという大きな開発事業の予算がつかまりました。

それをどう展開したらいいかという問題を考えるメンバーに、私も入っています。そこで私が感じたことは、ダイナミックなアイデアが地場からはなかなか出てこない、ということですが、議論を重ねるにしたがって、日常的な問題をからめて矮小化していく。もちろん当面の予算枠を照らし合わせながら物事を考えることは、役場の人などは習慣として持っています。それでは、十年後にこれをどういうかたちで次の世代へ継げばいいか、というようなことに関して、ほとんど考えが及びません。

何よりも問題なのは、補助金財政でいろいろなことを処理してゆかなくてはならないという長年の習慣が、地方をおそろしく能力のないもの、アイデアのないものにしてきているのではないかと、と思えます。たとえれば、小遣いがもらえるから何かをするのであって、自分がこういうものが欲しいから人や金の算段をするという態度ではないわけです。

百万円の費用なら百万円のこと、一千万円の費用なら一千万円のことしか考えず、これを連携して転がし、将来一つの大きな塊にしていくという雪だるま方式の考え方はほとんど出てきません。多くは単発、単年度事業で終わってしまうのです。また、国から出る金の筋がそれぞれに違いますし、担当者も時どきに替わります。

これは、仕方がない構造ではあるだろうが、何とかならないものか。しかし、訴えるのはやさしいのですが、どうすればいいか、とても難しい問題ではあります。

美星町のリーディング・プロジェクトは、初年度の九指定のうちの一つでありまして、自治省もたいへん力を入れていきます。その時に、自治省のお役人に教わったことが、今いちばん大きな印象として残っています。

だいたい十億のお金が出るということで、われわれは十億のお金の使い途を計画しました。ところが、最終審査の段階で自治省の役人に、「あなたたちは十億円ももらえるから十億円分の計画を考えるんですか。自分たちの金は一銭も出さないんですか。十億の金は呼び水でしょう。町として本当に望ましい事業であるとしたら、もしかしたら三十億、五十億円の規模かもしれないじゃないですか。五年、十年の長期的な事業計画と予算計画を出してみなさい」というような、強い姿勢でやる人がおりまして、おカミのなかにもえらいことを考える人がいるのだと感心しました。本当にそれは正論です。

そして、美星町は現在二十五億ぐらいの町予算があるところですが、その五年計画、十年計画をつくりました。そして、十億を第一段階の事業費として、総額三十数億円の町の事業計画としました。

しかし、それが許可されて実施計画、実施設計に移る段階で、もう切り売りが始まるわけです。パートごとに処理してゆこう、とする。そこでは人間関係とかいろいろな利害関係がからんで、矮小に、矮小に分割されてしまうおそれがあります。

せつかく大きく夢をさせて理念構築をしてみても、町当局が

実施にあたって、よほど腹をすえてかからないことには結果は知れている。

何よりも、計画策定、実施設計、運営管理と一貫した姿勢で俯瞰できる人なり機関なりが必要で、それがうまく機能する体制が必要です。でも、ひとたび絵が描けたら、あとはお祭り騒ぎのようになつたり、腹の探り合いのようになりにかたねない。みんなが同じ全体像をイメージしていればいいのですが、途中参加の人からはパートのアイディアしか出ませんので、これが五年して本当に完成するかどうかというかたちになるだろうか、というのが読めなくなつてしまつた。

ちよつと心配が過ぎるかもしれませんが、そうした現状があります。

私の郷里の実例ですが、どうも地方の問題はそう簡単にいきません。

宮本先生も様々なところで問題を投げかけられ、八珍柿のようにうまくいった例もあります。また、周防猿まわしのよう、先生が亡くなった後、非常に好回転しているところもあります。しかし、いかに宮本常一といえども、いかに実践的、民俗学的なフィールドからの提言といえども、当たりはずれがある。確率でいうと、三割バッテリーになっているかどうか。先生が書いたり、講演をしたり、あるいは力を入れて人を励ましたり、そうしたところをもう一回歩き直さなければ評価はできませんが、全体的に歴史の上でいうと、この種の問題は、十のうち一

つ、先生の考えが根づいていければよしとしなければいけない。むしろ、そのあとの九を、どう確率を上げていくかは、われわれ次の世代の課題であると思つていきます。

■「村おこし」修業

川喜田 日本の村づくりでもヒマラヤの村づくりでも、共通にこんなことを感じています。

住民とわれわれとの関係なんです、その地域のことは住民のほうが先生に決まつている。だから、こちらは生徒として、師匠に対する礼をもつて接すること。これが第一。

ところが今度は、住民がわれわれを先生にしなければならぬことが二つある。一つは、たとえば、私はずっと北上山地の山奥の村の村おこしにかかわつているんですが、そこでは今、和牛に力を入れている。ところが牛市でよい値で売れなかつたらがつくりです。つまり、いくら地方の知識をまとめてもそれだけではだめで、レーガン大統領のくしゃみの仕方ひとつでこれもなるんだ、というデータもないと困る。

すなわち、外の情報を非常に欲している。そうした場合、こちらはあんまり学がないけれども、住民よりはほかの世界を知つている。だから、外の世界の知識などを教えてあげると歓迎される。

もう一つは、住民の声をオーガナイズしてあげるといふこと。

この二つのサービスができたなら、こちらが先生になれるということですが。そうすると貸し借りがいいから、まことに気持ちがいい。

住民本位だからというので、もっともらしい顔をして聞き役にはばかり回っているのが能ではない。こつちも向こうに対して知識を提供するというように、ファイティ・ファイティでないとおかしと思う。“地域おこし”に関して、この修業をもちよつと自覚的にやらないといけないということですね。

しかし、最終ゴールは何かといえ、外の知識を仕入れてくることも、自分たちの仲間の声をオーガナイズすることも、住民自身が握ってしまえば、いちばん強い。実際に沢内村など面白いことをやっている村は、それをやっているわけです。

舛田 山形の場合、中央志向性が非常に強い。ですから、いま川喜田先生が言われたように、山形県内でも“地域おこし”が成功しているのは、確かに住民が自分たちの声をオーガナイズしていくことができたところですね。

ほかのところは、せつかくそういうものが出てきても、最終的に計画をつくる時にどうするかというと、たとえば東京のコンサルタントの会社に頼んで、報告書を出してもらおうといったやり方である。しかし、それを実際にやってみると、どうもうちの町には合いません、みたいなケースが非常に多い。そんなわけで、神崎さんのご報告のなかでの宮本先生の考え方というのは、非常に参考になりました。

安達 今、小さな町でも企画課などができ、企画の係長というのは、みんな大学を出ていて、役場に勤めて十年といった人たちです。

先日、山形の朝日町のプランができたんですが、要するにそれはシステム図を書けばいいというようなものなんです。

朝日町は蜜が入った非常にいいリンゴができる。赤ワインのいいのもある。また、酪農もさかんだと自信たっぷりなのに、なぜお嫁さんになると、フィリピンの厄介にならなければいけないのか。そういう根本的な問題は全く伏せ、システムだけ書いてある。コンサルタント会社の影響なんでしょうね。

■地主の役割と地域文化

高橋 ついこのあいだも、山形のあたりを歩いてきたんですが、日本の農村なり地方は素暗らしくよくなっていると思うんです。経済の問題に関して、東京との格差を意識し、格差を埋めようという発想自体がもうおかしくなっているのではないかという感じが私はするんです。むしろ社会開発とか文化開発のほうで、経済開発よりも重要かもしれない。

その点で、みなさんに民俗学的におうかがいしたいのですが、宮本先生がいちばん信頼を置いた層は、先ほど神崎さんがおっしゃった地主だったのかどうか。町方の資産家というか、町人層のところに、人間として、あるいはカルチュラルなパトローネ

ージとしても、最も信頼の置ける層があるのだとお考えになつていたのでないかという感じもするんですが、そのへんはどうでしょうか。

宮本 最も、と感じていたかどうかはわかりませんが、信頼を置いていたことは確かです。若い時に関西で過ごししましたからな。

一方、地主層のことは、戦後の篤農協会からみで歩き回った時の収穫が大きかっただろうと思うんです。具体的にどうやって次のステップを踏み出すかということ、地域規模でも全国規模でも、同じテーブルで考えられた、よき時代だったと思うんです。

その時、きちんと一緒にものを考えられ、かつ、意見を具体的に持ち、技術を持っていた人たちが、地主層だった。それを理論的に歴史観としてまで持つようになったのは、能登の時国家の調査がきっかけだったと思います。時国家が、地域社会全体を食わせるためにいかに四苦八苦しているかが、記録として、ずっと長い時間にわたって出てきた。

安達 地主と商人というのは、小さな町ではかなりダブっていたんじゃないですか。純粹な地主もありますが、商人のなかでも酒屋などは、山を持っているとか相当な地主がいる。

高橋 宮本先生は、日本の町で文化性のあるところというところ、このくらいしかないんだといくつか言い切っておられます。そのなかでも大阪、要するに船場の商人に対する信頼感、先生の

なかで非常に篤くあつて、ある意味で自分の学問を支えた。パトロンはそこなんだというお考えがあるのではないか。それがまた旅における地主層の重要性とつながっているのではないかと、感じもするんです。

宮田 いわゆる村のなかの町というものですな。関西の在郷のようなものが宮本先生のモデルとして常にあつたようです。

日本では侍中心の城下町が地方の拠点になっていきますが、それに対してはあまり信頼を置かなかつたようですね。どうも侍文化に対する独自の判断があつたのではないか。宮本さんの、いわゆる城下町論を読んでもみると、侍が日本の都市をだめにしている。怨霊やお化けを出すのもみんな武家の文化だ。農民にはそんなことはあり得ない。そういう複雑な、たたりのような人間関係をつくらないからと言っている。

そして、日本の町がなぜ栄えたかというところ、百姓のお陰と言っておられる。町方と結びついた農民、近郊農村出身の農民が、日本の町を支えているという表現があります。

安達 典型的には大阪の周囲ですね。

舛田 農地改革以降、地主にはかなり厳しい評価があります。しかし、もう一方で、地主の子弟がかなり高い教育を受けて地元に戻ってきて、地主として地域の文化に果たした役割があるんですね。

たとえば私などが見ている地主でも、青年たちを集めて夜学をやってみたり、あるいは楽器を買い与えてブラスバンドをつ

くってみたり、とかしている。そういった意味での地域文化というかたちで、地主の果たした役割を、宮本先生はどういうふうに評価していたのか。

安達 それは歴史的に考えないといけない、全部一緒にはできないと思うんです。

地主について大まかに言うと、大正八年頃からがらっと変わるんです。大正八年頃から、みんな懐手地主になってしまふ。コメを売ることだけしか考えない。もつとも、大地主は最初からそうですが。

大正八年までは、十五町程度の地主は作男などを若干置いて、手づくり農業をやっています。明治の前半は、それらが品種改良などでトップに立っているわけです。いわゆる篤農家の集団です。

土地の改良なども、自分の資金を出し、小作は労力だけ出せというので、今の農水省の補助事業みたいなことをやっていた。その結果反収が上がると、地主は小作料も少し上げる。悪徳地主でなければ、小作人も取り分が少し多くなる。そういうかたちで両方が折り合っていたわけです。

そんなところに外から人をつまり、“異人”を呼ぶ。それが長逗留をして、農閑期に村の自作農の上層あたりが寄って川柳や狂歌を学ぶとか、ちよつとした「連」みたいなものができた。地主はそういう役割を果たしたと思います。

加藤 確かに、日本の地主層の持っていたたいへん高い文化

性、伝統を考えてみないといけないと思うんです。池大雅の絵が大分県中津市にあるということですが、私がこれを読んで連想するのは、秋田の平野美術館です。

あれは、藤田嗣治がどうにも絵が売れない時期に蔵のなかに泊めてやった。そうしたら、彼が大壁画を描いたんですね。蔵のなかに描いたというのがすごいんですが、あのようにして絵描きを長逗留させるわけです。芭蕉の『奥の細道』だって、地主層とか豪商の家とかに泊まって、わりあい優雅なんですね。

そういう人たちを迎え入れる伝統がずっとあって、地主文化が大衆化したものが地方都市のシンポジウムや講演会かもしれないですね。今でも文人墨客を愛する伝統がある。こういう国はあまりないのではないか。

■都市人口の環流の場としての地方

高橋 私が最近地方を回って痛感することは、地方から出てきて東京で名を上げた芸術家の美術館や記念館だとかの、ここ数年の整備はたいへんなものである。それが新しいネットワークを組んで、東京の若い連中がそれを経巡るというようなパターンも出てくるのではないかと感じがあります。

ですから、地方というのはむしろ若い連中の教育の場だとか、中高年層の自我再編成の時期の教育の場だとか、そういう機能を担うようになるのではないかと感じがあります。

川喜田

そういった教養というか、知的に高いものを仮に第五次産業と呼ぶとすると、将来発展するのは、たぶんこの晴耕雨読産業だと考えている。この場合、「雨読」は受け身ではないに、晴耕「雨クリエーション」。これが非常に安定したものであるとして普及するとにらんでいます。その場合、農村のほうがいいです。

高橋 たとえば「マイホーム」と言いますが、これは企業に全面的に帰属することのアンチテーゼとして言うわけで、その意味でマイホームというのは不健全だと思えます。あらゆる集団に部分的にしか帰属しない、社交や自己啓発にも部分的にしか帰属しない、そういう個人がそろそろ出てきているのではないか。

そういう人間が都会のなかで非常に多く現れてきて、彼らが新しい旅を求め、アイデンティティがどこにあるか探しているような感じも出てきている。その層に対する教育の場、再教育の場がない。へたをすると、チベットとか外国に行ってしまうと思います。その受け皿としての準備が今の農村では必要なのではないかという感じもします。

米山 現在、日本で産業としての農業は、計画経済そのものみたいな感じになっている。ソビエト、中国の計画経済と同じで、工場生産みたいなものです。豊作になれば減反とかをやり、農民のほうもそちらでは全然うまみがないから、自給地で一生懸命にやっている。日本もそうだと思うんです。

ですから、専業農家は気の毒ですが、儲けなんかどうでもいい、通勤兼業をやればいいというほうが、どんどん肥大しているという状況です。

しかしもう一歩進めば、ガチガチに管理されている専業農家のほうはお先真つ暗でつぶれる。つぶれたら、自給地にあたるものが激増して、環流人口を引き受けるかたちの村ができる。日本の村の将来というわれわれの研究会の本来の話に帰ると、そこへ行く可能性があるのでないかという気がするんです。ですから、これから農業を振興してということとは別に、次の世代の環流してくる連中をどういうふうに入れて村をつくっていくかを、本気で考えることが重要ではないか。

■地方の「しがらみ」をどう解消するか

加藤 そうした新しいあり方の象徴的なものが北海道の富良野だと思うんです。昔は誰も知らなかったところでしょう。倉本總という人が住んだために、富良野はロマンチックなところになった。スキー場があつてしゃれたヒュッテもある。

私の知り合いのお嬢さんですが、子供の頃から牛が好きで、畜産を出た人と結婚し、東京の大学なんかにいるよりは北海道で牧場をやりたいというので、北海道に行っています。北海道にはそれを受け入れるおおらかさがあるんですね。

米山 私は地域振興というか農村振興の側の味方のつもりで

いたんですが、先ほどおっしゃった大根と盆栽みたいな面が、農村にはやはりあると思います。それを考えておかないと、どうしてこんなにみんな町へ出てくるのかという説明がつかないわけです。

『Voice』という雑誌に、曾野綾子さんが「都会の幸福」という連載をしている。一口で言うと、田舎の悪口なんです(笑)。

私は東京しか知らないから、東京から見ますということなんです。田舎へ行くと威張っているお婆さんがいる。よく聞いてみたら、医師会会長の夫人とか、知事の夫人とかで、自分は偉くもないのに夫人だということで鼻息が荒い。また、地方史家が威張っていて、中央から行った歴史小説家などは逃げ回っているとか、そういう話が次から次に出てきて非常に面白い。

私のような、地方主義の本を書くことと思っている立場から見ると、そうした視点は非常に大事だと思うんです。都会の人がどんどん言ってくれないと、地方の人は夜郎自大、井の中の蛙にならねない面が確かにある。そこをなんとかしていくことを考えないといけないと思います。

高橋 戦前から戦後にかけて、農村社会学のいろいろな成果が出てきました。ただ、一つだけ問題だったのは、柳田さんをはじめとする方々が江戸時代の農村を復元して、それをモデルとしたことである。そして、福武直さんその他によって、そのモデルが近代化にともなうって崩壊する過程として、農村のコミ

ュニティがとらえられてきた。

これを崩壊過程と見ずに近代化にともなう再編成過程と視点を変えれば、将来につながるのではないか。再編成過程だったのだと見ると、われわれが今の農村に対して持っている不満も少し違ってくるのではないか。

宮本 農村の再編成の過程という時に、父が考えていたのは、大きな意味でのシステムの再編成のようなものではないかと思えます。その意味では、民具などハードもいろいろ使いましたが、手段にすぎないし、農村もまたそうである。

昭和四十年ぐらいから人の動きということについてさかんに言っているのは、日本観光文化研究所とかかわりが深いわけです。観光そのものについては、非常に早く見切りをつけた。けれども、最後まで人が動くことに可能性を探ろうとしていた。今の世はタコ壺の管理社会化で、都市を含めて構造がたいへん硬直しています。みんな立場でしか発想できなくなり、立場でしかカネが使えない。しかも、全世界、同じシステムに向かつて進みつつあります。

父の生前は今ほどはつきり見えていたわけではないけれども、管理とか計画といったことに象徴される時代の動きに対して、非常な嫌悪感、危機感を持っていて、少しでも風穴を開けるために動き回り、人を探し、横につながろうとした。

郷土大学の試みにしても、地元を肥やそうということもあるんですが、単にそれだけではなく、むしろ地方間をつなげない

かという意図がかなりあったように思います。しかし、そのための具体的な工夫は、いまだに大していい知恵が出てはいない。手探りの状態であると思います。

(第十八回 一九八八年七月十九日)

農業に明日はあるか 秋田県羽後町貝沢集落の取り組み

●講師 高橋良藏・農業作家

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 高橋潤二郎／慶應義塾大学教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／筑波大学教授 宮本千晴／（株）砂漠に緑を 山俊直／京都大学教授

安達 今回のゲストは、高橋良藏さんです。この方は、米をつくり、牛を飼い、またご自分で大工もなさいます。

私は、かねがね百姓というのは、百種類の仕事ができるから百姓というのだと言っている。米はつくれるし、大工もでき、石工、左官、木工もやる。ところが、今は百姓が一姓になってしまっている。そういうなかで、専業農家でまた百姓でもある高橋さんを、今日は講師に迎えました。

高橋（良）ご紹介をいただきました高橋です。私は、秋田県の横手盆地（秋田県羽後町）の一角で農業をやっています。私の農業というのは、田んぼが二・四ヘクタールと乳牛が二十頭で、そのうちの五頭が仔牛です。

牛を飼っている関係で、二年ほど前から減反による休耕田を使って下さいと申し出る人が多くなってきました。とうとう現在では、六町歩くらいに増えました。それらの面積を合わせるに八ヘクタール農家で大百姓なんです。実際にはその中身にたくさん問題があるわけです。家族は七人で、私の息子夫婦と孫と、私の家族です。田んぼと乳牛を組み合わせた専業農家といえるでしょう。

■意欲的な空気があつた昭和三十年代

その頃、私は村の青年運動をやっています、青年新聞を編集していました。その時、地主の奥さんでインテリの嫁さんから、「村の嫁さんに名前がないのはおかしいのではないか」という投稿がありました。村のなかで婿をとる嫁さんは、ハナコとかキヨコとか名前で呼ばれているのに、よその村から嫁いできた嫁さんには、名前がない。みんな「あそこのあねい」とか「あねっこ」とか呼ばれ、名前で呼ばれる人が一人もいない。しかもその名前が私のところでは四つの階級に分かれている。貧農の嫁さんを「あね」、中農は「あねこ」、自作農は「あねち

「や」、そして地主の嫁さんは「あねさん」となるわけです。これも嫁さんの差別である。嫁の解放は、戸籍にある名前を呼ぶことから始めようという投稿でした。それがやがていろいろな運動を起こすキッカケとなり、三十年前のことですが、女性が「人間宣言」をやるに至ったわけです。

また、私の村は、非常に地下水の悪いところで、風呂の水は川から汲み上げ、台所用の水も金気水で鉄分が多いため、川から汲み上げていました。

その頃、東京では蛇口をひねると水が出ると言われていた。あの蛇口の水道が欲しいという話になるわけです。自分の名前すら呼ばれないような人たちが、そんなことを言い出した。そしてボーリングをやつて、地下水を汲み上げ簡易水道を始めた。また、ハエのいないところで、ゆつくり昼寝をしたいという意見も、嫁さんの間からでた。そしてハエの撲滅運動が起きたりした。

そのほかに、次・三男の潜在失業者という問題があった。あの頃は跡継ぎでもないが、仕事もないために、どこにも行かないで家の仕事を手伝っている男たちが百戸の集落に四十五人ぐらいいた。ちょうど八郎潟の干拓の話が出ていた頃なので、そこに集団入植運動を起こそうということで、次・三男会などという会が生まれました。

とにかく村のなが、男でも女でも暮らしを向上させるとか生産に意欲的な空気が充滿していた。農業とか農家の暮らしを

よくするというところに、明日に向かって、みんなが希望を持っていたわけです。

■減反政策がもたらしたもの

ところが、昭和四十年代半ばからの減反政策を境にして、村の様相がすっかり変わっていききました。私の村は昭和五十二年に、農協の窓口の調査で農業所得と農外所得が半々になった。そして十年経った今日では、村の経済は農業所得が三〇%、農業以外の所得が七〇%というふうにすっかり変わってしまいました。

これから五年先の村の農業がどのように変わっていくのか、私なりに考えてみますと二つの面があります。

まず、「農業が崩れた」とか「農業が破壊した」とかいう言葉がこれまでも使われてきていますが、農業が本当に破壊する、崩れるという最終的な到達点はどういう姿なのであろうか。それは耕作放棄ではないだろうか。村の現実を見ると、叱られるかもしれないが、もしかしたらそれは数年後に訪れるかもしれない。そうした現実の状況について二、三申し上げたいと思います。

第一に、昨年から水田農業確立対策ということで新しい減反政策が始まったのですが、そこで米価引き下げという問題が起きました。来年からは新しい算定方式でもっと米価が下がるこ

とを約束しています。米一俵が一万三千円台の米価になる計算です。

二番目に、減反奨励金のカットです。今、減反をやる場合には農家に減反奨励金や補償金が出ているのですが、昨年からまず三六%カットされ、再来年度からは、もう奨励金や補償金は出さないと言われはじめています。補償金がゼロになると、大きな問題が起きると私は考えています。

三番目に、牛肉とオレレンジが自由化されることが、三年後とはつきり約束されてしまったことです。私は酪農家ですから、今は、仔牛の値段で酪農を支えているわけです。自由化になれば肉牛で三〇%から四〇%の下げ幅になる、特に私のような乳牛の場合は、アメリカの肉質に近いということで打撃が大きいので四〇%は覚悟しなさいという計算が専門家の間でなされています。

■減反奨励金がなくなると何が起ころか

以上のように、農業を取り巻く状況は実に厳しいものがありますが、私どもがいちばん心配するのは、来年一年で減反奨励金がなくなつた時に、果たして農家が減反をするだろうかという事です。

今までは減反奨励金があるから結局減反をしてきた。この奨励金があるから、少しでも有利にしましょうということでも村の

転作委員会が組織された。これは昔の五人組のように、一人はずれると奨励金をもらえなくなるので、まずはみんなこの秩序を守ってきました。

ところが、この奨励金制度が完全になくなれば、転作委員会のような拘束力を持つものもなくなるので、減反が守られるか疑問が出てきます。

大潟村では、過剰に作付けした米をヤミ米として流通させたという事件が起きたが、不起訴になった。そこで、作付けしても大丈夫ということで一挙に大潟村では過剰に作付け面積が増えた。今年には特に凶作ということもあり、ヤミ米が初めて普通相場よりも高く売れる現象まで起きた。今年の経験で、おそらく過剰作付けが進むのではないだろうか。

この過剰作付けが一、二年続けば、私は国内市場の自由化に直結してしまうと思う。政府米が引き下げになり、今度は国内市場で農家同士の安売り競争が出るので、ますます米価の引き下げに拍車をかけてしまうだろう。

また、私の場合は酪農もやっているのですが、肉牛が自由化されると米価が下がり、乳価も下がりますが、逆に土地改良区とか役場の費用負担金は値上がりしてくるので、円高の関係で飼料が安くなった分を差し引いても、私の家の農家経済のなかで百二十から百四十万円ぐらい所得が少なくなります。これは半年分の生活費に相当します。私の属している農協は七百農家からなっていますが、合計すると四億二、三千万円ぐらいの減収になり

ます。

これらのことが地域全体に大きな打撃を与えるのは確実です。私は田んぼの価格が相当下落すると思います。私の村の農協の場合、最盛期の時は一反歩三百万円ぐらいでしたが、今は田んぼを売る以外に借金の返済ができない。

五年ほど前から負債整理委員会が農協のなかにできて、田んぼを売るように指導しましたが、その時は百七十万円でした。ところが最近では、田んぼを売る人がいても買う人はいないわけです。現在米価が一万六千円で、田んぼは百五十万円ぐらいです。米価が一万二千円台になった時に田んぼの価格は百万円を切るのではないだろうか。

東京で地価が上がったと騒いでいますが、地方の農村の農地価格は下落の一途で、問題は深刻化しています。三年先はこの状態でいくと、ぼちぼち耕作放棄が始まる気がします。その前兆と思われることが今いくつも出て来ています。

たとえば、いま私は六町歩の減反田を牧草地に借りていると言いましたが、十一カ所に分かれているのです。農地が散在すると、大きな機械ではロスが大きいです。酪農家が共同で大きい機械を買っている。しかし全戸合わせると三十六カ所にもなり、とてもやり繰りできない状態でありお手上げです。

転作奨励金という制度があるので、それをもらうために田んぼをある程度管理するわけです。農地は放っておくと使えなくなってしまうんです。私の地方では昨年からは、転作地を貸す

人が私のような借りる側に管理費を渡すようになっていきます。転作奨励金がなくなれば、貸す人が自腹を切ることになるので貸すことができなくなり、私たちのような借り手もお手上げとなれば、農業にあまり依存しないような農家は耕作を放棄するだろう。いったん耕作放棄が始まれば、数年後には一つの流れとなって増加するという状況になると見ています。

■暗い見通しをどう打開すべきか

それからもう一つ、私の村のなかで不安に感じる問題は、農業の就労人口が急速に高齢化しつつあることです。

羽後町には三千五百戸の農家、四五〇〇ヘクタールの田畑があり、約四千人の人が働き、その耕地を維持しています。その六五％が女性です。年代別に見ると六十歳以上の人たちが三〇％台を占めています。十年後の中心労働力は、男が四百二十人しかいない計算になる。また四五〇〇ヘクタールというのは、一万七千カ所にも分かれて点在している耕地であり、一度に耕作できるわけではない。こういう事情であるから耕作を放棄する流れが出るであろう。

最近、出てきた状況ですが、町の工場誘致において企業側の雇用の条件として「家の農業を手伝わない」ことをあげてきている。農業をやって、工場のほうの作業に集中できないと困るというわけです。

それから、結婚の届け出数が、この五年間でガタガタッと少なくなってきたいます。これは独身者の増加を物語っている。三十五歳以上で嫁さんをもらえない独身男性は、この五年間で四倍に増えました。

これから五年後を推計すると、だいたい三十五歳以上の独身男性は五倍から七倍に増える計算になります。東京の銀座で「嫁よこせ」などと騒ぐ元気のいい青年のいるところなんですから、けれども……。

村の農業はここ数年のうちにガタガタと落ち込んでしまおうという暗い話になってしまいました。どのように打開していくべきなのでしょう。

たとえば私のうちでは、息子とも話しているのですが、農家という強みを生かして、野菜をつくるとかアヒルを飼う、また竹、栗を植えるなど自給態勢を目指そう。健康的な食品を自分の手で作っていいこうということを行っています。

また、私のうちは牛舎などサイロも含めて全部手づくりです。転作田が増えて乾草の置場が必要となったので、大工さんに頼んだところ百五十万円かかるということである。百五十万円というのは私のうちにとってはたいへんな金額です。今年はどうしても牛舎が必要になったのですが、借金もいやだということ。古い農家を解体する際に出た古材を息子がもらって、自分でノミをふるってつくりました。

それから私の書斎は自分の手で作りました。大工さんに頼

むと五十万円かかる場所ですが、ベニヤなどの材料で四万円ぐらいでできましたが、結構立派なものです。

このように工夫したり、考えたりしていく。農家の自給力の強さを生かせば、まだまだ私のうちは五年や十年は大丈夫です。しかし村全体を見ると大変悲劇的な状況です。

■危機に瀕する農業者年金

安達 今の高橋さんのお話を聞いていると、農業と農民のいない村になってしまいうすね。

なお、今のお話に関連して他の過疎地の報告をしておきますと、島根の過疎の村の調査では、昭和三十年にあった農地の半分が、現在では荒れ地になっていることがわかりました。

また、新潟県高柳町も同じように、昭和三十年と六十年を比較すると農地が全く半分になっています。そして耕作する人も半分になっている。

それから農家の持っている山自体の面積が狭くなっている。荒れ地が出れば山に還っているはずだが、農家は多分非農家に土地を売ったのでしようね。

高橋（良） 秋田魁新報に秋田の大曲農業高校の卒業生の動向についての調査結果が載っていました。それによると、昨年の卒業生百数十人のうちで卒業後すぐに農業に従事した人は二人しかいない。

ところが卒業してよそに就職した人たちの追跡調査をする
と、八〇%の人が戻ってきて農業に従事しています。これは農
業者年金をもらうためです。この年金は、経営譲渡した後継者
がないと支給されないのです、無理やり自分の息子を村に戻し
て、資格をつくっているわけです。しかし、戻ってきた息子が
農業に携わっているかというと実態はどうも違うようです。

宮本 帰ってきた人たちは何をしていますのか。

高橋(良) 近くの企業などに、就職しています。一応一〇
〇%就職ができています。このあいだ、若い娘さんたちと話し
合った時に、「なぜ農家の嫁がいやなのか」聞きましたら、老
後が不安定と言う娘さんがいました。勤め人とは退職金や年金
が違うというわけです。

それで、同じ村のなかで、高校卒業後、役場の職員になった
人と、農業に従事した人を比べてみましたら、六十歳定年後に
八十歳まで生きたとして、退職金や年金などを合わせると、役
場の職員と農業をやって隠居した人では、四千八百万円ぐらい
の違いができました。

安達 農業者年金が危機に瀕しているということで、私は二
年調査をしたが、高橋さんがおっしゃったように、年金の受給
資格を得るために息子をちよつとだけ呼び戻すということがケ
ースとして非常に多い。

実際のところ、年金を納める働き手がいなくなると年金自
体がパンクしてしまう。また、最近では農業者年金に掛け金を

納めずに、銀行などが出している利率のよい積立貯金等に掛け
る人がでてきた。

この年金制度も、耕作放棄の現状とともに見直す必要があり
ますね。

■農地の散在が委託耕作をばむ

舛田 山形市内のいちばんはずれに七十戸ほどの集落があり
ますが、ここは農協を通さないと委託耕作をおこなっている。
このままでいくと、農業を営んでいるその五十五戸のうち五戸
だけが同じ集落のなかの土地を集積して専業農家としてやって
いき、残りは完全に山形への通勤に変わっていくと予想されて
います。

高橋(良) 私の地方で、農家が田んぼを手放すということで、
会社を設立し耕作の請負を始めたところがありました。最初は
新聞などで取り上げられたりしたが、二年経つとお手上げにな
ってしまつた。それは、委託されている農地が細かく点在して
いるため、機械で効率良く耕作ができないわけです。

安達 耕作しない土地をコントロールするような調整機関が
必要だが、行政サイドに、そのような機能を期待することはで
きない。今の農政は、米価を引き下げ、小規模な農家をやめさ
せて、大規模な農家を残すという考え方なのだろうが、農地が
散在してしまつている現状を考えると難しいですね。

宮本 山林であれば土地を買うことも考えられるが、農地は法的な制限もあるので、簡単に買うことはできないでしょう。

これは山林のケースですが、栃木県で雑木林になっていたところが人手に渡り、名目上別荘地ということで約千七百人に分散してしまった。幸い別荘が建つこともなくそのままの状態ですが、極端にいうと農地がそういう状態に追い込まれることもあるのではないだろうか。

安達 つまり、公共の外に放り出される土地をどのように管理するのか。必ずしも農産物をつくらなくてもいいが、農地は管理をしなければ荒れてしまう。農地の管理については、現状では何も考えられていないわけです。

加藤 放り出される農地を、仮に不動産屋が十億円を投資して買い占めて、代耕作を請負でやらないかと言われた時には、代耕作の見込みはありませんか。

米価を一万円にして、耕作料が二万円でしたらやりますか。

高橋(良) 一万二千円の米価が、ギリギリのところではないでしょうか。私は一万二千円が耕作放棄の分岐点であると思います。ここまでは米で収入を得られます。ただし、農地が散在していたのでは、無理でしょう。

宮本 「土地を貸すから耕作をなささい」と言われて、やる気が起こるでしょうか。やはり自分の土地でないと難しいように感じます。利益が上がるとなると耕作するかもしれないが、「百姓をやる」にはもう少し別の要素がないと、代耕作をしよ

うとする気持ちにまでならないでしょう。

高橋(良) 私の持論は、農協単位の共同化を農協が計画するべきだということです。今の農業の現状では、個人個人で農業をおこなうにはあまりに障害が大きい。また、当分の状態を続けるということであれば、減反奨励金制度を続けることがいちばん有効であると思います。

米山 私は、国土保全の観点から農村を存続させていくことは、十分あり得ると思います。たとえば、環境庁が国土保全のための補助金を生産農協を単位として出すようなことを考えれば、可能ではないだろうか。そして農村あるいは農協は、農村存続のための貴重な人材を確保するために存在していくということですね。

宮本 農地保全の問題は、土地の信託組合や銀行などを実現させるための法律的な整備があればいちばん早いのではないだろうか。

耕作放棄はしても、意識の上で土地を簡単に手放すことはないとと思うので、耕作する権利のみ供託しあう制度ができればよいと思う。

安達 しかし、現在、土地の値が下がっているという非常に悪い条件があるわけです。資産価値が下がれば、今の若い人は簡単に土地を手放すのではないか。

■地域問題なのか農業問題なのか

高橋（潤） 今の農家は、農外所得七割の人も含めて、農家と言っています。根本的に彼らは農民ではない。かつての農民は、その地域で食えなかつたから困った。今は農業をしなくても食えるわけです。

まず、今の農業のおかれている状況が地域問題なのか農業問題なのかを分けるべきなのではないでしょうか。

また、日本の農村にある意味で悪くしてきたのは農業に対する補償だと思います。今までのお話をうかがってきても、根本的には補償に頼っているためにダメになってしまったところがあると感じますね。

加藤 ところで、高橋さんは、ご著書『百姓宣言』のなかで、完全社会主義体制の北朝鮮の農業を非常に感動を持って書かれておりますが、日本の農業というのは資本主義体制下にありながら、中途半端な統制と援助によって一〇％社会主義農業のようなどころがあるので、これは大いに具合が悪いですね。

高橋（潤） 全部国家公務員として農業を営むようなかたちに三十年ぐらいすると思いますが、その過渡期はどうなるでしょうか。

安達 ECの農村の場合は所得は少ないが、バカンス利用が大事ということで、所得補償をしていますし、また環境問題と

して、農業を減らすことによって減収した場合も、所得を補償しています。

米山 環境問題は、農業のなかの新しい要素ですね。今、人々の環境問題に対する関心は高く、「無農業」であるとする
と高く売れる傾向もある。

日本人は、円高不況が来るといいながらも、それを乗り越えて来ている。同じように農業も現在の様々な問題を乗り越えていくのではないかと。私は、米はまだ、依然としてつくられていくと思います。

宮本 農業は、必ず何らかのかたちで残っていくはずであり、それは国家公務員おかせ方式でなくても残っていくだろう。要するに、今の農村については、地域問題のほうが重要なこと
で、このままでは地域が崩壊してしまうのは確かであると思う。

宮田 冒頭で嫁さんのことをおっしゃいましたが、婦人の講、
というの、昔から村にありましたか。女の人だけが集まる講、
寄り合いです。

高橋（良） 無尽講のようなものではありません。五、六人ぐ
らいのグループでしたが、今はもうなくなりました。

宮田 村おこしなどで、無尽講といわれた月待ちの講とか嫁
さんだけ集まる講とか、昔あったものをもう一度復活させて、
女の人たちが横につながっていくという考えはありますか。

高橋（良） 私のほうでは昭和三十年代の初めの頃から、女
の問題、嫁の問題が言われ出したなかで、農協のなかに若い嫁

さんたちの会が持たれだしましたが、逆に昔からのものはだんだんとなくなってしまうようです。

米山 昔の講とは切れたところで、女性の集まりができてきているという感じがすね。

■農民のエキスパートシステムの構築

高橋（潤） 私は、高橋さんのお話をうかがって、農民のためのエキスパートシステムをつくるべき段階に来ていると思う。こういう時にはこうするというマニュアルをコンピュータに入れ、エキスパートシステムとして保存しないと農業の崩壊までに到底間に合わない感じがします。事実、素人がやろうと言っても何もできません。いわば農村用のエキスパートシステムを徹底的につくり始めたほうが早いのではないでしょうか。

加藤 高橋さんの『百姓宣言』にもあるように、「奥羽山脈に風穴をあける集云」のようにいくつかの地域を越えての会議も、かなり普遍的なネットワークとマニュアルをつくらうということだと思えますね。

米山 明治の初めの農村は、鍵となる農家が各地に点在して、ネットワークを結んでいる感じであったかもしれない。

ほとんどの普通のお百姓さんは、単なるなりわいとして農業をやっていたが、本当に農業をやるうとしていた一部の人たちがネットワークをつくって厳しい現実を担う段階を背負ってい

たわけです。今もそれと同じようなパターンで、この厳しい状況を乗り越えていこうとする力のある人々によって日本の農業は継続されていくと思う。

安達 私はいろいろな農村を歩いていて思いますが、昭和四十年以降の政府による農業管理のしすぎで、今ある既成の団体のなかで農家の指導性が失われています。この管理の枠を打ち破る場面を多くつくっていけば、農業は継続されていくと思います。

高橋（良） おそらく五、六年前でしたら、自分で牛舎をつくるという考えは生まれてこなかったでしょう。これから先も何か生み出していかないと生きていけない。その生きる知恵が、農業を支えていくと思います。

（第十九回 一九八八年十二月十九日）

深みある町づくりをめざして 岩手県藤沢町の実践

●講師 佐藤 守・岩手県藤沢町町長

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 川喜田二郎／中部大学教授 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／筑波大学教授 宮本千晴／(株)砂漠に緑を

■出稼ぎで荒れる暮らし

川喜田 それでは、佐藤町長さんをご紹介申し上げたいと思います。

私は、かつて北上山地の岩泉町^{いわいづみ}安家の調査をやり、当時から村づくりに関心が深かったんですが、その時に藤沢町にもまいりまして、非常に印象が強いものがありました。岩手県下の山村でユニークな村づくりをしているということでしたが、藤沢町長さんのお話が断然光っていた。素晴らしいことをしておられるなということが非常に印象に残っていました。そのようなことから、今回のゲストとして、是非とも佐藤町長さんにお越

しただけならと思った次第です。よろしくお願い申し上げます。

佐藤 ただいまご紹介いただきました、岩手は藤沢町の町長でございます。

藤沢町は岩手の県南に位置し、北上川一つ隔てて宮城県、仙台平野になっていきます。われわれのところは北上山系の最南端の丘陵地帯です。なだらかな丘陵地帯でありますので、事情をご存じない方は「いいところだな」と言われますが、山が低いということは水がないということであり、一方では北上川の水害がありながら、一方では干ばつに泣くという地形でもあるのです。そして、国道も鉄道もない町です。

昭和三十年に一町三村が合併して、当時で一万六千人の町になりました。合併前は、それぞれ四、五千人の町でしたので、大きいことはいいことだと希望を持ったわけですが、高度経済成長時代になりますと、わが町でも競って人が出ていき、結局、あの時代に一万六千人の人口が一万二千人に減ってしまいました。

農地は畑が千ヘクタール、水田が千ヘクタールで、そこに現在二千八百世帯が暮らしております。農家は二千世帯ですので、

水田についてはまさに五反百姓というような自給自足の延長線上の町であつたわけです。したがつて、わが町の暮らしは、相互扶助とも申しますか、あらゆる面についてお互いに助け合つて生きてきた典型的な東北の山村であります。

これが、高度経済成長時代になって、地域格差が歴然としてきますと、自給自足のような町では暮らしていけないと、みんな競つて出稼ぎに出たわけです。当時二千二、三百世帯の農家で出稼ぎが千五、六百人を数えました。

これだけの出稼ぎが出るということは、単に人が出ていったということだけではなくて、消防団活動をはじめとして社会機能がストップするということです。正常な家族構成、暮らしができない出稼ぎ世帯が増え、今まになかった生活状態が出てきますと、一見平和で穏やかであつた町が、外見上は変わりませんけれど、人々の心はすさむ一方でした。

■住民に町づくり計画をまかせよう！

その当時は、いったい、この町は町民のためにあつたほうがいいのか、ないほうがいいのかが判然としないぐらいのたいへんな時代でした。出稼ぎから帰つてきた人たちが、道路網が悪い、あれが悪いこれが悪いと舌鋒鋭く言いますので、役場もそれに何とか応えようとして、道路なども国の制度を持つてきて対応しようとする、用地買収には反対するというように、

公共意識や地域の生活財産をつくらうという連帯性がなくなりまして、総論賛成、各論反対ということになりました。

したがつて、その当時、過疎計画を策定するように行政の指導がありました。住民が役場に対して不信感を持っている状態のなかで役場職員が過疎計画をつくるのは、意味があるのだろうかと考え込んでしまいました。住民との一体感のないなかつつとしたとしても仕方がない。

鉄道も産業もない町に明日があるとすれば、そこに生きていく住民が心を一つにして新しい町をつくっていく以外にないわけです。そういう点を考えまして、ひとつ住民に全部任せてみたらどうなんだろうということになりました。住民にとつて町というものが必要があるかどうかも含めて、彼らに町づくりの計画を任せよう、その原点の確認の上に町の新しいあり方を組み立てていかなければならないことになりました。

住民に計画づくりをまかせようと考えたのは、たいへんなことですが、ただ、一つの救いは、当時は職員数百五十人ぐらい、現在は三百あまりになっている町の役場は、地域の人々から羨望の眼差しで見られる、地域では最高の職場であつたことです。そこで、役場のなかには、様々な職業があるけれども、みな同じ藤沢町の職員であるということで、何日間も職員の学習会をいたしました。とにかくわれわれは恵まれているから燃えなければならぬ、そのためには全員が町長、助役になつたつもりで、財政にはどういふ問題があるのか、町民はどういふ生活

をしているのか、所得はいくらなのか、町民から聞かれたら何でも答えられるように、町政の中身の共通理解をつくるために学習に学習を重ねました。

■過疎からの最初の復興計画

次に、四十三の集落に職員全員が散らばって、地域の方々に、町の現在の危機、全体から見た様々な問題点を訴えて、町民の奮起を要望することになった。そして、四十三のそれぞれの集落で計画をつくる運動を始め、各集落が将来を見通した地域のあるべき姿や、地域の方々が望んでいる地域像を描き、計画をつくって、それを集大成して町の計画にしようということになりました。

そこで、役場の職員が各家庭を回って歩いたわけですが、町民はその話には簡単にはのってまいりません。「今さら行政が何をやる」ということで、笛吹けど踊らずという感がありました。

しかし、職員はそれを乗り越えて一軒一軒回って歩きました。当時は公民館のような施設はありませんから、民家を借りて、そこに何人か集まってもらい、五人が十人、十人が二十人と増えていって、地域の人々が地域の問題を考える仕組みを準備していったわけです。

当時、役場としては、地域のあるべき姿をどうつくるかとい

うのは地域住民の責任であり、行政はそれを応援するにすぎないとして、主人公である地域の人々が、自分たちの地域をどうするか、本気になってあらゆる面で検討してほしいと言ったものです。しかも、その計画については予算などは最初は顧慮せず、みなが望む地域像は何か、そのために必要な福祉、産業、その他はどうなのか、まず何にもとられないで計画をつくってほしいというのが当時の問題提起でした。

そして、各地域の代表者にそれぞれの地域をつくった地域計画を役場に提出してもらうという手順を経てつくったのが、最初の、いわゆる「過疎計画」です。

今度、これを受けた役場行政は、具体的な展望を行政の俎上に乗せなければいけないので、当時の、国のあらゆる制度を勉強するのに必死でした。

そして、最終的に出てきた計画について、行政と地域の代表の人々によって任務分担をしました。地区公民館等、地域の城は地域の手で、道路についても、町道は町が、地域の集落道については、地域の生活財産であるから地域でと、任務を分担して、過疎計画の実施に入っていったわけです。

これは当初は素晴らしい勢いで進んで、地域はまたもとの元気を取り戻したように見え、住民による町がいよいよスタートしたというような錯覚を持ったものでした。何をやっても地域活動が盛り上がるので、よその方々が来町されたり、新聞でもチャホヤされまして、いかにも住民自治による町といった格好

になったわけです。

■「精神的基盤整備」としての地図づくり

ところが、われわれが見ているとどうもおかしいところがある。道路やスポーツといった、個人の利害にかかわらない部分については議論白出華やかなのですが、一人ひとりの苦悩はその活動のなかに見えてきません。たとえば、地区の運動会をやっている時に、同じお弁当を食べながら出てくる話題といったら、「隣のせがれは今度は牛を飼うそうだ」「今度は出稼ぎに行くそうだ」というものである。

本来、地域の自治組織は、住民一人ひとりの苦悩、願いを前提につくるべきものであるのに、個々の“思い”は表面に出ないで、全体として、利害があまり衝突しないサロンのな自治会ができてしまったわけです。これでは単なる社交の場でしかなく、自治会という旗の下、一軒一軒の家庭は依然として様々な生活の厳しさの只中、苦悩の只中であつたわけです。

そこで、これを、一人ひとりの願いの上にもう一度たき直していかなければならないということで、町民のみなに次のように言いました。「農地が少ないといっても、約七〇%の山林原野があるではないか。その所有者ははっきりしているが、お互いのために話し合えば、融通しあつて農地の拡大はできるのではないか」。

そして、五千分の一の地図を全農家に配りました。これは最初は大問題になりましたが、敢えて問題提起したのは、零細農家であるがゆえに、誰しも口では言わないながらも思っていたことがある。それは、「隣の田が自分の田であればいい」「隣の山が自分の山であれば、あそこに畑をつくりたい」などということ。他の人々の持っている土地を利用できたらという願望は皆持っているわけですが、それを言つたらたいへんなことになります。したがって、それはどうにもならないことだとして、先祖がつくつてくれた農地は不動のものであるという前提の上で考えますから、前途の希望はいきおい出てこないわけです。この固定概念を壊さなければと、農家に五千分の一の地図を配りまして、畑に立って心のなかに描いた、わが家の農業経営を図面の上に書いてほしいと問題提起をした。

これはおそらくたいへんな作業であろうと予想されましたが、町をつくつていく場合に、一人ひとりの夢が何であるかということを示せず、ただ個人の都合の悪い点は埋没させてやつていく町づくりでは夢がない、二千戸の農家が一人ひとり描く、「夢のわが家の農場」を提出することとなりました。

藤沢町は第三次農地改革をするのかという声も出て、議会でも問題になったりしました。われわれはそういう観点ではなくて、一人ひとりがこの町のなかに持っている夢を出し合つて、町づくりのベースにしようとしたわけです。

それでも、一年ぐらいのうちにはだんだん経営地図が出てき

ました。自治会や地域の人には見せなくてくれと、直接私のところを持ってきたものも何百枚とありました。そして、どこからともなく、「どこどここのせがれがうちの山に色を塗った」とか、「うちの山五ヘクタールに誰々がリンゴ園として色を塗った、桑畑にした」などの話が出てきて、町は議論沸騰という状態でした。

そういう時にわれわれが言ったのは、役場や議会では、道路をつくる時には簡単に人様の土地の上に線を引いて計画をつくるではないか。そういうことをお互いに許し合っている。にもかかわらず、一人ひとりの願いを凶面に描くと、なぜこれだけ問題になるのか。それはおかしいのではないか。所有権の侵害でも何でも無い、一人ひとりの夢が言えないような町では町づくりはできない、という論理でした。

そして、住民の人々が町づくりの取り組みをしている時、町として準備したことがあります。当時、町のなかに藤沢町以外の方が数千ヘクタールの山を持っていました。そのうち、国有林が六百ヘクタールありました。

現在もやっておりますが、役場の管理職と議員で出資して、第三セクターの藤沢土地開発公社をつくり、議会の債務負担行為としての承認を得てカネをつくり、そのカネで隣の気仙沼や近隣の大きな町の材木商の持ち山を譲ってもらおうということをおこない、土地の取得も図りました。

■農・工が手を携えての発展

また、産業施策ですが、失ってしまった若い労働力を何とか連れ戻さなければならぬということで、当時千人ぐらいいいた、町から出ていった若い者に手紙を出して、町がどういう条件を準備すれば帰ってくるのかということ、一人ひとり、さらに、その家族からも聞きました。大方は、何としても所得格差が問題ということで、働く場、工場があれば戻ってもいいという答えが圧倒的でした。

どういう職場があればいいのか、どのくらいの俸給をくれる会社があればいいのかということ、われわれが調査し、最終的にはこの町の産業施策としては、「農工商全」の姿をつくらなければならぬという結論に達したわけです。

したがって、一つは工場導入に総力をあげました。どの役場もそうですが、農村工業という話がよく出されるわりには、行政は企業に対する認識を持ち合わせていない状況だったわけです。

そこで、当時、町から出て、大きな会社の幹部社員になってくる人に、役場に来て、とにかくふるさとのために活躍してくれということで説得し、まず職員候補をUターンさせました。そして、企業活動に認識のある者を中心に、この町に必要な企業はいったい何なのかに議論の焦点を絞りました。農業に連動

するもの、農業の近代化にインパクトを与えるということから、エレクトロニクス関連産業など経済変動に強いパーツ関係に絞り、企業誘致を進めました。

現在、直接誘致した工場に勤めているのが約千二百人、関連等も含めると二千人ぐらいの就労場の確保になっています。

■農業振興のための様々な仕掛け

問題は農業の振興のほうです。これについては、市場競争に堪えるコストが農産物の基本的な条件になっている時代に対応していくための農業基盤整備として、国営開発を導入しました。一つは何とかして出稼ぎを防ぐこと、いま一つは土地の付加価値を高めたいということです。手つかずの山林原野ではいかんともしがたいため、新しい農地をつくり、加えて、その間の農業者の就労の場、農外収入の場を確保することにもなります。

国営農地開発をおこなったもう一つの内なる要素は、中核農家の次の発展に結びついていかなければならない現状です。

今から十五、六年前は酪農が順調だったので、比較的大きい農家は、開発事業やミニ計画にはあまりよい反応は示しませんでした。それがここ十年間ぐらいで、中核農家は典型的な負債農家に変化してしまいました。負債額は三億円とも四億円ともいわれています。

われわれは、その農家の人々の農地や山を直接、間接に交換したりしながら、その土地を県の農地管理開発公社に売って、そのカネで彼らの負債を払わせて、今度は農地管理開発公社に委ねた土地を国営開発で造成し、それが自作農維持資金としてわが家の農地に再度還っていくという手順でやっています。農業で生きようとして固定負債になった人は、みんなそのチャネルの切り替えによって、次の発展に入っています。

また、国営開発の新しい農地は毎年何百町も出ますが、原則として個人経営は認めず、すべて農業生産法人でやっています。この推進のために、農協と町と若干の農家から集まって、藤沢町農業開発公社をつくりました。公社の中心の任務は農地の交換、預託を含めた管理です。

次に畜産振興ですが、町には現在、既存の黒毛和牛とホルスタインで約千六百頭の牛がいます。しかし、農業自由化時代を迎え、何とか藤沢にある野草を食べ、しかも品質は外国のものと競争して勝てる牛をと考えて、外国の牛の強靱性と日本の牛の上質性をミックスした新しい牛をつくることによって、畜産振興を図っています。

そして畜産にかけるもう一つの願いがありません。町では国営によって整備された農地はコスト競争に耐えうる条件を持っています。谷間の農地については、そこまでの生産性は期待できません。したがって、これについては、農業人口の高年齢化もあり、谷間の農地で肉牛生産も併せておこない、農地の荒れ

るのを牛の力によって防いでいくようにしていきたいと総力を挙げています。

また、農業後継者の育成ですが、本気で藤沢で農業をやっているという者については、農業短大を終わって、自家の農業をするまで三年間待てと言っています。学校卒業と同時に家の農家経営に入ってしまうと、地域全体の農業の浮上にならないので、農業青年には生活がある程度保証し、その間、町の開発公社に入って、様々の研修をやってもらおう。これを私どもは「藤沢町農業後継者実践農場」と称しております。

今後、藤沢町の農業は、二ヘクタールないし三ヘクタール単位の団地のかたちにもっていこうと条件整備をしています。いづれ既存農業についても団地経営にしていく予定です。

たとえば、いま生産法人に入っていない農家のお母さん方は、自家の農業と併せながら、時間給四百五十円ぐらいのパートで、アスパラガスやリンゴ農場で働いています。こういう団地ができることは、他の農業従事者の就労の場をつくることにもなってきます。

いくら企業誘致をしても、住民は五十五、六歳になってきますと全部が農民になるわけですから、そういう人々も含めた農業のあり方を前提にしなければならないと思っています。

畜産についても、畜産農家が五軒、十軒とそろい、十ヘクタール、二十ヘクタールの飼料作物、デントコーンなどの農地を共同で購入し、法人所有にするという仕組みなど、あの手この

手で農業再生の取り組みにいま全力をあげているところで。

このような取り組みにより、いま農工一体ということで、企業については、純然たる企業と、農業とかかわりのある企業を織りまぜながらやっています。特に現在、町へ出た青年はほとんど戻ってきまして、人口はようやく増加の方向に向いています。そして、今度は町の工場に勤めていた青年が農業にUターンする方向が出てきて、たいへん心強く思っているところです。過疎脱却はだいたいできたのではないかと思えます。

■「町民の家はすべて福祉施設」という発想で

企業の誘致は一つの条件ができたので、いま町で総力をあげていますのは、今後の高齢化社会に対して医療体制を整備することです。

町民の家全体が診療所であり、町民の二千八百世帯が全部福祉施設の役割を持つのだとの理念のもと、常時パトロール体制により、「医療の沢内、福祉の藤沢」と言われるぐらい、福祉については充実ははかりやっています。わが町の特徴は、町民相互間の福祉として、町ぐるみで全力をあげているということです。

以上、いろいろ申し上げましたが、小さな東北の町ですが、町民はそれなりにいま自信を持ってきたようです。

■「藤沢方式」は伝播しうるか

川喜田 どうもありがとうございます。すさまじいことをやっておられるんですね。驚きました。

宮本 社員一万二千人の大企業という感じですね。

加藤 Uターンが始まったのは何年頃ですか。

佐藤 いわゆる企業誘致の頃からで、昭和五十八年頃からです。その前にニット関係の企業はあったのですが、これはどちらかといえば農業の所得を補充するような意味の企業でした。五十八年以後目指したのは、農業を補充するものではなくて、地域の新しい産業としての工場でした。また、われわれが誘致した工場が近隣町村に工場をつくって分散したため、近隣市町村のほうからも恩恵をこうむっていますし、今ではわが町では労働力のUターンはほとんど終わってしまった感があります。

安達 借金した農家が、国営開発にからめたプロセスのなかで、借金が戻り、土地が返ってくるという「手品」をお話になりましたね。あれはいい考えをお出しになりましたね。

びっくりしたのは、リングと牛が中心であるのに、十年間で所得が約倍増したことです。粗生産でみると、昭和六十年の六十億円から平成十二年には百二十億円になる見込みでしょう。何かすごいからくりがあるみたいだ。

加藤 安達先生がおっしゃった「手品」を含めて、こうい

う話が伝播していったら、藤沢方式が他の自治体に広まっていくということはないんですか。

佐藤 よく他の自治体の方々が来町されますが、現在は開発はやめていますし、牛についても見学に来られますが、藤沢では外国牛もたくさん入っていますし、和牛だけでやっておられるところとは若干認識が違うところがあるような感じがします。

安達 しかし、別の言い方をすると、こんな大きな計画が福祉に至るまでどんどんできるのは、工場誘致がうまく進んで、関連企業を含めて約二千人の働き場があるという、しっかりとした歯止めがあるからですね。農工商全というけれども、むしろ工のほう地域おこしのいちばん大事な歯止めになっていて、工があるから、あるレベルから下には所得は落ちない。そして、農地が五割増え、そこに新しい法人が入り、技術も入る。そういうものが藤沢方式であるとすれば、これは波及は難しい。こんなことができることはないと思います。

加藤 いちばん最初におっしゃった、みんなにイメージを描かせるというのが、「精神的基盤整備」みたいになっていると思うんです。これなしに、でき上がったものだけ見て、まねをしようとしたってできないと思います。

安達 「地区の計画をちゃんと立てないと、中央は何もしないよ。あとはやるなら自分で責任を持って」という割り切りは、行政としてはなかなかできない。そんなことをやったら、町長

はたいい落選しますね。

佐藤 われわれは、行政は水平ではないと言うわけです。努力した者がよくなることだという言い方をして、厳しくやっています。

安達 その勇断には本当に敬意を表します。理論としてはすぐ言えるんだけど、実際に首長がそこまで断を下せないんですよ。

佐藤 やっぱり厳しいですね。

安達 社会教育レベルで意識改造というのはいいけれども、行政が決断するということは、カネの行くところと行かんとこの差別ができるわけですからね。これはたいへんなことですよ。

川喜田 一つお尋ねしたいんですが、これだけの、いうならば「藤沢大コンツェルン」を運営していくには、事務量だってたいへんだと思うんですがね。役場の職員だけで、よくこれだけ回っていきますね。

佐藤 役場職員は二百名いますが、トラクターもハイポニカもやっていますと言えばかっこいいですが、要するに何でもやらなければならぬ。冬期間、十分でも機械が止まれば全部ダメになるから気を抜けないですし、また、牛が千六百頭いて、夜中にお産があれば、役場の職員は行かなければならないわけです。そういう意味では、職員の盛り上がりはたいへんなもので、よその自治体に行くと、職員の悪口をよく聞きますけれど

も、藤沢では職員の悪口を聞いたことはないですね。むしろ、議会などからは少し職員を休ませたほうがいいんじゃないかと言われます。

川喜田 職員が猛烈というわけだな。

佐藤 猛烈職員だと思えます。これが今の町を支えるカギです。

舛田 先ほど、五千分の一の地図に各農家が夢を描くというお話がありました。その結末はどうなったのですか。

佐藤 そのまま代替地をよせば協力しますよという人もいたし、破談になった人もいます。町全体としては土地が動きました。これは一つはショック療法であって、われわれの町ではこれ以上農地はできないのだという妙な既成概念を壊さなければだめだということが、大きな願目だったわけです。

宮本 地図上では、合計二千五百ヘクタールの計画が出たということですが、現実に存在していたのは二千ヘクタールの土地ですね。実際にはみんな重なり合っているんじゃないか、わずか五百ヘクタール分しか超過分がありませんね。

佐藤 やはり千ヘクタールぐらいありました。国営で六百ヘクタール、それから経営畑地総合整備事業がありまして、それがだいたい四百ヘクタールになりますから。今後は既存耕地も大型トラクターが入るように整備しますから、これからの近代農業の生産ベースになるわけです。

安達 とにかく岩手でいちばんうらやましいのは、まだ土地

があることですね。

川喜田 今度、京都の丹後半島で移動大学を開きますが、ここに面白い人がおられまして南米とか世界中を回って、牧場のことはずいぶんよく研究している。「年がら年中ほったらかし牧場」というのをうまくやっているんです。その方は牧場が本業ではないのに、町の青年たちの授産のために牧場を始めた。あのあたりは豪雪地帯ですから、冬場はいつたいどうするんですかと言ったら、牛は間伐材の皮を食べていると言うんですよ。

佐藤 私の町でも、冬の間も牛を全部雪のなかに放しています。木の葉を食べていますね。近隣の農家が見学に来て、みんな一様に驚くのは、冬は牛というものは小屋に入れるものだと思いいこんでいるからですね。純粹の和種であれば無理ですが、他はみんなハイブリッド、F1なので可能です。

■町全体をたばねる力―福祉

川喜田 この猛烈集団のリーダーは佐藤さんでいいんですが、後継リーダーのことはお考えですか。

佐藤 これは一人ではできませんので、後継リーダーについても、十年ぐらい前から助役二人制をやっています。

また、町全体の結束を図っていくのは最終的に福祉で、これは誰にとっても大切な問題ですから、一生懸命やらなければい

けない。その上で、「誰にとっても町は必要だ」という世論をつくりながら産業施策などをやっていかなければならない。苦労するといえはその点です。

町民の合意がなければ何もない町ですから、それだけが財産です。

川喜田 いちばん難しいのは「佐藤哲学」をいかに伝えるかで、そのためには、誰もが楽しく読める物語にして藤沢町奮戦記をご出版いただきたいと希望しております。

どうもありがとうございました。

(第二十回 一九八九年七月十八日)

博多万能ねぎと地域活性化

福岡県朝倉町の試み

●講師 森部賢一・福岡県朝倉町農業組合次長
現JA筑前あさくら指導販売部部长

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 須藤護／放送教育開発センター助教 舛田忠雄／山形大学教授 米山俊直／京都大学教授

■朝倉町の農業経営の歩み

神崎 今回、私が紹介するのは、福岡県朝倉町の森部さんです。元気があつた町ということでご紹介したいと思います。

朝倉町は、筑後川の川べりに開けた純農村で、かつては稲作が非常にさかんなところでした。昭和四十五年から稲作の減反政策が出てきましたが、朝倉町では直ちに農協を中心として転作の問題を検討し、青ねぎを町の特産品として栽培するという路線を打出したのが昭和五十二年です。

私がいちばん感心したのは、栽培の促進と同時に、販売という問題を考えてことです。「万能ねぎ」は十年間、東京市場で

大暴れをしています。東京市場という人の数が多いところで、近代的なセンスを持って販売戦略を展開されたことに、大きな感激と驚きを受けました。

実際に昨年朝倉町にうかがいまして、万能ねぎの研究会でいろいろの方と会いましたが、博報堂の九州支社の幹部がそろって、しかも商売抜きで博報堂自体の販売戦略を朝倉町側でつるし上げをしながら、逆提案をしていくという、すさまじい会議でした。

また、驚くべきことには万能ねぎは市場では生産が追いつかないくらいですが、朝倉町では、「万能ねぎはやがて頭打ちになる時代が来るであろう」ということで、すでにポスト万能ねぎについて、日本人の食生活の将来的な予測もしながら、その態勢も検討している。その面では本当に元気があつた、活発な農業活動だと思えます。

しかし、活発な活動のなかでも、様々な問題を抱えているとも思えますので、そのへんも含めてお話しただきたいと思えます。

森部 朝倉町の代表的な品目になり得ている万能ねぎの話を中心として、また、いま朝倉町が抱えている問題、朝倉町の上

部団体である福岡県園芸連という立場のなかでの福岡の園芸や農業の分野も含めてお話ししたいと思っています。

朝倉町は純農村地帯であり、九州一の筑後川に面しています。昭和二十八年に大洪水がありました。その復興に数年間を費やし、町としては一人立ちできないような状態が続きました。昭和三十四年に町村の合併がおこなわれ、三十八年に農協合併があり、昭和三十年代から米麦を中心としての農業経営の道を歩いてきました。

昭和三十八年の合併時の農産物の販売については、大半が米麦で、青果物の割合は四%くらいでした。それが昭和六十三年度は、農産物の販売高のなかの青果物の割合が七〇%台というウエイトになってきました。昭和四十五、六年から始まった転作、もしくはその後の再編対策のなかで、朝倉町はどちらかというと転作のうまい活用をし、それなりに農業所得が上がって、今日の「農業の町」的な存在が維持できているように感じています。

現在中心となっているものは万能ねぎですが、米麦のほかの青果物については、時代的変遷というか青果物は十年すると産地が変わる傾向にあります。農家の努力もさることながら、外部要因も大きく影響して、なかなか長続きしないという実態です。

朝倉町は大正時代から野菜の苗をつくり、遠くは朝鮮、台湾まで輸出して、生活の糧とした時期もありましたが、昭和に入

り、そして二十八年の大洪水後の復興の品目として、平坦部では園芸の振興を図りました。

幸いなことに朝倉町は一方は筑後川に面した純水田の米麦地帯であり、一方は山麓を有するような山に面しているため果樹園芸地帯でもあり、家庭環境的な分野の農家経営も存在しています。施設園芸も昭和三十年に入ってきゅうりのハウス栽培をおこない、昭和四十年になって京浜市場や京阪神市場に出荷するようになりました。

また、私たちは京都とも非常に深い縁がございまして、昭和四十年代には、「京都に春を呼ぶのは朝倉町のトマトだ」と自負するくらい、京都でのトマト販売ではナンバーワンにさせていただきました。しかし、いろいろな土壌病害や、トマトの病気も多発して、そのあとに代替品のなかたちでねぎが入ってきました。

■万能ねぎの驚異的な販売額の伸び

「万能ねぎ」はグリーンが特徴です。ねぎには、白ねぎ、青ねぎ、わけぎなどがあり、日本人の食生活の中で、誰もが知っている、またなくてはならないものに属しています。白と青ではいくらか食味の違いもあります。

朝倉町を含め福岡県内で小規模に生産していたものを、昭和五十二年の秋に部会組織にまとめ、京浜市場に出荷すること

になったわけです。

万能ねぎの販売数量と販売額の推移ですが、昭和六十三年度には二千八百三十六トンの販売をし、二十九億五千六百万円という金額でした。昭和五十二年十二月に発足して、十数年の間に十数倍の伸びを示しまして、青果物業界では非常に驚異的な伸びだと評価をいただいています。

そのような伸びの裏に、非常に特徴的だったことが数点あります。栽培農家は発足時は五十三戸で結成をみたわけですが、現在は約百四十戸、三倍くらいの伸びです。一方、栽培面積は十二ヘクタールくらいのものが、平成元年度は、七十ヘクタールと、五倍くらいの伸びになっています。

当初は自家努力的な分だけでの生産でしたが、現在では作業の一部を外部に委託をしたりということで、他動力の活用がうまくできることよっての販売高の増額であったようです。

そういった作業の委託をお願いしている方が約七百名から八百名くらいいます。この方々がおられなければ、万能ねぎの三十億円なり、三十三億円はないと言っていると思います。その方々へ生産農家から支払うカネは約二億円くらいになります。朝倉町は農業の町を標榜しているように、企業誘致等はあまりやりません。こういったなかで、地域との連携、または地域に果たす役割の一端を、この万能ねぎは担っています。

■万能ねぎ料理アイデアコンクールの実施

技術改革的な新しいものの導入については積極的におこないました。発泡スチロール容器の使用や、冷蔵庫の使用もいちばん最初に手掛けました。

農産物は過剰といわれていますし、外国農産物の輸入自由化等の絡みもあり、生き残り対策みたいなことがあちこちで話題にあがるわけですが、私たちが今まで取り組んできたことについては、「良品に過剰なし」ということで、品質本位の、消費者に安心していただけるようなものを常々つくろうということにしています。

食についての研究にも取り組んでおります。日本人特有の食生活の文化にも変化があります。そうしたなかで、私たちも昭和六十年頃までの十年程度は生産者側の一方的な考え方で取り進めてきましたが、消費者と一体となり、もしくは逆提案をいただけのようなかたちのなかで万能ねぎをとらえたほうがいいのではないかということで、全国規模でアイデア料理コンクール等を実施しました。

このようなコンクールは、農産物、特に野菜類では稀なことというところで、それ相応の評価をいただきました。その集大成的なかたちで英文も載せた万能ねぎのアイデア料理の本をつくりました。

アイディア料理の本に英文を載せたのは、当初の取り組みと
はだいぶ飛躍して、同じ農産物、ましてはただのねぎであっても、
用途的に幅広く利用していただくという気持ちもありまし
た。特に販売の七〇%が京浜や京阪神であり、都心部において
は、外国人の方々にも相当お買い上げいただいているように聞
いていますので、そういった拡大を図る意味合いで英語も併記
したわけです。

また、朝倉町から一時間のところに、福岡空港という主要空港
があります。幹線ルートのみならずであることも幸いしていますが、
万能ねぎは、フライト農業のはしりでした。たかがねぎ、または
あのように量のかさむものが何で飛行機に乗るかということも、
かなり論議されましたが、日本航空と特約して、福岡—東京間
をキロ当たり百二十円くらいで運んでいます。ねぎの場合は、十
トントラックに満載しましたが、軽くてかさ張るものですから、
三トントくらいしか載りませんので、キロ当たり六十円くらいとな
ります。航空機のほうが高いといえは高いのですが、結局採算上
うまく合ったわけです。いま農道を利用した地方空港、農道空港
の話もあちこちでよく聞きます。私のほうには特に多面的利用の
問題で、全国からよく視察にお見えになります。

■販売高の二%は広報費

万能ねぎは販売方法が非常に目だっておりますが、こういっ

たことをやることに対してはそれなりの経費がともないます。
青果物、ましてねぎとしては、ラジオCMをやったり、テレビ
CMをやったりというのも、非常に早い部類だったようです。
全然なじみのなかった東京への拡大でしたので、店頭に立つて
の試食宣伝会もかなり回を重ねましたが、電波が手段的に速い
ということ、ラジオ、テレビを使って本質を知っていただこ
うということでもやりました。

私のほうでは販売高の約二%くらいを広報費として計上して
います。この二%が農産物として妥当かどうかはなかなか計り
知れない面があります。しかしながら一般の工業製品とか、加
工品、食料品など、今の生活すべてが宣伝によっているという
のは過言かもしれませんが、そういう部分も多分にあるのでは
ないか。農産物でもそれ相応の自己主張的な商品の紹介という
分野があつていいのではないかと考えます。

広報費は農家で使う肥料や農薬、もしくは販売のための輸送
費と当然同じ経費として、外国との対応、将来の農家人口の減
少等も含めた生き残りのためのパーセンテージとして設計して
います。

そうは申しましても、いかなる宣伝をしても、外部要因とし
て、その年の気候とかによって、農産物の場合は過剰生産とい
う事態が起こることは、どうしようもない現実です。その対応
策として、安値対策準備金的なものを準備しています。これは
販売高の五%の積み立てをおこなない、安値に遭遇した時に、あ

る一定基準をつくって、それから継ぎ足しをして生産するとい
うかたちです。

国においても、特に農林省の青果物価格安定制度や、県の事
業もありますが、そういったものは別角度で、あくまでも農
家自体が自分たちで積み立てをしたもので、自分たちのための
運用をなすとかたちでやっています。五%という結構な
カネになるわけですが、順調な年はほとんどそれを使いませ
んのほうではそっくりそのまま一年、個人の名義に分散してお
預かりして、二年越し、三年越しくらいの、長期安定的なか
ちのなかでの生産を図っていくということもやっています。

■消費者ニーズは生産者の側からつくれ

万能ねぎの販売戦略は、生産農家百四十戸の全員で検討会を
やります。青果物の主要産地ではこういったことはごく当たり
前のことですが、違うのは、自分の品物がどういった商品ステ
ージにあるかを朝倉町では認識するようにしています。ただ、
ものをつくって時期が来て収穫し、出荷をし、カネになるとい
うのではないけない。安い高いは人任せではないけない。消費者ニ
ーズの先取りよりも、消費者ニーズは生産者みずからつくと
いうことで、逆にこちらから提案しようという姿勢で取り組ん
でいます。

現状では万能ねぎは生産不足で、つくってもつくっても足り

ない。しかし、その一方で全国的に注目をいたしている品目
だけに、競合産地がめざましい状態で出てきます。それに対抗
すべきというか、それを超えるような手立てということ、ま
ずはより以上の用途拡大をし、単に対相手の競争意識からだけ
ではなくて、本当の万能ねぎファン、何が何でも万能ねぎが大
好きだという客層の拡大を図っています。

しかし、栽培農家では、自分の商品そのものの消費地の状態
まではよく知らないなど、まだまださん問題があるのが現状で
す。

そこで、朝倉町の生産者としてのモラールアップを図り、生
産者と消費者との顔の見えるような体系をつくらなければなら
ないということで、産地直送や宅急便など、いろいろなかたち
で取り組んでいます。その青果物のいちばんの産地として、
今までのものを超えるような部分をつくるのが目標です。

そのため、アイディア料理コンテストや、テレビスポットを
やったり、試食宣伝会をおこなったりしていますが、大企業の
ようにはまだまだカネがないわけで、新聞広告までは思うよう
にいきません。

そこで、「食の考来学」として、近未来の食生活をとらえよ
う。特に農業以外の先生方等のご協力をいただいて、五年ない
し十年、もしくはもう少し先の、食生活をはじめとする人間と
しての衣食住の変革をある程度までとらえて、それが先取りの
一端になり得たらと思っています。会が発足して昨年二回会合を

持ちました。

最後に、地域的な部分としては、幸いなことに朝倉町は長寿の町です。仕事にまい進する部分だけではなくて、町をあげての健康管理という部分もあります。農産物をつくるうえでは、そういった生産地の状態があつてしかるべきではないか。健康な町から健康なものがつくれるんだというかたちで、健康づくりも町の事業の一つとしておこなっています。

■万能ねぎの販売戦略

加藤 素晴らしい着想と素晴らしい実績で、私は初めて聞いてびっくりしました。

売り上げの二%を広報費に回すという話をうかがつて、驚いたのですが、こういうアイデアはどこから出たんですか。これはササニシキでもあきたこまちでも、わりあい安定したところではかなり広報費を使つておられるのだからうけれども、ねぎ一つで二%という発想はすごい。

安達 三十億円で二%というと六千万円ですね。

森部 万能ねぎを農協で集めて販売するためには、運賃や作業費がいります。農家から販売代金の一部を預かつて精算するわけですが、一年分を精算すると、最初は四、五百万円くらい余りました。それでラジオCMをやろうとしましたが、少ししかできない。

そこで、博報堂に、一般企業の販売戦略の裏話をやつてくれないかという相談をいたしました。当時は焼酎ブームでしたが、農家を集めて、普通の他業種の話をしてもらいました。大蔵省で毎年発表している、どこがいちばんんだとか、宣伝費は何パーセントだという業種別の資料がありますが、それらを参考に当初は一・五%くらいでしたが、少し増えて二%となりました。

あとはねぎの市場価格が下がった時に、二%というものがどうなるか。それから低コストという分野に対して、広報活動はどこまでが妥当なのかという難しい面があります。

安達 農家からいうと、宣伝費二%、価格安定みたいなものに五%、運賃その他、農協さんに手数料があるわけでしょう。そうすると十何パーセントくらい引かれるんですか。

森部 安値準備金の五%分は農家に戻りますから、実質経費としての市場手数料が八・五%あります。それから上部団体の農協は二%、園芸連が〇・六。十一・一くらいが手数料です。ほかにこのねぎに関しては出荷経費として、運賃や容器代としてキロ当たり二百七十円くらい別途つきます。水揚げ、市場売り上げからして農家所得は五〇%くらいです。

米山 万能ねぎの衰退期まで予測されているのはすごいなと思いました。(笑) やめるところまで考えておられるわけですか。

森部 私のほうは昭和六十一年くらいから博報堂にいろいろ提案をいただき、それを農協なり生産者代表の方々と協議して実施するわけですが、商品の一つのライフサイクルみたいなも

のが存在すること自体、今の農家としてはごく当たり前のこととして理解しておく必要があると考えています。

ある農業経済の人が見えていろいろのお話し申し上げた時に、「万能ねぎの百億円くらいの態勢は敷かれている。しかし一方では、油断すると一年にして終わってしまう」と、厳しいお言葉をいただきました。

朝倉町には、Uターン組がだいぶいますが、前の組合長がよく「Uターンというのは人の人生を変えてしまったんだ。君らは人の人生まで変えてしまったんだから、それだけの腹構えて態勢を組んだり、または指導しなさい」と申されました。

Uターン組で再度、普通の仕事に戻った人はいませんが、ただ現在万能ねぎが足りないだけに生産拡大を進めて、出荷をかなり強要しますので、遊びの時間、ゆとりがなくなりました。いま月に二日くらいしか休みがない。一週間おきには通常出荷という状況です。それをいかに週休二日といわれるような態勢を引くか。休みを保障しないことには、カネは儲かっても長続きしないのではないかとというのが今の問題です。

私たちとしては、目的を持った遊びを、農業指導の一環として考えていますが、とりあえずはスペインのバルセロナのオリンピックを見に行こうじゃないかと考えています。サイクル的に四年くらいありますからね。

今、オーストラリアが人気ですが、一週間か十日くらい行くので、生産力が落ちるわけです(笑)。遊べ遊べと言いながらも、

それもちょっと困るので、もっと先の夢を見てもらうわけです。

加藤 非常にモデル的なものですが、たとえばビールに例を取ってみると、ビールの消費量はずっと上り続けています。しかしそれには純生とかドライというのが次々に出てくるという面があります。ということを考えて、万能ねぎ一本でいくことは必ずしも万能ではないかもしれない(笑)。品質的にパリエーションをつけることはできるんですか。つまり激辛じゃないけれども、辛口のねぎとか、甘口とか……(笑)。

安達 青ねぎの販売額が増えている背景には、料理の仕方が変わってきたんですね。

加藤 家庭のなかから菜切り包丁が消えてきたことも関係するかもしれないですね。関東ローム層の太いねぎはやはり菜切り包丁がなければ、小さなナイフではどうにもならない。菜切り包丁はこのごろ売っていることは売っているけれども、家庭でも手持ち率を見ると低いんですね。今は、万能ねぎを調理ばさみで切っている女性がいるのですから。

これは調理の道具と関係すると思います。出刃包丁が家庭からなくなったでしょう。だからこのごろ魚を三枚に下ろすことを家庭ではしなくなりましたね。

■産地間競争に生き残るには

米山 「万能ねぎ」というブランドは商標登録されているの

ですね。

須藤 同じねぎをつくる産地が増えてきたというのですが、産地にはどのようなところがあるのでしょうか。

森部 毎年、夏場に調査しますと、ここ数年は北は北海道から鹿児島、沖縄まで六十産地くらいあります。

いま北海道は梅雨がないことを生かして露地栽培です。野菜産地のなかでは、東北よりも夏の北海道が脅威です。条件的にこれほど優れたところはないというくらいです。

生産量的に二番手は高知県の土佐山田町です。それから隣の大分県です。あとは水耕栽培をおこなっている千葉県の長生村や、仙台界限での生産も見られるようになりました。

北海道のねぎは夏場は「北海ねぎ」という命名で、南は沖縄まで出荷されます。

須藤 このような産地間競争に対して朝倉町の農家は自己防衛意識が強いのですか。

森部 これは農家自体の問題ですが、生活にいくらか余裕金まであるような状態になってくると、自分の生活に満足する。それと同時に、閉鎖的な状態となり、新たな人に自分の持っている技術を公開したくなくなるというのが現状のようです。

安達 ねぎ御殿が建ちましたら、ちよつと考えたほうがいいんじゃないですか（笑）。年間三千万円売り上げて五年続いたら御殿が建ちますよ。それはちよつと危険信号だと思いますね。北海道のホタテ御殿にしても、ああいうものを建てると自

己防衛が強くなりますから。

森部 朝倉町も二代目のところがだいぶ出てきつつあります。完全に路線が引かれたところに、ただ参加したといった親譲りのかたちですから、意識的な、従来ほどの欲のある取り組みが少なくなってきましたね。

舛田 町では農業の場合、後継者は育っていると見ていいんですか。

森部 だいたい後継ぎはおりますね。

米山 お嫁さんの問題はどうでしょう。

森部 ねぎ農家はいいほうでしょう。あとは個人的な部分とか家族的な部分がありますから。

安達 ねぎは儲かるけれども、女をこき使うから嫌だよという近村の女性側の声はないですか。

森部 多いわけではありませんが、仕事の委託先までが奥さんの管理の部分となりますので、親戚付き合ひのような感じで旅行に行ったらみやげを買ってこくかがあります。

安達 ねぎの生産費のなかでは委託まで入れると労働費がかなり高いでしょうね。労働費はねぎのコストの何割くらいかかりますか。

森部 委託費は最大限の状態にしても、だいたい二五%の範囲で収めなければいけないというのがあります。

安達 それに自家労働を換算すれば、半分くらいいきますね。
森部 枯れ葉をむいたり、規格調整だけではなくて、すべ

てになりますと、だいぶかさみます。

安達 ものすごく労働集約的で、花みたいなものですね。

■つむじ曲がり町を活性化する

森部 朝倉町では、万能ねぎの他にも、柿、かいわれ大根、タデの生産にも力を入れています。朝倉町にも浮気性の人がおりました、みんながやるものを毛嫌いして、自分が大将にならなくては気がすまない人がいます。そういう人がいてこそ、新しいものが出るわけです。タデについては独学的なかたちで、他産地を盗み見してマスターして、五年前くらいに一人で始めたのですが、われわれが相談を受けまして同志を六人募って、現在では七人でやっています。

ただ、つくれば売れるものではありませんで、かいわれ大根と同じように業務用から何とか一般家庭までの大衆化を願う意味で、従来は木箱であったものを塩ビを使ったりした容器の変更や、新しいものではネーミングを「プリティーナ」として、和食だけではなくて洋食など、すべての分野に使えるようなかたちで取り組んでいます。

加藤 お話のなかで、みんなのやることにくっついているのは嫌だというつむじ曲がりが必要です。どういう村に行ってもたいいていいると思いますが、とりあえず転作で何かやらなければいけない時に、つむじ曲がりを持つている主導力が村を活性

化させているんじゃないでしょうか。

食糧管理法にベタッとくっついて、ただコマだけをつくっているところには、そういうイノベーションは生まれません。日本の農村はわりあいつむじ曲がりが多いんじゃないですか。

必ずしも朝から夜まで、ひたすら働き続けるのが篤農家ではなくて、やはり工夫心を持った人が篤農家ということではないでしょうか。

安達 働いてばかりいてカネをためるのは、精農家とか言いましたね。篤農というのはもうちょっと前で、非常に知恵があつて、何かにこだわっていて、わが道を行くという者。

篤農家というのは農村のなかから上のほうで、精農家は小作農が上がっていく。そんな感じで私は使い分けています。それがもし正しいとすれば、私のいう篤農のなかには「これはおれがいちばんだ」という誇りを持っている人も入ります。

このような人は野菜、果樹、みかんなどをつくっている人が多いですね。枝変わりで新品種ができますからね。愛媛の伊予かん、梨の長十郎はそのいい例です。柿もそうでしょうね。交配じゃなくて、おそらく枝変わりでしょう。

加藤 今日はどうもありがとうございました。たいへんいい勉強をさせていただきました。

(第二十一回 一九九〇年一月二十三日)

「夢と誇りの持てる雪国山村の創造」

山形県朝日村の
イベント地域づくり

●講師 清野美智夫

山形県朝日村企画課博物館センター係長

現朝日村農業委員会主査

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生
恒／社会農学研究所所長 須藤 護／放送教育開発センタ
ー助教 舛田忠雄／山形大学教授 宮本千晴／(株)砂
漠に緑を 米山俊直／京都大学教授

舛田 今回、私が紹介します方は、山形県朝日村の企画課の
清野美智夫さんです。現在、月山あさひ博物館センターという
新しい施設を建設中で、その中心になっている方です。

山形県内でも例の一村一品運動というような、地域づくりと
して地域特産品をつくり、いろいろなことをやっている町村が
あります。たとえば朝日村の隣の西川町では、自然水ブームの
非常に早い時期に「月山自然水」をつくりましたし、「ふるさと
宅急便」というかたちでいろんなものを送る。あるいは庄内
の北のほうの八幡町ではおかゆの缶詰等を生産しています。

朝日村の場合は、月山ワインをかなり早い時期、昭和五十四
年より農協で生産しておりますが、地域特産品というよりは、

イベントを中心にして地域づくりを考えていこうという方向
で、今日までできているように、私は見ております。

『釣り吉三平』という漫画のなかに、タキタロウという大き
なイワナの話がありますが、あれのものにはこの朝日村の大鳥
池のイワナの話があつて、タキタロウまつりを開いたり、ある
いは田麦俣地区の多層民家の雪おろし体験ツアーを開いたり
と、いろんなことに取り組んでおります。

今日は清野さんにそのへんの話をいろいろ聞かせていただけ
ればと思います。

清野 ご紹介いただきました朝日村役場の企画課の清野と申
します。現在は、企画課の配属ですが、博物館センターという
大型プロジェクト事業の本拠地の担当を命ぜられて、ヘルメッ
トをかぶって毎日設計図を見ながらやっているところでです。

今日は、雪に関したること、今まで朝日村がイベントを通し
てどんな成果があつたか、どういう方向に向かおうとしていた
のか、そしてそれぞれの現状と課題をお話しようと思っており
ます。

まず朝日村についてですが、朝日連峰と出羽三山に囲まれ、
自然に恵まれた、山林が九〇%というほとんど山林の村です。

主産業は米作を中心にして、その他、山菜の促成栽培、あるいは昭和六十三年に国の野菜産地指定になった夏秋キュウリの栽培、促成トマトの栽培、また目立った点としてタラの芽は全国一を誇っております。

農業を中心とした産業形態で、ほとんど兼業農家です。千四百世帯のうち専業農家はわずか十九世帯です。また兼業も高齢の農業従事者で、先行き不安に思われる状況です。

また、朝日村は豪雪山村で国から特別豪雪地帯の指定を、加えて過疎地域、辺地の指定も受けています。今年度から新過疎法が適用になりましたが、相変わらず仲間入りしています。

昭和三十年には人口一万五千人、当時は村に銅の鉱山があった、鉱山に従事する人たちもいましたが、年々減りまして十二年ぐらい前に閉山、現在の人口は六千七百人弱です。

■「朝日村研究会」の発足

先ほど外田先生からもお話がありました。一村一品運動など、全国的な地域づくりの運動が出てきたのが、十五年ぐらい前だったと思います。私は役場に入って十七年ですが、入った時から、友達と会えば地域づくりが話題になっていたように思えます。

役場には職員が百四十名おりまして、そのなかで昭和五十三年に朝日村研究会という組織がつけられました。係長が当時は

五人ぐらいだったと思うんですが、あとは主事クラスがメンバーです。会が出来たきっかけは、何とか村おこしをしようじゃないかということからでした。その当時は、仕事を通して、様々なことを発案しても上司から抑えられるという時期でありましたから、グループで話し合っって何かできないかということがはじまりでした。

まず、鶴岡国立高等専門学校の先生のご指導のもとに朝日村の実態調査をおこない、冊子にまとめました。個人個人分担任してやったのですが、これがわりと刺激になりました、こんな実態ではたいへんだ、何とかしなければということになりました。

そして、具体的な事業としては、月山祭の開催などイベントを何かやるうじゃないか、ということがそこで出てきたわけです。私どもは専門家ではありませんから、イベントがどのような効果をもたらすかということは、当時は全くわかりませんでした。とにかくイベントをやって人を集めようという単純な発想だったと思います。

それが何となく私どもに明るさを与えました。これは錯覚かもしれませんが、いろいろなアイデアがグループ活動のなかでどんどん出てきたわけです。

また、何もない時でも一カ月に一回は会合をもち、話合いのなかからいろいろな案が出てきました。役場では、それぞれ違う部署についていますが、このグループを通して非常によく連携し合っったと思います。企画課の職員もいますし、教育委員会

の職員もいるし、建設の職員もいるし、福祉の職員もいる。そういうことで何かと行政の仕事がうまくいくということがありました。

ですから、昭和六十一年から十年を目途にした新総合開発計画のプランニングを実践に移す場合でも、この研究会のなかから、発案だけでなく、行政的に実践に移されるような場面が多々ありました。

その他に、研究会でも独自の活動ということで考えまして、雪とは関係ありませんが、伝統文化の鷹狩り技法を守る会の発足を目指しました。慶應義塾大学を卒業しまして真室川町で鷹匠になった松原英俊さんという方が、もつと大自然のなかの環境で鷹匠の仕事をしたというので、研究会でそれを取り上げ、彼の住居と鷹の繁殖小屋をつくりました。彼は、ワシントン条約で外国からの入手が非常に難しいというクマタカという鷹の人工繁殖を目指しています。

繁殖小屋の建設のための資金集め等の苦労を重ねてみて、地域づくりは一人ひとりが自ら考えて、しかも考えるだけではだめだから、まず実践してみようとする自信がこの経験により培われて、いろいろなイベントの開催にもつながったという感じがあります。

先ほど「タキタロウ」の紹介もありましたが、昭和五十八年に大鳥池の幻の巨大魚タキタロウ調査ということで地理学者の五百沢先生を中心にして調査をおこないました。一年間調査を

おこない、二年目の五十九年にNHK特集で「幻の巨大魚タキタロウ」という番組が放映されました。

これが意外と反響を呼びまして、役場の電話が毎日鳴りっぱなしになるほどでした。そこでタキタロウを何とか村のイメージに生かそうじゃないかということで、次の年からはタキタロウ一色の村づくりを目指しました。タキタロウのTシャツ、お菓子、酒、饅頭、テレホンカードなどが出ました。

そのタキタロウで何とかまとまったイベントができないかというところで、昭和六十一年にはタキタロウまつりを開催しました。

このまつりは現在まで続いておりますが、タキタロウにちなんだ、タキタロウ神社なるものを勝手ながらつくりまして、民間に募金をお願いして資金を集めました。本格的な神社ではありませんが、小さな神社をつくって、そこにタキタロウを祀ろうということ、毎年神事がその祭りのなかでおこなわれております。現在は村外からも、山形県内ですが、約三千人ほど見えられて、あの大鳥の山のなかにはたいへんな賑わいを見せております。

大鳥というところは役場から二十四キロ離れたところですが、過疎化が非常に進んでおりまして、今後の朝日村の過疎対策の重点地域です。現在は国土庁のモデル事業のなかの一つとして、タキタロウ会館建設の計画も進められているところです。

■雪おろし体験ツアーの実現

このようなイベントの陰には、朝日村研究会の話合いもありますが、外部の方々の熱い協力があつたわけです。先ほどのNHKの放映もありましたが、マスコミの協力が非常にあつたんですね。

「雪おろしツアー」については、研究会のなかでも、そんなことをやっても人は集まつてこないという考え方でした。私もそうでした。ところが、熱心な職員がおりまして、反対されてもやろうという気になつたんですね。

村長・助役から、こんなことをやつてもだめだと言われ、起案文書では廃案になつたわけですが、彼はあきらめられなくて、その手段をどこに求めたかという、マスコミの協力という言葉はちよつとおかしいのですが、ある新聞社の方に相談したそうです。

そうしましたら、その記者が協力してくれ、「雪おろしツアー」についての記事を全国版に出してくれたんです。トップの許可が得られなかったものを、彼は勝手に仕組んだわけですが、これは行政の仕事の流れとしては許されないことで、もし村に迷惑がかかるようなことであれば処罰ものだったわけですが、何と大当たり。反響を呼びまして、先ほどのタキタロウと同じように役場の電話は鳴りっぱなしとなりました。

「雪おろし体験ツアー募集」というようなかたちで打ち出したわけですが、役場の上層部も、こんなに反響があるんだからやつたほうがいいというので、許可が出されたわけです。

山形県内の各新聞社も、協力的にPRしてくれまして、当初は十五名の予定だったのが三十名となりました。実際には旅行エージェントから二百名の予約が入つたのですが、旅行というのではなく、朝日村の住民と心の交流をやりたいという考えがありましたので、旅行代理店には遠慮してもらおうという結論になりました。そんなことで現在六年目を迎えようとしている雪おろし体験ツアーです。

■「克雪」から「活雪」へ

雪といえますと、朝日村の積雪量は役場付近で平年一・八メートル積もります。ちよつと奥に入ると三メートル、四メートルも積もるところがある。雪が降りますと、役場に入った頃は、この村から出て行きたいという気持ちになりました。

とにかく交通の便も今ほどよくありませんでしたし、バスも通らなくなるし、除雪も現在のような小型除雪機は集落にはありません。雪が降れば降りっぱなしの状態で、今やエピソードになつてしまつたのですが、二階の屋根から出入りするという話も、今から二十年前は本当の話でした。現在はそういうことはありません。

そういうところに育ったものですから、この朝日村にはいたくない、住みたくない、というのは、私だけではなかったと思います。当時、東北地方全体が、出稼ぎ問題も非常に深刻であったわけで、雪対策ということが、行政のなかでも地域のなかでも取り上げられまして、克雪こそ村の活性化につながると考えられていました。

先ほどの新総合開発計画についても、地域づくりの第一の目標は、克雪対策にありました。

道路交通網の整備、完全除雪ということで、村道と名が付くところは全部除雪するような計画を立てました。そのためには何千万円もする大型除雪機械が必要で、資金もかかるわけですが、何とか計画的にやってきましたわけです。

加えて雪対策は何といても住民一人ひとりが住んでいる家の雪おろしを何とかしないと、雪から解放された平野部並みの生活はできないわけです。毎日毎日雪が降り積もりますし、多い時は一晩に約一メートルも降ることがあります。

放っておけば家がつぶれます。屋根がつぶれないとしても、周りが雪で覆われて、それこそ二階から出入りしなければならぬという、非常に苛酷な暮らしになりますから、雪おろしを何とかしようというのが、その当時の克雪の中心課題だったように思います。

では行政としてどういうふうに取り組むかということをお考えたかという点、雪をおろさなくてもよいような建物を建てる運

動が生まれました。今後、補助金制度などを考え、克雪住宅を普及したいと考えています。

雪対策は当時、用語としては「克雪」ということで取り上げられていましたが、最近では「利雪」とか「親雪」とか、「和雪」、ごく最近では「活雪」というふうな、時代とともに雪に対する考え方も、言葉に見られるように変わってきています。

また、新総合開発計画のなかには、「雪を利用して楽しむ、そういった村づくりをしよう」というふうにあります。文章では誰でもうまく書けるが、実践するととなると、そう簡単なものではないですね。研究会のメンバーは、発案だけではなく、それを実践することが必要だということがわかっていたものから、雪で楽しむもうじゃないかというので、「雪とびあ」を企画したわけです。

個人のアイデアをどんどん取り入れて企画する。ある程度計画を審査する上司はいたと思いますが、それをつぶさないでやらせてみるという気運が、役場のなかに広がってきまして、思いついたことはどんどんやろうという雰囲気は役場のなかにできていました。

「雪とびあ」の内容は、雪像コンクールを中心とするものです。私ども雪国に住んでいる者にとっても、雪像、とりわけ大きな雪像は素晴らしいものです。単に雪を積み上げたものではなく、芸術的に加工され、照明を加えると神秘的な何とも言えないような感じがする。

そこで、大雪像コンクールをメインイベントにし、庄内地方に参加を呼びかけた。雪とびあ大賞に輝きますと十万円、ホワイトロマン賞とタキタロウ賞は五万円の賞金を出しています。鶴岡、酒田からの応募もありました。

また、雪像コンクールと併せて雪の大きなステージをつくりまして、そこでステージショーと花火などもおこないました。冬の花火はこの年初めて朝日村でやったのですが、夏の花火と違い、打ち上げますと、花火の明るさでパッと周りが白くなるんです。暗いですから、黒も入りますが、白と赤と、何とも夏の花火と違った風情があります。住民のあいだからも冬の花火はいいもんだというので、以後毎年やるようになっていきます。問題も確かにあります。花火を上げるにはお金がかかるし、行政が民間からお金を集めたりすると、非常に社会的な問題にもなりますし、ある面では非難されることもあったわけですが、村が金を集めなければいだろうというので商工会に集めてもらい、現在に至っております。

■雪おろし体験ツアー、六年目の曲がり角

昭和六十年からの「雪とびあ」の開催、その翌年から雪おろし体験ツアーを開催し現在に至っています。雪おろし体験ツアーは、雪おろし自体は半日ですが、雪国の村の人たちと話をする機会を持ってもらい、レクリエーションなどを通して親睦を

深めようというようにやっております。

雪おろし体験ツアーは六年目を迎え、曲がり角にきているのではないかと思います。心の交流ということをやっています。が、正直なところ、やり始めた時ほど反響がありません。また、同じような体験ツアーをどこでもやるようになったということもありません。雪国というのは他の自治体の行事を真似てやる場所が多い。〇〇体験ツアーというのが非常に増えてきています。田植えの体験ツアーもありますし、草刈りのツアーなども多くなってきたなかで、新しい考え方を入れて別の方向を目指さないと、雪おろし体験ツアーが、朝日村を強烈に印象づけるものとしては、長続きしないだろうと思われれます。

そのためには、現在民宿に泊ってもらっている雪おろしツアーを、朝日村の住民の家に受け入れるようなツアーへと変えていくべきではないか、加えて雪国の山村に子どもを留学させるというのを冬期間だけおこなうなど、雪おろし体験ツアーに加えて、受け入れの質を変えていく必要があるのではないかと考えています。

「雪とびあ」も雪おろし体験ツアーと同様にどこでもやるようになって、今後は内容の検討もしていかないと、朝日村の雪祭りのイメージは遠のいてしまうのではないかと。そういったことも考えながら仕事をしている昨今でございます。

こういったことで朝日村の地域活性化を目指したイベントとか行事をいろいろおこなっているわけですが、これまでの活性

化の経験を簡単にお話しました。

■月山あさひ博物館センターの建設

昭和六十三年十月に東北自動車道の酒田線が路線発表になりました。朝日村にインターチェンジが二カ所できるということで、それにもなつての環境整備や新たな事業起こしが始まつております。

その一つとして、私がいま担当しております博物館センターがありますし、もう一つはどこでも始められているゴルフ場の誘致です。

博物館センターは、アマゾン自然館と、ワインの醸造施設をともなつた月山ワイン研究所とを中心に構成されています。なぜ、朝日村にアマゾン自然館かといいますと、鶴岡市に長年アマゾンに住んでおられた探検家の山口吉彦氏がおりまして、動植物の資料をたくさん持っていらつしやる。縁があつて朝日村でそれをお借りして皆さんにお見せしようということがその始まりです。

研究所の機能は、ワインの研究はもちろんですが、朝日村の特産物の研究と販売もここでおこないます。ワインは、昨年度は十二万本を生産し、一億円産業になつて、やつと大台に乗つたような感じのところですよ。

それから溪谷が非常に美しい梵字川に、吊り橋を架けます。

対岸には、スノーシェッドという旧国道トンネルがあります。その旧国道のスノーシェッドに体験交流施設をつくらうということで、レストランとライブコンサートなどができるような施設の建設計画があり、いま吊り橋を架ける事業を進めております。

レストランは再来年になりますが、建設を予定しております。アマゾン自然館とワイン研究所は、十月に外装が完成し、来年の七月二十日にはオープン予定です。また、ふるさと創生一億円事業で、文化創造館を建設します。今年度末の着工、来年度完成を目指しています。これらを総合して「月山あさひ博物館センター」というエリアをつくつて、村の活性化を目指そうと、現在取り組んでおります。

■朝日村独自の文化の継承を

加藤 全体的なお話をうかがつていて、素晴らしいアイデアがどんどん実つてきている感じが感じられました。言い方が適切かどうかわかりませんが、タキタロウから始まつて雪おろし体験ツアーに至るこのアイデアというのは、とてもアマチュア的で、ほほえましいんですよ。

しかし、そこに道路が貫通してくる。そして陸の孤島でなくなつて、ゴルフ場もつくりましょう、アマゾン自然館も、というのは、たまたまそういうコレクションをしている人がいたか

らということですが、何か朝日村にあまり似つかわしくないように感じます。

むしろ、同じような豪雪地帯のコロラド州とかの自然館ならわかるのですが、突如アマゾンが出てくると(笑)。

米山 アマゾン自然館は、どんなものになるんですか。

清野 動植物、ワニや蝶などを展示します。民族衣装の資料や槍などは鶴岡市で展示します。

米山 名古屋には、国宝級のタンザニアのマコンデの彫刻があり、タンザニア大使が何度も見に来ているそうです。そういうのもいいと思いますよ。アマゾン自然館をやるのであれば、新着資料が次々に入ってくるような壮大なスケールで運営してほしいと思います。

安達 あらゆる野鳥を集めるのは、いかがですか。鷹匠がいるんだから、もう少し優雅なことをやっては。

宮本 鷹匠に、せっかく村に来てもらっているのですから、日本の鷹匠の技術の保存もいいのではないか。クマタカという保護鳥の人工繁殖にまで取り組んでいるのですから、それこそ鷹狩りに関するシンポジウムの開催などはどうでしょうか。環境も良いですし、人々が集まると思いますよ。

加藤 朝日村には、即身仏で有名な注連寺や出羽三山があり、信仰登山の人たちもいるわけでしょう。出羽三山の伝統を生かすほうが、ゴルフ場よりずっと面白いかもしれないですよ。

安達 修験者の道場みたいなものはどうでしょうか。女性も

可となると案外はやりますよ。

清野 雪おろし体験ツアーに参加した方で、次の年に、湯殿山信仰の滝にうたれる修行に来た方がいます。

須藤 今までの話と関連してくるんですが、かつて宮本常一先生が山村や過疎地域の振興対策を考えておられた時に、まず足元から見つめていこうじゃないかということをかきかんに言っておられた時期がありました。

いろいろのイベントのお話をうかがっていると、興味深い発想がどんどん展開していつて、たいへん面白いんですが、一方で、伝統的な行事、伝統的な文化、そういったものがどういうかたちで保存されるのか気になります。それが宮本先生の言われた足元を見つめるという作業だと思います。

先ほどのアマゾンも結構なんですけど、もう少し足元を、いま言われたように月山の信仰とか、そこでおこなわれてきた芸能とか、地元で積み重ねてこられた文化の層は、朝日村では非常に厚いと思うんです。それをここへ来る人たちに教えてあげる、というかたちで考えることはできないのかという問題があると思います。

清野 文化財の面ですが、確かに村にもたくさん文化財があります。現在は、多層民家、これは雪おろしの中心の場となっている茅葺き屋根の古い民家ですが、村の文化財として保存しています。

これは県の文化財の指定を受けまして、民俗資料の面を付け

加えれば、国の文化財に指定してもいいというような文化庁からのお墨付きもありましたが、そこに資料館を併設する計画まではまだ至っておりませんので、現在は県の指定文化財どまりという状況です。

別の民俗資料館的なものの必要性とその建設も、急がれていくところですが、住民の要望が非常に強いのは事実で、行政の開発計画にも盛り込んでいくことが予定されています。

対応策の一つとして考えたのが、先ほど申し上げた博物館のエリアに予定されている文化創造館の建設です。名譽村民で『月山』の作者である森敦先生の資料も、この創造館に収める予定ですが、それに加えて朝日村の文化財もこの場で何とかできないかという強い要望があったものから、神楽や田植え踊りもここで舞台上演できるような設計を依頼しています。このように、少しずつでも文化の保存をしようという考え方がいるところです。

次に、社会教育関係の人づくり事業ですが、高齢者大学、成人大学とも言っていますが、単なる趣味や知識を得る講座ではなくて、地域を考えるような内容、地域おこしの話を聴いたりする講座の内容になっております。

本格的な地域づくりの講座メニューを考えたのですが、その後、国際化、高齢化と、社会の状況がいろいろ変わってきたものですから、現在に至っては山村の朝日村でも国際交流というものを前面に出さなければならぬ時代となりました。それに

ともなつて英会話の教室などを開いております。

■イベントがもたらす地域への効果

清野 足元からというご指導がありました。朝日村のいろいろなユニークな事業については、あくまでねらいとするところは目を朝日村に向けてもらうこととする。それが若者が住む時の自信にもなるし、人口の流出にも歯止めがかかる。

若者たちにとって自分たちの村が何かで有名になると、安心するわけです。たとえば彼らが鶴岡に飲みに行つたとします。

「ああ、雪の朝日から来た」「雪おろして有名になつたけの」「タキタロウで有名になつたけの」と言われるようなことがあると非常に自信にもつながるんですね。イベントには、そういう効果がありますし、私個人としてもそれは認めてやりたいところですが、一方、先生方からのお話のあつた足元というのも、しっかり見つけていかなければなりません。朝日村はやはり農業の村ですから、そういった基本的な村づくりの面も怠つてはならない。

たとえば、月山ワイン研究所の目的というのも、月山ワインを特産物にしよう、生産を向上させるためには山ぶどうの栽培を大幅に普及させなければならぬ、という以前からの使命に基づいています。

月山ワインへの取り組みは、足元から地域を見つめた事業で、

今後とも本気になって進めていかなければならないと考えております。

須藤 朝日村研究会でも、地域のお年寄りの方に、昔の農業はどうやったのか、昔は山ぶどうはどうやって増やしていったのか、赤い蕪はどうやってつくったのかを聞き書きしてはどうか。いい悪いは別として、自分たちの先祖がたどってきた足跡を勉強して、記録に残してみる。

そこから知恵として吸い上げられるものは吸い上げていて、将来のために利用していくようなやり方で積極的に進めていったら、非常に面白い知恵、役に立つようなアイデアがいろいろ出てくるんじゃないかと思えます。

また、それがイベントに転化していったり、産業に転化していったり、ということができると面白いと思います。

加藤 お話は尽きないと思いますが、どうも今日はありがとうございました。

(第二十二回 一九九〇年七月二十三日)

過疎山村の再生

●講師 安達生恒・社会農学研究所所長(当時)

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 川喜田二郎／東京工業大学名誉教授 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 佐々木高明／国立民族学博物館館長 須藤護／放送教育開発センター助教授 宮田登／筑波大学教授 米山俊直／京都大学教授

■島根県弥栄村での調査

安達 私が島根県弥栄村やまに初めて行ったのは、昭和四十四年の一月で、過疎法が制定される一年ちよつと前でした。弥栄村は昭和三十八年のいわゆる三・八豪雪で大きな打撃を受け、過疎化が急激に進んだところです。

弥栄村の一種の総合調査団とでもいいますか。学生と日赤の医師と生活改善の方にも調査団に入っていたら、昭和四十四年のお正月に調査をおこないました。雪深いなか、三つの集落を選び出して細かな調査をしました。集落の人の健康診断もおこない、そのデータを見せていただいて、それから卒

家離村で広島や山口に行った方の追跡調査も含めて、かなり手の込んだ調査を合計二週間ぐらいいおこないました。

この弥栄村は、現実にかなり厳しい過疎状態で本当に暗い。暗いというのは住民の心が暗い、役場も真つ暗。そして、もう取材してくれるな、悪いイメージができる、そしてまた人が出ていくから取材拒否といった具合でした。そこで調査には医師が入り、健康診断ができるということ調査の許可ができました。

現在の、弥栄村は元氣のある村です。弥栄村が元氣になったきっかけは、いろいろあるとは思いますが、都市から来た若者が弥栄郷共同体を集落の方と協力してつくったことでしょう。

弥栄郷共同体は、昭和四十七年に四人の都会の若者が何者にも管理されない自由な生き方を求めて過疎地の真つ只中にやって来てつくった共同体です。二十年が過ぎ、現在ではすっかり村に定着しています。メンバーの十四人が有機農業で米、野菜、しいたけ、牛肉、豚肉、みそなどをつくって年間七千万円を売り上げているグループです。

これらのグループから新しい可能性が見えただけではなく、もう中国山地の過疎は峠を越えたと私は思います。弥栄郷共同体と行政の仲は非常にいい。一緒になってやればいい。し

かも中国山地は幅が狭いですから、都市間交流はいくらでもできます。それでやっつけていけばこれからだんだん光は見えてくるのではないか。また、こういう団体が日本各地にいろいろ数多くできあがってきていますしね。今、大学紛争を経験した人たちが社会の中核になっています。この世代の人々は、それまでの農村にあったものとは違う価値観や行動パターンをつくり出し、農村に新しい風を吹きこんでいます。そして今、世の中が変わって都市との交流がさかんになっている。

結局、過疎の問題は、人口が減ったとか増えたとかいう単純なことではなく、人々の意識によるところが大きいのではないかと思います。

■過疎の内部メカニズム

昭和三十五年から四十五年にかけての高度成長期は、一層過疎化を進め、過疎地域は人口が一気に減りました。人口が減ったといっても、その頃過疎地域の内部はどうなっているかということも誰も言わないので、私の調査を少しとめてみました。私はこれを、過疎の内部メカニズムとしましたが、高度経済成長に引きずられて家ごと人口がどんどん外に行く。人口、戸数が急に減るといことがポイントです。五十年の間に半分になるのだったらかまわないわけです。

いきなり人口が減少するので、今度はそこの農林業もできな

い。荒れ地がどんどん出ると生活環境が悪くなります。一層悪くなるから、こんなところは置いていかれるよという理由で、また人が外に出る。そうすると「もうここに住んでいるのはだめだ」と、住民の意識が非常に縮まってしまい、後退してしまうわけです。そういう悪循環の構造から、結果として集落がなくなってしまう。

集落崩壊はいちばん奥から始まるわけです。奥の集落が全部撤収する。そうするとその次の麓にいる人々は自分のところがいちばん奥になってしまったのでたいへん不安になる。そしてまた集落の消滅が起こる。それは島根県石見地方の奥で現実に見ました。つまりドミノ理論、奥が倒れると、ずつと将棋倒しのように次々と倒れる。住民意識の後退は集落の消滅につながってしまうほどたいへんなことです。私は過疎地の活性化のためには内部メカニズムを大事にすることが必要であると言っています。

この内部メカニズムを一応整理し、今度は東北などに当てはめてみたのですが、中国地方とはまた違う。過疎はまるで天気の変化のように西から東へと変わり始めました。それは中国、四国、九州の山村から始まり、東北はそれより五年ほどして過疎が始まりました。東北地方は、たとえば島根県で見ているようなかたちではない。いわゆる出稼ぎがある、水田がしっかりとっている、家制度もしっかりしている。ですから東北地方で家が離村するとなると、親族会議をやって許可されなければでき

なかつた。

島根など中国地方は、伝統的に人がひよいひよい外へ出るころなのです。徳川時代にも同様な過疎化があったのですが、その時も簡単に外に出てしまつて、下関などで沖仲仕をやつてまた帰つて来るとか、そういう歴史があります。

こうして全国の農村地域を見ましたが、私の日本の農村全体の問題を考える原点到石見があります。日本各地いろいろ歩きましたが、絶えず石見と比較して私なりにまとめてきたということですが。

■過疎学の集大成として——七つの提案——

もう三年前になりますが、私の過疎学書、私家版をつくりました。そして国土庁はもちろんですが、いろいろな方に、かなりよく読んでいただきました。これは一種の過疎学の集大成といふか、現時点でのまとめですが、愛媛から島根に来て、私は過疎男になつてしまつたわけです（笑）。

過疎男であるならば、何か今度はひとつ、もつと新しいものを提案しないといけない。時代はすっかり変わりましたからね。そこで私は、具体的な七つの提案を出しました。

過疎法ができた当時、過疎地域に指定されたのは約千二百市町村でした。過疎法における過疎の要件は、人口減少率が十五年間で〇・二以上であること、最近三カ年の平均財政力指数が

〇・三七以下であることの二つです。

しかし、過疎法ができて二十年が過ぎましたから、たとえばベッドタウンになつてしまつて、もう過疎ではなくなつたようなところもあるので卒業生を出せと、まず提案しました。するとだいたい九百くらいになります。同じ予算の枠で指定地域が少なくなれば、配分が多くなる。それからもう一つは過疎と言いましても、雪の降る豪雪過疎地域はたいへんだから傾斜配分を採用してはどうかというものです。

また、過疎法は一つの町村で計画を立てて、それに予算をつける方法をとっているが、それではもう古い。もつと広域で考えなければいけないから、過疎町村が連合体をつくつて広域対策事業を起こして、それに対して過疎債が使えるようにということを行いました。これは理論はいい、考えはいい、と言われたものの事実上採用されなかつた。あとは全部採用になりました。

二つめとして出したのが、地場産業の振興です。過疎法では地場産業の振興をあまり取り上げなかつたので、過疎債を基盤整備などに使えるようにどんどん地場産業の振興に努めなさいと言いました。

三つめとしては高齢者対策です。この対策にはいろいろありますが、私は高齢者が自分たちの持つ能力を活用できるように新しく働く場所をつくれ。それからなるべく老人ホームをつくるな。もしもつくる必要があるならば、ミニ老人ホーム、つまり

家族をちよつと延長したようなものを町の真ん中につくれということを言いました。

四つめは山と水を守れと言いました。つまり環境です。過疎地域は上流のほうにあります。上流の環境をよくしなければ下流の環境もだめになる。これは町村だけではなくて、日本の国土のために必要なことで、これにきちんとカネを使えるようにするべきです。

五つめとして、地域間交流事業を進めるために起債をどんどん認めなさいと言いました。つまり都市から人を呼ぶなど、お互いの交流があります。今は交流がさかんですが、それにはカネがいりますから。それを担うシステムは第三セクターです。第三セクターの基金に過疎債が使えるようにしたい。過疎債というのは七割が交付税でみてくれますので、たいへん有利です。これは現在、非常に役に立っている。

六つめは、県での総合対策の事業の制度の導入です。県でも過疎債はかなり使っています。今までは道路整備にしか使っていませんでしたが、最近は各県でどんどん施設をつくりまして、かなり過疎の村が良くなっています。

最後は、過疎の町村自体のことです。今まで多くの町村が住民に相談しないで過疎計画を策定していました。住民を含めて計画を策定しているところもありますが、これはまだ半分ぐらいのときです。

このような主張をして、一応は認めてもらいました。

■二十一世紀に向けての農村の役割

昭和から平成の時代にかけての八〇年代に日本の社会は大きく変わりました。いわゆる高度産業化ということもありますし、また都市化が非常に進んで農村との関係もだいたい変わってききました。新しい社会の状況がありますが、私はやはり近郊農村から見るのではなくて、過疎の村から農業を見てきました。

今度は、農業が農産物自由化という難しい局面に立ち向かっている。この問題が回り回っていちばん打撃を被るのはやはり農山村です。農山村をどのように維持し、どのように新しく編成替えをするかは、二十一世紀に向かって日本の農業の非常に大きな課題です。

つまり、過疎問題をもう少し広げて考えていくと、過疎地域に含まれる農山村地域での農林業の維持は、日本の国土保全にとつても最も必要だということです。

一方、都市ではご承知のように生活にいろいろな歪みが出ています。特に子どもにとっては劣悪な環境です。ですからいわゆるふるさと、山と緑を求めての体験型レジャーやレクリエーションが八〇年代の後半からいろいろ出てきました。こういったものを重ね合わせて、いったいどういう農山村をこれからつくり直していくかを考えていくことがいちばん大事だと思います。

ところがその場合、いちばん困ることは、土地が荒れることである。私の言葉なのですが、土地の荒廃を防ぐためには「土地利用の社会観」を変えることが必要です。つまり所有は個人でよいが、利用は社会化すべきである。これに気がついたのは、もう十五年ほど前です。私は「むらの再生」という本を書きました。副題は「土地利用の社会化」です。これはジャン・ジャック・ルソーの社会契約説のなかの次のようなことから考えたものです。「土地は神様のもの、つまり社会のもので、それを個人が自分のものだと思ふには条件がある。一つは自分の食う以上を困い込んではいけない。」これを、現代にあてはめてみると、日本の既成地主がいけないということです。ですから農地改革は正当で、困い込んだ以上、耕せというわけです。しかし、現在、耕しきれない状況がある。そうしたらそれは耕す人に土地を貸しなさいということです。

この土地利用の社会化を進めるには、本当にやる気のある人と、土地を提供する人の話し合いのなかで、自分たちの生活と生産の必要からつくるといふ自前のシステムをつくるのが非常に大切だ。

土地利用の社会化を具体的におこなうとすると、次のようなことが考えられます。それは、日本の過疎地には高齢者がたくさんいます。一年間雇うというような労働力にはならない。が、毎日朝、数時間、一週間に数日という細切れ労働力は、たくさんある。それを組織して、その人たちに水周りなどを毎日見て

もらうなら、手数はかかるが労働は特に厳しいものではない。それをやってもらって、しかもその人たちに時間賃金をピシッと払う。水田を持っていて耕作を依頼したい人は、水田を基金として出す。この二つの組織を第三セクターがうまく機能するようにお世話をするというのはどうでしょうか。

そしてもう一つは、機械利用組合の作業料金を高めに設定することです。高めの部分が所得補償になります。アルバイトの賃金が入って、あわせて年金があれば働く人も今の生活を少しよくできるでしょう。

今の若い人は、どんどん生産組合をつくっています。過疎地域の水田が荒れるのを防ぐためには、そういう第三セクターをつくる。この方法を応用して農産物の加工など、いろいろなことができる可能性があるということです。

ルソー先生が十八世紀におっしゃったことを近代的に仕組みだらこんなふうになるのではないかと思います。

■これからの農村を築く人を育てる

これまで水田、あるいは農地や山林の問題をあげてきました。が、いずれにしても国土利用、あるいは土地利用ということを農学の視野のなかに含み込んできました。

土地利用の社会化をもう少し広げますと、やはり過疎地は山と水田になります。そうすると一つの村には還元できない。で

すから流域連合をつくらなければいけない。私は、今度の新過疎法には一つの町村だけの過疎計画ではなくて、流域連合したものに特別事業を起こせるような準備をしなさいということをご提案しました。

そうするとこれは農村と農村の連帯関係だけではなくて、環境の問題、あるいは資源の問題にかかわりますから、下流域にある都市との連帯、連合は当然考えなければなりません。

簡単に申しますと、島根時代の過疎男が過疎問題の視点から世の中の流れを見てきて、環境問題を捉えた時に、山と里と川と海と、そういった流域連合をつくって生態系の物質環境に取り組みなくてはいけないというのが、私の今の到達点です。

そして、それを誰がやるかという点、放っておいてもできるわけではなくて、第三セクターであるとか、それぞれできるかたちで、流域連合を、あるいは日本の農業をつくっていく。生産者が気づいても自分一人ではできない。仲間を組んでもうまくやれない。だから第三セクターが応援するべきだと言っているんです。地方の行政を含んだシステムをつくれば、活動していくうちに人が育つ。私は、生産者や地元の人々の自らの力によって農村を築いていくことが大事であると思っています。そのなかで一まわり、二まわり大きい本当の住民が育つだろう。そういうものが育たなければいくら地方の時代だとか、農山村を守れと言ってもできやしないというのが私の基本的な考えです。

親の背中を見ているから、もつとしっかりした子どもが育つのではないかという希望があります。

現在、農業は非常に難しい状況にあります。しかしこれを突き抜ければ必ず二十一世紀には新しい農業ができるということになる。明日は曇りならばその次は晴れになるといふ願ひもありません。

■意識革命が村再生のキーになる

加藤 まず、安達さんの考え方と現在、実際に進行している事柄についての感想や批評をうかがい、同時にもう少し一般化して過疎についての諸問題について討論いただきしたいと思います。

米山 私のフィールド調査との関連で考えてみますと、弥栄村は三・八豪雪によるたいへんな打撃を受けたけれど、そのなかから頑張って立ち直った二つの実例と言えるのではないかと思います。弥栄郷共同体という外から来た人がある意味では引っかき回して新しい要素をどんどん加えていったところが大きな意味を持っているのではないのでしょうか。

安達さんは愛媛県でみかん農家の共同組織でアドバイザー委員として活躍し、「ボンジュース」の製造まで手掛けるような大きな生産協同組合をつくられた方です。その後は愛媛から島根に移られて、元気のいい人ですから非常に活躍され、島根県

ではある意味で神様みたいな存在のようですね。

宮田 弥栄村は、西日本の村の一つの典型的な姿で、崩壊というものを通して、二十一世紀に向けては展望が非常に開けているといった安達農学で説明されると、このプロセスはよく理解できます。

弥栄村には、神様が残っていて、かつての焼畑農耕時代のいろいろな民俗儀礼があるものですから、私も行ったことがあります。

根底から村が崩壊した状態になっているところへ新しい人たちが入ってきた。私は、村を統合する力は神楽や仏様だろうと思っていました。私は、村を統合する力は神楽や仏様だろうと思つていましたが、弥栄郷共同体の人たちはいったいどこにそのスピリチュアルなものを求めていたのか。意識革命ということとを安達先生は言われんとしておられるのでしょうか。村を興す精神的な統合について、その軸として、民俗学は昔から神様、仏様ばかりを言っていますが、そうではないものがあるという印象を受けました。二十一世紀の村は、新しい意識によって生きていけるという展望になるのでしょうか。

神崎 意地悪なことを言うつもりはないのですが、弥栄郷共同体は、十四人で、年間七千万円を稼ぐことができます。それが、村のなかに本当に定着したのだらうかというのが私は非常に大きな疑問だと思うのです。たぶん、まだ村とかけ離れた存在だと私は思います。やはり江戸っ子三代ではないけれど、付き合いの部分を紹介しないと、簡単に成功例と言うことはできない

ような気がします。

宮田 安達先生の場合、地元の付き合い等はあまり気にしていません。第三セクターで組織をつくって、そうするとある時期に非常にかたちが整って、それで自然と人間がくつついていくというように、非常に楽天的に明るい未来を描いていますね。

佐々木 この弥栄村のようなストーリーは非常に明るい結末だけれど、どの村も自分たちの将来に対してこのように明るい展望を持っているのかどうかということに私は疑問を持っています。

弥栄村の崩壊と同じような時期に北陸の山村をずいぶん歩きました。しかし、こんな明るい結末でない村がいっぱいあるわけです。現実には依然として暗い状態の村もあるわけで、これ、日本の過疎の村は再生しましたとなるんでしょうか。

加藤 私も、佐々木さんと同意見なのですが、現在、全国にある市町村で過疎に指定されているところが約千二百あります。

要するに、千二百人、生徒がいるとするでしょう。そのなかでいちばん上の偏差値の高い四十人ぐらいを語っているようなところがあって、あとの千百人はどうなるんだろうという印象を持ちましたね。

米山 死屍累々の部分はかなりあると思うんです。私の知っている例で言えば、岐阜県の奥美濃、根尾東谷のいちばん上に

大須という部落がありました。そのいちばん奥の村が完全に崩壊したという報告を聞いて、それを『過疎社会』の冒頭に紹介したのですが、そういうことが現実になりました。

加藤 安達さんの話のなかで私は非常に面白かったのは、集落が奥から順々になくなることです。歴史的に考えてみると、奥へ奥へと向かうのがどちらかというと歴史なんです。植文彦さんの『奥の思想史』というたいへん面白い本があるので、まず通りがあつて、鳥居があつて、その奥に何があるだろう。そうすると森があり、谷があつて、奥へ奥へ。その奥はどうなっているんだろうと奥を追究していくのが歴史というものなのです。

現在は、奥がだんだん衰退してきて奥がなくなつて、全部口に来てしまつてゐる。それで思い出すのは、突飛ですが実はレジャーの歴史なんです。

ハワイ群島はもともと山登りのためのレジャー地だったのに、山登りがさかんになるとワイキキビーチに下りてくるんです。今は山登りなんて誰もしない。また、黒海にある旧ソ連の保養地ソチもともと山登りのため、水なんて誰も相手にしなかったのが、だんだん山の奥を極めるのではなくていちばん手近な水辺でごろつとするようになる。これは文明的に面白いですね。

米山 経済学的にはまさにその通りで、儲かるとなればどんな耕作地が奥へ奥へと行くわけで、それがだめになればどんな

どん下がつてくる。前進、後退いずれも必要性があるわけで、仕方がないと言えは仕方がないと言えます。

■村は「自信」により再生する

須藤 安達先生のやつてこられた学問が、いわゆる現在学として生きているということが非常に伝わってきました。

もう一点は、安達先生が積み重ねられて来られた学問の積み重ねが、一つの過疎の状況をきちんと捉えているところが、現状を打開していく一つの力になつてゐるんだということ。現実に対してどう対処していけるか、将来をどう展望しているかを示すものが学問なんだという姿勢が伝わってきます。

加藤 過疎の村に対して安達さんは非常に楽天的なんです。日本の村は全部コミュニティが入つたり、青年協力隊が入つたり、第三セクターができたりによつて、全部よみがえりますよという予言をいわばしている。

須藤 私自身は新潟県の山古志村で徹底的に過疎について勉強をさせていただきました。日本有数の豪雪地帯で、私が最初に行つたのは昭和四十五年ですが、その年に降雪量が五メートルにもなり、春だったのですが、とにかく雪の壁をずつと歩いて行つたという記憶があります。その時に三・八豪雪の話もよくうかがいました。そのなかで、考え方として非常に大事なものが、まず地域の人たちがその土地に対して自信を持つことだ、

その土地にしっかりと足をつけて、その地域の将来を考えていくことが大事なんだということを教わりました。

当時、村は、出稼ぎは仕方がないが、企業誘致をたいへん嫌っていた。その時に地域の生活調査、民具調査や年中行事等の調査を徹底的にやれと言われました。それが一つの学問だろうと思うのですが、民具の調査、あるいは民具の収集をすることによって、その地域の生活の組み立て方を見ていこう。そうするとその地域のなかで非常な知恵の積み重ねによってその地域、地域の生活が成り立ってきているのだということがわかってくる。こういう地域の生活のメカニズムをきちんと見ていくことが大事なんだということを教えられました。

山古志村の例では、いわゆる文化財指定、特に国の文化財指定がされるということ、その地域の人たちがものすごく自信を持つことになりました。自分たちの村が全国区になり、全国の人たちに自分たちの村を知ってもらうことによって、たいへん自信がつくということです。

川喜田 問題として、「土離れ」ということがあります。ふるさと喪失、土離れ、これを回復しようと思うと少なくともその物理的条件でいちばんいいのは過疎地なんです。ユーズ、需要者は大都市にいる。過疎地はそこにある土や草花といったそのままの自然を売り物にすべきです。そうすればうまくいくんですが、悲しいことに過疎地の場合、二つ難がある。一つは住民が自分らが有利な立場に置かれていることに全然気がつい

ていないこと、もう一つは、「暮らしていけないし、困っている」という意識です。自分が困っているという立場にしか立てず、外の人が何を望んでいるかを冷静に見られないことが彼らにとつての問題です。

交流や連携の話がありました。一昨年、スウェーデンの行政の人と話していて感じたのは、スウェーデンは行政自体が役人を増やすことは難しいけれど、サービスは向上させたいので、行政側から呼びかけて国内の筋のいいNGOと組む方法をとっているということです。そのNGO自体にカネを貸すのはもったいないので、その予算をひとすると、三倍とか九倍の補助金を出す。その代わりこのようなサービスをしてくれと行政が指示するわけです。おそらく私は日本もその方向に動くと思う。つまり行政とNGO、日本の場合はそれに企業が加わってスクラムを組む時代がどうもきそうな気がします。

加藤 いろいろとお話をありがとうございました。今日の議論を参考にして今後の過疎地の現状について考えてみたいと思います。

(第二十八回 一九九三年六月二十二日)

情報化による農業の再生

●講師 田上隆一・農業情報利用研究会事務局長

現農業情報利用研究会専務理事

〔出席者〕加藤秀俊／放送教育開発センター所長 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 須藤 護／放送教育開発センター助教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／神奈川大学教授 米山俊直／放送大学教授

■パソコン通信が農業を変える

加藤 今日お招きした田上さんの住んでおられる茨城県せまの関城町せまは、一九八七年開設のパソコン通信「村のネットワーク」を通じて農業情報の拠点となり、都市の消費者と農村の生産者を結ぶ産直ネットワークや営農情報の提供、局地的な気象観測システムなど多彩なサービスが、北海道から沖縄までの四百人の会員を結んでおこなわれています。以前別の研究会でお話の方がったのですが、パソコンを使った農業の全く新しい波が生まれ始めたという感動を持ちましたのでお願いした次第で

す。

田上 私自身農家の生まれで、農協に勤務したりはしましたが、農村から離れよう、離れようとしていたんです。しかし、結局農村にいて農業に深くかかわっています。こうした環境のなかで、農業をもう少し見つけていきたいという思いが私のかにあつて、そのなかでコンピュータが極めて大きな存在になつており、農業とコンピュータが私の仕事のテーマになっています。

今日は、農業現場の動きとそれを支援する側、たとえば行政、農協などの動きの二つの視点から、いくつか現象を見ていきたいと思います。そして問題を私なりに少し拾い、そういった課題が見えると思うと、どうあるべきなのかという提案を最後に少しさせていただきます。

農業の政策面から見ると、私は昭和二十五年生まれなんです。子どもの頃は、農業基盤整備が重要なテーマでした。そのあとは機械化ということが大きなテーマになった。ところがそれは、予想外にどんどん早く進み、機械化が十分に行きわたると、次は施設化で、さらに省力化が図られた。その次の農業構造改善事業では対象がハードからソフトに移行し、現在の構造

政策では、ソフトノミックスということを言い始めてきています。

ここでのソフトは、実際にはコンピュータを使うという意味
あいが強く、この五年ぐらいの農業政策の方向は、機械化農業
という今までの大きな流れから、情報化農業に移りつつあると
言ってもいいのではないかと思います。どういう有利な情報を
取り込むのか、どう処理するのかというあたりで、コンピュータ
を使った情報化農業ということがさかんに言われてきてい
ると思います。

そこで、具体的に現場がどんなふうに変わってきたのかにつ
いて、私のよく知っている例を三つほど話してみたいと思いま
す。

経営環境はものすごく変わりつつあります。これからお話し
する例は、親の世代とけんかをしつつ経営スタイルをガラッと変
えたものです。その代表に、熊本県八代市の宮本慶一君がいま
す。私と同じ二十五年生まれなんです。通常トマトやキュウ
リを栽培している大きなハウス農家でもせいぜい三千平米ぐら
いですが、彼の場合は六千平米のハウスでトマトを栽培してい
ます。年間売上目標一億円、両親は昔ながらのミカンづくりで
すから労働力としてはあてにできない。近所のサラリーマンの
奥さんたち五、六人を常時雇っています。

環境制御を百パーセントやりたいというのが彼の考えで、ヤ
マハポートに特注して長い船をつくり、土を入れそのなかで栽

培をし、水と肥料を百パーセント管理するというやり方です。
鉄骨でアングルを組んだ六十センチの高さですから、非常に作
業がしやすく、手が汚れたりしなくなり、今までの農作業のイ
メージが一新されました。花の栽培と同じような感覚で、サラ
リーマンの奥さんたちのアルバイトとして人気があります。

これだけ大きな規模で環境コントロールをしながら省力化す
るには、いかにデータを収集するかがポイントになってくる。
ハウス内はいたるところにセンサーがぶらさがっていて、温度、
湿度、水、光などを感知して、自分でつくったプログラムで計
測、制御しています。

こうしたFA（ファクトリー・オートメーション）としての
コンピュータ活用のほかに、マーケットに対するコンピュータ
活用もし、自分で売り込みをする。さらに、それらの連絡にパ
ソコン通信を使っているという徹底したコンピュータの活用事
例です。

二番目は、市場環境の変化をコンピュータで追っている例で
す。栃木県の人見角一さん、やはり私たちと同年代で、那須で
リンドウをつくっている。那須はリンドウが有名ですが、実は
自然のリンドウではなく、彼の栽培もので有名にしたんです。
彼は育種が好きで、新しい品種をつくり、自分でつくったもの
でパテントを取って、それを隣近所の人たちにも広め、一大産
地になったんです。

また、彼はファッション業界に非常に関心を持って、流行色

の先読みをしながら、リンドウ以外にも野の花を手がけています。それも、ある冷蔵庫会社と特殊契約をして、エチレンガスを相当量吸収する冷蔵庫を共同開発しました。単に球根を冷蔵庫に入れても、エチレンガスを発生して腐ってしまうのですが、これを防ぐためです。それによって様々な球根を完全に数年間生かしておく技術を得て、先取りした流行色情報によって、栽培、出荷します。

彼はデータベースを誰にも見せていませんが、色、流行、ファッションなど様々な情報を入れていくようです。もちろんハウスの制御も昔からやっていますが、彼の得意技は、独特のマーケットのデータベースで、その意味で、彼の農業経営からコンピュータ、データベースは切り離すことができないものになっています。

三番目に農村社会の変化として、特徴的な人のお話をしたいと思います。茨城県の下妻の塚田猛君で、つくばで自然派ネットワークというグループをつくっています。山形や遠くは北海道の北見を含む百数十名の農家を束ね、約七千戸の消費者に農産物の宅配をしている。しかも、運送業者に頼むのではなくて、自分で配達をするかたちで、現在十七、八台の保冷車も持っています。

このグループのユニークなところは、これまでの地続きの農村の連帯ではない、地縁を超えた点である点です。これだけの農業者を一つのブランドとして集約するためには、作物、土

地、人柄、労働環境の問題などの農産物の背景が見えなければいけません。それでコンピュータ・ネットワークに取り込み、畑のデータベース作成に一生涯努力しています。

また、このグループは完全な農業者の売り手市場で、消費者の要望は聞かないんです。おれたちはこういうものをつくっているから、これが気に入ったら買ってくれというやり方です。

それだけ安全基準には非常に厳しく、生産者責任制度をとっています。畑のデータベースを公開することによって、どこぞの誰さんの畑は過去三年間にこういう農薬をこれだけ使っているというものを公示しています。そして現在彼らは、微生物群を主に使った農薬投与しており、化学農薬は極力避けておられます。事務局で、菜っ葉でも果物でも、全くアットランダムに取り出してきて、生態チェックをして、その生産者が申告したものと違った農薬が検出された時には、即その場で会を脱退させられます。

百数十名の農家全部はコンピュータを持っていませんから、今のところは、生産者責任カードに、所定の項目を全部記載してもらい、ファックスで送ってもらったものを、女性の担当者がデータベースにエントリーして積み込んでいきます。

これが三年、五年とたちますと、こういう病気が出た、なかなか育たないという畑の問題、様々なトラブルが起こった時に、キーワードでデータベースを検索することによって、農業改良普及員や試験場よりもはるかに生きた情報が取れるんで

す。

百数十軒の自立経営農家、目覚めた農家のデータをみんなが共有することによって、非常に優れた農業経営が可能になるということに、塚田君は最近気づいて、データベースをもっとよくするために、百数十名のグループ全員にファクシミリではなくパソコンを導入してくれとお願いをして、今年の二月の総会でそれが決定されました。

農地、労働力、技術、資本の把握をするために、コンピュータなしには考えられないという一つの典型だと思えます。

この三つの例は、それぞれ今までの農業の経営体制から完全に脱皮しています。その人たちは、いずれも極めて効果的にコンピュータを使っているということが特徴として言えます。

■パソコンネットによる異質な人々との出会い

さて、極めて有効な例以外の、一般的な場合はどうなのでしょう。か。

十年ぐらい前から、農家のなかでも、これからは農業だつてコンピュータが必要だと思つて始めた人たちがいたが、ほとんど挫折した。しかし、たとえばプログラミングに向いた性格の人は、一生懸命それをやつて、比較的面白い、ユニークなプログラムをつくつた。これがみんなの意見をもとにどんどん鍛えられて、非常に優れたものになって、その人を中心に、地域の

人たちが集まっている。こういったパソコンクラブは、各県に五十から百ぐらいあると踏んでいます。

そうした動きを見て、農協、農業改良普及所といったところで、農家のニーズをいち早く取り込んで、コンピュータ教育を始めたところが出てきています。私のところのパソコンクラブは一九八六年から始めましたが、そのころ全国にポツポツとそんなものが出始めたのではないかと思います。

今でも農家でパソコンにやらせることというところ、表計算、簡単なデータベース、そしてコンピュータをつなぐコンピュータ通信程度ですが、農業簿記グループが様々なところでできてきている。簿記が進むとさらに分析をするような経営改善に動いていきます。つまり、処理から創造という格好に農家をめぐるデータ処理が動いてきているようです。

極めて優れた例が北海道美幌町にあります。私と同じ世代の村上君が、十年前からパソコンで自分でプログラムをつくつて、そのプログラムを友だちにも使わせている。その友だちがどんどん増えて、いまや百八十人になりました。美幌町農協の組合員は七百人で、百八十人のうち町内の人が約百人ですから、七百人のうち百人も村上さんのソフトウエアを使っているということになると、その人たちの財務処理は完全に標準化されているといえます。

さて、パソコンクラブの教育から何が生まれるかというところ、人のつながりです。よその優れた人間を連れてきますから、異

質の人間との出会いがある。ここで技術向上し、新たなネットワーク、人の出会いが出てきます。

たとえば関城町では、農水省の試験研究機関の人たち、筑波大学の先生や、学生といった人々との出会いがありました。関城町はナシの産地なんです、ナシの霜の害を防ぐための気象観測ネットワークというものをつくった。畑にセンサーをぶらさげて、電話回線で引張って、畑の状況を見て、明日は大霜だという時には、みんなで出て霜対策をするということをやったわけです。

これはパソコンクラブでの人の出会いによりです。そこで、今まで農業問題なんか考えたこともなかったという電気技術者、あるいはコンピュータメーカーのシステムエンジニアといった人たちが、「そんなことは簡単だよ」と、自分の知識をそこに結集してくれました。これで手づくり気象観測システムができた。

次にパソコン通信ですが、様々の出会いのなかで、簡単に意思の疎通ができる、珍しがつて農村に遊びに来る人や、われわれも都会に出て行くということがでてる。ノート型パソコンを持って、われわれがつくった画像データベースを見せに行くと、おみやげにメロンやナシの自信作を持っていくと、「あれが食べたい」と、あとで電子メールがくる。それがどんどんさかんになって、今度は知人に送りたい、親戚に送りたいということ、非常にたくさん情報が流れ、農家が忙しくなっ

まった。

電子メールを見て、プリントアウトして、それを今度は宅便の伝票に書くということになると、ナシやメロンの収穫時期は忙しくてやっていられないということで、ホスト局のなかに来た注文を自動的に伝票にして、伝票を農家に配るというシステムをつくりました。

こんな格好で、最初は遊びのつもりだったものが、日常の暮らしのなかに、そして農業というビジネスのなかにどんどん展開していくというかたちで、農家のパソコン活用が様々な形で起きています。

農家ではこのようにポトムアップで動いてきたのですが、行政からのもう一つの情報化の流れがあります。

これまでの構造改善事業ではハード中心だったものが、平成二年からソフト重視の新しい農構事業が始まりました。農業・農村活性化農業構造改善事業です。この前段として、昭和六十二年に農水省がグリーントピア構想を出しています。二十一世紀には高度情報化社会が実現するであろう。その段階で農村はどうあるべきなのか、各年の段階で何をすべきかという構想の立案です。

補助事業では、ハード中心ですからシステムのことは何もできなかったのですが、六十二年の活性化農構以来、プログラム、ソフトウェアのほうにお金をつけるという発想になり、全国各地にコンピュータ、データベース、ネットワーク、そして農家

にパソコンの端末が置かれるようになってきたという動きがあります。

しかし、これらは情報をいったん中央のセンターに集約し加工しようという発想です。上司に決済をもらって、ハンコがペタペタいくつもあるような文書書類の流れと同様の命令、報告ラインでコンピュータを置こうという発想では、情報化がうまく進みません。

ところが現に、農家にパソコンを置いてしまつたら、パソコンそのものが汎用で横に使えますから、大学とつながるし、他のビジネス世界とつながります。そうすると、国の言っていることは違うんじゃないか、農協は何かおかしいんじゃないかと、みんなの意識が目覚めてきています。

■目覚めた農業者と行政のギャップ

結果的に言えば、非常に閉鎖的な農村社会の、地縁と血縁だけしかなかったような世界のなかで、異質なものが出てきたことによって目覚めたという感じがします。そういう意味で、パソコン通信は社会の窓であると思います。しかし、社会の窓には違いありませんけれども、その社会の窓にしかすぎないものを、役所が「これで活性化をやれ」と言ったところで、誰もぶら下がってこない。

活性化が生まれるためには人の出会いがあつて、そのなかに

信頼関係が生まれたところに電直、産直も生まれているんです。信頼関係がなければ、いくら電子掲示板売り込んでもだめです。人が出会って、面白がつて、交流があつたところに、電直が展開されます。

たとえば、関城町の作物が気に入った人は、親戚の分まで注文を取ってくれます。会社の総務課に売り込んで、お中元として六百ケースのナシの注文が来たことがあります。この種のもは毎年あるので、安定的な収入になっている。これもあくまで、売らんかなではなくて、人の出会いがあつたということです。そういうツールの一つであるという捉え方をすれば、パソコン通信で何をするのが重要で、「何を」という部分を農村政策のなかに持ち込まなければいけないと私は思います。

国の取り組みには、コンピュータを戦略情報システムに利用しようという面があります。私どものような草の根のネットワークは、自然発生的なところから生まれた農産物流通ですが、そうではなくて、意識的に戦略として生産と消費を直結していく、そのための手段としてデータベース、ネットワークを構築するという考え方です。

内向きには、農家を掌握するための農家向けのネットワークで、ここから情報収集をして、たまったデータベースで外向きにマーケティングをおこない、これを武器に産地間競争をやるという発想です。

結論から言いますと、農家は産地間競争をやるということ

はもうあきらめつつあります。自立経営農家は、産地間競争ではなくて、産地間競争と競争のすき間で、「おれはいくら稼ごうか」と考え始めています。どんなに有名な産地も、数年のあいだにどんどん動いてしまう。十年もてばいいほうだと思います。

農協の職員は銘柄産地にしなければいけませんから、悪い品物を売らないよう選別を強化する。そして、いいものだけに、わが地域、わが産地として東京の大田市場で名をはせる。これでは選別されてトータルで農家の所得が減るから嫌気がさす。現状としては、農協によるしめつけが産地間競争の行き着くところになってしまっています。

グリーンピア構想も、平成二年から六年まで四、五年やってきますと、政策のなかで様々な問題が見えてきました。

まず、農業関係機関の情報連携が全然ないということ。コンピュータを持つことは情報を「共有」することであるにもかかわらず、今までどおりの各役所の統治下にたてこもり、他は絶対に見ようとしなくせに、情報化、情報化と言って農家を指導しようとする。

情報化を進める役所の現場では農業情報の何たるかがわからないのに、かたや農家はインターネットで学者とEメールの交換をしている。状況はここまできていますので、だから役所だけではだめなんだという声が出始めています。

農業を支えていくための様々な情報が役所ごとにある。気象

情報、市況情報、病虫害情報、技術情報、これらはみな役所等の組織単位に情報が取られています。統計情報もわかりです。役所を縦においた情報ネットワークでは、もはや機能せず、役所間の連携をしなければいけない。

役所間では様々な問題がありますから、いきなりリストラは無理でしょうが、少なくとも、コンピュータでつないでしまうことによって、壁を取り払うことが可能であると思います。

しかし、仮に役所が連動するということの合意がとれたとしても、つなぐデータベースができていくのでしょうか。担当者の机のなかに様々な書類として情報が埋もれているのが常だと聞きます。そんな状態でデータベースがあらうはずがない。

また、農協にもデータベースがありません。全国の農協を集めると、日本の企業ではいちばんコンピュータの保有台数は多いが、農協の業務は、バッチ処理、業務完結型であって、一時的に売れたものを入れ、かかったコストを入れ、差し引きいくらかというのが見えたら、入れたデータを全部空っぽにして、また次の月の仕事をするというように、月次更新をしています。

農家と農協との取引のなかには、付帯して発生する様々なデータがあるはず。どこの誰さんが、いつ、何を、どれだけで売ったか、いつごろ持ってきたかという情報が、もし全部データベースのなかに蓄積されているとすれば、その分析をすることによって、その農家の特徴、マイナス面、努力するポイントが見えてくるかもしれないのです。売り上げの計算だけでは、

農家の起死回生のための経営努力の方向は見えませんが、このデータベースをつくっていくことが非常に大切だろうと思います。

大きな枠で言うと、国も直接にはデータベースを公開していません。たとえば気象情報は気象庁がつくっていますが、それは気象協会等にゆだねていて、そこで情報サービスしている。また、市況情報は、全国生鮮食品流通情報センターというところに、農水省の市況情報を蓄積して、情報サービスをビジネスとしています。

技術情報は試験場、普及所のなかにあるけれども、ネットワークでは公開しません。統計情報は、われわれの地域にも各々統計事務所があつて、そこで集計されたものが農水省に集まり、統計協会が情報サービスとしてビジネス展開しているという格好です。

ともかく、データ公開は早急に必要です。そのためには関係各機関がお互いに調整連携しなければなりません。

最近では少しずつ公開の方向になってきて、この七月から、NIFTYServeやPCIVANでも気象情報のサービスをおこなうようになりましたが、情報が公開されるということは非常に意味のあることだと思います。

また、情報化を進めていく上で現状はあまりにも環境が不備です。先ほどの話は突出した例で、パソコンを見たことがないなんていう農家もいるわけです。大半の農家では教育が必要で

す。個別経営農家は超零細ですから、農協がパソコンプラザのようなものをつくって共同でやるか、国が支援するかして教育することが必要である。さらにそうしたセンターでデータベースをつくる人の育成をすることも求められると思います。

■畑が見えるデータベースの構築を

では、目指すべき農業情報システムはどういうものでしょうか。

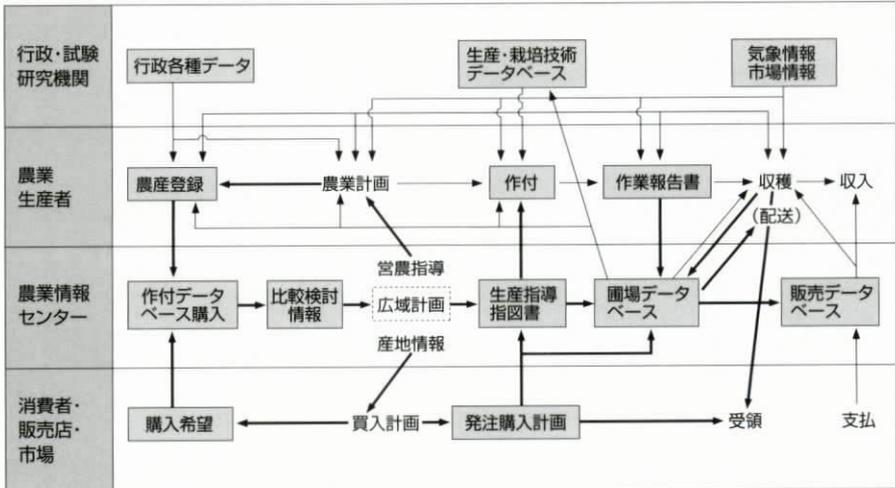
農業支援をするためには、図1のようなシステムが必要だと私は考えています。

農業情報センターにデータベースを置いて、生産者も消費者も皆で共有するというのが私の考えです。

つまり、農業情報を畑から、農家の庭先から発生するようにする。そういったデータ、情報が見えるようになれば、消費者も安心して買えるはずですし、圃場の生育ステージが見えるような状況が現実化されるとすれば、的確な営農指導が可能になるでしょう。

研究機関も試験機関も、様々な研究をおこなっていますが、残念ながらフィールドを持っていません。だから、いつも「こういう条件だったら使えます」という話でしかなく、なかなか実用段階に行かない。実用段階に行くには、機関が技術を持ち込み、農家の圃場で実証試験をしたものが商品になって出る、

図1 農業の生産流通戦略情報システムの情報フロー



「販売計画情報」は、生産と消費との間で予め伝達される(情報)によって農産物を計画(戦略)的に生産しようとするものである

「営業支援情報」は、農業者が固有の農業情報(圃場や作物に関する個別情報)を共有するとともに、関係機関の情報を有効活用するものである

というかたちでなければならない。

農家の生育ステージのデータをどんだんデータベースに入れることによって、研究者がいつも具体的なフィールドで研究がおこなえるというように、生産と研究の現場を結び付けるためには、どうしてもコンピュータが必要です。そのためのデータベースを構築して、ネットワークを整備することが必要だろうと思います。

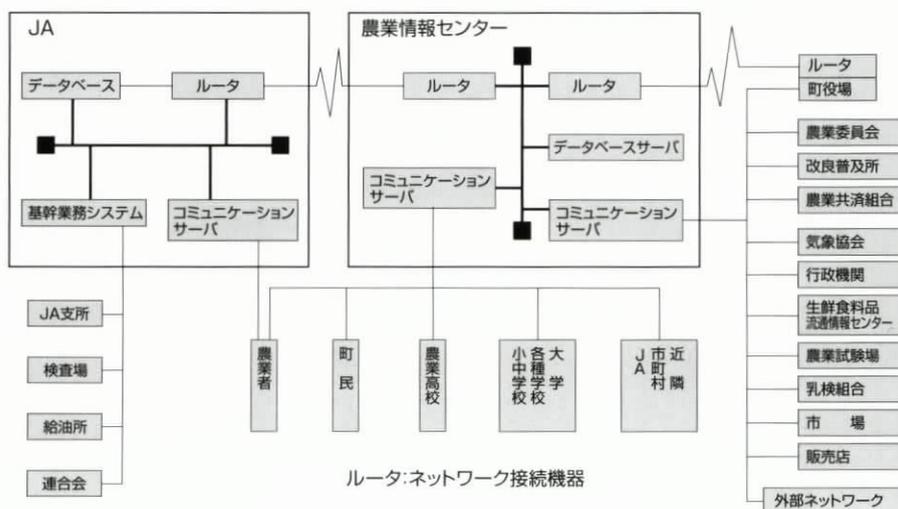
このデータベースが見えるようになると、消費者もまた安心できるのではないだろうか。つまり、市場機構をクリアできるのではないだろうか。

今の流通システムは、農家が農産物を集荷所に持ってきて初めて品物の詳細がわかって、市場にファックスを出し、市場ではそれをもとに売買しているという格好ですから、ものが出たこないと、プライスという情報が出てこない。これを先行させるためには、畑が見えるようにすることが必要です。

そのためには、ネットワークが必要ということになります。ネットワークをつくるためには、そうしたものの考え方に基づいて、地域ブランドをつくり上げていく必要がある。今までの産地という概念ではなく、地域、あるいは地域の人々をも含めたブランドで売り込むということです。

一人ひとり自立しているのに、強制的に調整、集計しようとするのが今の農協の一元集出荷で、守らなかつた場合はペナルティーということもままあるわけです。

図2 地域農業情報ネットワーク・イメージ



農協にも自己変革を図ってもらい、こうした考えを進めていくと、図2のような地域を横に結ぶネットワーク、地域戦略システム、地域情報システムみたいなものが考えられるのではないだろうかと思えます。

先ほどの塚田さんの例のように特殊なものは全国展開をやってもいいかもしれませんが、普通作物は、水の問題しかり、地域連帯がどうしても欠かせません。そこで様々な各機関、別の目的を持ったところが横につながらなければいけません。ルータといくつか書いてありますが、これは、どんなに離れていてもコンピュータを電話回線で直接つないでしまうものです。つながっていれば、利用者側からは一台のコンピュータに見えますので、関係者は、いつでもどこからでも農業に関係するデータベース全体を共有できるというシステムです。

しかも、今のコンピュータ技術は非常によくなっていますから、業界標準でこのシステムを進めます。業界標準ということは、世界標準です。そして世界標準ということは、全くそのまま世界のインターネットにつながるということなんです。こういうことは、これからの農業を考える体制として不可欠なことだろうと思っております。

このようなシステムができて、初めて農業が変わっていくのではないだろうかと思えます。ネットワークというのは何もコンピュータと電話線ということではなくて、そこで伝達される人の思い、消費者の思い、農家の考え方、そういうものが出る

いだらうと思います。究極には自分の食べ物、一人ひとりにとっての食べ物という部分について、安心してつながることのできる消費者と生産者のネットワークの実現ということではないかと思えます。

だから農業情報というのは、全国民が一緒に考え、共有しなければいけない問題になってくるのではないのでしょうか。昨年の米騒動なども、全部ベールをかぶせておいて詳細な情報を公開しなかったところに、パニックの原因があるのではないかと思っています。

データベースを検索したらみんなに情報が見えるというようになれば、何も大騒ぎすることはなくなるのではないのでしょうか。

■農業情報化は新たな百姓一揆

米山 農業の問題に限ってのお話でしたが、日本の情報システム全体がこの問題を抱えていると思えます。

たとえば、いま神戸市は文化都市、情報都市として発信しているところなのですが、ネットワークは一応建前として持っているけれど、その利用状況を見ると、「今日はこのゴルフ場が空いていますか」などという質問しか来ない。せっかくの情報ネットワークが全然役に立っていない。仏つくって魂入れずという状況です。

おっしゃるように、気象庁は気象情報というように、縦系列でそれぞれの情報を個別に握っているところが、最大のネットワークではないでしょうか。関連各機関を全部LANでつないでいくという考え方は非常に面白く、しかもいちばん大きな問題ではないかという感じがしました。

田上さんの言われている地域農業情報ネットワーク・イメージ、これにはびつくり仰天しました。最先端をどんどん動いているというわけですね。

田上 今度、十和田地域の十四農協が広域で戦略情報システムを十二億円の予算でつくるお手伝いをします。ここでは様々な組織のネットワークを連結して、全体として大きなデータベース・サービスができるインターネットを目指したいと思っています。

加藤 私の率直な感想を言いますと、非常に穏やかなやり方ですが、これは一種の百姓一揆といえるのではないのでしょうか。農水省も、農協もあてにならない、ではおれたちでやろうじやないかと自分で販路を開拓していくというのは、やはり一揆ですね。

田上 コンピュータ・ネットワークを経験した農業者は、これまでの枠組みから解放されて、完全に目覚めてしまうんですね。そして、想像がつかないほど行動的になっていくのです。

宮田 百姓一揆が成功するには、エリアが適正規模である必要があります。江戸時代でも、一つの場所だけではだめで、い

くつかつながってはじめて大掛かりな一揆になって成功する。その点で、この情報による一揆は最初からネットワークが前提になっていきますからね。

先ほど人間の信頼関係が基礎になるといわれましたが、適正規模はどのぐらいのところにあるのでしょうか。

田上 年一回、地方都市で開かれる、「農業情報ネットワーク全国大会」が一つの目安になるでしょう。開催地域で一年ぐらいい前から手弁当で準備する、全くの素人の手づくりなのですが、最近はその関係者もこぞって参加するようになってい

米山 それは非常に面白いですね。

田上 各大会の名誉会長は知事で、農家の人たちは県庁に直談判しに行くといったプロセスを全部やるんです。今まで農家の人たちがやったこともないようなことです。

米山 これまでの開催地を教えてください。

田上 最初土浦で二回、三回目が熊本県の八代、第四回大会が北海道の北見です。この場合、道東地域の農家はほとんど来ていました。たとえば、準備のための実行委員会は今月は女満別、来月は網走というように、転々とオルグをしていき、最後に北見に結集となりました。

そして、第五回が愛媛の内子、第六回が宮城県（わたり）の巨理（わたり）です。今年、第七回が宮崎の都城です。いま第八回をどこでやろうかと思っ

宮田 開催地の選定は何か勘が働くのですか。それともデータベースの蓄積によるのですか。

田上 人との出会いですね。

宮田 やはり人間関係ですか。

田上 話をしているうちに、その人間が「どうしてもおれがやりたい」と言い出すのです。今まで、いつもそうでした。

舩田 パソコンネットはすごいと思いますが、関城町自身が人口一万七千人ぐらいで、専業農家は非常に少なくなってきたということですね。町のどのぐらいの農家がネットワークのなかに入ってくるのか。たとえば、二種兼業みたいな農家も参入しているのでしょうか。

田上 関城町に限って言えば、ネットワークに入っているのは、全部専業農家で、二十代から四十五歳ぐらいまでの人たちです。

神崎 田上さんは、基本的に専業農家の確保が必要だとお考えですか。

田上 私はそんなふうに考えていません。専業農家の人のほうが切実感がありますから一生懸命になっていますが、各地のネットワークでリーダー的存在になっているのは、専業農家でない人もかなり多いです。違う角度、視点から様々なことを見る目が持てるということですね。

神崎 兼業農家を含めてのネットワークの広がりますね。

田上 面白い現象だと思うのは、一揆といっても、行政と相

対するかたちではないということです。全く違う発想で情報をとらえて、行政や農協に対して、「違うやり方をするよ」と言い出している自立経営農家を見て、行政もそれに乗っかっているということですね。今度の新政策のなかでは自立経営農家を育てると言っていますね。

つまり、自立というのは、自立できない農家の集まりである農協からの自立であって、政策もそうしたものを打ち出さざるを得ない。その時のツールとしてコンピュータは欠かせないということも政策で言っています。その場合、農協の存在も変わらざるを得なくなりません。

加藤 無知で弱気なお代官さまがたくさんいるということですね。「百姓どもがこう言っている」「なるほど、もつともじゃ」と……。

田上 コンピュータ・ネットワークを本気で大々的にやったら農協はどうなるのかね、と言っています。

宮田 民俗学の宮本常一さんが、かつて、日本の農村内部から「世間師」が出てきて、それが各地をつなげていくと言いました。日本には「社会」という言葉はないが、「世間」という言葉があつて、「世間」をつなぐと何か新しいものが起こってくるという伝統があるということです。お話をうかがっていて、世間師が押さえていくネットワーク社会という思いがしました。

江戸時代の関城町の指導的な名主の記録は、歴史学のほうでほしいへん注目されています。その名主の日記を見ると、積極

的に村から出かけていって、いろいろ資料を収集しているので。伊勢参宮などの旅の日記も、普通の旅日記と違って、細かに実情を観察して、村に戻ってくる。それを思うと、昔から革新的な農民の伝統があつて、田上さんのような人が出てきているんだらうと思います。「世間師」の伝統がある。

田上 関城町では百年以上前も、革新的なグループがナシ会社をつくって、馬で境まで持って行き、境から江戸川を使い、船便で東京に売っていたりした。紀国屋文左衛門ほどではないですが、だいぶ金儲けをしたようですよ。

■世代間・地域間ギャップへの危惧

須藤 千葉県の館山の近くに三芳村みよしという村があつて、私は今そこに調査に通っているのですが、農業や化学肥料を使わずに農業をしているグループがあつて、生産者は三十名、関東エリアで千二百名の消費者がいて、野菜と米と果物の産直をやっています。

これが二十年続いてきて、今いろいろな問題が起こっていて、そのなかでも世代間のギャップが大きな問題として出ています。上は七十代前半で、若い人は二十代、そうすると、コンピュータに対する考え方はもとより、土をつくることに対する考え方ですらギャップが出てきています。

ただ農業や化学肥料を使わなければならないという考えの人と、

農業を使わないための緻密な工夫を重ねる人とは、生産物の質に大きな差が出てきてしまっている。消費者に与える影響は甚大です。

このような地域にコンピュータが入って、ネットワークを使っていく場合、若い人たちはかなり興味を持って、追いかけていくでしょうが、五十代を過ぎますと、難しいし、めんどろくさいし、なかなかできない。そうなった時に、三十名の生産者グループが分解してしまうのではないだろうか。疎外される人が出てくるのではと危惧されます。

田上 分かれてしまっているというのが実態のようです。一軒の家でも、若い人たちのグループはコンピュータを導入し一生懸命農業をやるが、その父親の世代は従来の農業日誌をつけたりする研究グループというように、全然交流がなくなっている。

たとえば父親は昔からナシをつくっているが、息子はトマトとキュウリというように違うものをつくっています。そうした人と若い人は自立できない。

須藤 全く新たなシステム共同体が形成されていく可能性が非常に強いわけですね。

神崎 それは仕方がないし、私は、多分十年、二十年あとには、ユーザーインターフェイスが改良されて、かなり普遍化されたシステムなり機械で、年寄りまでも使えるものが出ると思います。たとえば、いま電話は年寄りも使えますが、無線機だ

つたら無理なのと同じことですね。

田上 二十歳以下の人は、学校でのコンピュータ教育を受けているので大丈夫です。

農業情報の教育が必要なのは、学校教育では受けられなかった人たちで、生涯教育のかたちで取り組んでいかなければいけないだろうと私は思います。

神崎 私は、世代間ギャップよりも地域間ギャップのほうが少し心配です。ある村では実質專業農家がゼロの状態になっているわけです。お話のネットワークシステムが完全とは言いませんが、システムがこうした村をどれだけ拾っていきけるか。地域間ギャップが生じて、見捨てられてしまう村が必ず出てくると思います。それは過渡期でしょうが、そこをどう考えるかが問題です。

(第三十回 一九九四年七月二十日)

水清き杉のふもとに山形県金山町の町づくり

●講師 岸 宏一・山形県金山町町長／現参議院議員

〔出席者〕加藤秀俊／放送教育開発センター所長 川喜田二郎／東京工業大学名誉教授 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 須藤 護／放送教育開発センター助教 舛田忠雄／山形大学教授 宮田 登／神奈川大学教授 米山俊直／放送大学教授

■「独立国」としての町づくり

加藤 今回は杉でたいへん有名な山形県金山町町長の岸さんにお話をおうかがいしたいと思います。

岸 今日、京都大学に関係しておられた先生方がお見えです。京都と私の町の因縁話も少しからめて口火を切りたいと思います。

実は、私の町には、全国的に有名な条例が三つあります。一つは、日本で初めてつくった「公文書公開条例」、もう一つが「街並み景観条例」、それからもう一つ非常に面白い条例があります。それは、明治二十四年の有名な大津事件の当時――

まだ金山村でしたが――その時の村議会の決議です。

大津事件は、明治二十四年五月、天皇が招請したロシアのニコライ皇太子（後のニコライ二世）が大津遊覧中、警護に当たっていた巡査の津田三蔵に斬りつけられたという事件で、たいへんな国際問題になるのではないかと、政府、皇室はじめ国を挙げての心配事となりました。

その当時としてはすごいことをやったものだと思うのですが、事件があった翌日、わが村は臨時議会を招集し、一つの議決をしました。ロシアの皇太子を傷つけた津田三蔵は非常に悪いやつだ、天皇陛下のお客として来た方を傷つけたとはとんでもない。よって、わが村では今後一切「三蔵」という名前は付けない。また、現在「三蔵」という名前の者は、全部改名するという内容です。

これは、かつて京都大学の田岡良一教授が書いた国際法の教科書に、山形県金山村の議決した資料として載っているのだからです。

当時ロシアは何といっても強力で恐れられた国だったわけでしょうから、小さな試みながらもロシアの耳に入れば外交的なフォロワーになるかと思つたのでしよう。わが村の祖先たちにはな

かなか外交的なセンスがあったのではないのでしょうか。

公文書公開条例は昭和五十七年四月に施行いたしました。当時、私の大学の同級生の田岡俊治君が朝日新聞において、スウェーデンやアメリカの事例を挙げて情報公開のキャンペーンをやっていたのですが、実際にどこかの町でモデル的にやらせてみたいと考え私のところに話を持ってきたのです。

私の町は、明治以来、町村合併を一度もしたことがなく、また、鉄道が通っていない町だったものですから、人間関係が非常に濃密でした。ですから、すべての情報は公開されていると言って等しいわけです。その意味では、情報を公開するのは簡単なのです。

あまつさえ、田岡君から、「もし日本でいちばん早くこの条例をつくったら、日本の行政史か政治史におまえの名前は残るぞ」などとおだて上げられて、私もすっかりその気になりました。公文書公開条例を日本でいちばん早くつくってしまったわけです。

そして考えてみますと、田岡君は先ほど挙げた国際法の田岡教授の息子なので、わが町はよくよく京都と縁があることになりました。

また、わが町では大堰という石張りの美しい水路をつくったのですが、それは琵琶湖疎水をお手本にしたものです。農水省からは、「石張りではなく、経済的で効率的であるからコンクリートの三面張りにせよ」と言われずいぶんやり合いましたが、

結果的には、石張りをつくったことが有名になって、この水路は農水省の水辺環境事業の優良事例のパンフレットに載っています。これもまた、琵琶湖ということで京都とはたいへん縁が深いということになります。

前置きはこのぐらいいにして、私の町は人口八千人です。今は過疎地には指定されておりませんが、いちばん多い時は一万二千人を数えておりましたから、約二〇%の減になります。

ここから、私の考えてきた町づくりについて少しお話ししたいと思います。

私はもう二十五年町長をやっておりますから、ずいぶん長いわけです。ついこのあいだ選挙が終わったところですが、初めて町長になった時のスローガンを久しぶりに見てみたところ、「真の地方自治の確立」と載せている。若いのにけっこう生意気なことを言ったものだと思います。ですが、いまだに町村合併にはいろいろ問題があるという信念は持っています。

私は一つの国と考えると町づくりをやっています。どこの市町村でもマークはありますが、金山ではこれを町旗にして、各家庭に国旗と一緒に配りまして、わが町は独立国なんだから、祭日には両方出してくださいと呼びかけています。

また、わが町には三十一の町内会がありますが、田舎社会においては、町内会の自治はいわば民主主義の学校ではないかという考え方から、一戸平均にするとだいたい年間一万二、三千円ぐらいのミニ交付税を町内会に配っています。

なかにはわずか十三戸の町内会もありますが、そういうところでも、何に使ってもいいから皆さんの意見を出し合って運用してくださいと言っています。ただし、皆で分けてはいけなと言っています。そして、この単位を「区」と呼んでいる。

区長の方々は、一般の自治体では役所の連絡員のような位置づけですが、私の町では、「あなた方は村長さんです。で、あなた方が村長だとすれば、私は知事だ」(笑)、そういう関係だと思っけ付き合っけくれということで、集落自治を進めています。

集落地区の一つの大字が地域になります。おかげさまで全部の地域が自主的な振興計画をつくるに至りました。私は長いあいだ町長をやっているものだから、ワンマン、独裁にならないために、特に警戒して、このような私たちの町づくりをおこなってきたと言えるかもしれません。

■街並みにこだわり続けて

町づくりのもう一つの考え方は、今では当たり前のことになっていますが、町が持っている特色にこだわる町づくりということ。私はこの考え方で、若さに任せてやってきたみたいなところがあります。

環境の面から言いますと、わが町は非常に美しい盆地の町です。イザベラ・バードというイギリスの女性旅行家——おそら

く初めて日本の国内旅行をした外国人の女性になるのでしょうか——が明治十一年に金山町を訪れて、非常にロマンチックなところだと書いています。これが決してお世辞ではない証拠に、近隣の市や町のいくつかについては、「非常にみすばらしい町だ」とか、「特にいやな町だ」と園に衣着せぬ書き方をしていることからいっても、いかに金山町が美しいかがおわかりいただけるかと思えます(笑)。

その美しい町をつくることかなりの精力を傾けており、冒頭でお話しした街並み景観条例もそのためにつくったわけですから、以下、環境と産業の両面から、お話し申し上げます。

さて、東北地方では、秋田杉と金山杉は双壁であろうと思います。秋田杉は本来は天然ものを指したのですが、今は、天然ものは五万立方ぐらいしかないと言われており、秋田杉と言われているものは主に人工の秋田杉で、秋田県で生まれたというだけの話です。金山杉については、山形県内の五十年生以上の全人工林の確か二割ぐらいをわが町で占めています、かなり古い木が多い。ですから、金山は、山形県内では山林王国と言われているようです。

ただ、この森林は、どちらかと言うと大規模山林所有者の寡占状況にあるので、一般の林業地域とか林業地帯とはやや趣を異にしています。しかし、戦後は、いつとはなしに町民の皆さんの誇りとするものになってきています。

杉の木が多いことと関係があるのでしょうか、わが町は大江

さんが非常に多いのです。いちばん多い時では二百人ぐらい、町民八千人のうちの二百人ですから、かなり多い部類に入っているのではないかと思うのですが、その大工さんたちが、出稼ぎなども含めて、貴重な“外貨”を獲得してくれるわけです。そこで、金山杉を宣伝し、かつ大工に勉強させようということで、昭和五十三年から住宅建築コンクールをやっています。

そもそも、私が町長になってからは、公共建築は県内の設計者にはほとんど頼まないで、東京芸術大出身者に決めていたのです。芸術大学ですからセンスがいいのではないかということ、美しいものをと依頼していたわけです。

建築コンクールは、そうした芸大の卒業生や教授の方々からアドバイスもあつて、始めたものです。せっかかない杉があり、いい景観があつても、大工の腕やセンスが悪いばかりに、美しい山村の風景を台無しにしているのではないか、大工さんに勉強させようという試みです。

大工さんには、当方で十万円ぐらいの賞金を、工具のかたちなどで渡しました。大工さんたちが最初に審査をして、そのあと住民の皆さんと専門家が審査するというシステムです。厳しい基準でやるうということ、いまだに最優秀賞は出ていませんが、このようにして大工が勉強すると同時に、行政側でも景観、美観に関心を持ち出したわけです。

そうして、街並み景観づくり百年運動を始めました。その結果が、街並みの形成基準です。

切妻の屋根で、耐雪性のある白壁の在来工法を使うということ、金山の住宅の基準にしたらいという話でだんだん盛り上がっていった、街並み景観条例ができ上がりました。今、町が定めた設計基準によって家をつくった場合は、三十万円の補助金を差し上げています。

ただし、この基準は外観にだけ適用されていればよく、中身はどうつくってもかまわないのです。しかし、三十万もらうより、女性週刊誌に出てくるような西洋風な真つ白な家がいいとか、町長が嫌いだから絶対に言うことを聞きたくないという人もやはりいるわけでして、年に二、三十戸建てられるなか、一割はどうしても言うことを聞いてくれない。民主主義とはそういうものなんでしょうね。

こうした町づくりを心がけてきたおかげで、テレビや新聞などでも紹介されるようになり、東京の経済同友会の第一回の優秀賞をはじめ、第一回の「活力ある美しいむらづくりコンクール」で最優秀賞である農林大臣賞というように、次々に賞をもらうようになりました。

■木材関連産業が次々に育つて

それと相前後して、今となつては少々名前が古いのですが、「グリーン・コンピナート構想」というものをつくりました。町の持つている特徴にこだわれば、緑や自然景観、森林材を生

かした町づくりをしなければいけないというのが動機です。

当初は、丸太を製材して、せいぜい板と柱をつくるぐらいでした。

ご承知かもしれませんが、北国の木は、京都の北山のような三十年や五十年ものでは、とても製材として使えないわけです。ですから、「割り角」と言つて、太く育てて四つに割つて柱をつくつたり、板をつくる。こういうものを使い、大工の技術を伸ばして結びつけ、東京にどんどん大工を進出させることを試み、次第に「外貨」を獲得してくる仕事が増えるようになりました。

今では、金山の森林組合で棟上げをするまでを引き受け、あとは東京の工務店にお任せするというシステムができ上がり、金山杉と大工技術をドッキングさせて売る仕事が、森林組合だけでも年間二十棟ぐらいいあって、断るのがたいへんだというほどになっています。

実は、グリーン・コンピュータ構想に非常にこだわっていたがゆえの、失敗談もありました。

忘れもしませんが、東京の大日産業という会社が、今で言えば、「環境にやさしい」木材関連会社をつくるということ、派手に取り上げられたことがあります。その社長ということで、慶應ボーイで、日本で初めてワラント債を発行した、才人の若者で、私はすっかり意気投合してしまったわけです。彼の考え方が、非常に立派だったんです。

いい山をつくるには、間伐と言つて、間引きをしなければいけない。その間伐材を使つて、LVL（ラミネートッド・ペニヤ・ランバー）という一種のベニヤをつくるというところに目をつけた。木をくるくる回して、薄くリンゴの皮をむくように剥いで張り合わせる。その過程で、曲がつたり、ねじれたり、寸法が変わりがちなのですが、それをうまくやつてのけるLVLを日本で初めて開発したわけです。ちなみに、この機械を開発したのも、京都大学の先生でした。

その会社は、岐阜県、北海道をはじめとして、全国に展開することになったのですが、私はすっかり意気投合してしまつたので、わが町が四割、そちらは六割出して、一億ぐらいの資本金で第三セクターの会社をつくらうということになった。町役場で二千万、私以下、親戚や議員たちから二千万集めたんです。

ところが、試験操業をしている時に、この才人社長が株か何かに引つ掛かつて、倒産してしまつた。いろいろな住宅メーカーに身売りすべく売り歩いたのですが、なかなか思うようにいかない。たまたまその工場長をやっている立派な人がいて、彼に助けられて、ようやくこの会社を身売りすることができたわけです。

しかし、日本で一つしかない国産材針葉樹のLVLですから、きつといつか役に立つと思つてはいました。今でも保証弁償を個人でやっていますが、これがこのごろたいへん売れるように

なりました。

曲がらないし、寸法が変わらないし、よじれたりしませんから、家具の芯材などに使えるわけです。しかも間伐材ですから、コストは安い。曲がった木をくるくる剥いでいけばいいわけです。

特に今は、人間が亡くなった時に入る棺の芯材に使っています。これは景気に全く左右されません。というわけで、非常にいいところに気がついて、今では売り上げが四億円ほどになりました。もちろん、壁材や天井材などにも使えます。その分野では日本で唯一の会社ができたわけです。

ところが、その会社が一つあっただけで、波及効果というか、在来金の山の製材工場が非常に刺激を受けたみたいなのです。従来は先ほど「割り角」といった、柱と板材だけに限定されていたものが、今では、腐らない、燃えにくい、アリの食われない、よじれないといった様々な特長を注入する技術を、各社が開発し始めました。彼らは「ハイテク木材」と言っておりまして、その呼び名はともかく、木材業が様々なかたちに変わりつつあるということです。

面白い例としては、木レンガを一生懸命になってつくっている男がいます。歩道にレンガみたいなものが敷き詰められています、あれを木で代行するわけです。腐らなくて、よじれないという加工をするわけですが、「自然にやさしい」コンセプトが今の時代に非常に合っている。

この金山産の木レンガが、四国の四万十川沿いに採用されていますし、日光街道の埼玉県への延長沿いにも使われています。木レンガ生産では、山形県随一となりました。

また、従来の板では外壁にできなかったのが、先ほどのハイテク木材——腐らない、燃えにくい、よじれない——ということになると、外壁にも木材の加工したものが使用可能になる。金山の木材関連産業が、われわれのこだわりで、一つひとつ新しい姿に変わりつつあることを考えると、「こだわり」も町づくりにはいいものだとつくづく思います。

さらに欲を言えば、手づくりの木工家具や木地師など、「木」に関した様々な分野にわたる人たちに、金山に住んでもらえたらいいなと考えています。さらに、近いうちに、森林に関する、あるいは住宅に関する博物館のようなものをつくって、「山形県に行ったら金山町のこれを見ずしては」と言わしめるぐらいにもっていきたいと考えています。

■「金山ホスピタリティ」

加藤 どうもありがとうございます。話題がたくさん出そうなお話ですね。

米山 イザベラ・バードさんがほめているというのはすごいですね。これはやはり記念すべき点ですね。

加藤 彼女が歩いていたら、新潟からあとは悪路続きだった

たのに、どこだったかで、ここはユートピアだと言っていますね。

岸 あれも山形県で、新潟から下りてきたところの、川西町か飯豊町のあたりです。でも、私のところをいちばんほめているんですよ（笑）。

「旅行の全行程で、村長が挨拶に来たのは金山村だけだ。それから、物見高い群衆が集まらないのも金山だけだった」と書いています。今というホスピタリティのセンスが非常にあったのではないかと思うのです（笑）。

加藤 この研究会のなかでは、神崎さん、須藤さんのおふたりが、福島県南会津郡田島町にある木地師の道具博物館に関係しておられるんです。

須藤 田島町の博物館は、いわゆる山村の生産用具ということで、文化庁の指定を受けたものを展示保管しています。稲作、畑作、山仕事、機織りとか、山村で生活を立てていくために使ってきた道具を集めて、二千点ほどが国の有形民俗資料の指定を受けました。

まっすぐ伸びたよい木、それも八十年とか百年たった木を切つて、おわんをつくる職人さん——木地師さんと木地屋さんと通常言っておりますが——その人たちが使った道具類と製品、半製品の木工品が目玉になっています。

そのほかには、お盆や丸膳、とつくりの袴、茶托など、つまりろくろを使った丸もの、くりものもあります。なおかつ、町

で仕事をしている木地屋さんと、山を移動しながらつくつきた木地屋さんとの比較をしながら展示しています。

岸 技術はまだ残っているんですか。

須藤 山のほうはもう全くありません。いま残っているのは町のほうだけで、電動ろくろを使ったものです。会津若松の漆器の木地をつくっている職人さんがおられるので、現代物はそういうものを中心に集めています。

岸 では、ぜひ先生、金山に一度来てみて、お知恵を貸してください。

金山は、寺社有林を除くと、関東以北では、二百年以上の人工林がおそらくいちばん残っているところなんです。まだ十ヘクタールぐらいあるのですが、その枝を使って漆製品を細々とつくっているのが現状です。産業というところまではとてもいわず、趣味の域を出ていません。

今お話したように、ようやくくだわりの町づくりというか、インフラはできましたが、「手の技術」を持った「人」がいなのがネックです。今のところ、建具屋さんぐらいなんです。

須藤 お話からすると、金山の杉は建材として使われているようですが、建材の前の段階で、桶や樽の材料となっていたというのではないのですか。秋田杉の場合、建材よりもむしろ、桶、樽材としての利用が高かったと聞いています。

岸 確かに以前は、酒屋や醤油屋で使っていましたね。私の家も実は酒屋をしていたのですが、桶、樽は今全くつくつて

いません。

金山の場合は、資産をつくるということで杉を植えたのがそもそも始まりのようです。ですから、いちばん大きい山持ちは、二千ヘクタール以上持っているわけです。

米山 町にいらっしやるんですか。

岸 ええ、住んでいます。宮城県とか、新潟県まで山を持っている者が二人います。ですから、林業といっても、農家林家ではあるが、親持ちの木材を皆が活用するかたちです。

神崎 たとえば、今われわれが金山を訪ねた場合、金山杉がもつともよく見えるポイント、遊歩道のような場所はありますか。

岸 二百年以上の山については、見晴らしポイントがあります。車もそこまで入れません。

神崎 それは観光客への公開というかたちですか。

岸 そうです。しかし、観光客というより、研究、研修で来る場合が多いですね。

加藤 とりたてて観光客誘致はなさっていないわけですね。

岸 していません。しかし、今、毎年役場職員と町の若者六、七人を、ドイツの農村に勉強にやっています。それは、将来的に、美しい村をつくって、観光を目指すことを見越しているプランです。

加藤 ドイツとの直接交流ということになると、姉妹町の関係になっているんですか。

岸 まだ、それはやっていません。私は姉妹町にはちょっと疑問があるんです。よその事例を見ると、あまりにカネがかり過ぎるし、役職が上の人ばかりがおこなっている。あとは子どもが申しわけ程度という場合が多い。

加藤 姉妹町といってもいろいろで、岩手県の大迫町の村田さんがオーストリアとのワインの職人協定をされたような例もありますね。

■「家筋」考

加藤 先ほどの「町は国である」というポリシーはすごい発想ですね。国旗と同時に町旗を出すのは、えらいことです。

岸 区長、町内会長になると、バッジをつけたいと言うわけです。同じでは役場職員と間違えられるから、色を変えました。年に何回か区長会議を開くのですが、全員がバッジをつけてきます。非常に誇りを持ってやっているということでしょう。

町づくりではそういった「誇り」を持つということが大事です。昔は、東北の農山村は、ズーズー弁ではかにされるのではないかというような意識がどこかにあって、自信がなかった。東京に同化したいと、いつも東京を向いていたものです。それがだんだんなくなりました。

加藤 いいことですね。

岸 今では田舎といっても、テレビで東京と同じものを同時

に見られるから、だいぶ昔と違ってきました。集落排水ということで、下水道もどんどん普及してきていますし。

宮田 歴代町長を見ると、「岸」姓が多いですが、町長さんの家は岸一家の総本家といった位置づけですか。

岸 違います。そういう意味では、私はランクがかなり下のほうです（笑）。本家はいちばん大きい山を持っています。

米山 その一族郎党が同族というわけですね。

加藤 拝見すると、昭和十八年から町政施行後ずっと町長は岸一家ですね。

宮田 町長の家筋というわけですね。

岸 家筋というか、結局、私の頃は、大学を出て田舎に帰る者はいなかったわけです。大学を出たら、食っていきける者しか田舎に帰れなかったし、当時田舎で、大学を出て勤めるところといえば、県庁や銀行ぐらいいしかなかったわけです。しかし今は、町役場はほとんど学卒です。

岸姓が続くもので、私が町長になった時は必ず全国版に出たものです。

本家はそんなに近い親戚ではないのですが、今でも親戚つきあいをしていて、選挙に立つ時は、必ず「ご本家さん」に行ってお参りをします。そういうパターンは今もあります。

加藤 やはり宮田先生、「家筋」なんですよ。

宮田 確かに、町長になるべく選ばれた家筋なのかもしれませぬ。

金山の地名を見ると、たとえば「七日町」とか、「十日町」といった市を中心とした名前がありますね。また、「谷口銀山」という鉱山、「田屋」といういわゆる水田地帯の田作りの小屋、焼畑と関係する「焼山」といった地名がある。さらに、伊勢信仰に由来すると思われる古い地名も点在しています。こうしたいろいろな要素が並存していて、複合的な町に発展したわけでしょう。

おそらく、「市」が中心であるから、絶えず人の流れが激しくあって、たとえば大工さんなども情報伝播者になるのでしょうか。そういったものを一括して統合できるのは、やはり聖なる家筋です。町長になるべくしてなったということでしょう（笑）。

岸 いや、とんでもありません。

加藤 地図を拝見していると、まさしく米山さんが言われる「小盆地文化」の典型のような場所ですね。いま宮田先生が、七日市、十日市などの地名を挙げられましたが、そのあいだの市日はどこに立っていたんでしょうかね。新庄ですか、それとも真室川ですか。

宮田 「だらだら市」という、日をどんどん変えていくものだったのではないのでしょうか。

ちょっと話が変わりますが、惜しむらくは、神社やお寺があまり見あたらないことです。何かあったのですか。愛宕山、薬師山、不動山という名前は残っているのに……。

岸 そこには全部神社があります。神室山も、昔の修験の山

だったんです。しかし、今は宗教的にはあまり熱心ではありませぬ。

宮田 そのようですね。お祭りは番衆がありますね。

岸 「稲沢番衆」は神室山の山伏が神様を祀った時に舞ったもので、六百年の伝統があると伝えられています。戦前までは、三地区でさかんにおこなわれていましたが、今は稲沢地区だけになりました。しかし、最近では若者がたくさん参加し、秋田県矢島町の「坂之下番衆」と交流もしています。

それと、いちばん古い修験者の通った道である安沢に、「安沢歌舞伎」というのが残っていて、四十七士の墓と呼ばれるものもあるんです。真偽のほどはともいいますが、(笑)。

宮田 あとからつくったわけでしょうね。

岸 そうらしいんです。

宮田 町には、何かそういう知恵者がぞろぞろといるみたいですね。なぜかと考えるに、金山という名が示すように、おそらく「山師」の系譜があるのでしょう。

■「都市」に負けない魅力を

永野 いただいたパンフレットに、「全町公園化構想」という項がありますね。誰もが住みたくなるような公園のような町づくりを二〇〇〇年を目指してやっておられる。

皆さん、まねしてくださいということで、モデルとしてやっ

ておられるだけなのか、それとも、住める能力を持っていて、来たい方はどうぞ来てくださいということのどちらなのでしょう。

岸 「交流」は次の時代の一つのキーワードだと言われていますから、私たちは美しい、特色ある町をつくり、そこへ住みたいという人が増えることを望んでいます。

ちなみに、金山の場合は、人口は二千人減っていますが、世帯数は増えている。人口減は単に子どもを生まなくなったからだけなんです。

ただ、都会の若い人たちが、美しいからということでも来て、仕事があれば住めないわけです。

ですからわれわれとしては、広城市町村圏というかたちで、新庄市を中心にして働く場所を確保すべく、地域振興公団の工業団地をつくっていきまして、いい会社としては航空電子の子会社があります。

航空電子に約三百人の男子職員がいますが、そのうちの三割はわが町からの勤め人である。新庄に勤めて金山に住むというパターンが定着しつつあるわけです。

私のところは「独立国」ですから、住んでよかったところをつくりたいと思っています。

たとえば、町に育英会をつくって、大学へ入る子どもには全員月額四万円ずつ貸与しようということをしている。今年は何と二十五人も申し込みがあったのですが、短大も含めて、

全部に貸すことにしました。四年間でですから数千万円かかってしまうわけですが、金山に住んだら、子どもの大学の費用がだいぶ助かったといったシステムをつくることも大事だと思っています。

それと、ここは雪国ですから、冬の雪対策がしっかりしていないといけない。冬になると毎朝雪を寄せなければいけないが、寄せる場所をどう確保するか。

また、人口密度がここより高い新庄市でも、雪かきができないから、年寄りが「息子がいるあたたかい東京に行くわ」と言っ、て、中心部のかなり教育レベルの高いクラスがいなくなりつつある。ですから、雪対策のシステムは重要です。

つまり、都市の持っている機能については弱いけれども、そのほかの「生活する機能」については負けないぞというものをつくっていかねばいけないと思っています。

■「土離れ」回復のために

永野 これだけの構想をつくられるには、外部のプランナーを入れておられるのですか。

岸 政策顧問というかたちで、山形県出身の伊藤善市さんをはじめ数人の方に、お知恵をいただいていますけれども、主たる部分は町でやっています。

また、大きな影響を与えているのは先ほども触れましたが、

東京芸術大学の建築学の先生集団です。私の従兄弟で林寛治というのがいるんですが、これが芸大出身の建築家で、その縁です。

わが町の中学校を設計したのも、芸大の教授なのですが、二十億円かけました。町の予算が四十億ですからその半分という、とんでもなく立派な学校です。

要するに、何でもいちばんいいものをつくろうという主義なんです。

加藤 町が主体というのはすごいですね。よそからプランナーを頼むと、逆に自治の主体性を問われることになる。

岸 ただ、外からいろいろな刺激を与えていただくことは重要です。田舎に住んでいると、どうもスケールがちんまりしてしまう恐れがある。

このあいだ、予算編成会議で、教育委員会で、超一流の人たちを招いて子どもたちと触れ合わせるための予算を付けなさいと言ったら、百万円しかつけない(笑)。超一流を呼ぶのに百万円と呼べるかと文句を言ったんですが。

舛田 新庄も含めて、最上地区は政策顧問を置いているところが比較的多いですね。

岸 私のところを見習ったようですよ。

舛田 金山町がいちばん早いのですか。

岸 県下でいちばん早いですね。

舛田 それ以外に、オフロードのバイク大会をやっています

ね。全国からライダーが集って、神室スキー場にテントを張ったりして、山のなかをダーツと走り回っている。ああいう発想はどこから出たわけですか。

岸 あれは川崎君という森林組合長が一人で考えたので、行政の発案ではありません。けっこう有名になっています。

川喜田 ここまで聞いていて、町長さんのお話は大局的に見て正しいと思います。

このあいだも行ってきたのですが、岩手県のいちばん南のほうに藤沢町という町があります。岡本太郎さんがえらく入れ込んである町です。そのように、今までどちらかと言うと過疎地のように思われていたところへ、東京その他の文化人たちが接近しつつある。それはごく自然な流れだと思っております。

日本の過疎地は、もちろん過疎だから「食べていく」ことを皆必死で考えているでしょうが、食べていきたいなら、外の世界に対して何らかのセールスポイントがなければなりません。それならば、国民全体がいま何を欲しているかということを考えてほうが手っ取り早いのではないかと。

たぶん今の日本列島でいちばん問題なのは、国民、特に若い層が「土離れ」をしていることだろうと思います。全員百姓をやれということまでいかななくてもいいですが、精神的に土離れしているのをなんとか食い止めなければならぬと、皆思っている。そうすると、立地条件はむしろ過疎地のほうがいいのではないかと。そういう傾向がいろいろなかたちで最近日本にな

かに現れてきている気がします。

岸 「土離れ」も確かにありますが、「せせらぎ離れ」、「水離れ」もたいへんなものです。これは建設行政が悪かったと思うのですが、どんな山奥の田舎の川も、全部コンクリートで護岸をしてしまつて川辺に下りられなくしてしまつた。

このあいだ、建設省に呼ばれて、何かしゃべってくれと言われたので、川の再生事業を提案しました。ドイツなどでは、川の堤防はつくることはつくるが、その上に草を生やして見えなようにする。そういうことをもう一回やり直す必要があるのではないかと言つてきました。

従来 of 行政の思考方法は全部経済型志向で、効率一番、経済性一番、安全性一番。自然や環境をないがしろにしてきたわけです。

会計監査院も少し考えを改めないといけない。最小の経費で最大の効果を上げる行政は結構だが、「最大の効果」の中身がこれからは問われるのではないのでしょうか。

わが町の場合は特に、町を流れている川はすべて源がわが町にある。したがって、水はきれいです。それをもっともつと大切にしていきたいと思つています。

■外国人花嫁と「家のサイフ」の問題

神崎 町政要覧に韓国の花嫁が紹介されていますね。いま日

本の村では大半、嫁不足が問題になっています。そこへ何らかの手を打たないと活性化は難しいということも事実です。

韓国の花嫁さんがずいぶん定着なさっているようですが、政策的にある程度努力されたのですか、それとも、自然発生的に増えたのでしょうか。

岸 「小さな政府」ということが私の頭のなかにはいつもあります。基本的には、政府が嫁の世話までするものではないという姿勢でずっときています。

しかし、嫁に来たら町民ですから、日本語教室を開いたり、ついこのあいだは、ダークダックスのディナーショーがあったので、三万円もするチケットですが、夫婦単位で全員招待しました。そういうふうには配慮はそれなりにしていますが、行政的には、それ以上のことはしません。特別扱いにすることはかえって問題がありますし、押しつけがましくならないように気をつけています。

神崎 いま、何人ぐらいおられますか。

岸 韓国、中国出身で四十人ぐらいではないでしょうか。けっこう多いのです。ところが、やはり韓国は韓国、中国は中国というふうに分かれてグループ化してしまう。そうすると、だんなのほうも分かれるんです(笑)。

このあいだ、自然祭という冬のお祭りの時、韓国と中国両方でギョウザのような民族料理をつくって売ることを提案したのです。両国チームが競い合ってつくって楽しかったようで、彼

女たちからは非常に喜ばれました。

神崎 お嫁さんたちをめぐって、たとえば、「ことうお墓には入りたくない」といったような宗教問題、信仰問題が出てきていませんか。

岸 そこまではいってないんですが、文化の違いからくるスレ違いはあります。

私はもう母親はいませんから、女房に給料を渡すわけですが、農家でも若い息子は、給料をもらってくと母親に渡すのがここでは一般的です。それに対して、外国人花嫁の場合、ものすごい抵抗があります。

また、嫁のほうも電機工場などに勤めて給料をもらうわけですが、それは全部お母さんにいったん渡して小遣いのかたちでもらうといういままでの慣習を言うのと、絶対ダメです。いちばんトラブルのもとになるようです。

言葉の問題はもちろんありますが、そのほかはあまり問題はない。ただ、われわれが心配しているのは、子どもたちの教育問題がこれから大きくなってくるであろうことです。

加藤 先ほど、役場の職員に学卒がたくさんいると言われましたが、皆、地元に戻ってきた方なんですか。

岸 そうです。しかし困っているのは、今は日本の国全体が長男、長女社会でしょう。だいたい長子は思考方法が似ているんです。調整型というのか、気力のあるタイプが少なくて、早く言えば「いい子」タイプである。

これをグチっていたら、ある大学の先生から言われたんです。

どこの大学に行って直接、「将来的にといい含みで、田舎で町長になりませんか」と言って職員採用したらどうかというものです。これは面白いのではないか。今は価値観が変わってきていて、国会議員や大臣が偉いとは思わない時代ですからね。

加藤 山形県の長井市に行ったところ、教育委員会の社会教育課の係が、「先生、お久しぶりでした」と言うから、誰かと思ったら、私が学習院で教えていた時の学生なんです。「わがふるさとに帰ってきて、市役所の職員になって、たいへん楽しく過ごしております」と言うから、「よかったね」と私も言いました。もうそういう時代ですね。

岸 そうです。しかし、バランスを取って、やはり高卒も採らなければいけません。

それと、今度私も少し考えを改めまして、女性を採用することにしました。今まで十数年間女性職員は採用しなかったのです。こんなことを言うと怒られますが、女性を採用しますと、必ず職場結婚をしてしまう。そうすると、小さい役所ですから人事の配置が難しくなる。しかし、それも言っていられなくなりまして。二十一世紀、特に日本は女性をどう活用するかが重要だと助言されたこともあって、今回たくさん採用することにしました。

■「景観条例」苦労話

須藤 私事になりますが、私は千葉県の市原市に住んでいて、市では市原市らしい景観づくりや、景観条例をどういうふうに作成していったらいいのか、今さかんに勉強会をやっているところですよ。

今日の町長さんのお話にはとても感銘を受けました。

おさだまりのスローガンの「景観づくり」ではなく、大工さんを育てていくというあたりからの発想はすごいなと思います。それによって杉林が保たれていき、そこからまた利潤が生まれて、結果的に景観が保全されていく。

特に、自然に対する考え方や、山に対する考え方に非常に感動しましたので、条例をどういうふうにつくっていかれたのか具体的に参考にさせていただきたいんです。

加藤 一度現地にかがうといいですね。

岸 小さい町ですからやりやすい、というところはやはりありますね。

小さい町は、町役場職員がその気になるわけです。その気になるといえるのは、理解して共感を覚えさせるといことだと思えます。私はいつも役場職員に、「理解と共感を得られる行政をやろう」と呼びかけています。そして、共感する人の輪を大きくしていく。

その点、市の場合には人口が多いですから、形成基準などを設けると、一アール当たりとして、そのなかにはうるさい人もかなり住んでいると思いますから、かなり慎重を要するとは思いますが。私のところはその点では規模的に楽なんです。

須藤 いちばんの問題点は、市民の自主性をどうやって高めていくかということだと思います。

岸 私のところでもよく機能したのは、やはり三十万円の補助金を出すことを決めたからではないでしょうか。しかし、大工たちからは、切妻の屋根とどうして決めるんだ、施主が入母屋をつくりたいと言ったらどうするんだという文句がだいぶ出ました。

加藤 細かいことですが、切妻の勾配は、昔からこの程度なんですか。

岸 そうです。その勾配も、いくら以下とはつきり数値で決めたわけです。あまり急でも、あまりなだらかでもないけないというところで定めました。

舛田 各集落をずっと歩きましたが、この条例の補助金対象になったような家を随所で見かけました。今までに何戸ぐらいできたんですか。

岸 一年にだいたい二十戸から三十戸で、もう十年ぐらいになりますから、二、三百戸になると思います。ただ、強制力はありませんから、本当に楽じゃないです。いちばん重要なポイントに変なものをつくってくれたりする(笑)。

川喜田 景観ということになると、技術的な面だけでなしに、やはり美的な面がクローズアップされてくる。根本的に趣味のいい人と悪い人というものがあると思うのです。あの人は趣味がいい人と周りが何となく認めている人がいる。

そういう人に対して、「あの人、よろしいで」というように、皆でもりたてるシステムづくりが重要ではないかと思えます。

岸 聞いた話ですが、東北出身の、安井賞をもらったある画家が、「自分が生まれたのは東北だ。東北は冬になると一面真っ白だ。そういう色のない世界の生まれという影響は何かしらあるのではないか。というのも、京都あたりで生まれた絵描きにはどうにもかなわないところがある。京都には美しいもの、いいものがたくさんあるからだ」と、酒を飲んでしみじみと言っていたということです。

そういうことは、あるのではないのでしょうか。観光地に行っても、歴史がない観光地はあまりきれいに見えない場合が多いと思いますね。

加藤 さて、お話は尽きないと思いますが、このへんでお聞きといたしましょう。今日はどうもありがとうございました。

(第三十二回 一九九五年七月十九日)

III

ふるさとに生きる



土着の精神に根ざして 「秘境 秋山郷はいま」

●講師 高橋彦芳・長野県栄村村長

〔出席者〕加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 須藤護／放送教育開発センター助教 宮田 登／筑波大学教授 宮本千晴／(株)砂漠に緑を
米山俊直／京都大学教授

長野県の北東端、中津川溪谷沿いに位置する秋山郷は、平家落人の里として知られ、長い年月にわたり秘境として独特の生活文化を受け継いできた。江戸期の文人で「北越雪譜」の著者として名高い鈴木牧之の探訪による「秋山紀行」によって、初めて世に紹介された土地である。

◆日本の最深雪地帯 秋山郷

高橋(彦) 遠いところまでお越しをいただきまして、たいへんありがとうございます。心から歓迎申し上げます。

鈴木牧之の「秋山紀行」が、最近神戸のほうで英訳されて、

海外に紹介されるというようなことがあり、また、このところの秘境ブームにも乗りまして、非常にたくさんの方々がこの秋山郷を訪れるようになりました。もはや秘境とは言い難いようです。

まず、栄村の概況から少しお話しをしたいと思います。信越の県境にあります栄村は日本の深雪地帯でありまして、それは同時に、人間の住んでいるところとしては世界の深雪地帯といつてもいいんではないかと思えます。昭和二十年二月十二日に、栄村の玄関である国鉄飯山線、森宮野原駅で測定された七メートル八十五センチという積雪記録がありますが、この記録はまだよそにはないでしょう。

戦争に負けたからというわけでもないでしょうが、昭和二十年というのは非常な大雪が降った。当時、私は中学の寄宿舎にいたわけですけども、春三月下旬、家へ帰ろうとしてもどうやって辿り着くのかわからないという有様でした。かんじきで踏み固めて都合のよいところへ道をつけてあるわけですから、間違つてよその家へ入ったりしたものです。

当時は、今の電柱より丈が短く、電線をまたぐ、電線の下を穴を開けてくぐる、といった状況でした。

そうした土地へ大衆消費社会が入ってきますと、その狭間にあつて住民生活は非常な苦境に陥り、当然ながら過疎化をしていくわけです。

栄村は千曲川を南北に挟んだ二つの地域が昭和三十一年に町

村合併してできたもので、定住人口も一時は六千五百人ぐらいあったんですが、現在は三千二百人、今度の国勢調査では三千百人を割るかもしれません。

半減と言ってもいいほど人口が急激に減りますと、大衆消費社会に対応するのは難しく、若者が流出していくというわけでありまして、六十五歳以上の人口の占める割合は、二七％を少し超えているかと思えます。

ところが、村の面積は非常に大きく、とりわけ南北に長い。北は新潟県の頸城と境を、南は群馬県八日村と境を接している。周囲も新潟県津南町はじめ九市町村と接しており、苗場山の頂上では湯沢町と隣合せています。

しかも、苗場山、鳥甲山はじめ東西に山岳が二重、三重にあるので、三十一の集落が分断されて散在しているという、行政効率からいうと非常に具合の悪い配置です。

ここは昔から農林業でやってきたわけですが、所有階層は極端に偏っており、三割ぐらいの人が七割の農地を所有し、大部分の人は炭焼き、養蚕、その上に耕種農業というのが戦前のかたちでした。

焼畑時代は別として、もともとは畑作地帯ではありませんから、現在は水稲一本といってもいいぐらいの土地です。そのため、戦後の主流をなす換金作物についても自分たちから積極的にやろうとする傾向が少なく、ホップや加工トマトのように、よその地域で放り出したものが栄村のほうへくるといふ図式に

なってしまうっている。信越界隈というのはどうしても、長野県の先進的な畑作の後塵を拝すといったような性格が非常に強いのです。

今、農林業で農協へ集約しているものは十七億から十八億ぐらいです。そのなかの第二位は、最近では、エノキ茸とかシメジといった、土地を利用しないでできる産物で九億円弱ぐらい、約半分を占めているわけです。

売上げ第二位が畜産で、和牛も約千二百頭います。しかし、畜産農家戸数自体は三十戸ぐらいしかなく、そのうち大きいのが十五戸ぐらいで、あとは本当に小規模のものばかりです。鳥鳥甲牧場というところが一戸で五百頭ぐらい持っている。

その次が米で、以前は一位の地位にあったんですが現在は三位ぐらいで、約三億円です。そのほかに今の主流のグリーンアスパラをはじめ、野菜も種類だけはいろいろつくっています。

しかし、それだけやっても売り上げは二十億円あるかないかというところでしょう。それに給与所得等の約二十二、三億円を加え、総所得四十五億円ぐらいすると、人口三千人として一人当たり百五十万円ぐらい。これが住民経済の大柱であると考えていただきたい。

したがって経済的には非常に低位にあるわけですが、住宅事情とか、需給面を考えると、なんとか生活をしているというのが実態といえます。こういう村にあつて、基本的には大衆消費社会の時代ですから、若者の流出を止めることもできず、私ども

も村の責任者としては非常に苦しい立場にあります。昔は苦しいながらも水稲や炭焼き、養蚕をやりながら、地域が自立していたわけです。

こうした地域のみとまりが今では分散されてバラバラになってきており、田んぼを捨てる農家もありますし、地域の経済の自立性というものは失われてきつつある。それは村の崩壊につながるので、規模はどうであれ、自立性のある地域経済、産業を根底にしっかりと持っていなければならぬと私は思います。

◆古くからの知恵「田直し」の復活

ですから、こういう山村として農林業は土台から絶対に外せない。その上で、小さくてもいいから地域内で産業間に連関性をつけていかなければならないということで、農林業と観光を結びつけることを考えました。

つまり、栄村では農林業と全く離れた観光はないということですが、農林業が観光を規定していくかたちになるので、栄村ではいわゆる盛り場的な観光はありえない。また逆に、観光サイドからも農林業に新しい注文を出していくという関係をつくっていく。

さて、土台となる農林業については当然、基盤整備を続けておられますが、農業構造改善事業などが始まった時点では、こう

いう山村は土地基盤の構造改善政策の対象には当てはまらなかつた。

昭和四十五年頃、ようやく山村地域農林漁業特別対策事業というのができて、栄村でも四十八年頃から基盤整備を始めました。

ただ、その事業枠は箱モノもすべてひっくるめて一億円ぐらゐという小規模なもので、その後、やむなく村単、つまり村単独で引継いでいくかたちになりました。半額は農民の名前で融資を受けてもらい、残り半分は村が出すということです。つとやってきたわけですが、一団地三ヘクタールとか一・五ヘクタールといった小規模の土地がほとんどでした。

また、後年、中山間地の転作などについては補助事業を探してやるようになりました。というのも村単だけでは村の負担も農民の負担も重すぎてどうにもならないという事情がありました。そのうえ、地形が悪いものですから事業費が非常にかかります。最近では米をめぐる経済環境も厳しさを増しつつあるので、農家は補助事業であつてもほとんどもう意欲を示さなくなつて、いきおい荒廃地はどんどん増えていく。

昨年、私が就任してから、従来の補助事業の欠陥をよく考えるところ、土木科学に基づく机上の設計基準のようなものがあるのではないかと感じさせられました。昔から農民は、それぞれの田んぼを長年やってきて、どこから水が出て地質はどんな

具合かということをも百も承知しているのであって、改良の構図というものが頭のなかへ入っている。それなのに、極めて官僚的に、強引に設計基準を通してしまふ補助事業のやり方をしていくわけです。

この「田直し」の実践は『現代農業』誌がたいへん興味をもつて取り上げてくれましたが、農民の気持ちを生かしながら、昔のモッコヤ一輪車の部分を機械技術を使ってやっていこうというものです。

この事業の担当は、村のある青年で、村が青年の機械をリースして、当該農家と役場の職員と三者で現場で協議をして、ここはこうやろうじゃないかというように、図面なしで直接進めていくやり方をしています。

この青年はかなりのベテランで、冬になると関東近辺の圃場整備事業にも多年行っていますし、現地を見て農家から希望を聞けば、だいたい頭にイメージができてしまうようで、いろいろそこでアドバイスをし、三者で協議する。

また、農民の負担は二十万円を超えないようにしています。せいぜい四、五年でカタをつけられる程度の借金でなければなりませんから。

いろいろな地形があるので千差万別ですが、農家の負担が八万、半額負担ですから、総事業費が十六万円内外で上がるといふ例もかなり出てきた。そうすると、申込希望が続々出て、今のところ、平成五年まで事業計画は満杯になっています。

◆農作業の共同化へ向けて

できるだけ基盤整備をすると同時に、近代化、機械化のため共同化を図っていくのも大きな課題です。「共同化」というのは最も農業者に嫌われるところである。けれども、ある部門で非常にうまくいったという体験ができれば、広がるのではないかと思います、とりあえず田植えだけでもやろうと考えました。

というのも、今まで田植えは二条植えで、田んぼへ入っていつてコトコト田植え機を転ばせて歩くやり方だったんですが、栄村も転期にあり、五条植え、六条植えの田植え機を農協でも売り出し、農家もそれに飛びつく傾向がある。五反百姓がみんなそれをやりだしたらたいへんである。

「共同」はまず、人間が「共働く」わけですが、土地にももちろん網をかけなければいけない。ですが、バラバラで交換分合もなかなかままならない土地柄ですから、私が勝手に名づけた「属人属地複合型機械共同事業」というモデルをつくりました。

たとえば五人の人が集まって、どこを「共同化」と認めた田んぼとするかを協議する。その五人の組合員の田んぼのなかでも、田植え機が入らないところは当面は個人でやることとする。田んぼの状況もほぼ同じもので、共同の田植えに適するもの

だけとりあえず一時共同化に入れるわけです。人によりそれは一〇〇%かもしれないし、五〇%かもしれない。

つまり、属地的に共同化のなかへ入れる枠を設定しなさい。そして外れたところは意識的に圃場整備をしなさいということです。そうすれば、ただ漫然と圃場整備をするのではなくて、共同化のなかへ入れていく方向での目的意識的な圃場整備になる。モデルは五戸一件しかまだないんですけども、村が応援してうまくいっています。

しかも、共同化の対象は決して上等農家だけでなく、「じいさん、ばあさんの老人農家も入りなさい」と呼びかけています。実際、モデルケースには老人世帯が二戸入っています。近代的な機械を使えない老人ですが、その共同化グループのなかに、エノキ茸栽培をやっている二十歳の若者が二人おりまして、その二人が専属オペレーターとして全部の田んぼをやっています。その代わり、配りや補植のような補助作業は老人でもできるので、労働力を適当にならし、あとは金銭で清算すればいい。やってみたら非常に具合がよく、五軒の田植えを一日と半日ぐらいで仕上げられる。

老人農家も巻き込んでいっているのは、こういう山村では水路の普請の問題があるからです。水路はおしなべて六キロメートルぐらいありますが、中核農家の五人や六人で六キロの水路を維持するなんてことはとうていできない。全員の村普請によって成り立っている水路が圧倒的に多いんです。

だいたい水路というのは年三回手入れが必要である。春、雪消えと同時に一回。これは、落ち葉が入っていると、崩壊場所があるといったため。次に夏ですが、このあたりは植生が激しく草がいつせいに伸び出すので、田植えのあとに一回。秋には、来春融雪水があふれる場合の排水路の確保。これだけしなると、灌漑水路の維持はできないわけです。

中核の農家に土地を集中させよということが今さかんに言われていますが、たとえ幾ヘクタールになろうと、水路の維持は個人では無理がある。したがって、農家数を減らしてしまうと困るので、じいちゃん、ばあちゃん農業であつても、できるだけ共同化のなかで生残れるように段取りしています。

◆都市との交流により見直す「自分の仕事」

あくまで農業をベースにしたうえで、次に観光についてもできるだけ、食材、みやげ品等、地域独自のものを打ち出していく方針を取っている。また、観光サイドから、「きみたち、こういうものがいいからつくってくれないか」と農業のほうへ注文をしていく観光のかたちをしたい。

また、都市との人的な交流が土台にならないと思わなくては。観光施設にしても、その職員から村のことをあれこれ聞けるといった、栄村独特の味がしなければ、京都などの“大”観光にとても太刀打ちできない。

観光については原則的には、施設は村がつくり、運営は財団法人栄村振興公社が担当するという関係になっています。

ただ今、皆様が座っておられますこの宿泊施設「のよさの里」の職員は全部公社職員で、現在正規職員が十四名、集落のおかみさん方などのパートを含め、三十人ぐらいでやっております。今年の目標総売上は一億六千万円台、決して多くはありませんが、人的交流の面で軽視できないものがある。

昨日、今日の二日にわたって、医師、栄養学者、保健婦さんなども入った人たちが東京からやってきて、こちらの農家の人たちと第一回「雑穀シンポジウム」というのをやっています。雑穀づくりでいちばんたいへんな部分は乾燥、調整であるといった百姓側の意見を聞いたり、産直について知恵を出し合おうというものである。

雑穀の生産は以前から細々と続けていたんですが、今年はぜひシンポジウムを開きたいという呼びかけが都市側からあり、また、武蔵村山市からは姉妹提携をとか、よそからの呼び掛けが非常に多いわけです。

そういった都市との交流のなかで、改めて自分の労働が面白くなったり、何か手応えのようなものが出てくると思うんです。遅れた産業を担っているわけですから、手応えがあるとか、誰かが求めているといった要素がなければ、労働自体がだんだんつまらなくなってしまう面がどうしてもあります。

特産品の「猫つぐら」、これは猫の家なんです、都会のペ

ットブームもあってぜひ送ってくれという声があります。その際にも、どうせならそのなかにコシヒカリ一升、ゼンマイの干したものを、マタタビ等を入れて送つたらというようなアドバイスを公社の職員がしてやる。そうやって、つぐらつぐりの老人と都会の人を公社の職員が結びつける。

すると、見たことのない洋酒が都会から届いたとか、手紙をやりとりしたとかいう話が出るし、また、三日もかけて七千円ぐらいの猫の家をつくっている社会というのはどんな社会か覗いてみたいと、都会のほうからも人が来る。そういうことをしながら住民が故郷を見直す、自分の労働を通じて自分の生まれたところをもう一回見直すといったようなことをやっています。

また、冬が非常に長いですから、冬の間いろいろな知恵を絞ってうちでつくったものを、毎年三月三十一日に村中で持ち寄って、「田舎百貨店」というのを開きます。即売もするし、お互いに考え出したものを見せ合ったり、あるものは専門家に手を加えてもらって商品化の方向へもっていくという具合です。

私としては、村長ですからリーダーシップを取らなければならぬんですけれども、補助金をもらってきて大事業をやるといった従来の地方行政のやり方では、住民が生きてくるはずがない。社会資本がよくなったからといって、ここに留るかというところでもないんです。もちろんそれが必要ですけども、住民の意思を全面的に前に出してやっていきたい。

私たち村民がこういうものを開発しているんだという意識を向上させていくことを中心にやっているつもりですが、この二年ぐらゐの間で、各層それぞれにかなり燃えるようになってきたと手前味噌ですが思っているわけです。

しかし困るのは、若者の流出はそれでも止まらないということです。エノキ茸などは五千万、六千万円売り上げているような家もあって、都会の平均的サラリーマン以上の所得がある。にもかかわらず、どうしても勤めたい、勤めるなら東京へ行きたいという。若者を残すには、いま申し上げた農業プラス観光だけではなかなか難しいことは承知です。

男女を問わず、学歴も高くなつてきているし、ハイテクといふか、青年たちももう少し燃えられる企業がなければだめなのかという気はしています。

これは栄村単独ではやれないので、隣の飯山市に、対象を周辺町村の若い労働力も含めた、受け皿としての企業誘致対策というのを市にやってもらふ以外にない。

ただ、新規卒卒は難しくてもUターンする者は比較的います。この栄村振興公社も職員はほとんどUターン組です。どうやら今は、「お金だけじゃないよ。働く意味とか手応えもやっぱり人間には必要だ」という若者もぼちぼち出てきている。しかし、新規卒で村に残るものはゼロで、根本的対策にはなっていないのが現状です。

◆健全財政を支える「やりくりの知恵」

加藤 町村の合併の歴史を拝見しますと、明治八年、二十二年、昭和三十一年と三回ありますが、旧部落といふか、集落間の関係はどうなんですか。いまだに旧字（あざ）で結合していて、なかなか隣とうまくいかないというようなことはないですか。

高橋（彦） 三十二集落から一集落減つて現在三十一集落ですが、集落の持つている財産とか水利権は厳然と分かれていて、明治以来固定しています。

若者の定住には環境整備も必要なんです。しかし、飲料水も山から出る融水が水源になっていますから、特定の集落に属しており、それを共同化して上水道整備をするのは難しい。下水道についても、建設省所管の下水道事業などはもちろんやれないし、農林省の集落排水事業も栄村としてはなかなか難しいわけで、結局、個人の合併浄化槽にして、共同導水管のようなものを村でつくるかという話になっている。

しかし、集落が散在していて、その間に山あり谷ありですから、効率が著しく悪いわけです。

とにかく、秋山郷というところが、観光客にしても新潟県の津南町経由、プロパンガス、石油などの物流もすべて津南を通しているわけですから、いくら秋山振興の掛声をかけても、人の町に声をかけているようなもんです。栄村の役場のあるあた

りは誰も通らないし、秋山の人たちはみな北越銀行の支店に預金している。村の農協へなんてさっぱりでね(笑)。

加藤 栄は長野県になりますが、住民意識は新潟のほうを向いているということですか。

高橋(彦) 経済取引に関しては、です。

「教育県」と言われていることもあり、長野県のほうが先進地域というプライドがわりあいあって、新潟へつきたいなんて全然考えてないんですが、食材を買う、あるいは病院、救急車、し尿、ゴミ処理になると、どうしても津南町と広域圏でやらざるをえない。

加藤 山林が大部分ですけども、国有林はどれぐらいありますか。

高橋(彦) 国有林は一万五千ヘクタールで、村の面積の半分強、民有林は一万一千ヘクタール。残りは、田んぼ、畑、住宅です。

安達 村勢要覧の十四億円の予算のなかで、自己資金は一二%ぐらいですか。

高橋(彦) いや、二億円もないんです。したがって、交付税がほとんどです。だから財政運営はよほど考えないとならない。

安達 にもかかわらず、公債費の比率が約一四%だから、栄はなかなか健全財政ですな。普通過疎の村というのは、公債比率は一八ないし二〇%ぐらいですよ。

高橋(彦) この数字は古いんで、私が引継いでからは、一〇%を割ったんです。

とはいえ、何か事業をやる時には思いきって十数%まで上げることも将来必要かもしれない。でも、そういう展望なしに、ダラダラと公債比率を上げてしまうのは芳しくないと思っています。

私のところでは、学校をつくる場合、必ず社会教育用にも使えるようにしてある。今度つくる小学校も、子どもの数自体は少ないから文部省の基準でいけばそれこそマッチ箱みたいなものをつくればいいんですが、体育館なども社会体育館兼用、家庭科教室も地域のかあちゃんたちの料理教室にもなるものにするので、七億円ぐらいかかる。

そうすると、大きめになって当初は出費がたいへんですが、そのためにすでに三億円貯金してあるので、あと二年、一億五千万ぐらいずつ貯めれば、そんなに財政を悪化させない。集落が散在しているから、村の中心にあるタイプの社会体育館じゃ意味がない。小中学校が社会体育館兼用の、いわゆる「学社共用」方式でなければとてもとても……。

安達 財政の長期計画がたっていることがいちばん肝心なのであって、それさえしつかりしていれば一時的な公債費の伸びはこわくないですよ。

◆都市部への「素材提供型」産直

加藤 要覧を拝見すると、年間の観光客の見込みが十二万人と出ていますね。米の定住人口が三千三百人だとすると、だいたい三、四十倍ですね。京都が百万人のところに三千万人ですから、三十倍。住民一人当たりになると、米村は相当な観光地と言っているかも知れない。

高橋(彦) 八十二銀行の長野経済研究所が出した数字だと、米村の一人当たりの観光収益は、長野県下百二十一町村のうち、三十何番目かということですが、そういう実感はあまりない。確かに、一人当たりの消費額からすると、ばかにいいところについてしまうんですけども。

どのくらいのパイにすればいいのかわからない。あまり大きくしてしまうと、サービスが雑になったり、お客を見たら札を払い出す機械みたいに扱うようなことにもなりかねない。米村らしさも何もあつたもんじゃなくなる。観光の目標をどの程度に定めればいいのか。米村振興公社も、バックを大きくして、農協みたいになるとまずくなるんじゃないかと思っっています。

いったん、拡大した規模を縮めるのは、難しいわけです。スキー場なんか見ても、まず、シングルリフトでしょう。次はペアリフト、二人乗りでもフードつき、それから今度はゴンドラ

リフトという具合に、リフトの速度もだんだん速くなる。

また逆に、そうしたベースに追いついていけないスキー場だつて出てきている。特色がなければそうなると思う。よそとそういう競争をしなくていい観光というのがないだろうか。

宮本 観光の姿勢がそういうことであるならば、たとえば産直のパイプを通した素材の都市部への供給という格好で何か活路があるような気がします。ここで生産加工も何もかもあるのではなく、見本は地元にあるが、町の人が好んで利用して使うように自分らは材料を提供するという構えですね。

コウゾの紙の原料、アケビづるなど、この近辺に昔からある手工芸品の素材を安定的に都市に供給できるような、特定多数とのコネクションをつくる。都市部には趣味のビジネスがいろいろありますからね。

それと、食いものですね。今どきは舌の肥えたお師匠さん方がたくさんいるから、うまいものにはやはり客がつく。そうした材料を届けるシステムづくりかな。

高橋(彦) たとえば秋山郷では、家庭用のトウモロコシなんか素晴らしいのがあるんですよ。だからもつとつくつたらどうかというんだけど、クマに食われるとかいって、なかなかやってもらえない。

ほかにいろいろあって、雑穀の飴なども、この間、秋山郷のおかあちゃんたちに昔ながらのアワ、キビの飴をつくつてもらって東京の保育園などでわけたら、非常に喜ばれ、もつとつ

くつてくれなんて言われたんです。まだ商品化はしておりませんが、雑穀の飴というのは、ちょっと黒ずんでいて、口の中に入れてとさつと溶けてしまう。甘くないし、歯につかないんです。ここの子どもたちには、以前はこの飴しかなかったんです。

宮本 労力の点ではたぶん割に合わないんでしょうが、わざと焼畑を復活させるなどというのもいいと思う。昔、焼畑に使っていたんだらうなと思うところで、放つてあるところがたくさんあるはずで。数年つくつて休閑させるのを前提に、トマトやアケビをある程度捨てづくりで焼畑をすれば、ブランドになり得る。カリ分が多いから、味はいいに決まっているからね。

高橋(彦) たとえば、この座布団カバーは栄村の和紙なんです。座布団までつくるのはなかなかたいへんなんだけど、上質和紙をつくるということならできる。

昔から、コウゾは畑というより、田畑のあぜに植えていた。なかには、七割もあぜというところがあったりしたもんです。

安達 そうすれば、田仕事の合間合間にコウゾの面倒もみられるわけですね。全体として、いろいろなものがやれるわけで、面白いと思うなあ。農水省は一種類を大規模にやれといっているが、それだとダメなんですよね。

宮本 産直を安定してやるためには、組み合わせでちよこちよこと添えてやるのがおすすめです。よく喜ばれるんですね。「秋山」

というのは全国的に知られているわけだから、このブランドで頼めばひと通りの素材は供給できるというようにすればよい。量的拡大のほうへいくのではなく、最初からある程度の限定した量ということでやればよいのではないか。

◆不在村民と「情報の産直」

加藤 私は、観光というのはだいたい土地を減ぼすものだと思うんです。京都も結局観光でダメになったと思いませんか。日帰り客も多いし、実際、お金はあまり落ちていないんですね。

京都に住んでいた時に、民博の梅棹忠夫さんと「不在市民の会」というのをつくろうという話をしていました。不在市民税を年に一万円払う、クラブ制の観光組織ですが、その不在市民証がなければ京都には泊れないことにする。

秋山郷にはそれが馴染むような気がします。いま宮本さんが言われた、特定多数より一定限度の条件付きというのは、要するに不在市民の会みたいなものでしょう。

須藤 今、秋山郷の小赤沢地区を中心に、若い人たちのある動きが出てきていると聞いています。それは、秋田から伝わってきている狩猟技術、あるいは焼畑といった古い時代の生活技術がなくなりつつあるので、写真集にして残したり、調査記録としてまとめようというものです。

前例として、北海道でアイヌの民具をまとめて分厚い立派な本にしたもの、また、マタギで有名な新潟県の奥三面おくみおもての生活文化の記録などがあるんですが、それらを手本にして、秋山郷でも、何千人かの交流する人たちを募り、前もってお金をもらって編集費にあてるやり方で本をつくらうというものです。日本観光文化研究所ですつと一緒に仕事をしてきた仲間たちがいるんですが、皆でぜひ協力したいと思っています。

米山 さつき加藤さんが言われた、会員制にして産直もつないでという、不在村民になるわけですね。一年に一万円ずつぐらい集めるということはできないことはないです。

須藤 奥三面の写真集は一冊五千円なんです。どのぐらい集まるかと心配していたが、二千人あまり集まったそうです。秋山の場合は三面より一般的に見て知名度が高いですからね。

加藤 ワラビやアケビもいかもしれないが、「情報の産直」のほうがこれからは面白いかもしれない。

米山 知的産業としてどんどん収束させていくといいかもしれない。

高橋(彦) 私も、もともと村の社会教育畑をずっとやってきているんです。一般行政は味気ないので、若い頃はあまり興味がありませんでした。

宮田 「行政」の意味は、古代社会では、本来「まつりごと」をおこなうというわけですから、祭りやイベントをたくさんやっつてはどうですか。たとえば秋山郷の大嘗祭であるとか…。

◆ホラ吹き大会と墓地公園

宮本 それはそうと、地方にご厄介になるという点では、最近お墓のことがいろいろ言われていますね。

高橋(彦) 毎年一回、アイディア募集のために、「ホラ吹き大会」というのをやるんですよ。そうしたら、栄村中を世界の人の墓地公園にしますなんてホラ話が出た。これはまたたつぷり面白い話だなんてことで、一等賞になった。

山の上にあつてせせらぎの聞こえる墓地がお好み次第などと、ふるっているわけです。

加藤 ゴルバチョフでもシナトラでも全部分骨してここに入れる(笑)。

宮田 先ほどいただいた資料のなかの、名主、島田三左衛門の「秋山様子書上帳」ですが、読んでみると、もともと歴代名村長が出てくるという土壌がある。この内容は単なる実情報告ではないですね。三左衛門という人は哲学があるというか、風水思想に基づいて陰陽のバランスをとらなければならないと言っています。

村をつくり直す基本ができていて、三代後の島田三左衛門が具体的な構想をつくったわけでしょう。そこにお墓のことも出ています。

生活が苦しくてやっつけていけないので転地しようとしたとこ

る、村人が全員反対した。その理由はお墓を山中に捨てていくことはできないというものです。そこで、何とかここでやっ
ていくための新しい方策、たとえば、金を藩から十年間無利息
で借りてみてはどうかという案をこしらえたりする。基本には、
陰陽のバランスを崩すなどという発想があつて、それは、高橋村
長さんのなかにも脈々と流れているのでしよう(笑)。

高橋(彦) 鈴木牧之の文章は有名ですが、文士の遊びとい
うか旅行者であつて、この様子書上帳のほうが資料としては格
好かなと思つて持つてきたんですがね。

宮田 水を使つて温泉をあてるのか、特に「風水」説の知識
もある。温泉にしても、渋や湯田中などほかにもあるわけだか
ら、こんな奥まで来てもらうには、何か別の方法を考えなけれ
ばならないと言つていたり、痲瘡がはやると、無医村だから、
近隣九カ村と連合して対策しろと言つている。これは、たいし
た人ですね。

加藤 人間の知恵はあまり進歩しないということではありま
せんか(笑)。

先ほどホラ吹き大会のお話がありました、このホラ吹き大
会というのは以前からあるんですか。

高橋(彦) 三年ぐらいまえにつくつたんです(笑)。やつて
みると、市民会館は村の人でスシ詰めになつて、夜十時半頃
になつても帰る人がほとんどいないほど盛り上がる。

米山 話術にかなり左右されるでしょうね。

高橋(彦) そうそう。墓地公園を提案した彼などは、ユー
モアを交えて、みんなが笑いこぼるほどのをやつたから効果
があつたんだね。

宮本 それはしかし、いい方法ですね。真面目な提案をして
いるとやれそこがどうだ、ここがどうだと追い詰められるけれ
ども、最初から嘘だと言つていけば、かえつて自由な発想がで
きる。

加藤 「嘘から出たまこと」というのがありますからね。

宮田 公園墓地というのは、現在大きな流れとなつていま
す。村は過疎化して祀り手が失われ、祀られない怨霊が大都会に集
結してくる。それをいかにして鎮めるかが大きな問題になつて
いる。

齢を取つてUターンは難しいけれど、せめて魂だけは戻して
おきたいというので、公園墓地というのを故郷につくつてもら
いたいという都会人の願望は、二十一世紀にはずっと深まるの
ではないでしょうか。

◆「おれのはこれだ」という土着精神の復興を

高橋(彦) 住民を前へ出していくにはいろいろなることをや
つてみなければならぬです。ホラ吹き大会もその一つ。で
ないと、村のことをやるのは議会議員と村長きりで、あとは静
かにしている、みたいなことにどうしてもなりやすい。

今の時代、「村」の経営というのお金が非常に要るから、とかく予算を取るとか陳情行為に偏りがちなんです。議会と村長が資本に働きかけてでつかいリゾートプランをプチあげて、それが決まると今度は途端にワラツと反対が出てという、長野県のリゾート問題はみなそのパターンです。住民の発想なんていうのは最初から全然ない。

ここにはスキー場はないんですが、村の子どもたちがこんな雪のなかに住んでいながら、遠くまでスキーのために出かけなければならぬなんてかわいそうだということで、要望は以前からかなりある。

それで、場所は示したんですが、構想は皆に任せているんです。スキー指導員の資格を持っているのが十六人もいるから、きみたちで構想を練ってくれと言っています。財政上の心配はその後に私がすればよい。しかし、二、三年のうちにはできると思います。ただし後発スキー場ですから、たとえばファミリー用とかいった特色がなければならぬ。考えてみれば今は、ゴルフ場とか大人の遊ぶ場所ばかりで子ども遊べる所がないわけです。大型スキー場は基本的にファミリーを相手にしていません。

須藤 秋山の人たちに東京を研究する会をつくってもらうことを提案したいと思います。武蔵村山と姉妹提携をしているという事です、先ほどの不在村民のネットワークをつくったり、特産品の市場調査をしたりしながら、今の時代、自分たち

の生活のレベルが東京の同世代とそう変わらないことを再確認してもらおう。しかも自分たちは家は自分で持っているし、野菜も穫れる、お米も穫れる、その上積みとして観光産業もあるという事です、若い人たちの知的作業を通して、地元に住んでいくことが非常にいいことなんだとわかりあえるような都市部との交流ができればいいですね。

加藤 新宿にアンテナショップが出ていますね。

高橋(彦) ここでは、「経済競争で勝って豊かな栄村をつくりましょう」なんていうのではダメなんです。おっしゃるように文化事業をやって、ちょっと大げさかもしれないが、「土着の精神」みたいなものが多少でも湧き上がってこない、経済復興だけではどこまでいっても難しい。まず、文化、知的なものをもう少し掘り起こして、人間の暮らしとしてプライドの持てる空気をつくらなければならないと思います。

宮本 昨日話をしてもらったクマ撃ち名人の山田亀太郎さんが言っておられましたよ。

世間の話は知らないけれども、自分が苦勞をしてきた、クマのこととイワナのことだったら何でも聞いてくれって……。「おれのはこれだ」というものが大切ですね。

加藤 残念ですが、約束の時間がずいぶん過ぎてしまいました。また、これを縁にお付き合いをお願いしたいと思います。

高橋(彦) ぜひひとつ、私も同様でございます。

(第二十三回 一九九〇年十一月四日)

生活の器としての 町づくり

●講師 中西通

丹波古陶館館長、兵庫県篠山町商工会会長

現篠山市立美術館運営委員長、丹波古陶館館長

〔出席者〕安達生恒／社会学研究所所長 須藤 護／放送教育開発センター助教 舛田忠雄／山形大学教授 宮本千晴／(株)砂漠に緑を 米山俊直／京都大学教授

兵庫県中東部の盆地に位置する篠山町は、丹波黒大豆、丹波粟の産地として名高く、また丹波杜氏としての出稼ぎの歴史に支えられた地域経済のゆとりは、瓦屋根のどっしりした家々、竹林の散在する田園といった、日本の原風景ともいえるのどかさのなかにあらわれている。

人口減少、再開発の波は御多分にもれずこの地へも押し寄せているが、中西氏は骨董商を生業としながら丹波古陶館館長、能楽資料館館長として、独自の視点から町づくりを進めてこられた、いわば“町衆”的な心意気を感じられる方である。以下

は、「いいものはいい、悪いものは悪い」という絶対的な「目利き」の世界から見た、イベント等による一過性の「村おこし」への警鐘である。

◆「人が来ることが絶対是」という「村おこし」の危うさ

中西 町づくりを考えていく時、末端の自治体というのは「企業感覚」を持つこと、そして町に対する誇りを持つことが必要ではないかというをよく思います。

町づくりを考えていく時いちばん悩むのは、住民にとっても行政にとっても、地域全体を共通の財産としてみる意識が少ないことです。それには悲しい思いがいたします。たとえば篠山には、古い町並みもありますし、目抜きのお店街もある、もちろん山林もありますし、田畑もあるというように、皆が地域を自分たちの誇りにすべきなんです。それらが地域全体にとつての共通の行政財産であるという感覚が少ないのが、悲しいんです。

共通財産という意識があると、もつと集中的に投資ができるんです。そうした集中的投資というものがなかなかできない。ばらまくことはできても、一点に投入して、地域のイメージを助長するようなことがなかなかできにくい。そこがやはり、「行政」というものの難しいところだと思います。

現在、一村一品運動とか、町おこし、村おこしとかいろいろ

ありますけれど、いま流行の「村おこし」などという言葉は私にはあまり好きではありません。そういう一過性の言葉で篠山を語るのには、何ともいえない気持ちがあるのです。だから篠山はあくまでも「篠山づくり」であって、一般的な一村一品運動とか村おこしという言葉で考えられたくない、ということを常に言っております。

全国各地で「村おこし」の取組みがさかんですが、最近、非常におかしいと感じるのは、何の必然性もないところでイベントをやつて、人さえ連れて来ればよいというものの方です。あれは絶対におかしいと思う。なぜそう言うかという点、私が焼物の世界に住んでいるからなんです。焼物の場合も同じような歪みがあるのでよくわかる。

少し飛躍しますが、焼物というものは、「造形芸術」という分野があるばかりに、本来生活用具であるものを芸術的感覚で受け止めるがちです。その代表例は抹茶茶碗などの「茶陶」です。

丹波焼でもそうなんですが、「工人」から「陶工」へ、「陶工」から「陶芸家」へ、「陶芸家」から「芸術家」へというふうには、仕事の内容は変わらないのに、同じ人が肩書だけ変わっていく。それも近年急速に、です。飯茶碗と抹茶茶碗を例とすると、もう少し飯茶碗的な、焼物の原点に帰つてものを考えるということをしなないと、日本の本当の文化を理解することができなくなつてしまつたろうということを感じています。

焼物は生活の器です。生活のなかでつかまえるべきものであ

るのに、もつともらしい高級感をもたせようとすると問題があります。同様にイベントをやつて生活圏外の人間をたくさん呼ぼうとか、観光で無理にこしらえた数字が成功の証しであるというような考え方には、かなり抵抗があります。

その意味では、先日起きた信楽高原鉄道の事故は村おこしの総括みたいな感じがします。普段からあのような催しには疑問もありましたので、すごいショックでした。思っていたとおりになったという感じがありました。限られた地域、限られたキヤパシティにもかかわらずあれだけの人間を受け入れて、そして人が来るのが絶対是というものの考え方が根底にあるために起きたと思うのです。

私の信条は、観光客におもねることは絶対にいけないということです。同様にマスコミにこび、へつらうこともいけないと思つています。

◆陶工たちの菩提寺「丹波古陶館」

焼物は基本的に生活用具です。それがあつた時点で、「茶の湯」という世界が入つてきて、大陸の様々な文化と合体し日本の美学の主流のようなものができたわけですが、それはけつして生活の本流ではありません。

今よく言われている村おこしとか、一村一品運動とかというのは、実際はすべて観光につながる話です。極端に言うとう

「田舎は観光で飯を食え」と言っているわけです。かつて、「貧乏人は麦飯を食え」と言った人がいましたが、全く同じ感覚です。それは貧乏になつたら身売りしろというのと同じで、地方をバカにしている話である。しかも、地方の側もそれが当たり前だというふうに受け止めているところに問題があります。

憤りを感じるのが当たり前であるのに、何も感じないのか、それとも、もはや感じる能力を失っているのかなと思う時もあります。

篠山、あるいはもつと田舎の町ならそれなりに、おのおの歴史の風土というものは自然も含めて確実にあるわけです。そこに住んでいる人間がいかに自然や歴史的な背景のなかでゆつりのある豊かな生活を展開しているか、それは「たまたまい」という言葉で表現されるものかもしれません。もしそうしたものに触れたいと思う人があれば拒む必要はないと思います。しかし無理に何かつくり出してまで人に来てもらおうということは、本当に何とも情ない気がいたします。

観光客を予見したそうした仕事をするのは私にはつらいですね。それは全く一過性のものであって、長続きするものではありません。今、そこに住んでいる人間を、そしてその生活を大切に、そんなことが必要なのではないかと思います。

現在、丹波立杭の窯場には窯が六十軒ほどあります。だいたい関西が中心だと思いますが、東京をはじめ、全国に出荷しています。丹波窯は日本を代表する古窯の一つで、備前、信楽、

瀬戸、越前、常滑とともに大きな窯業集落です。

昭和四十四年に「丹波古陶館」をつくりました。その時私には、永年この窯を守り続けた丹波の陶工たちの菩提寺をつくるのだという気持ちを実際ありました。先祖の作が地元こんな集中的に残っているケースは、ほかの古窯の世界ではないことなんです。たまたま世の認識が丹波の場合は遅れたことと、私の父が地元で早くから古陶を愛好していたという経緯があったものですから。先人たちの作を地元にしちんと残さなければならぬという気持ちがあったので、「丹波古陶館」をつくりました。

かつて、丹波の窯のある立杭の里はけっして豊かとはいえませんでした。今のように隆々とした家がずらつと軒を連ねるといふようなことは、数十年前はなかつた景色です。

年とつた陶工に聞いてみますと、子どもの時分から丹波石とこのを掘りに行つたり、窯の手伝いをしたり、窯たきをする場合はずっと窯たきの仕事ばかりというように働いてきたそうです。「それに比べると、現在の暮らしは夢のようなもんですよ」という声を、何回も聞いたことがあります。

「丹波古陶館」を建ててから十年ほどして、窯に対する認識がずいぶん変わってきました。古丹波というものに対する認識と、それを生み出してきた立杭の里に対する認識がだんだん高まってきたということが言えると思います。そういう意味では暮らし向きもよくなつたし、地域産業の活性化に大きな役割を

果たしたのかもしれない。

しかし、肝心の焼物自体には難しい問題があります。たとえば、李朝の初期の井戸茶碗などは、造形に対する意識がないままに、ただ無心にロクロをひき高台を簡単に削って焼き上げたものです。

もともとはそのへんにあるお粥茶碗だったが、巧まずして生まれたかたちというべきものがあり、実にいいものなんです。それを利久が見て取り上げた。それらは確かに評価も高いし、一国一城と取り替えたというような逸話も歴史に残っているほどです。

一方、今つくられる抹茶茶碗は、そうした作品を「意識して」つくることになるわけです。つまり、本来は無作為のなかから生まれたものを、こんどは作意でつくることになる。第一次産業的発想から生まれたものが、今度は高度な芸術的発想によらないと生まれえない。これは現代陶芸のもつたいへん難しい点だと思います。

同じ工芸といってもこれはまた特異な世界ですが、能面も同じです。世阿弥の時代に打った面を、次の代、たとえば桃山であれ江戸であれ、正確に写すことを習わしとしています。同じものを写しても、それが生まれた時代によってうったえかたが全く違うのです。

焼物は時代によってかたちが変わっていきますが、能面はかたちが変わりません。ですから、その時に打った人間の精神構

造といったもので時代的造形を判断するしかない。

われわれはもつと原点にかえて考えてみなければいけないと思います。

◆「この町の人間として何をすべきか」が原点

——篠山歴史美術館

私自身のなかで、遠隔地で田舎の篠山で、どのような商売のあり方がよいかを考えつつ、また父親が残した焼物コレクションをどういうふうにか活かしたらいいかということを探していました。

そして、昭和三十年代の終わり頃ですが、観光に絡む問題で時の町長が汚職をやりまして、実刑を受けるといふ事件が起りました。これは篠山にとつてたいへんショックな事件でした。それが、いつてみれば、今日の問題意識に私が目覚めるきっかけであるように思われます。こういうことではない、自分の生まれ育った地域がどうあるべきかということをものすごく考えるようになったのです。

自分はこの町の人間として何をすべきかということを考えると、自分本来の商売と、地域のあり方とを両立させて考えなければならなくなりました。

それが丹波古陶館をつくらせたり、美術館をつくらせたりする動機となった次第です。

篠山歴史美術館の建物は、明治二十四年につくられ、木造建築では最も古い裁判所として残っていたものでした。それを都市計画街路をつくるために潰すというのです。これはたいへんだ、あの建物は篠山にとって不可欠な財産だ、ということでも、保存運動を起しました。しかし裁判所は普通地域の人々にとっては暗いイメージをもたれがちです。保存には反対の人も多くおりましたので、私は必死でした。まさに孤軍奮闘でした。最終的には、昭和五十五年篠山セミナーというのをやりまして、私はそのパネラーとして出席することになり、県の企画部長や、町長、神戸大学の先生などと一緒に話をしました。このセミナーが、自分に与えられた最後のチャンスだと思いついて、徹底的に持論の展開をやりまして、その晩の食事の最中に、当時の町長の言葉で言いますと「今度のことは、あんたには参った。裁判所は残そう」ということになりました。

しかし、この裁判所が残ったら美術館にするということは持論として全部話をしていましたから、それに責任を持たなければならぬ。町長に「あとはおまえに任す。そやけど、都市計画との間にどういふ接点を見つけたらええか」と言い渡され、お互いの条件闘争のようになりました。それで、南向きの建物に九十度動かして西向きにして、都市計画道路をつけたのです。そして私は今、その篠山歴史美術館の運営委員長をやっています。地方としてはかなりレベルの高い美術館になっています。たまたま篠山に藩窯がありましたので、それを中心にいろいろ

な武具や屏風、蒔絵の調度などを並べることにしました。もともと町にカネがあるわけではありませんから、館の蔵品を買うということではできません。

そこは私の経験と人間関係を生かして、「何とぞあの品をお借りしたいのです」とあちこちについて回ったところ、極端にいったら「町に貸すんやない、おまえさんに貸すわ」ということになり、町民の方々をはじめとしていろいろな方からの寄託品で、篠山歴史美術館をオープンすることができました。ですからレプリカをこしらえる必要はありませんし、かなり水準の高い展示になりました。

今は何点か館蔵品もあります。このあいだも、非常に有難いことに資料価値の高い日本地図の屏風の寄付がありました。このように、しっかりと運営をやっていますと、寄付も受けられるわけです。

美術館は、五十五年八月の篠山セミナーから二年後の、五十七年四月一日に開館しました。

◆「保存」は闘争的な仕事である

中西 私にとりましてはたいへんな仕事でした。民間人として行政を動かす時には、たいへんな決断と勇氣が必要です。それがいちばん苦しいところで、本当にやる気のある人間は野党的にならざるを得ないんです。けっして思想心情において野党

ではないんですけれども、やっぱり勝負の時というものがあった、たいへん難しい、つらい仕事です。

また、残っているものを「壊す」のは一晩でもできるんですけども、「守る」ほうは、逆説的ですが闘争的な仕事になってしまふことがあります。私がやっているようなことも、すごく先鋭的に見られてしまふ。それも仕方ないことだと思えます。ひとつのものを行政と勝負しながらつくり上げていくには、やっぱりそういう闘争的な面があるのではないかと思います。

安達 今はとかく先鋭のほうで勝つんじゃないですか。

中西 いや、わかりません。もともと文化人というのはいへんソフトで、行政に対してものを言わない。特に田舎においてはそうです。

宮本 守るといふことはたいへん闘争的なこととおっしゃって、なるほどと教えられましたけれども、守るといふことは同時にものすごく想像力の必要なことなんですね。

中西 「攻めるほう」と「籠城するほう」という城攻めの問題と同じことです。籠城するほうが何日持ちこたえられるかということがあって、すごく難しいと思うんです。忍耐ということからいきますと、籠城するほうがはるかに忍耐がいるでしょうし、攻めのほうの何倍ものエネルギーがおそらくいるんじゃないかということを思いました。

宮本 保存については、なくなつた後と、なくなる前の状態

とが同時に存在すれば、選ぶことは簡単なんです。ところが想像で選ぶしか仕方がない。これが難しいんです。

安達 それが歴史が絡みついていると同時に並べられるんだな。因縁があるからね。

中西 われわれは同じ地域で同じことを見えていますので、地域の人々に歴史をわかってもらえてははずなんですけれども、これはやはり政治意識や市民意識の問題に帰着しますね。

たとえばお城ができて、町づくり、都市計画ができる、町並みができる。これは政治の世界なんです。敗戦後、過疎になって、丹波の都であったものがもはや都のかたちもないというのもすべて政治のなせるわざ、というふうに考えてみると、やはり政治意識を持たないと状況は動かないということになります。

だから町づくりを考えると、地域の政治家になるということとイコールであるはずなんです。ところが、政治をやるというのは民主主義の世界では選挙をやるということとイコールという変なことになっている。選挙に出るといふのは特定の人間のもので、これは行政能力ということよりも選挙ということに対する能力が問題になってくる。

それが地方、末端へ行くほど格差が開いてきまして、選挙のレベルと地域問題等を考えるレベルとが全然くい違ってくる。われわれはそれに対してどう立ち向かったらいいか、一市民と

してどういふふうに対応したらいいかという問題が問われてきます。

舛田 たとえばふるさと創生の一億円にしても、どういふふうな使い方をするかということの問題も確かにあるけれども、それよりは使い方をどう決めていったかという意思決定プロセスに非常に問題があるのではないかという気がします。温泉掘りにお金をつぎこんだりする市町村も多いですね。観光収入が目的となっている。

中西 観光ということは絶対意識してはいけないと思います。たとえば焼物の話ですけど、焼物のレベル自体は落ちていきます。よりイージーな方法で量産するというかたちになってきているわけですから。

つまり消費者そのものが心貧しくなっているんです。カネができるけど観光として焼物の里へ行く。何でもいから買ってみようかということになってくると、そのレベルはひたすら下がる一方ということになります。

◆文化の尺度は「目盛りのない物差し」

中西 いちばん最初に商工会長として話をしたのが、「目盛りのない物差し」というものでした。経済の尺度にも距離の尺度にも目盛りはある。だけど文化の尺度には目盛りはない。だからその時、その人、その地域によって独特の目盛りを刻んで

いかなければいけないのではないか、というものです。私に与えられたのはそういった仕事だと自分で意識してきました。

それで行政とある意味で対決しつつ、また、スクラムを組み、地域の商業振興を果たすためには商工会としてはどうすべきかということを考えてきました。

公益法人としては限界がある。第一給料がないわけです。給料がないということは極端に言えば素人で、素人の限界がおのずとあります。そのためいろいろな検討を五年間かかってやってきた結果、篠山町商業振興協同組合という事業団体をつくりました。これももちろん無給ですが。

その協同組合が二千万円、町が一千万円と両方で三千万円の出資をして、第三セクターの町づくり会社をつくるころまできました。今年の六月十八日がその設立総会なんです。選挙されなくても、シビリアンとして果たし得るもつとも政治的な仕事を展開する基盤整備が、五年間かかってようやくできてきたわけです。

また、今の農業問題も実際には全部商業振興として考えるべきなんです。ですから、篠山では農協が商工会員です。黒豆や山の芋が売れると、「ブランドは何や」「篠山や」となる。そうすると「篠山の町はどんな町や」となります。そのイメージは長年かかってつくってきたものです。そのブランドも大いに活用すべしと私は言っています。

私は自分のやってきた実績のなかで問題提起をします。その

なかでは農業も商業も区別がない。いかに生産性を高めるかということになってきますと、単に“なんぼ”の売り上げということではなくて、篠山というブランドによって地域全体の生産性が高められていくわけです。

米山 まさに地域振興ですね。

中西 ですから私にすれば、「今さら何で村おこしや」というような感じがあるわけです。

昭和五十五年でしたか、大平首相が「地方と文化の時代」という言葉を言われた時に、ようやくだなという感じがありました。ですから、その流れを利用して篠山の地域振興をもっと進めなければいけないという気持ちになりました。

須藤 この町には、非常に均整のとれた安定感というか、豊かみたいなものが感じられますが、経済基盤というものがやっぱりしっかりしているからなのでしょうね。

そこから考えて、中西さんのような方がかなりたくさんおいでになるのではないかという印象を受けたのですが。

中西 商工会員が今、一千四人います。そのなかで全商工会員に呼びかけて協同組合をつくる。一口十万円ということの問題提起したんです。五、六十人も参加してくれるかなというような話だったんですが、五、六十人では寂しいから百五十人、三千万円という目標を立てて協同組合をつくろうということになりました。「これは中西さん、あなたに対する信任投票みたいなもんやで」という話になりました。

説明会をしたところ、締め切った段階で二百十七名、三千六百五十万円となったんです。

これは要するに「何するかわからん男やけれども、期待しようではないか」という票ですね。ですから、ある意味では理解者も少しは増えているなという感じはします。

宮本 中西さんを信頼する意識みたいなものが、やはり高いんでしょうね。

◆「意識」することが街並み保存の第一歩

中西 しかし、たとえば古い街並みの残されている河原町では、なかなか難しいですね。なぜかと言いますと、商売をやめてしまった屋になって、前向きに商売をしている家なんて本当に少ないわけです。そんななかで、私が丹波古陶館や能楽資料館などをつくったり、いろいろなことをやっている。当然、反発も抵抗もあってよくは思われなわけです。門前に信者なしというたどえもありますから。

たとえば街並み保存しようの問題提起しますと、「反対や」という人がいます。「電柱撤去やろうやないか」という問題提起を私が出すと、「反対や」と言うんです。「おまえの言う論法から言うとう電柱も保存しなければならぬ」というわけで、本当にたいへんです。ですけど、「意識」をした途端、もう家は壊せないのです。

ほとんどの住民は街並み保存などの意識のないまま生活しています。「意識」のないままに家を潰し、「意識」のないままに新しい赤い瓦を屋根に葺くんです。

ですから、「こんな赤い瓦で葺いて」と私が言えば、「あほ言うな、おまえには反対や」と言うんですが、反対であれ賛成であれ、意識を持たせたら勝負は勝ちです。意識を持たずということが啓蒙運動の第一歩です。篠山では河原町の商店街は、そうした賛否両論のなかでしっかりと街並みを保っているわけです。それがすごく面白いですね。

宮本 反街並み保存の姿勢で、街並みが維持される(笑)。

中西 今は、篠山の場合は、どこの商店街でも家を建て替えたりする時に、全体の景観を意識しています。

商工会長になった時の「目盛りのない物差し」もそうですが、「てんぼの改革」という問題提起もやりました。「店舗」と、天保時代の「天保」とを兼ねまして、「てんぼの改革」というポスターをつくったんです。

また、篠山商工会に「篠山往来」という月刊誌があるんですが、それに店舗改造をやった家を全部紹介しているわけです。そういうことをやるものだから、いまだに皆、意識しているようです。

街並みに対する意識をずっと推し進めていきますと、いわゆる大店法がどういう経過をたどろうとも、大店法に負けない既存の商店街がしっかりと立ち上がったよみがえりをして、本来の姿を保ち

ながら新しい流通の時代に対応していけると私は確信しています。

その方向で商店街再開発を考える核をつくらうとしています。「篠山のお城の建物がなくなった以上、新しいお城をつくるんや」という気持ちで図面を書いているんです。

宮本 中西さんが、文化を守るためには、経済、経営の感覚が必要だ、プロの感覚が必要だというようなことを最初におっしゃったのですが、お話をうかがっていて、文化を守るとかつくりだす、あるいは環境を個性のあるかたちでつくって維持していくとかいうようなことは、目先のソロバン勘定ではどうにもならないところにすぐ突き当たってしまいますよね。それを経済の感覚を持ち込むことでうまく両立してしまつた。要するに、今の経済論の限界を、現実にある地域社会のなかで超えた運用の仕方をなさっているわけです。その意味で極めて先進的なモデルであるという印象を受けました。その論理が理論として、あるいは共通の価値観としてもう少し広まれば、普遍的な手法にもなりうるような気がします。

中西 今日、ある証券会社の人と話していたんですが、数字は人格であると言うわけです。おそろしい話でして、私はとにかく、資本金が大きいとか売り上げが大きいとかシェアが大きいとかいうのは賞賛にならないと思っっている人間なんです。要は何をしているかというのがいちばん大事なことであつて、たとえ小さくてもキラッと光っている仕事のほうが大事だと思っ

ているわけです。

私は、田舎まんじゅう屋のおっさんがとにかく一生その田舎まんじゅうだけをつくった、それが文化そのもの、いちばん大事な仕事だと思っているわけです。ですが、大企業は数字は人格である、それは社是だというわけです。これはたいへんなことですよ。暴力団に金を貸そうが、どこに金を貸そうが感覚的には一緒なんですね。

すべてがそういう企業感覚で賄われていく時に、少なくとも地域に残った人間が、そういう感覚ではない生活をどうしたらできるかということが、われわれに課せられたいちばん大きな問題ではないかと思います。

ですから、小さくてもよい、東京に負けない篠山があるとしなければならぬ。日本の村を考える時に、そのことが底辺になかったら生きてはいけません。

米山 実際に篠山という場所を考えた場合、宝塚市、三田市までは都市近郊であり、そして三田の北であるこのあたりは都市近郊の外側というところでしょう。そしてもう一步、北山(京北町、美山町)まで行くともう過疎地です。

過疎と過密の接点である近郊のひとつ外側に位置するのが篠山です。大都市の中心まで通勤するのに、汽車で一時間から一時間二十分かかる、そうした意味での「生き残り」というわけです。「生き残り」という言い方はふさわしくないかもしれませんが、ともあれ篠山はどういうふうな進路を取ればいいのか。

こうしたボーダーの地域が研究者の関心をいちばん惹きつける場所といえますね。

◆「小なりといえども」という誇りの持てる地域教育を

私のなかには、いちばん大事なものは教育行政だという気持ちがあります。今、突破できないいちばん難しい問題は教育です。篠山は最終的には人材を養成して外へ出す地域、人間を輩出する地域なんです。そのためにも教育行政が大切です。

教育に対する啓蒙をずっと推し進めていって、最終的には教育長はもちろんですが首長も教育行政の大切なことに目覚めていってほしいと考えています。

舛田 教育行政が大事であるということはわかりますが、たとえば教育行政のなかでも学校教育に関する部分というのは、文部省からものすごい締めつけがあつて動きがとれないわけです。

中西 学校教育に関する部分は、文部省に任せなければならぬことが多いでしょうが、「社会教育」がありますし、また、よく出る言葉ですが、「地域に根ざした教育」があります。

しかし、教師や教育委員会は「地域に根ざした教育」ということをよく言いますが、実際は全然根ざしてなんかいない。単に児童生徒のみではなく、一般住民に対して特に「教育」の持つ大きな意味がある。過疎の問題などというものは、そこに住

む人間の誇りの問題なんです。それを回復するのが教育の課題
というか、「地域に根ざした教育」の本当の姿だと思っ
ているわけですね。

学校教育はもろんなかなか難しいですが、社会教育とい
った問題についても、現状はいわゆるコミュニティセンターを中
心とした「福祉的」社会教育で、すべてが甘やかし教育です。
厳しく本物を求めるということがなくなっている。いいものを
育てることができない。

「人口が少ないからダメだ」と思ったら、生きていけるはず
がありません。「過密」は確かにあって、息苦しくなったら過
密です。そういう意味では、満員電車は過密である。しかし、
がら空きの電車でもゆったり座っているなど思ったら、それは
「過疎」でありまして、生活空間が豊かやなあとさえあれば
いいことだと思えます。「過疎はない、過密はある」と私は理
解しています。

ですから、「小なりといえども」であって、「大」が必ずしも
いいことではない。本当の焼物のあり方はどういふものである
かということを私は丹波の窯場の人たちにも知ってほしいと思
いますし、篠山の生き方はどんな生き方がいちばん正しいかと
いうことを、篠山の人にいちばん理解してほしいと思います。

それは、やはり地域の教育が教えなければならぬ。経済活
動をやっている人間がそんなことを言うよりも、最終的には、
教育行政に携わっている人間が考えていき、教えていくべきで

はないかと思えます。

われわれの活動の背景には常に、丹波篠山に誇りを持つこと
があります。その誇りを持てる教育こそが、いま必要とされて
いるのです。

(第二十四回 一九九一年六月五日)

情報発信地としての農村

「秋田県大潟村の村づくり」

●講師 宮田正植・秋田県大潟村村長

現秋田県ポート協会会長、(株)ルーテル大潟社長

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／筑波大学教授 宮本千晴／(株)砂漠に緑を 米山俊直／京都大学教授

秋田県の大潟村は、日本第二の湖、八郎潟を干拓し、国のモデル農村として、一九六四年秋スタートした。それから約三十年。一戸当たり全国平均の約十倍の広さの農地は、その後始まった生産調整のなかで、順守派、過剰作付派の対立を生んできた。

しかしこうした対立も、三十八道府県からの入植者から構成される村のエネルギー、多様性のあらわれともみることができ。実際、広大な干拓地を走る、高速道ともみまがう直線道路を見ると、従来の農村の因習とはおそらく無縁の場所という印象を受ける。

研究会は、ウルグアイ・ラウンド最終合意案の提示を年末に控えた一九九一年秋、農業者の方々から、今後大潟村の生きる道についての生の声を聞くべく、大潟村を訪れた。以下はそのなかから、村長宮田正植氏が語られた、大潟村が抱える問題と将来ビジョンである。

宮田(正) 大潟村の村長の宮田でございます。よろしくお願い申しあげます。

大潟村は、日本の農業発展のモデルとなり得るような営農形態、経営規模、営農技術、生活環境等を充実したモデル農村を目指して、昭和三十九年につくられた村です。

当時の農業の流れは、農業基本法のなかの規模拡大、選択経営拡大の方針に沿って、将来的にコスト低減、競争力のある農業を目指そうというものでしたから、このような新しい大規模な村がつくられたわけです。

当時、私自身も規模拡大は時の趨勢と思ひまして、もといた村では集落で二、三番目ぐらいに大きな農家でしたが、この程度ではダメだと思ひまして大潟村へやってきたわけです。今、振り返ってみますと、国がそういった将来見通しをしたことは極めて正解だったと思ひますし、事実、農業は規模拡大時代に入っていると思ひます。

ただ、大潟村がつくられたその考え方自体は極めて正解ではありませんが、日本の農村、農業というものに対しては何ら改

革、改造がおこなわれなかつたわけです。ですから、テストケースの大潟村だけが一つポツンと誕生し、あとに続くものが全然なかつた。そして現在、日本の農業は内外の圧力によってお手上げというところにきています。

規模拡大の施策が結局テストケースだけで終わってしまったというのは、結局、行政や政治の怠慢と言わなければならぬと思います。

◆「経済原則」と「理想」のぶつかる場としての大潟村

大潟村の農業経営ですが、入植者はそれぞれ一五ヘクタールの面積を与えられました。ところが、一五ヘクタールのうち、稲と畑作物の作付け契約面積はほぼ同程度でしたが、畑作については奨励金は一切出ないという問題がありました。

また、干拓地のヘドロ土壌ですから、畑作をやっても最初のうち失敗例が非常に多かつた。その点、米は最高に適している場所でしたから、十俵ぐらいはわけなくとれる、苦勞なく儲かるのが米だということがわかつてきた。

それで、生産調整に協力しないで全面稲作をやっていくという農家が増えてきたという経緯があります。

それが最近まで続いており、生産調整に協力しない人が四七%まで増えた。協力している方は五三%ぐらいです。

なぜこういうふうになってきたかという、ひとことで言う

と儲かるからです。全面稲作をやるのは結局、高適な農業の理想像を描いてというのではなく、畑作よりも米をつくったほうが儲かるという事実による。現在の形骸化した食管（食糧管理法）に便乗して金を儲けるためには非常にいい環境であつたということですが、結局、生産調整政策のもとでは、全面稲作でヤミ米を売ってやっていくのがいちばん儲かる仕組みになっているわけです。

私自身としては、必ずしも生産調整を好むものではありませんけれども、やはり生産調整はしていかなければ日本の米は守っていけないだろうという立場にたっています。ですから、先ほどのパーセンテージからおわかりかと思いますが、村長になって十四年ぐらいいになりますが、いつもすれすれで当選しています。

一五ヘクタールを水田扱いするという問題についても、生産調整に従わずに勝手にたくさん米をつくり金を儲けても、短期的には儲かつたようにみえますけれども、長期的な村の発展からみると疑問だという立場をとっています。

ところが、村長の言うことを聞くと一年間で五百万円ずつ損をするというのが通り相場になって、だんだん人が離れていくということが起こってきた。

そこで、国や県と交渉し、最初は半分程度の制限だった稲作を一〇ヘクタールまでにし、次に一二・五ヘクタール、最後には一五ヘクタール全部までというように、水田取り扱いを段階

的に認めてもらうようにした。これには十数年の歳月がかかりました。現在は、一五ヘクタール全面水田取り扱いということになりましたから、自分の持っている土地から転作した分だけは全部奨励金の対象になっています。

今では、全面稲作の人と転作に協力した人の所得を比較した場合に、ほとんど差はなくなり、並んだといっていると思います。一五ヘクタール全面水田取り扱いというこれまでの村の最大の課題がまず解決したということになります。しかし、解決すれば、皆が転作に協力してもいいはずですが、そうならない点が難しいところです。

世間では、こうした大潟村の現状を取り上げ、「だから、米の自由化をすべきだ。でないと、日本の農業はよくなるまい」と、いかにもカッコいいことを言っていますが、村民にしてみればしらけた話に聞こえます。たとえば米が安くなれば、一切米をつくらなくなつて別のものをまたつくるでしょう。

ですから、一部の世間が言っていることと実態とはまるで違つたと私はみています。農家といえども社会奉仕で生産するのではありませんから、結局、米が安ければ誰もつくりたくないわけです。高品質少量生産になるのではないかと、趣味的につくるのが残るとか巷では言われていますが、そうしたことはまずないと思うほうが正解です。ことに、経済感覚の発達している人の多い大潟村の人たちは、明日からでも別のものへ転換するでしょう。

今は米を多くつくることで国に叱られているけれども、今度はずつとつてくれと国から頼まれるかもしれないと私たちは笑っています。経済原則の変化によってまた流れは大きく変わるだろうと思います。

大潟村は、各戸一五ヘクタールで営農していますが、それは水田が全部であろうと、あるいは田畑複合であろうと、規模としては現行制度ではかなり強力なものと思います。ですから、他地域のような後継者不足という問題はここではみられません。ほとんどの家で後継者がいます。最近少し変化はありますが、大学を出るとおおむね村に戻ってきますし、お嫁さんも、少し窮屈な面はあるけれども、まずまずくるという状況です。

しかし、現行制度では強いが、自由化になればどうなるか。これは推測ですが、米専業ですと、いちばん弱いのではないかと思います。通称アキタコマチという良質の品種があるので、少々安い米が入つてきても生き残れるといった予想をする人もいますが、私はそれほど甘いものではないと思います。現状では、アキタコマチなどのおいしい米を単品で茶碗で食べる比率は極めて少なく、混米で食べる需要のほうが莫大な量を占めています。

そうした純粋なおいしい米への需要が頭打ちとなれば、価格の暴落は目に見えているし、混米用やその他の材料用の価格もどんどん下がっていくに決まっていますから、アキタコマチであろうとコシヒカリであろうと、先が見えている。

つまるところ、一五ヘクタールの経営規模だから自由化にももちこたえられるということには全くならないでしょう。むしろ逆に弱いのではないかと思えます。米単作の場合のほうが、深刻な状況になる。したがって、米を中心としつつ、米以外のものと組み合わせさせた農業の確立ということが、わが村の最大の課題であると思えます。

◆ 恵まれた土壌を生かして田畑輪換を目指す

そこで、大潟村の場合は田畑輪換ということを目指しています。同じ場所を今年も田んぼにして、来年は同じ場所を畑にする。次には、またそれを入れ替える。一年ないし三年に一回、畑にするというやり方ですが、この方法は最近非常にいい効果を生んでいます。

農薬が少なくすみますし、肥料もそれほどいらぬ。それにもかかわらず雑草があまり生えないという利点があります。一般的に、大潟のようなヘドロ土壌の場合には水田連作をおこなっている、だんだん昔のヘドロに戻って軟らかくなってしまふという問題がありますが、畑にすると、ある程度乾いていく。したがって、土壌学的に見れば田畑輪換が最も望ましいわけです。

これからの大潟村の生きる道は、規模拡大のみに走るのではなく、この規模のなかで所得をどう増やしていくのかにあると

思われます。そうだとすれば、複合の田畑輪換体系のなかから可能性を見出し出していかなければならない。

幸い、わが村は土地改良、農地の基盤整備が非常によくできているという点では、恵まれた環境にあります。用排水を完備し、手入れをして暗渠にすれば、既存の水田よりも非常に良質の圃場になります。

また、ここは、土壌的にはまだ新しい土地ですから土に病原菌があまりいないということ、さらに微量栄養素、カルシウム等を中心にしたよそにない新しい養分がいっぱい含まれています。それらが作物に吸収されますから、特にメロン、果菜類などは、同じ品質でもよそに比べて格段においしいといった特長もあるわけです。

地形的にも、ここは風通しがいいというか、全くの原っぱですから、風が強い。そういう環境では、病害虫の発生が少ないんです。

ですから、いま大潟村では、消費者と提携して、それらの条件を生かした自然米とか有機米の栽培がさかんになってきています。自然米には肥料も農薬も一切使いません。畑にしたものを今度は水田にするというようにすれば肥料をやらなくてもいいわけです。除草もトラクターに動力除草機をつけてやっている。こうした自然米づくりのノウハウが確立されています。この自然米は通常のアキタコマチの販売額より、六十キロ当たり五千五百円高くなっています。

有機米は、カントリー公社が経済連經由の正規ルートにのせて、約七方から十万俵ぐらゐの契約をしています。

畑作もいろいろ工夫していますが、なんといっても歴史がまだ浅く、米よりは技術的に遅れています。先ほど述べたように、一五ヘクタールの位置づけが決まったところなので、今後、畑作をやる人はじっくり腰をすえてやっていこうかという感じになってきています。ですから、これから畑作技術は急激に向上すると思っています。

畑作の場合は基本的に、大麦とその後作の組合せというパターンで、大麦プラス大豆、大麦プラス小豆、また大麦にカポチャというタイプが主です。一部、メロン、カポチャの本作、大豆、果樹もありますが、穀物生産が主流です。

今後、全面稲作をやっても面積が一五ヘクタールに限られているとすると、米作の発展の可能性は少ないでしょう。一五ヘクタールのなかで発展の可能性をさぐるとすれば、米以外の作物に活路を見い出すというのが今後のわが村の課題であり、それに力を入れていくことになると思います。

◆共同化の難しさ

安達 畑作をかなりやる農家と米中心の農家と分かれていくのは今のお話でよく分かりました。しかし一口に畑作といっても、大麦や豆ならかなりの程度まで機械化ができますが、カポ

チャとかメロンはあまり機械化はできないのではないですか。そうなる、規模的にも限界があるし、人手の確保の心配も出てきますね。

宮田（正） それはあります。大潟のメロンは、どこにも負けない味のいいものができるのですが、作付け面積は少なくなってきたのです。最大の原因は人手不足です。

大潟村の場合、人手は村の周辺に頼むのですが、その周辺部も若い奥さん方は新たに誘致された工場へ働きに出かけるようになってきましたし、一方、年配のおばさん方は昔の農作業の技術を持っているわけですが、だんだんと高齢化してきている。人手の問題で作物の伸びが抑えられるということになります。

安達 資材と金利を除いた、米農家の第一次生産費はどれぐらいですか。

宮田（正） 通常、大潟村は五〇%程度です。ただ、他と比較してみますと生産費はそれほどは、下がってはいません。なぜかという、三〇ヘクタール規模に見合った機械の導入など、ものすごい過剰投資をしているのです。この点はこれからの最大の課題だと言われています。

当初、大潟村は共同経営でスタートしたわけですが、国が計算をして、「コストを下げるために共同でやりなさい」と、五人ないし六人で六〇ヘクタールぐらゐの土地を持って耕作することから始めた。しかし、この方法は崩れました。なぜ崩れたかというと、共同経営ではお互いにもたれ合いで、生産力が上が

らない。そして、人間関係がこじれて、おれだけ苦労しているのに、分け前は同じという不満からガラガラと崩れていったんです。共同化のテストケースとしては、極めて明瞭な結果が出たわけです。

そうした解体のあと、個人で営農するようになった人の生産力はぐんと上がっていった。しかし、個人になって生産力が上がっていくと、大きな機械を買って過剰投資がちになり、せっかくの生産力の上昇分も食われてしまうという状況になっていきます。

ただ、現在の制度のなかでは、米はどんな方法でも売れるので、個人でそうした大きい機械を買って多少効率が悪かろうが、今はまだ何とかやっていけている。ですから、村の現状に厳しさが出てこない、共同化にはならないと思います。

加藤 だいぶ以前ですが、五、六軒単位グループの共同経営で大型機械を使用し、グループごとのうちわに名前を書いて公民館に張ったりしていた時分にこちらにうかがったことがあります。それがうまくいかなかったって個人経営が始めたのは何年頃ですか。

宮田 (正) 入植が始まってから七年目ぐらいからですね。

舛田 機械の共同利用がうまくいかなかったというのは、入植世代の場合ですよ。世代交代で若い人たちの代になれば、また新しい方法が出てくるんじゃないでしょうか。第一世代の後継者たちの意識はどうでしょうか。

宮田 (正) 後継者が百パーセント実権を握っている人もいますが、おやじの権限というのは、この場合はまだまだだよより強いんです。自分が入植して一五ヘクタール獲得したという自負があるものですから、息子のほうは、おそらくよそより少し小さくなっているでしょう(笑)。息子も強くなってきたのでしょうけれども、まだ一人でバツと新しいことを展開するのは難しいのかもしれないね。

ですが、時代の社会的な条件変化があることだし、徐々にではなく、一気に何か新しい展開があるという可能性は考えられると思います。

◆龍神「八郎太郎」を祀る

宮本 八郎潟は、海へは開いています、水が入ってくるのはどこからですか。

宮田 (正) この周辺の山から出ている川が日本海へ流れ出ていますが、大きい川ではありません。

八郎潟は防潮水門によって海への開口部がとめられたため、閉鎖水系になってしまった。そのため、だんだん水質が悪化していることが問題になっています。その水をきれいにする事業が予定されています。

この飲み水は、最初は地下水を汲み上げていたのですが、鉄分が含まれていたり蒸発残留物が残ったりして非常に問題が

あるというので、今は正面堤防の浸透水を使っているんです。残存湖のなかでは正面堤防がいちばん水のきれいな場所です。堤防自体は百五十メートルぐらいの幅があります。

しかし、残存湖全体も汚染の傾向にあるので、将来的にはこれだけに頼っているのは難しいということ、いま八郎潟側ではなく山手のほうにダムをつくつてもらっています。そこから飲料水を引くことを県にお願いして、今年、調査費がつかまりましたので、五年か十年のうちには飲料水はそちらからの取水に切り替わるだろうと思います。

宮本 残存湖が汚れるといつても、まさか、どぶ川のように汚れるわけではないでしょう。

宮田（正） ヘドロがたまつてきて、水そのものに透明度がなくなつてきています。干拓地では、ある期間が過ぎれば当然ヘドロが溜まりますから、事業を起こした国が本来、車検のように定期点検すべきなんです。あちこちに何十ヘクタールもの空き地を、ヘドロを浚渫する場合の場所として最初から国によって計画的に空けておいてあるわけです。

宮田（登） 全然別な話で恐縮ですが、年表によりますと入植して十四年ぐらいい後に大潟神社ができあがりましたね。

新しい村をつくる時には、入植者の出身地のお宮さんをもつてくるケースが、日本全国の村では多いわけです。それによつて村がつくられていくんですが、大潟神社がつくられたのも、かなりいろいろな検討の上といった経緯はありますか。

宮田（正） 当初から神社をつくろうという声があった一方で、ここは国の土地を払い下げた公共用地でしたから、神社はダメだという声もあった。

しかし、だからといっていつまでもそのままではいけない。つくりたいという人が圧倒的に多いので、当時の職務執行者の村長さんも「じゃあ、思い切ってやろう」ということで弁護士に相談しました。

宮田（登） 神様は、どこから勧請しましたか。

宮田（正） ここには三重県からきている人がかなりいるので、三重県知事から伊勢神宮にお願いしてもらつて、遷宮のお社を一つそのままいただきました。

そうして、天照大神、豊受大神が伊勢からきました。そこで一つまた問題がもち上がりました。この土地の神様の「八郎太郎」をお祀りしないのはおかしいという意見が出たわけです。

そこで、伊勢神宮に相談したら、素性の知れない神様はダメだときたわけです。地元では、「そんな理屈がどこにあるかわれわれは八郎太郎が入らない神社なんかいらぬ」と言うんですね（笑）。

たいへんなことでしたが、また向こうへ再三お願いした結果、「正式には許可しないが、あんたの方が勝手にやるのは仕方がない」と黙認してもらつたような感じになりました。この八郎太郎も片側に入れて、結局三柱を合祀することになります。

宮田（登） それは面白いですね。やっぱり八郎潟の神様は龍神様ですものね。

宮田（正） そうですね。ここの周辺には昔から八郎太郎を祀っているお社があちこちにあります。やはり、大潟神社の一角に独立して八郎太郎のお社を一つ建てたほうがいいのじゃないかと思えます。ここ何年かのうちに一つ建てたいと考えています。

米山 八郎太郎のお祭りを別につくられたらいいんです。春祭りがいいかもしれませんね。春、雪が解けてこれからという時に始まる八郎潟のお祭りは楽しいものになるでしょう。

加藤 神社のお話が出たついでにお墓のことをうかがいたいんですが、入植者の皆さんは、それぞれ北海道から沖繩に至るまで全国各地から集まったわけですね。亡くなった方もいらっしやると思いますが、お骨はそれぞれの故郷に帰りますか。それともここに墓所を決められるのでしょうか。

宮田（正） 村で墓地公園というのをつくって、墓石も統一して永代使用権で貸しています。八、九割ぐらいの人がこちらへ墓を移し、そこへ納められています。

また、村民センターでは、村の社会福祉協議会が大潟村方式という葬式のかたちをつくっているんです。これは葬儀屋さんを指定して、十万円、十五万円というふうに世間より割安にしています。結婚式というと公民館結婚のような感じでしょうか。大潟では、この世で甲乙をつけないように、あの世でもそうな

んです（笑）。

◆モデル農村の持つ意味を改めて問う

米山 大潟村の一戸一五ヘクタールというのは、たいへん恵まれた条件だと思います。普通は一・五ヘクタールあれば精一杯という農家がほとんどなのに、ズバ抜けていい条件で営農しているわけですから、もうちょっと米を続けてつくったほうがいいということにはならないでしょうか。

宮田（正） それはいちばんの基本問題に触れることですね。大潟村は米作がいちばん適しているし、生産調整に従わずにつくれば、今は徹底的に儲かるわけです。しかし、そうしたことが長い目で見て果たして日本農業のためになるか。また、八郎潟を干拓した意味がどこにあるのかということになる。

小さい面積を大きくすれば儲かるというのは、何もこんな場所ですらなくともわかることなんです。わざわざ税金を使って干拓して村をつくらなくたって、倍になれば倍儲かるぐらいのことは証明できる。

したがって、本当に大潟を国のモデル農村にするのであれば、最初から法的な規制をしてここでは全面稲作をさせることとする。米は当然安くできるから買値も安くするというように、法律的にきっちり枠をはめてしまわなければモデル化した意味は出ないわけです。

大きい村だから米をつくらせればいい、それが高い値段で取り引きされるというのでは、意味がない。

安達 国営にしてみんな国家の小作にするというのはどうですか。地代負担がうんと軽くなるのでは。

宮田（正） 入植当初のアンケートでは、自分のものにした人と国から借りるだけいいという人と半々だったんです。

このあいだオランダのフォルカー博士がきて講演会をやりました。オランダの干拓地では最初は土地を農家に売ったが、その方式ではダメということで、今は一切売らずに国が貸しているということですよ。

なるほど、やっぱり先輩国は賢いと思えましたね。日本も、もし貸すやり方でやっていたら、入植者も国の方針に沿って営農したであろうし、今のような対立もなかった。同じ目標で努力できたはずですよ。

安達 最初からいちばん肝心なところに穴が開いていたんですよ。投資金額を早く回収しなくてはという気持ちが生産調整を守らせないわけです。

宮田（正） 最初は私も生産調整反対ということで、大潟村のような場所ですこそテストケースを試みるべきだという考え方だったんですが……。

安達 米はどのようなかたちで自由化していくのだろうか。やはり自由化の方向へいくのだろうかと思うんですが、いちばん怖い関税方式へだんだん傾きつつあるので心配しています。その

場合、アメリカのようになってしまいかもしれない。

つまり、減反をやりたいという農家に対しては米を少し高く買う。しかし、減反をやらない人には「みんなつくっておけ。その代わり、面倒は見ないから」という方向へだんだんいくのではないかという気がします。

宮田（正） 結局そうなるでしょうね。それよりほかないでしょう。外からは輸入しながら、内では生産調整をやれと言ったって無理というものです。

米の自由化問題に対しても、まず全国の農家が一緒になって汗を流して米を守るように頑張らなければならないと思っています。それでもダメな場合はやむを得ない。しかし、そういう努力をみんなと一緒にやるということに意味があるわけで、その意味というのはまたモデル農村をつくった意味でもあるということですよ。

単に経済原則の宣伝になるということで、大潟村を誕生させたわけではない。全国にいくつかある干拓地のうち新しい村を独立してつくったのはこの大潟村だけなんです。あとはみんな既存の町村に併合させた。ですから、新しい農村というものモデルをつくるという夢があったはずですよ。

そうした夢を、過剰作付などによって大潟村の村民自らの手で壊すということはダメだと、私は意地でも頑張っているのです。ここはその意味で、経済原則と夢やロマンとの激しい戦いの場というわけです。

◆農業のメッカ、また都市との交流の場として

富田（正）では、今後の村の目標をどこにおいたらよいか。

当面農業のメッカを標榜するということを計画しています。ここには、自立できる農家群がたくさんある。また、県立の農業短期大学、県立の生物工学研究所もありますし、それに付帯して今度できたアキタバイオミックスエリア（生物資源総合利用センター）もある。さらに、農業試験場の支場もあります。農業試験場の本場もここへ誘致したいと考えておりまして、「農業のことなら何でも大潟村」と言われるようにしたい。試験研究機関など様々なものをここへ誘致していきたいと思っています。

それから、「混住化社会」をつくりたい。大潟は、学校の先生、役場、農協職員だけが勤め人で、それ以外は全部農家という特殊な構成になっている。多種多様な人間がごちゃごちゃいたほうが社会の見方も広角になるだろうということから、混住化社会の形成を目指しています。

現在、村では新しい発展計画を作成中ですが、そのなかの一つに「文化入植」というのがあります。わが村は農業入植から生まれたわけですが、今度は文化入植があってもいいではないか。文化人にわが村に住んでもらい、ここが情報の発信地になる。それを応援することは、大潟村の農業にとって必ずよいイ

ンパクトを生むと考えています。

また、都市と農村の交流ゾーンとしての方向も伸ばしていきたいと考えています。ちよつと前ですが、世田谷区の校長会の皆さんが、子どもたちをぜひ大潟のようなところで体験学習をさせたいものだと来村されましたが、子どもたちを受入れるような宿泊施設があいにくありませんでした。

ところが、わが村にも温泉が出、「ポルター湯の湯」という温泉保養センターが今年の二月にオープンしました。そうした温泉等を活用しながら宿泊研修施設を整備し、都市と農村の交流を図っていききたい。それがたとえば、ここで生産された農産物の流通にも結果的に結びつけば非常にいいと思っている次第です。

これだけの広さ、自然を生かしていけば、他のリゾートとはひと味違ったものを実現できるのではないかと考えています。

大潟村の人間は、総じて非常に変わり者という評もあります。進取の気性に富むというか、とにかくエネルギーッシュでパイタリテイがある。それは全国から入植していることのよさだと思えます。

これまでは、そうしたよさも、ヤミ米という暗い面に対立抗争しているといったイメージで世間では受け取られてきました。現在では基本的な対立点は、ほとんど無くなったので、今度からは明るいほうへエネルギーを向けていきたいと考えています。

「人がつくった」大潟村ですが、よくよく考えてみると、よ

そにない発展の可能性を秘めたものがいっぱいある。それをわれわれも再確認し、村を発展させていきたいと思っています。

加藤 たいへん盛りたくさんのお話をうかがいました。今日はどうもありがとうございます。

(第二十五回 一九九一年十一月八日)

漁業と観光のはざまでの町づくり 「伊豆・松崎町」

●講師 山本源一・静岡県松崎町助役(当時)

【出席者】高橋半右衛門／松崎町漁業協同組合組合長 山本忠徳／松崎町産業観光課長 加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 川喜田二郎／中部大学教授 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 須藤 護／放送教育開発センター助教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮田 登／筑波大学教授 宮本千晴／(株)砂漠に緑を 米山俊直／京都大学教授

伊豆の西南海岸に位置する松崎町は人口約一万人、温泉や美しい海、さらに昭和五十九年に開館した、江戸末期の町出身の漆喰芸術饅絵の名工「伊豆の長八」の作品を集めた「伊豆の長八美術館」も話題を呼び、年間三五〇万人の観光客を数える。美術館は建物自体も現代工法と漆喰を使った左官技術によりつくられており、併設の町営レストラン、重要文化財の「岩科学

校」とともに、町の活性化を企業感覚で図るべくつくられた「松崎町振興公社」によって経営されている。

「岩科学校」は明治十三年に建てられた、正面にバルコニーを持つ和洋折衷の木造建築で、二階の作法室は、壁面上部四方ぐるりと、長八作の百三十八羽の鶴が太陽に向かって飛翔する姿が一羽一羽異なった姿で描かれており、明治期の地元の人々の教育に寄せる情熱がうかがわれる。

研究会一行は岩地、石部、雲見三漁港を見学した。岩地は遠洋漁業で賑わった時期もあったが、二百カイリ問題、減船政策等で、昨春秋には最後のマグロ漁船が姿を消し、現在は沿岸漁業の港となっていること、雲見漁港もテングサ採りで好景気だった時代もあったが、今は民宿経営の比重が大きくなっているとのことである。

長八美術館が脚光を浴び、なまこ壁の通りが建設省の「手づくり郷土賞」を、また「うるおいのある町づくり自治大臣賞」なども受賞しているが、生業としての漁業は後継者難であり、過疎化、高齢化の進むなか、観光を核とした町づくりの今後の方向等について議論が沸いた。

◆生き残りを賭けて

山本(源) ちょうど今、われわれは第三次総合計画の策定作業中ですが、産業界のバランスを保ちながら地域の生き残り

を賭けるべく総合計画委員会で審議し、基本構想、基本計画がほぼ承認の段階までできたところです。しかし、このところの日本経済、特に製造業ではハイテク分野が不況業種に指定されるということを考えて、相当無理をして、企業誘致など第二次産業などへ視点を向けてきましたが、そうした「総合化」への視点ははたして適切だったのかどうか、自ら問い直しているところです。

第一次、第三次産業については漁村の皆さんの力によって、民宿兼業というかたちで何とかもちこたえてきたのですが、これが五年後、十年後、二十年後というスパンで考えた時にどれだけ民宿兼業が残っているだろうか。観光計画もたいたいま作成中ですので、的確なデータを取るべく作業中です。

かつてわが町は二百二十軒近い民宿があったのが、現在百九十几个、すでに一割以上の廃業がある。五年たち十年たつと、民宿兼業が許されるような産業構造であるかどうか。国土庁流にいう非経済文化圏にある地方は、今後どういうかたちで生き残れるのかということは非常に問題です。

加藤 伊豆でも東海岸のほうの熱川とか下田とかは、以前に比べるとずいぶん立て込んできたのではないですか。

山本(源) それが反対なんですよ。熱川を区域に持つ東伊豆町、「踊り子」の河津町、下田、南伊豆、松崎、西伊豆、賀茂と、一市六町村、これらを賀茂地区というのですが、全データを分析すると、東伊豆、下田ですら危ないのではないかと言

われています。「伊豆急行があるからわが町は活性化している」などと言うのは大間違いであると、このあいだ賀茂地区の会合で下田の方が言われていました。第三次産業一辺倒政策というのがやがて行き詰まってしまう時代が来るだろうと、皆このあたりでは感じています。だからといって、第一次産業に夢ありという政策がとれるかというところ、そうでもないところにジレンマがある。

というのは、帯広、十勝の開拓史上で「開拓の神様」と言われる人が、わが町の出身者なんです。今のお金で三億円ぐらいポケットに詰め込んで開拓に乗り込み、失敗した人がほとんどなか、「開拓の神様」と言われるまでになった人がいるのですが、松崎では非常に名門の依田一族の出身なんです。その次男坊なんですが、「こんな狭苦しいところにいるよりは、おれは大平原に向かって行く」と言っただけで出ていきましたね。

帯広の子どもさんが姉妹提携でわが町を尋ねてくることがありますが、松崎というのはさぞや広いところだろうと思っただころ、バスに乗って両手を広げると、両方の手が山に触るぐらいだったと、帰ってきて言っているそうです。子どもらしい非常にうまい表現だと思いますが、そうした制約の多い環境では、農業に夢あり、林業に夢ありという政策もとれません。では、せめて海はどうか。静岡県の漁信連の親分はわが町出身ですし、すぐ隣町から漁連の大親分が出ています。漁信連の親分とは、月に一度は飯を食いながら漁業問題等々で議論してい

ます。

しかし、あれよあれよという間に、わが町に遠洋漁業の大型漁船が一隻もなくなつてしまった。沿岸漁業や養殖漁業として問題にならない。これでは、一次産業に夢ありといった政策を打出しても、ウソということになつてしまふ。

では、観光一辺倒でいいのか。振興公社の直轄事業として、国民宿舎が本年度も最高の利益を上げていますし、長八美術館、美術館隣接の町営レストラン「カサ・エストレリータ」、重文・岩科学校などは順調に収益を上げています。確かに直轄事業はいいのですが、総体では地盤沈下にあるのではないかと、「うるおいのあるまちづくり」で自治大臣の表彰を受けたり、あるいは農水省の表彰を受けたりして、勲章だけ多くなるけれども、実は体質はけつして強くないのです。

「われわれの世代はもう終わりに近いから、あなた方がしっかり地域を考へて行政をやってくれ」と若い職員に言つてはいませんが、怖いのは、われわれの同級生が町内にだいたい二百七十人いるにもかかわらず、平成四年度の母子手帳の交付数は五十九で終わりそうだとことです。

こうした状況で、若者が地域に賭け、定住しようという気になるものをどうやって見出しらいいのか。確かに長八美術館をはじめ振興公社の事業が全国的に評判なので、視察団がひきまきらずやってくるのですが、展望はけつして明るくないのだから、松崎町民なら私はこうするということを、ひとこと言

つて帰ってくれ、と私は言っているんです。

川喜田 ではひとこと申します(笑)。これから当たるのは、「晴耕雨読」の「雨読」の部分で「雨が降つたらもの考へる」と読み替へた産業だろうと思ふんです。

ものを考へる産業というのは本当は学校の担当なんです、知識の詰め込みばかりやっているから、あれは雨読産業に入れるのも怪しい。本当の「ものを考へる」、「知恵を出す」ということが必要だと思ふんです。これは第五次産業ぐらいに当たるのではないかと思ふんですが、第一次産業と第五次産業の組み合わせが伸びるのではないかと。

今から二十年以上前に箱根へ行つた時のこと、私は関西の間ですから、タクシーに乗つて、「どうです。もうかりまっか」——このへんは観光産業でお金が落ちるんじゃないですかという意味で聞いたところ、「いやあ、ダメですよ」という返事。というのは、観光産業はもう頭打ちで研修所が花盛りなんです。会社の勉強の場、知恵をつけるためと保養を兼ねて、自然環境のいいところへ来るといふ流れが、その頃早くも出ていたわけですよ。

なるほどと思つて気をつけて見ると、東京の場合だと、東京を中心にして東は千葉県を呑み込み、西は静岡県を半分切り取るぐらいの範囲では、空気、景色、水がよい一等地は観光産業というより、「雨読産業」が占領しています。たとえば富士山の裾野を例に取ると、こんな景色のいいところに工場誘致なん

てとんでもないと地元が反対していましたが、はたして入り込んだのは帝人の研修所です。

第一次産業の次は第二次産業、そして第三次産業へ行くというような順番は愚にもつかないと思いますね。「晴耕雨読！」これですよ。

◆「血湧き肉踊る」ことが若者を引き止める

安達 民宿は明日の産業として、ますます繁盛するという絵は描けないですか。

山本(源) 後継者対策が問題です。現在の経営者は中高年ですし、わが子、わが孫を後継者として民宿営業をやっているというの、百九十数戸の民宿のうち三分の二もないのではないかと私は予測しています。

安達 でも、需要そのものはあるのでしょうか？

山本(源) 夏は十分ありますが、年間を通じてではないところが問題です。

安達 もともと民宿専業でなく、生業を持ち、兼業のかたちでやっていたわけですからね。だから、四シーズンではなく、二シーズン営業、せいぜいでも三シーズンということなんですよ。

高橋(半) 先ほど、三つ集落を見ていただきましたが、雲見はかつては確かに漁業が主で、民宿が従った。ところが、

今はひっくり返ってしまっている。また、そうでないと生活がなりたたない。

山本(源) 先ほど見学した岩地の集落——屋根をオレンジ色に塗って「東洋のコートダジュール」を目指しているところですが、私もあの集落は子どもの時から本当にいいところだと思ってきました。

最盛期(昭和三十五〜四十年)には遠洋漁業の船を六隻ぐらい持っていて、われわれの同年代でも、マグロ船に二年も乗ると家が軒建つという、高所得者の町内で最も多い地域だったんです。それがいつのまにか衰退し、びつくりしたことには、岩地集落の人口は、昭和五十二年のデータに比べて平成二年は二〇%減となっている。

最も愛せるいい集落であったのに、山が海に迫っていて土地が狭隘だから庭木も充分には植えられない。もつとゆとりある場所へ定住しようということで、何代か続いた自分の家を棄て、町場へ出てくるという図式です。

そこへいくと、高橋組合長さんのおられる雲見集落は、かつて中心部にずらっと田んぼが並んでいたわけですから、全部つぶして観光にすべてを賭けた。だから、岩地、岩部、雲見三集落のうちでは歩留まりがいちばんいいのです。

高橋(半) でも、すべて民宿に客が入った五十年代に比べると落ち込んできています。流行らない宿、流行る宿という優劣がついてしまっています。

安達 客が入る宿というのはどういう宿ですか。

高橋(半) 時代に合わせて設備をしていったところですね。それと、お客さんに喜ばれるように常に努力しているところですね。しかし、努力している家というのはやはり後継者がいる家なんです。後継者のない家は新しい投資ができない。したがって悪循環に陥る。いいところはいい方向に循環していくが、悪いところは悪いほうへどんどん循環していく。観光業はどうしても若い人がいないとダメですよ。

加藤 息子とか娘に後継者を限定せず、「民宿経営者求む」というかたちで広く募っては。清里のペンション群がそうですが、経営権を渡して、持ち主は配当を得るかたちにする。

高橋(半) それも一つの方法ですが、田舎だし、渡すと取られるんじゃないかと、気持ちの上で抵抗があると思う。

山本(忠) 集落意識がものすごく強いですから、外の人が集落に入り込むなんていうのはできないと思いますね。

川喜田 若い連中に居ついてもらおうと思つたら、血湧き肉踊ることがなければダメですよ。

一例を挙げますと、山梨県の南アルプスの入り口に、芦安村あしやすという山林大地主の多い村があります。ここでは、おやじさんの跡を継げば金には困らないのに、息子どもがみんな東京へ逃げてしまった。それは、血湧き肉踊ることがないからなんです。

一方、愛知県の渥美半島で「電照菊」といって、電気で照らして菊を栽培することをやっているんですが、ここでは息子が

ちがみんな居ついてしまった。「いま東京の相場はどうだ」「大阪はどうだ」「よし、売った」といったゲーム感覚が面白くてたまらないからなんです。

これもそうだと思うんですよ。民宿という静かな感じがあつて、それだと若者の流出は止められない。もつていく方向を考えなければいけないんじゃないですかね。

加藤 民宿はどうやったら血湧き肉踊りますか。

川喜田 だいぶ前からある傾向ですが、中身入れ替わり現象が起こっていると思います。

たとえば広島市の中心部から車で一時間も走つたような農村なのですが、過疎化して小学校が売りに出された。それを買つたのは広島市の中心部にある広島YMCAで、研修所に使い、YMCAのドル箱になった。過疎化して売りに出された田舎の施設を、都会からきた創造性産業が買う例が、気をつけて見ると全国にずいぶんある。これが「中身入れ替わり」です。そういうことなら、外からきたものにやらせる前に、過疎化した村が自らやつたほうが早いわけです。

その場合の需要は何か。いま日本でいちばん大きい問題というのは、国民の、特に若い層が土離れしつつあること、自然から離れていっていることです。親御さんたちがみんな悩んでいる。文部省をあてにしていたら全然ダメです。そこが一つの眼のつけどころではないかと思ひます。ついでに女性もやっつけますから、うまいこと捕まえたら嫁問題も解決します(笑)。

こういう例はたくさんありますよ。

山本(源) 研修所ということですが、わが町にある品川区の臨海学校が廃止され有料老人ホーム化することが大論争を巻き起こしています。臨海学園施設といっても、子ども専用というわけではなくゲストハウスのな、区民の保養施設も併設されているが、利用率が落ち込んでいる。なぜかというところ、「温泉もいい、夕日もいい、人情もいい。けれども同じ場所に何回も行くより、やはり新しいものを見たい」という言い分なんです。一カ所設置型ではうまくいかない、時の趨勢というのが区の撤退の理由なんです。

舛田 マリンスポーツで、地元の青年たちが指導できるようなものはないですか。私は山形なんですけど、蔵王のスキー場のインストラクターは周辺の農村青年たちがアルバイトでやっています。それがきっかけで結婚したという人もいます。

高橋(半) 松崎は長野県の安曇村と姉妹都市提携をやっています。われわれも一、二回行きましたが、あそこでは嫁に困らないというんですね。土地の青年がスキーを教えて、そこで交流して一緒になるという話でした。

安達 私も、そういう例は知っていますが、少数派ですよ。それをあまり拡大してとらえたり、「触れあえばすぐカップル」みたいな論は問題です。機会があるということとは確かに可能性につながりますが、つまるところは本人の力量だと思ふ。私はずっと農村を回っていますが、しっかりした奴はいい嫁さんをも

らっている(笑)。

高橋(半) それに、スキーをやるところの場合は、スキーが目的で来るんだから施設や食べ物にあまり金をかけなくてもお客は来ますね。ところが、われわれのところは、夏は海水浴があるが、ほかには若い者が遊んだり運動したりするものがないから、宿の施設をよくしたり、食べ物をよくしたりしなければならず、コストがかかる。

山本(源) マリンスポーツなどいろいろな提案があります。が、漁協の立場から言うと、生業としての漁業を守るために、遊びの水域に線引きをしなければならぬ。これがけっこう難しく、水上バイクの問題すら線引きに非常に苦労しています。

高橋(半) もっていき方もあると思うんですよ。昭和四三、四年頃でしたか、雲見集落が伊豆ではいちばん先にアクアラングを誘致したんです。漁協はもちろん反対でしたよ。

それなのになぜ踏みきったかと言うと、民宿に来て勝手に潜る客がいて、漁協の組合員が止めに行っても、また民宿の主人に文句を言っても、特に法律で禁止されているわけではありませんが、せんからちがあかなかつた。

しかし、時の勢いには勝てないということで、組合員を集めて、「現実はこちらまできているが、どうだろう」と意見を聞いたのですが、貝を採られるなどといった理由で反対が強い。そこで、採られないために監視をつけること、海の区域を限定する等の条件で、不平もありましたが踏み切った。

今では伊豆じゆうほとんどのところでやっていますが、当時、静岡あたりに行つてそんなことを話すと、ほかの漁協の組合長さん方ほとんどでもないことをやりだすと笑つたものです。貝も採られるかもしれないが民宿にはお客が入る。問題が全然ないとは言えないが、それより大きいものをとればいいではないかと踏み切つたわけです。

時の勢いというのは制しきれないものがありますね。それに順応しなければダメですよ。

◆観光産業のなかで「正月や祭り」を守るには

加藤 日本全国どこへ行つてもそうですが、よその人が入つてくるというのは、うれしいようで反面迷惑などところがあるのではないですか。

高橋（半） 人も車もジャンジャン来て、海が荒らされるだろうと非常に心配したこともありましたがね。

加藤 今では一億総客商売になつてしまいましたね。村落のなかでみんなで幸せに暮らしていたのを、客商売が生業になつてしまつたから、山に入つても、海に行つても、商売のことが言わなくなつてしまつた。

高橋（半） 昔を知っている私らにすれば、昔は貧しいながらもお盆はお盆、正月は正月、お祭りはお祭りでしたっかりと休んで楽しんでたものです。今みたいにぜいたくなものは食べな

かつたし、きれいな着物も着なかつたし、きれいなうちにも住まなかつたけれども、休みは本当のんびりしていましたよ。近所、親戚が集まつて、心ゆくまで楽しんだ。でも、今はそういうことができなくなつてしまつた。

加藤 かき入れ時になつてしまつた（笑）。

高橋（半） ええ。確かに物質的には豊かになつてきたけれども、そういう本当のゆとりというか、やすらぎはなくなつてしまひましたね。非常に忙しくなつたし、神経も使うようになった。

それに、今の若い人たちは人が休んでいる時に働くのはいやだと言ふんですよ。

川喜田 しかし、田舎で難行苦行をしたいという気持ちの若者もいっぱいいますよ。だいいち、昔の塚原卜伝とか伊東一刀斎というのは、東京や京都に住んでいましたか。そんなことはないんですよから（笑）。

山本（源） 観光産業というのは、人間らしく生きたいと考える時、本当に適切な産業と言えるでしょうか。

それというのも、私は正月から一度もうちで食事をしていません。今日もわが家では母子家庭がまた始まつたと言われているだろうと思いますが、役場の職員は職務柄、国民宿舎へ派遣されることが多く、私は前後七回、国民宿舎で正月の餅を食べました。

朝の七時半には「おはようございませう」と頭を下げはじめ、

夜は十時にならないと「おやすみなさい」を言えない。まして子どもや女房のことばかり考えていると、業績や人間関係の調整がつかないので、どうしても公務優先になってしまう。

とはいっても、われわれはやがて役所へ帰る日が来るだろうし、定年になれば「晴耕雨読」の日も来るということがわかっているからまだ耐えられるわけです。生涯この生活というわけではありませんから……。

家庭へ帰ると、「私は大学を出るまでお父さんに勉強を見てもらったのはたったの二回だ」なんて子どもに言われていますが、こう考えてくると、若者が生涯を賭ける産業としての展望が可能かという点で、やや問題がありますね。

米山 私は十分可能だと思いますよ。その場合、組合長さんがおっしゃったことが重要だと思うのですが、せっかくのハレの日に働かなければいけないというのをやめることなんです。そして、うちの町はこういうやり方だと誇りを持って民宿をやっている。松崎はそういう自慢ができる町ですよ。

先ほどこで、ヨットとか映画用の遣唐使船の製作など、松崎は造船がさかんだということを聞きました。漆喰の博物館が全国的に有名になりましたが、次には木造船の博物館をつくるというですね。そういう目玉をつくってどんどん客を引きつける一方、「お正月三日はうちの民宿は休みです」と誇りを持ってはつきり言えはいい。そうして、自分たちの祭りをきちつとやる。

つまり、自分の町をどれだけ愛しているかというアイデンティティが重要になってくると思うんです。アイデンティティという言葉は森谷勉久さんは「愛着心」と訳された。すてきな訳だと思いませんか。何でもいいのですが、どれだけ自分のアイデンティティを持っているか、愛着しているかが重要です。

もちろん景気はよくなったり悪くなったりしますし、環境問題も起こるでしょう。雪が降らないからスキー場もうまくいかなくなるかもしれない。しかし、日本全国それぞれのところでアイデンティティをしっかりと持てば、おれは生まれたこの町が好きだからこの町で生きていくという人が必ず出てくるはずですよ。松崎も組合長さんや助役さんのような人がいれば大丈夫です。

川喜田 松崎は素晴らしいものを持っていると思うんですよ。遣唐使船を試作したりしておられる。あれは大したものですよ。

北海道の旭川に真冬に行ったことがあるのですが、開拓時代の生活を扱った博物館があります。一カ所だけものすごく人だかりがしているコーナーがあったのですが、開拓初期の人はこうやってわらじをつくっていたとおじいさんが実演してみせて、来館者にも参加をすすめている。

若い連中は与えられるだけでは絶対に満足しませんよ。体験させるシステムをどんどんつくるべきです。

◆職人の町「松崎」

宮本 町なかを歩いていたら、鈴木さんという刃物屋さんの前を通りかかったんです。いい剪定バサミをずっと探していたのに見つからなかった。それがこの店にはあったんです。ハサミの種類がものすごく多いし、幅がほんの少ししかないようなカンナなど、品数が非常に豊富です。

お店の方の話によると、三代前から鋸鍛冶として商売を始めたが、この町は職人さんが多かったからこそまでやってこれたとおっしゃっていました。新しいかたちでの「木工」の研修や訓練などを、先ほど川喜田先生が言われた「晴耕雨読」の感覚でやれませんか。非常にきちんとした伝統技術があるわけですから、絶やすことはないと思うんですよ。

加藤 ここは職人さんの伝統があるんですね。長八記念館があるぐらいですから、いい左官職人もいるのではないですか。

山本(源) このあいだ沼津で漆喰鏝による作品の個展を開いた人もいますね。

宮本 先ほどの鈴木刃物店ですが、ノコの目立て用のヤスリが東京でなかなか手に入らないからついでに買ったんですが、このまま使うと切れなくなるからと、十分ぐらいかけて表面のめくれを削り落としてくれました。

山本(忠) 使うとすぐ切れなくなるからといって、買う時

に一回研いでくれるんですよ。そんなサービスをしてくれるんです。

安達 日本新党の細川さんですが、熊本県知事時代に宮大工の学校をつくっているんですね。最終的には大学にするということですよ。

球磨川のいちばん上流の過疎地の人吉(ひとよし)に工業高校があったのですが、その建築学科を土台として、短大、大学と格上げしていこうとしています。宮大工は一人前になったら収入はすごいし、職人さん自体が減っていますから、技術の伝承という意味でも重要です。

加藤 いま全国的に茅葺きの修理ができる職人がいなくなってきたいますが、福島県会津の田島町にはいるんですよ。こここの茅葺きの職人の腕はすごいんですよ。

須藤 会津の茅葺き職人は、関東地方一帯から山梨、静岡の東部あたりまで稼ぎ地域にしています。

加藤 このあいだ、ある旅館の由緒ある茶室が百五十年たつて、茅葺き屋根が相当傷んでいるが職人がいないと言っているので、田島町を紹介しました。

須藤 静岡県東部のあたりでも、別荘やちよつとしたあずまやの屋根葺きは会津職人のお弟子さんが手掛けていますね。

加藤 田島町は伊勢の御遷宮も手掛けていますね。

高橋(半) 松崎あたりでも屋根を葺く職人が昔はいたものですが、今はみな亡くなってしまいましたね。

須藤 かんじんの茅がないんですよ。ですから、今では富士の裾野の大野原の茅を買いつける場合が多いですよ。御殿場あたりでは茅の刈り取りと販売で生活している人がいます。

加藤 茅葺きのように需要はそう多くはないけれども、全国的に需要のあるものがいくつもあるんですよ。たとえば座敷の欄間ですが、富山と石川の境の福光がわりによくやつています。

須藤 それから大阪の欄間ですね。

加藤 茅葺き屋根や欄間のように、量的にはそれほどではないが全国的に需要があるものは、分業してどこかでやるべきです。

ところで漆喰職人「長八」が松崎から出たのはどういう理由なんですか。

山本(源) 長八さんは松崎で生まれて、子どもの時に左官屋に弟子入りして、江戸へ出て左官業に精を出していたんですが、漆喰でただ白壁を塗るだけでは面白くないといういろんな工夫を凝らし、狩野派の先生について絵の勉強もして、あのような漆喰の絵を制作したのです。顔料も特殊なものを工夫して使っていたようで、赤は赤珊瑚を粉にしていたようですが、よく分からないものも多く、現在分析中です。

加藤 下田から松崎へ来るまで、バスの窓から見ていますと、なまこ壁がわりに多いですね。防火、防水、防湿という意味なのでしょうか。長八さんとまでいなくても漆喰の伝統があるようですね。ちよつと面白い風景でした。

須藤 職人さんがけっこういるみたいですから、刃物とか、漆喰の壁とか、文化庁に職人集団として登録するといいですよ。重要文化財関係の仕事がまわってきます。

安達 団体じゃないとダメですか。

須藤 ダメです。でも三人以上だったら組合になります。

山本(源) このあいだ重要文化財の岩科学校の修復作業をしたのですが、文化庁の外郭団体の理事がきて地元の技術者を指揮してやつてのけました。

須藤 賃金が高いとはいえ、伝統技術だけで食べていくのは困難ですから、漁業、農業、あるいは商売をやりながら、合間に稀少技術を使った修復などをする複合的なかたちでないとい、難しいかもしれませんね。

◆「質のよい客」という潜在需要

神崎 現在の観光一般についてですが、「平均化」しすぎている点が大きな問題であると私は思っています。施設もよくして、サービスもある程度のマナーで統一しようということ自体はよいのですが、結局、お客のほうは差別化を求めているいろんなところを探し歩くという動向があります。

その昔、伊豆大島や宮崎などがポピュラーな新婚旅行先だった時代もありますが、その後そうした新婚旅行のお客をオーストラリアやヨーロッパにとられてしまったと、指をくわえてき

た日本の観光政策をはがゆく思います。去年のバブル崩壊以降、海外旅行が減って、「安近短現象」と言って、「安い、近い、短い」が旅行の条件となってきたと聞いています。ここで何か手を打つべきではないのか。

新婚旅行というよりは、昨今は、むしろカップルと言うべきではないかと思えます。日本の観光地は、カップルがゆつくりしたり、おいしいものを食べて優雅に過ごしたいという欲求をなかなか満たしてくれない。五、六年ほど前、旅行会社で、「二人だけの宿」とか「二人の鄙宿」というキャンペーンをしたのですが、百万部単位で用意してもパンフレットがすぐなくなってしまうということです。そういう潜在需要があるんですね。

また、そういった人たちは、その関係のほどは別として、たぶん質のいい客だと思えます。観光地を荒らす客ではない。その場合、眺めがよくて優雅に食事ができるか、たとえば、どれだけ地酒やワインを選べるかも大事な設営になってきます。松崎は、海の幸は豊富ですが、そうした点はどうかを考えてみる必要がないでしょうか。

数にはすぐ結びつかないとは思いますが、口コミの力には非常に大きいものがあります。かつての伊豆・箱根はそうしたイメージで売っていましたし、熱海に飽きた新婚旅行者が大島へ行行ったわけですから、まだまだそうしたカップル客を開発する余地はあると思います。

山本(源) そういう意味では、大沢温泉ホテルという絶好の場所がありますよ。

米山 では、伊豆の隠れ宿として売り出しましょう(笑)。

山本(源) いや、実を言うとこれが売れすぎてしまって、派手な宣伝ひとつするわけでもないのに不況知らずなんです。先ほど北海道開拓の話でふれた「依田一族」の老家です。いわゆる旧家のどっしりしたつくりで、ロビーなどはススで黒光りし、見事です。

神崎 大沢温泉ホテルは知りませんが、私が親しいところでいうと、湯ヶ島の白壁荘ですが、新館を建ててからそうしたカップルの予約でいっぱいだそうです。白壁荘はかつては文士の宿として有名だったところですが、雰囲気があつて、二人ぐらいのお客さんでゆつくり食事ができて、変な邪魔が入らない、団体客との動線が区別されていて、という宿は、今どき探すのが本当に難しいようですね。

山本(源) 大沢温泉ホテルもいわば文士の宿と言えるでしょうね。檜風呂の素晴らしいのがあつて、あの檜風呂に入つて瞑想にふけるといい知恵が出てくるという著名人が何人かいます。

川喜田 最終的に魅力となるのは、松崎町へ行くと面白いグループがいるという風評が立つことなのです。伊豆の歴史をひもとくと、河津三郎とか土肥実平とかいろいろ面白い人物がいますね。今の松崎町にも相当面白い人物がおられるはずですか

ら、結集するのも一つの手だと思えます。あそこへ行くと、なんか「あやしげな空気がたち込めている」というのがものすごい求心力になる。

山本(源) 策定作業進行中の総合計画のなかでは、「松崎らしさ」という表現で目指すところを表していますが、C1作戦をどう考えていくかですね。

◆次郎長の親は雲見の出身？

川喜田 松崎町がやる町おこしというなら、伊豆水軍のスピリットがどこかにないと具合が悪くないかな(笑)。

山本(源) 静岡にそれを目論んでいるグループがあります。が、なかなかシナリオが書ききれないようですね。

川喜田 熊野水軍や庵原水軍との古い脈絡をたどる必要がある。

安達 村上水軍の関係では、愛媛県の興居島とか大三島などの村が集まって、「ふるさと創生」の資金を使ってやってますね。

米山 「水軍サミット」などはどうでしょう(笑)。

須藤 先ほど組合長さんが伊豆は東海道からはずれているからさしたる歴史がないと言われましたが、陸路の歴史はあまりないのでしょうが、海の歴史には壮大なものがあります。そうした意味で「黒潮サミット」などはどうでしょう。奄美あたり

から和歌山、伊豆、房州とずっと海の道をつなぐわけです。

加藤 カツオ釣り船のある港全部ですね。南は南西諸島から始まって、奄美、枕崎、土佐清水、尾鷲、焼津、宮古といったところですかね。

山本(源) 先ほど行かれた岩地集落には、阿波の国から来たと思われる「阿波屋」とか「焼津」といった屋号の家があります。風待ち港としての古い歴史からきているんでしょうね。

川喜田 伊豆の最高峰は天城連峰ですね。あそこには万二郎岳、万三郎岳などという名の山があつて、マタギの万二郎、万三郎の伝承を思わせますが。

宮田 それと、かつて天城修験というものがあつたようですが、もう残っていないようですね。

松崎町に池代という場所がありますね。学生の頃、「三居」をされている方を訪ねたことがあります。長男に家督を譲る「隠居」までは普通聞きますが、隠居が次男にさらに家をつくつてやり自分はまた別棟に移るので、珍しい事例です。その三居の家に古い行李があつて、おばあさんが小さい頃勉強したという明治からの教科書がびっしり入っていました。岩科学校で勉強されたのでしょうか。

山本(源) 地域が別ですからちよつとよくわかりませんが……。

宮田 印象的だったのは、おばあさんがそうやって小学校の教科書をいっぱい持っていたのと、岩地に行った時ですが、

「魚見」をやっていたというおじいさんの家に、大学ノートにずっとつけているという日記があったことです。名前は忘れてしまいました。ずっと魚見をやっているおじいさんでした。

高橋(半) いつ頃ですか。

宮田 三十二、三年前です。毎日、日記をつけていたということです。

山本(源) 斎藤伝吉さんの親でしょう。いつだったか、おれのところではずいぶん古くから記録をつけていると言っていました。たぶんそのおじいさんの息子さんだと思えますが、「生きがい対策」で松崎町史編纂委員になっていて、一生懸命にやっておられます。

宮田 非常に早くから教育が普及していたわけですね。

山本(源) 岩地というところは非常に教育熱心な地域なんです。松崎で東大第一号というのは岩地集落です。しかし、そうするとだいたいここへは帰ってこなくなる。

高橋(半) ここにもいろいろ面白い「歴史」があるんですよ。

こんな話を聞いたことがあります。

ここから南へ下がった南伊豆町青野という部落に寺があり、一時期、佐橋という立派な坊さんがいました。今は、長野県の松代にいるはずですよ。

その坊さんが清水の次郎長のことを調べて書いていた。次郎長は実際のところ親はどここの出身か定かでないようですが、男

親の名は三石衛門というらしく、三石衛門というのはどうも雲見の者じゃないかと思うと言うのです。ついこのあいだ亡くなったが三石衛門という人がいた、その先代かもしれないと言った。「次郎長の親が雲見の出なんて聞いたことがないよ」と私が言うと、ウソでも本当でもいいから、そうしてしまえと言おう。それで私もいろいろ考えてみたんですが、私たちのところも昔はカツオ釣りを櫓船でやっていたようだが、場合によっては清水の市場に魚を持って行ったかもしれない。そして風が悪くて帰れなくなり滞りし、ある女と交際があったかもしれない。

加藤 過去帳でも調べたら出てくるかもしれないね(笑)。そう昔々のことではありませんからね。

安達 ウソだって、三百年ぐらいそうだとおっしゃっていると、本当になってしまうんですよ(笑)。

高橋(半) 歴史なんてそんなものですね。

ところで、雲見にもちゃんとした歴史があるにはあるんですよ。それが面白いのですが、下田の城山に、名前は忘れましたが、小さな城があり城主がいたのですが、豊臣氏に攻められた。負け戦になりそうになったので、伊豆のときの豪族を頼ったのです。雲見の高橋丹波守左近、子浦の清水といった豪族に援軍を頼んだのですが、行ってみるともうすでに戦は負けで、高橋丹波守は河津で殺されたという説もありますが、一説では船で遠州へと逃げて、現在の水窪町の豪族にかくまわれてもらったということである。

水窪で丹波守をかくまってくれたのが、武士の落人の子孫の中峯という者で、そこに年頃の娘がいた。武家だから男の子の世継ぎをもうけなければいけないところへ、血筋のいい武士の婿が来たというので、親が取り持って娘は身籠った。

そうこうしているうちに、伊豆のさわぎも収まって丹波守にも帰ってくるように使いが来た。お産はまだだったが、娘はやむなくある峠まで見送ってそこで別れた。そのとき丹波守は男の子が生まれたらこの刀を持って訪ねてくるようにと、刀一振を形見として渡したということです。実際に男の子が生まれたらしいのですが、訪ねてこなかったそうです。そういう話があったわけです。

そして、昭和三十年頃だったでしょうか、静岡県史を研究している先生方が訪ねてこられて、雲見の高橋家に関係のある家が水窪町にあつて、そこに「開かずの箱」というのがある。易者に見てもらったところ開けても差し支えないということだったので開けたいが、雲見の高橋に関係があるらしいから、一緒に開けてみようということになった。金の玉が入っているとかいろいろうわさがあつたのですが、金の玉ではなく今の話の由緒書が入っていたようです。

もともと中峯という姓ですが現在は姓も高橋に改め、高橋のご先祖をお祀りしているそうです。

水窪から雲見を訪ねてきましたし、こつちの高橋も水窪を訪ねたのですが、こつちの高橋の子孫は学校の教員をやっている

のに対して、水窪のほうは杉山を二千町歩も持っている山持ちで、冬は鹿を撃つたり、たまには熊を撃つたりし、カネが入り用になれば杉の大木を、三本売れば事足りるということで、子どもも特に上級学校を出さず財産を守っていればいいという暮らし方の家だそうです。現在はサラリーマンのようですが、ウソみたいなホントの話があるんですね。

須藤 山と海がつながっているんですね。

高橋(半) 今の話の、高橋の家の面白い話はほかにもあります。東京の世田谷に高橋姓が集まっている地域があるそうで、その人たちが、われわれのご先祖さんは伊豆の雲見の高橋であるということが何かのきっかけで分かって、十年か十五年前に家系図を持って一族が訪ねてきました。高橋一族はもともと九州から出て、京都へ渡り、京都から葦山を経てここへ来ているというものです。

去年だったか、その一族が堂ヶ島へ旅行に来て電話を寄越し、ご本家のお墓参りをしたいがどうだろうかと言うわけです。パスを仕立てた一団体でしたが、代表者のような人が十人ぐらいたけ本家へ来てお茶を飲み、墓参りは全員でして帰りました。

加藤 松崎は高橋姓が多いんですか。

高橋(半) 雲見は多いですね。

加藤 役場の高橋さんも雲見の人ですか。

高橋(半) いや、隣の石部です。石部は家来筋です(笑)。今の話のように分家がけっこうありますよ。面白いというか、

不思議というか、そういうことがあるものですね。

加藤 話は尽きませんが、このへんで。どうもありがとうございます。

(第二十七回 一九九三年一月九日)

土と炎と緑のふるさと 越前陶芸村

〔福井県宮崎村〕

●講師 岩原 昇・福井県宮崎村村長（当時）

〔出席者〕加藤秀俊／放送教育開発センター所長 川喜田二郎／東京工業大学名誉教授 神崎宣武／宇佐八幡神社 禰宜 須藤 護／放送教育開発センター助教 宮田 登／筑波大学教授 米山俊直／京都大学教授

宮崎村は、福井県の西部に位置し、武生市、鯖江市に隣接している世帯数約九百、人口四千人余りの村である。

ここは古くから窯業がさかんで、「古越前」として日本の六古窯に数えられている。越前焼の歴史は古く、平安時代の末期から窯の火を絶やすことなくその伝統を受け継いできている。

この越前焼発祥の地に昭和四十六年、全国で初めてのクラフトパークとして越前陶芸村は誕生した。誕生して二十年以上が過ぎ、陶芸村は、歴史と伝統を守りながらも新しい陶芸の息吹を着実に育んでいる。

宮崎村村長の岩原氏は、越前陶芸村構想の段階から、陶芸村の発展に努めてきた方である。

まだ雪深い越前陶芸村を訪れた研究会一行は、陶芸村を見学した後、公園を軸にした村づくりやこれからの方向性等について議論を交わした。

◆日本六古窯の一つという伝統に支えられて

加藤 福井県宮崎村は、越前陶芸村があることで非常に有名です。こと私は、二十年ぐらい前からの付き合いがありますが、今回お話をしてくださる岩原村長さんは、この陶芸村を中心として早くから村おこしに取り組んでこられた方です。そこで、まず陶芸村の設立のきっかけから今までの経緯を含めて、村づくりについてのお話をうかがいたいと思います。

岩原 村づくりの話が本格的に出てきたのは、戦後のことになります。福井県の場合、主な産業は繊維産業でしたが、新しい時代にふさわしい産業を振興しなければならぬという時代の要請もあり、奈良時代からつくられている越前焼に目を向けたいわけです。

越前地方の焼物は、奈良時代から平安時代にかけて須恵器の製作に始まり、平安末期から鎌倉、室町時代あたりまでにかなりのものできていたようですが、その後だんだん衰退し、明治初期にはもうほとんどなくなってしまった状態になりました。

た。この越前焼は奈良、平安の時代からずっと窯の煙が絶えないでやってきていますが、このようなところは日本に六つあり、備前、丹波、信楽、瀬戸、常滑、越前を六古窯といえます。越前はこのなかで最も小さいものです。

そこで、私どもの村の大先輩になる山内村長が、戦後、非常に熱心に昔の焼物のことを考える一方で、新しい焼物をつくるために努力をしました。そのような努力もあって、県では昔からの焼物を、福井県の産業としてぜひ育ててみようということになりました。

ちょうど昭和二十二年に初めて地方自治法が改正された時期に、県が小曾原地区に産業振興の意味で窯業試験場を建設しました。その窯業試験場はまことに粗末なもので、昔の軍隊の演習場の建物のようなものだったのですが、二十三年頃に、本格的な仕事が始まりました。その時、京都からこられた場長さんが、たいへん熱心にいろいろなことを試みてくださいました。

まず、試験場の技師や職員は、研究者であるよりも、開発を主にやるのが第一である。そこで最初に、焼物の原料となる粘土調査をおこなった。その結果、この程度のものであれば、産業としてかなり大きな規模になるまでもちこたえるのではないかと考えました。今日の越前焼がここまでできたのは、この先生のお陰だと思えます。

焼物はなかなか難しいもので、多量生産するには時間がかかるだろうと思っていました。予想以上に長く時間がかかり

ました。本格的に越前の焼物が話題になるようになったのは、三十五、六年頃から三十九年頃までのあいだです。

ここでは瓦を焼いていましたし、またわずかながら焼物もありました。それで窯業団地をつくって、そこへ瀬戸などから誘致をしようということになり、ある程度構想が具体化したのですが、三十八年の豪雪で、話がなくなっていました。

しかし、三十八、九年頃からだんだん陶芸ブームとなりまして、それまで県が助成金を出し試験場までつくっておこなってきたことが、やっと目の見るようになりました。ところが当時、ここで焼物をやっているのは四軒ぐらいに減ってしまっていた。四十年代になって、なんとかもとのかたちに復元できないかと常々考えていましたが、試験場では場長が交替をする時期となり、越前焼をこれからどういう具合に振興していったらいいかということをお互いに大いに議論したわけです。

そこで、現在残っている窯元を試験場の周辺に集めよう。そして試験場が釉薬などの指導を直接全部おこなって、本格的な生産ができるような環境をつくるのではないかと。いちばん大事なことは、将来のために指導者を育てることだということ、その四軒にそれぞれ自分たち独自のやり方を考えてもらおうと同時に、試験場も積極的に彼らを支援しました。

◆産業と公園を結びつける発想

その時にわれわれが考えたのは、新しい試験場が三十八年から三十九年にできましたが、その敷地はだいたい三千坪ほどであったので、その敷地の中に陶芸家を連れてきて窯元にして、敷地そのものを公園にしようというものです。そして宣伝をすれば、観光客を中心に焼物が話題になって越前焼がさかんになる一つのきっかけにならないかと考えて、四十二年頃、今の陶芸村の小さいかたちを計画して、いろいろな準備を進めてきました。

四十四年に福井県知事が来村された際に公園化構想の話をする時、知事が「それは陶芸村だよ」と言われたわけです。知事に話した時は、小さな陶芸集落のようなものを描いていたのですが、構想はもつと大きなものとなり、県の積極的な支援を得て、本格的に陶芸村づくりが進み始めました。

そして、新しい焼物と同時に、訪れる人が焼物を見たり、つくったり、ながめたりすることができるよう機能を兼ね備えた「陶芸館」を中心に陶芸村をつくる。公園のなかには焼物の施設、窯元を全部含したらどうだろうという話がありました。

他で、陶芸村というものがあるかどうか探してみましたが、それに該当するものはありませんでした。われわれはたまたま焼物としましたが、産業と公園が結びついた発想が初めて生まれたわけです。

新しいころみということで県も非常に力を入れてくれました。そして、ここへ入植してくる人たちを全国的に募集し、二十人以上の人が入ってくれました。陶芸村は整備の途中、石油

ショックで足踏みをすることはありませんでしたが、一つの構想ができていたので、後はそれに基づいていろいろな施設をつくり、今日に至っています。

焼物の窯元は、陶芸村をつくった当時にはだいたい三十ぐらいで、年産十億から十五億円あげていた。現在は二十五ぐらいの窯元があります。入植した方々は、ここで焼物をつくり始めて、二十五、六年になります。大部分の人が日展や朝日陶芸展などの作家の道を歩んでおられ、それぞれ円熟して、いよいよ大家になるだろうという人ばかりです。

しかしながら、多量生産をする窯元が二、三しかなく、生産地としての課題は残っていますが、いずれにしてもこの新しい構想が一般に認められたことが、われわれとしてはたいへんうれしいことでした。

陶芸村をつくる時に、全国から多くの方が見学に来ました。とりわけ、焼物の産地で有名な有田、瀬戸、常滑などから「陶芸村とはどんなところだろう」と見学に来てくれた。この陶芸村ができてからは各地で、焼物だけではなく、公園と産業が結びついたものが出てきましたが、われわれのところでは苦しまぎれにやった発想が始まりだといえます。

この陶芸村が成長する間には、大勢の支えてくれた人々がいまいます。まず、ここに最初に来て、陶芸村を激励してくださったのは水上勉さんでした。そして、勅使河原宏さんを連れてこられて、ここに窯をつくるような話にもなりました。瀬戸の加藤

唐九郎先生もしばしばここへ見えて指導してくれました。最初は「村長、えらいことをやり始めて大丈夫か」と言われたのを覚えています。有名な哲学者など、素晴らしい方々にもお会いする機会もたくさんありました。そういう方々から、いろいろな指導をいただいたこともたいへんありがたいことだったと思います。

◆シンボルとカラーを念頭に

私は、常に二十一世紀にはどういうものがシンボルになるかということをするさく言っています。そういうことも考えて、現在、将来のシンボルになるホールを建設中です。このホールは文化交流会館といい、音楽堂としての機能を持っていますが、多目的に利用できます。ここでちょっとした音楽会や映画の上映、また大きな展示会などでもできるように準備しています。だいたい三月いっぱいぐらいに完成の予定です。設計は地元ですが、二十ぐらいの有名な設計事務所が競作をして、勅使河原さんをはじめとして多くの方に審査に参加していただいて、二十一世紀のシンボルになるようにそのなかの一つを選びました。私の村では陶芸村を中心に村づくりを進めてきて、産業と行政といろいろなものとの複合の村づくりということが基本的な考え方です。

村づくりのなかにカラー計画があります。この村はワインカ

ラー（レンガ色）を基調にして美しい街並みを維持し、村の景観形成を進めています。しかし、色彩コントロールは意外と難しいものです。公共施設だけでも十いくつありますので、それぞれ計画を立てて、ワインカラーの範囲内でつくってききました、なかなか難しいものだと思います。

いずれにしても公園計画から始まった村づくりであるし、とにかく美しい村にしようではないか。それから白壁で切り妻屋根といった昔の古い建物は残そうと、家の持ち主に頼んでみたりして、村全体としての景観維持につとめています。

それがすぐに認められたわけではないのですが、国土庁の第四回農村アメニティコンクールでは最優秀賞に選ばれました。静かで、昔の家も残っていて、けばけばしいところもない。しかも一つの村全体としての街並みの色彩ということから考えても大いに参考になると、今でも見学にきてくれる人がいます。

私は助役二期、今年で村長は十期目で、地方自治五十年です。今年で八十一歳ですから、これがもう最後になるかと思えます。いろいろなことを考えてやらせてもらいましたが、焼物の復興はなかなか難しく、ほかの産業のようにカネさえあればということではないとつくづく思いました。ですから、そのなかで、やはり陶芸村を中心にした村づくりの仕事は本当に印象が深いとともに、この陶芸村に満足しています。

◆本阿弥光悦の芸術村もかくや

米山 材料の粘土は最初に調査されて、大丈夫だと思われるんですか。

岩原 今の程度なら大丈夫ですが、本格的な量産が始まって、大規模な窯がいくつもできると、将来はやはり枯渇すると思います。昔は表面に出ている良いところばかりを掘っていたのですが、今では水田を起こして、水田の下にある土を採っています。山のなかでも一メートルぐらいの層しかないんです。

米山 今は燃料は薪だけではなく、ほかのエネルギーを使っているんですか。

岩原 薪はクラシックなものをつくる時だけです。今の作家は、自分が展覧会に出す凝ったものは別として、普通につくるものはほとんどガスか電気を使います。

加藤 越前焼のもともとの姿は須恵器の時代からあって、拝見していると、ある伝統がありますね。しかし新しい作家がおつくりになるものは、白磁のようなものであります。越前焼の伝統としてはこれからどういうふうになっていくんでしょうか。

岩原 越前焼は、新しい方向の越前焼と、昔からの伝統的なものを後世に伝えるものとの、二つの方向が今後あるでしょう。それと、食器を中心に多量生産できるようにすることを考えて

います。

宮田 江戸初期の本阿弥光悦の芸術村を思い起こさせられますが、この場合は入植する窯元の条件は何かあったのですか。村に入るの際に、全く自由参加というかたちで受け入れられたのですか。

入植された方々の多くは芸術家ですから、いろいろ難しい問題も生ずるのではないのでしょうか。

岩原 そうでしょうね。組合があるのですが、組合に全部入っているかという点でもないです。要するに、作家になろうと思うような人は組合に参加していません。いずれにしてもここは新開地みたいなものですから、村の人たちとの付き合いを養っています。入植した人たちには、自分の窯に閉じこもらず、地域のなかへ出るようにと行ってありますし、下草刈りの時などには手伝ってもらっています。

宮田 新開地でも、まとまるためには神様をお祀りするとか、あるいは、ごく自然に陶芸家たちの付き合いのなかでまとまりのシンボルのようなものを設けたことはあるのでしょうか。

岩原 そういふ話はありません。

加藤 先ほどのお話から、水上勉さんとか勅使河原宏さんなど、外部の方の力がこの村にいろいろ入っていると思います。村のなかの知恵者の存在、村長ももちろん知恵者ですが、村長さんには何人もブレインがおられたわけですね。それはどういふ方ですか。やはり役場の方ですか。

岩原 役場のなかにもいましたし、この小曾原という地区は、昔からずっと焼物をやった経験のある人ばかりです。そういう仕事をしていた方もいるし、瓦産業などもあります。そのほかに農協が協力してくれました。事の起りは、やはり水上勉強ですね。

◆ 中山間地域で生き残るためには

須藤 村長さんはじめこの村の皆さん方と、外からこられた方の努力というか熱意が伝わってくるようなお話をうかがって、たいへん感銘を受けました。先ほど二十一世紀を展望して、シンボリックなものをというお話をしておりましたが、焼物あるいは竹林など、ここに資源としてあるものを活用しながら、将来産業化していつて、一つの村のシンボルをつくりあげていく。そういう構想がもし村長さんの頭の中にイメージとしてあるのでしたら聞かせていただきたいと思います。

岩原 このあたりはいわゆる中山間地域です。農業といつても、水田の規模は小さいので、大規模な農業はやれない。中山間地域で生きていくこうとすると、やはり米だけではなくいろいろなことをやる必要があります。

そこで陶芸村の規模をもっと大きくして、いろいろな施設を持つ必要があるのではないかと考えています。農林省にいろいろ相談して、三つほど考えていることがあります。

一つは陶芸村の公園をもう少し拡張したほうがいい。焼物だけではなくて花をつくったりする人たちがたくさん入植するようになっていく必要もある。

二つめとして、最近、家族で一週間程度滞在できる安価な施設への希望があるので、長期滞在型について考える。

三つめとしては植物園のような施設をつくる。

米一点張りで行くのも難しいわけです。ここでできるコシヒカリは、山の水がきれいということもあり、他よりも値段が高い。味のいい米という触れ込みでいくらかやっていますが、私は、もつといういろいろなものを取り入れてほしいとみんなに言っています。

◆ 地方自治ひとすじに賭けた五十年

加藤 地方自治五十年というのはたいへんなことですね。

岩原 こんなに長く在任するつもりはなかつたのですが、昭和三十年に初めて村長になって、その当時町村合併の話がありました。ところが、結局町村合併はできませんでした。私は責任を取って辞めるつもりだったのですが、もともと村一つでやっていたではないか。一人でやって見返してやればいいではないかという話になって、その時辞めずに続いて、気がついてみると四十年になります。

加藤 今でこそ村おこしはここ十年ぐらいのあいだに各地で

おこなわれていますが、村長が取り組まれたのはずいぶん早かったですね。

岩原 その時分には村おこしなどということは言われていなかった。どんどん新しいものをつくりましたが、いま考えてみてもそんなに間違っていないかと思っています。

川喜田 村おこしのお話で私を感じ入ったのは、とにかく村長さんのご意志で、一つの統一した考えでずっと五十年も続いた。これはすごいことです。この継続性がなければ陶芸村はできなかったのではないのでしょうか。

岩原 そう思います。

神崎 私は川喜田先生がおっしゃったことを前に何カ所かを感じたことがあります。小さい規模の町や村は私腹を肥やさない町長さんや村長さんである限り、四年ごとの改選などしないほうがいいと思います(笑)。二期、三期以上やらないと一つの「におい」がつくれないうわけです。

川喜田 「継続は力なり」ということです。

岩原 私がずっとやらせていただいたから陶芸村構想はうまくいったと思います。

神崎 四年先を見てものを考えるのと、十年先を見てもの考えるのでは違いますね。

川喜田 焼物は世の人心の移り変わりと非常に深い関係があると思いますが、マーケットリサーチはどういうふうに行っているのか。

たとえば京都などは観光都市ですが、久しぶりに京都の郊外を歩くと、観光客が多いだけではなく、そのなかで若い男女が非常に多いことがわだつている。

加藤 今日も陶芸村には若い人が多かったですね。

宮田 ショッピングコーナーに占いのコーナーがあつて、若い人は買い物と同時に自分の運命占いをしている。あれもアイディアですね。

米山 とにかく官庁街が立派なので、まずびつくりしました。カラー計画などは、やはりアイディアですね。同じ色で統一するというのは非常に興味深いと思いました。銀行も同じ色に統一されていますね。

岩原 銀行本来の色は真っ白なんです。支店長が、ここには地元のカラーがあるのだからそういうふうにしよとおっしゃったんです。

神崎 窯業試験場の技術者が陶芸村の方向を変えたのがいちばんのポイントだと思います。つまり、これは古い越前焼の再現ではなくて、新越前焼を構築するという方向です。なまじつか民俗学者などを入れていたら、発掘品をコピーしてつくるといような発想しか出ないわけですから、技術者が変えた方向というのは正しかったと思います。それと、長たる人が十年、二十年のスパンでものが考えられたということが陶芸村発展のポイントではないのでしょうか。

◆村づくりに「趣味委員」を

川喜田 世の中に趣味のいい人と悪い人がいます。しかし、あの人は趣味がいいという場合、周囲の人が見るとだいたい評価は一致しているんです。ですから、趣味のいい人ばかりで、つまり昔で言うところの風紀委員ではないけれども、趣味委員というのはこれからは作るべきだ（笑）。何をやるにしても趣味委員の意見をまず参考に聞く。

須藤 このあたりの建物は白壁と切り妻に梁がずっと渡っていて、台所の上に小さな煙出しがちょこつと乗っていて、家自体がものすごく大きくてゆったりしている。このデザインはもともと趣味がいいんです。

川喜田 どの地方に行っても、あの人は趣味がいいなど評判の人はいます。別に決めるとまで言わなくても、参考までに聞いたらいいんです。

加藤 きつとこの村は全員趣味委員なんですよ。村全員みんな趣味がいい。先ほど町村合併の話が出ましたが、合併しないでよかったですね。合併したらこんなことはできないでしょうね。

川喜田 これからの時代、日本は自然の村落が重要になってくるのではないか。自然村落の持ち味が生かせないような行政

はだめだという時代になってくるのではないかと思えます。

神崎 もつと言うと、自然村落を壊したところが、もう一度修復されなければいけないようになりますね。それがいま村おこしの一つの方向にはなっていますね。

川喜田 不景気の前後では、すごく産業構造が変わるんですよ。一見変わらないように見えるけれども。今度の不景気を境に宮崎村がよりベターになるなら、それが一つの正しい方向だったという診断になりますよ。

加藤 それこそ趣味がいいとか悪いというのは景気とは関係ないと思えますよ。趣味のいい人がいる限り陶芸村は発展する。それでは、このへんで終わりにしたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

（第二十九回 一九九四年二月十九日）

農業に新しい風を

●講師

宮本慶一・(有)グリーンラブ代表

鶴山正行・AGCAT農園

【出席者】加藤秀俊／放送教育開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜須藤護／放送教育開発センター助教 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／神奈川大学教授 米山俊直／放送大学教授

研究会は、熊本県八代市でユニークなトマト栽培をおこなっている宮本慶一氏のトマト工場と、パソコン通信を利用して消費者と生産者の連携を図りながら農業の新しい可能性を探っている八代グリーンネットの会顧問、鶴山正行氏のトマトハウスを訪れた。

宮本氏のトマトハウスは七千平米の巨大なもので、そのなかで、独自にヤマハボートに発注してつくった船体(ボート)型のプランターを地上六十五センチの架設パイプの上に設置している独自のやり方である。この高さは腰を痛めないための仕組みであるが、クラシックやジャズが流れ、エアコンで調整され

た快適なハウス環境は、パートの奥さんたちにも、従来のきつた農業のイメージとはかけ離れている点で、好評である。

ハウス環境はパソコンで管理され、遠隔操作も可能である。こうしてできた高品位トマト「天使のしずく」は、斬新な都会的デザインのパッケージで東京や関西方面に出荷され、また得意のパソコン通信を使った産地直送もおこなっている。

実際にハウスを見学した後、研究会一行は、消費者と顔の見える関係を構築して、農産物の新しい生産・流通システムをつくりだそうとする、お二人の情熱にあふれた話を聞きながら、新しい農業者像について議論を交わした。

◆将来から現在を見つめる

加藤 今日現場を見せていただいた時にもいろいろお話をうかがったのですが、改めて、こうした先進農業をお始めにたった動機や将来構想まで含めて、お一人ずつ少しお話しいただけますか。

宮本(慶) 自分自身で別に先進的とは思っていないですよ。コンピュータを始めたのも、必要に迫られたからなんです。鶴山さんとトマトの小さな出荷組合をつくったのですが、決済の計算を手でやると、わずらわしいし、時間的なロスがある。じゃあ機械にやらせればいいというので始めたのがきっかけです。そこが勉強の起点で、八代の若い連中を集めて、最初は薄

記などから始めました。

加藤 いつ頃からですか。

宮本（慶） 昭和六十二年です。とにかくこれから先はパソコンが必ず入ってくるから、マスターまでしなくても、触って慣れておくだけでも必要があると皆に呼びかけて、一年通して勉強をしました。その仕上げに熊本にあるテクノポリスセンターへ研修に行ったら、そこにパソコン通信というものがあつて、使ってみると、これは面白い、自分たちでもできるなどということ、帰ってきて話し合い、じゃあつくろうかというのでできたのが、農家手づくりのBBS（電子掲示板）「八代グリーンネット」というわけなのです。

皆、その時々で必要性で生まれてきたという流れです。

ほかの面では、今の農村も農業も、地元のことでもそうなのですが、元気がないですよ。自分もそのなかに入って皆と同じように、あがいているだけでいいのか。自問しつつ、まだほかにも夢があるのではと考えていた。一億ちよつとかけて、二年前にハウスをつくって、「有限会社グリーンラブ」を設立したのもそうした流れです。

もちろんそのためには、自分以外の人たちの力が必要ですから、とにかくいろいろな人たちと付き合せて、自分が何かやる時に力になってもらうような関係をまずつくることだと思つたんです。ですから、ほとんどの農家にとっては行政の方々との関係は必要でないかもしれないのですが、私にとっては必要だ

からお付き合いもするし、農業以外の仕事をしている方々ともお付き合いをする。農家の人と話しているより私には面白い。知的な刺激がありますからね（笑）。

それともう一つはマーケット。つくるほうだけではなくて、売るほうもありますからね。どう売るかについては、鶴山さんをはじめほかの人からも勉強させてもらった。また、市場の人たちと付き合いようになつて、モノが流れていく時のカラクリをいろいろ教えてもらったんです。ですから、普通の方々が見ているようなモノの動き、モノの値段の付け方は表面的なものであつて、マーケットの内部にはすごいカラクリがある。そういったことも教えてもらつて、すべて整つたから、「グリーンラブ」を始めたのです。

しかし、まわりから見れば冒険にしか見えませんよ。冒険というよりも、めちゃくちゃなことをやっていると思つている人が結構います。でも、裏には自分の過去の経験、いろいろな考えの積み重ね、情報があつてしていることです。外から危ながつて見ている人たちには、そうしたバックグラウンドは見えないわけなんですよ。

いちばん気をつけているのは、「将来どうなっていくか」というところから農業を見なければいけないということです。「今」、「ここ」の延長線上だけから見ているといけない。今のままいけば、情報化がすごい勢いで進み、それを誰も止めることができせん。だから、今の形態で農業が続くなんていうこ

とも、とても考えられないわけだ。

農業の後継者が少ないという問題がありますね。では、少ないままずっといくのかといったらそうではない。農業をつぶすわけにはいかないからです。今後行政などが、他の産業の人が農業に入って行きやすいような施策をどんどん進めるのは目に见えているし、それにともなつて社会的な状況が変わっていく。変わっていくなかでの自分に目を置いて、考えなければならぬ。現在に視点を置いていたのでは、とても将来に備えることはできないと思つています。将来から現在を見つめ、自分に与えられているいろいろな手段はすべて使い切る。そういった考えでやっています。

◆「農業」が俄然面白くなった

加藤 鶴山さん、同じく経緯や将来構想をおうかがいしたいんですが。

鶴山 私は中学の頃から化学にとっても興味があり、本当は大人に就職したかったんです。でも、いつまでたつても帝人からうちの学校に求人が来なかつた。いま思うと、ああいう化学繊維関係に行かずによかつたなと思つています。

では地元に残るかなと思つていた頃、胸に大きな穴があいているのが分かつて、二年間を棒に振つた。体が弱いから、体をつくりながら家の仕事をするかなということでも農業を始め

たら、それが面白かつたんですね。

農業に関しては何も知らないもので、農業に対するものすごい学習意欲が出て、宮本さんたちと知り合い、吸収できるんだつたら何でもいいから、とにかく覚えてやろうと、いたるところに足を運んで顔を出した。

宮本さんは、わりと醒めた目で見るので、面白いんですよ。私たちは、青年の頃は朝までカンカンガク議論したものです(笑)。彼と私は、分かつているのを承知で、逆の立場でシミュレーションをしながら議論をするんです。そんなふうになつとやつているものだから、気が知れている。

私は農業に就職したつもりなので、友だちと同じように、自分の給料は自分でここまで出したいという気持ちがある。それで、わが家の闘争が始まつたわけです。私があまみやかましく言うものですから、うちの親は早々と私に全部財産を預けました。

それからがたいへんなんですよ。自分の給料を捻出しなければならぬ。経営が見えてきたんですね。せめて自分の給料ぐらゐらせるような経営をやらなければいけないということ、四十七年から私は青色申告を始めました。

結局三年か五年して、税理士に頼むのをやめて自主申告に切り換えた。自分でいろいろやつて、そのうち帳簿のミスで税務調査に引つかかつて、二十数万の追徴金を払つたのですが、その時から給料を口座引き落としにしました。すると、家計費と

農業経営費が完全に分離して、経営が見えてきた。見えてきたら、自分がどのぐらい規模拡大しなければならないかも見えてくる。そうするうちに休みも欲しくなってくる。特に結婚してからそういう感じですね。

また、最終的にはわが家の会社を誰に託すかという後継者問題も出てくる。私の頭のなかでは会社という感じなんですわ。魅力ある職場にするためにはどうすべきか。それには休みがあつて、ある程度の収入があるというのが必要条件になつてくる。子どもの前でも絶対仕事があつていいかと、愚痴は言わない。「楽しか、楽しか」と言っている(笑)。私は親から、百姓はどんなにきついかということはずっと聞かされて育つたんですよ。だから、次男でもあつたし、すぐ勤めに出てしまえという気持ちがあつた。その反動で、子どもの前では「きつい仕事だ」とは絶対言つてはいけな思つています。

流通関係についても、自分で売らうになつてくると、いろいろなカラクリが分かってくる。

昭和五十年ぐらいだったか、熊本県の「流通研修」で大阪の市場に二週間行つたのです。そのとき市場の人が、「よく見ておけよ。競りの時には価格が決まっているんだ」と言う。競りというのはある程度かたちだけということなんです。

よく考えてみると、スーパーや大手の量販店あたりは一月先の予定をチラシに刷るわけですから、その時に価格はだいたい決まっている。そこに卸すバイヤーも、価格的にはどこの産

地の荷をどのぐらいと示しますから、荷受け会社も指定された分だけ集めるのに必死なんです。

そういう流通の仕組みを知つたので、地元に戻つてから、農協の生産部会へいろいろ提言したのですが、まだ二十五、六歳でしたから、上のほうから押さえ込みがかつた。それに、どんな言葉、おれたちは応援するからと言つていた若手も誰も応援してくれない(笑)。こりやダメだ、俺が出て、外で自主的につくる以外にないなと思ひ、農協から「脱藩」してしまつたわけです。

でも、それからは面白いんですよ。自分の努力で成果が出てくる。そのうちに、荷受け会社の部長さんと知り合いになつて、その人に「徹底的に競り人と癒着しろ」と言われました。言葉は悪いんですが。「友だちになれ、いろいろなデータをもらえ」と言われたものですから、競り人たちと徹底的に友だち付き合いまでやりました。

そうしたら、私のトマトはおいしいから、これだけ別にして売り込みをかけようではないかということになった。いわゆる「差別化」です。世の中がグルメ指向になつて、差別的なものも扱いたいという流れとものすごくマッチして、ポーンと伸びていったわけです。

熊本ではたとえばイグサは全国の八割つくつていまして、ね。そのうち八代は六割持つている。六割や八割独占して、価格を自分たちでつけられないということはないと、前はイグ

サをつくっていたものですか、農協にもずいぶん言ったんです。しかし「流通がどうのこうの……」と言って及び腰なんです。いや、違う。生産者がパッチリまとまったら、価格は自分たちで決められるんだ」とずいぶん言ったんです。

安達 あなたは自分で価格を決めているんですか。

鶴山 決めていますよ。

◆農協の原点へ回帰する

宮本（慶） 私は個人で出荷する時も、農協経由で出す時も、値段は同じです。なぜこういった状況のなかで農協を使っているのかは、私なりの流儀、考え方があるわけです。

農協は、皆は組織だと言っているが、組織ではなくて集団だと思っっています。組織として備えるべき要件のかなりの部分を満たしていないと思いますね。

でも、やはりかたちがあるという強みがあるんです。だから先ほど言いましたが、利用できるものは何でも利用するのが私の信条です。農協と経済連にわずかの手数料を払っても、加わる価値はそれなりにある。今のところ農協の利用の仕方というのはそんな程度ですが。

農協も、協同組合法なんて言っておらずに、株式会社になっ
てしまえばいいんじゃないかと思うんですがね（笑）。

鶴山 農協も企業にならないとダメですよ。私はよく言うん

ですが、銀行あたりから定年退職した支店長クラスを連れてくればよい。経営努力しないことには農協はダメです。

安達 組合長が常勤で高給をとって、専務、参事を置いている農協なんか世界に例がありませんよ。

宮本（慶） 農協法ができた昭和二十四年当時の社会状況には、たぶんマッチしていたんだろうと思います。とにかく根本的に農家を見下している。弱いから何とか面倒を見てあげないといけないというところが農協法にはある。

でも、今は一戸、一戸の農家の足腰が強くなった。だから、網をかぶせようとするのだったら、強くなった人たち同士が、力の足りないところをオーバーラップしてつくる組織というのが農協であるべきだと思うんです。

それなのに、たとえば共同出荷とか何やかやで、一つの輪のなかに入れてしまおうとするから、無理がきてはみ出そうとするんです。弱いところ、足りないところをみんなで寄り集まっ
てやりましょうという考えでいけば、結構うまくいくと思うんです。

農協法がどうやってできたのか本を読んでみたことがあるんですが、GHQが介入したとか……。

安達 あれは政治的には簡単なんです。農地解放して、小さい自作農をたくさんつくった。これを倒さないために、農地法ができ、農業協同組合ができた。協同組合の原則自体は、役人がつくったもので、こんなにいいものはない。

宮本（慶） いや、私が読んだのは、何回もGHQに原案を持って行って、蹴られたという話なんです。

安達 それは農地解放についてです。農協は日本側がつくったのですよ。

宮本（慶） 農協法の前文に書いてある三つの目的なんていうのは、どこに行っただんでしょね。

安達 農協の原点はむしろあなたの方にあるんじゃないの。

鶴山 うちの農協は、発足当時すぐ輝かしい実績を持っているんです。当時無医村で医者がいなかったたので、診療所を農協が経営していた。これは全国でも珍しい農業組織だったと思います。

うちの農協はすごいんだという意識があったものだから、よけい農協青年部時代、入れ込んでしまったわけです。しかし、そんな理想が生きるような場所ではなかった。

宮本（慶） そこにも一つ問題があるんですよ。うちの農協は、困った農民が農民主体でつくったのではないんです。土地の地主さん、金持ちさんが困っている農家を見かねて、こういつた活動組織をつくればいいと勉強してつくっている。

協同組合の元祖、イギリスのロッチデールは、誰の命令でもなく、困っている人たちがつくったけれど、日本、ことにうんなんかでは発展の過程が全然違う。

私の見たところ、自主的に農民の連中が知恵を出し合っつった組織体はあまり見当たらないですね。誰かがつくつてあ

げて、そのなかで活動せいという図式がどうも日本には多いような気がします。

米山 場所によって、いろいろな発展過程があったと思います。全体で見ると、農協運動は、弱者救済みたいなかたちになる前には、かなり自主的なところはあったと思いますよ。

そうした原点で出発したにもかかわらず、組織が大きくなったのでガタガタになって、本来の姿を失った。ですから、ある意味であなたたちのほうが農協ファンダメンタリスト、原理主義者ですね。

鶴山 今、農協合併がものすごく言われていますね。私は合併はいいと思うのですが、合併したら、専門農協をつくつていかなないとダメだと思います。金融関係とか、合併しなくちゃならないようなところはほとんど合併すればいいんです。たとえば私のように高品位トマトをつくつていけば、その集荷組合をつくつたり、ロットで売り込もうという人はロットでやって、量で売る。どちらも組合員が選択できるような組織にすればいいと思うんです。

安達 全農を解体すればいい。

米山 国鉄のように、分割したらいい。

舛田 先ほど、一部の有力な農家が中心になってこの農協をつくつたと言われましたが、たとえば地域のなかでもそうした方たちが支配的だと、あなたがたが頑張つていろいろ試みても地域から浮き上がってしまうという心配はないのですか。

鶴山 今の段階では、私なんか完全に浮き上がっているし、何かアクションを起こすと、「またか」という感じですね。

私は農協の組合員の跡取りたちといろいろな話をするのですが、今の段階でこちらのアクションに引つ張り込んでも、彼らがつぶれてしまうのは目に見えている。だからジワジワと進めていって、彼らが主力になる頃を待たないといけないなど考えているんです。

加藤 その頃には、農協も脱藩統出で崩壊してくるのでしようかね。

宮本（慶） 私が農協に残っているのは、自分のまわりの人たちとどうまくやっついていかないと意味がないと思うからなんです。確かに、鶴山さんが言ったようないろいろな障害があるし、若い連中は分かっただけはくれるけれども、実際問題としてバックアップできないという状況もある。ですから、とにかく時機を待つ。それまではひたすら自分が力をつける。

この狭い社会のなかで、「あいつは」と言われるぐらいの力を持つてやらないと、若い連中だっただけでこないと思うんです。そして、農協は絶対に敵にしない。その代わり、彼らの言いなりにもならない。とても微妙なバランスの上でやっついていきます。

高品位トマト「天使のしずく」、「太陽の恋人」は農協まわしで市場で売っていたこともあります。普通はそんなことはせず農協のブランドネームを付けて売り出す。でも、それができる

ように農協とは仕掛けをつくっているんですよ。とにかく農協からも文句を言われないように、いろいろなことを考えています。

鶴山 私の場合は脱藩です。彼は一度脱藩してまた帰参したんです。とにかく宮本さんには農協で頑張ってもらいたい。やっていることは私も彼も結局一緒なんですよ。

◆百貨店方式の産直をめざせ

安達 現在、産直で個人で送っている方式が成り立っているのは、流通経費が非常に高いからです。流通経費が合理化で下がってくると、個人産直は成り立たなくなる。たとえば、コシヒカリは今めつぼう高いから産直も成り立つけれど、あれが十キロ四千元ぐらいになってくると、輸送費に千円もかかる産直からは消費者は買わなくなりますよ。

鶴山 だから私の場合は、バラバラの個人ものの注文のように見えるけれど、職場単位などで、二十ケースとか三十ケースとかまとめて送って、向こうで分けるやり方なんです。

安達 ホストをつくっているわけですね。

鶴山 これからの産直は、いつでも対応できるデパート化を考えなければならぬと思います。

消費者というのは勝手なもので、最初に「メロンの場合は五、六月でないとうりませんよ」と書いているのに、七月とか十二

月に「ありませんか」と問い合わせがあるんです。今は、ていねいに断っているのですが、仲間で十二月にメロンをつくっている人がいたら、回せるわけですね。トマトは、幸いなことに、周年栽培の宮本さんがいるから、回せる。

だから、これからは生産者側の専門的な集団化、組織化をしないといけないと思っています。要するに、産直のデパートをつくってしまうということです。パソコン通信でのぞいたら、必ず売っているようにしなくてはならない。今は、パソコン通信の産直コーナーをのぞいても、時的にならないものがあります。ところが、百貨店方式だったらいつでももある。とにかくそうしたものをつくるうということ、つくばの農業情報利用研究会の田上さんと必死になつて組織化に取り組んでいるところですよ。

加藤 そういうネットは、PCIVANにのつておられるんですか。

鶴山 PCIVANにもつていますがニフティサーブにもあります。ただ、まだ完全なデパート的な売り方ではありません。

加藤 個人相手の産直は手間もコストもかかる。だから、ドカッと卸す先をおつくりになるといいのではないかと思えます。個人相手にしたらご商売はたいへんでしょう。

鶴山 私が今メロンで一社持っているお得意先は、葛飾区のインテリア関係の会社なんです。お中元用に六年前からずっと

取ってくれています。時々送り先に有名人の名前が出てくるので、そのうちにコマージュに使えるかな、なんて考えますね。

宮本（慶） 私はいくつかのチャンネルを持ちたいと思っているんです。個人と、まとめて卸すのと、どちらがいいかというのは一長一短あつて、個人的に付き合っていれば手間もコストも確かにかかるんですが、食べた時に結構反応が返つて来るという手ごたえがあります。流通を考えれば、個人ベースは割は悪いですがね。

ずっと先にいけば、市場回しはかなり少なくなつてくるのは目に見えていますから、私の場合は大阪の生協と突き合わせようかという話もあるぐらいに、いろいろなところと直の取り引きができます。

安達 今、ダイエーやイトヨーカ堂は、製販同盟という面白いことを考えている。製造するメーカーと販売が同盟を組むんです。ダイエーなどは小売りだから、情報が多様化するなかで、小売りがいちばんよく知つているということで強い立場にたつ。川下のほうが有力で、どんどん注文が行く。

おそらく、そういうことがあなた方の世界でも生まれると思う。その場合、あなた方のルートのなかで輸送などをやる組織づくりをして、地方版の小さなクロネコヤマトみたいなもので代金回収までするという組織をつくつたらいいと思います。

◆「風景の見える」第五次産業へ

宮本（慶） どんどん自分たちの仕事の範囲を広げていく必要がある。守りの姿勢では、競合する側から攻め込まれる一方になってしまふ。コメをつくっています、トマトをつくっています、ただでは食べていけない状態が出てくると思います。

特に心配しているのは、私が入っているような農業は、ご覧の通り、優良な農地がなくてもできる。ビルのつっぺんでも、岩ゴツゴツのところでも。だから、私たちに武器として残っているのは栽培ノウハウだけで、これも近い将来確率的にソフトウエアとして出てきます。

鶴山 これは間違いないね。

宮本（慶） だからやろうと思えば、みんなができるんです。コメのように大きな面積を要するものは、ほかの産業とオーバラップしてくるんですね。私がおそれているのはそこです。農家でそれだけ大規模なことを考えてやる人は、そう多くはないでしょうが、採算ベースに乗るとなれば他の産業が乗り出してくる。

加藤 そうなってくるともう工業ですよ。知多半島のポットナム（鉢植えのキク）はすごいでしょう。日照量を均等にするために、立体駐車場みたいにクルクル回してキクをつくっているんだから。あれは工業ですよ。

安達 だいたい「農家」と「農業者」は別物と考えるべきですよ。

鶴山 統計の取り方もおかしいですね。

安達 農家という名前を崩しては役所が困るからね。でも、あなた方は農業者。農家と農業者は分けましょう。

宮本（慶） それは賛成です。農林水産省は、「農業」を見ていなくて、「農家」と「農村」を見ているんです。あれには腹が立つ。農業を一生懸命やっている人はどうなるんだと言いたい。

安達 分けないから、農水省のステップが全部狂うのです。護送船団で前後を守って、スピードをわざわざ落として、いちはんスピードの緩い第一種兼業農家などに合わせているようなものです。それに族議員というガンもある。

私は、農業の六〇年体制と言っているんです。政治の五十五年体制が崩れて、先はわからないけれども、農業のはまだがっかりしている。

宮本（慶） 国の予算を出す時も、私たちのように現業をしている者たちには補助金なんかいらなから、中山間地などのどうしたってコストが見合わないところに回して、こちらには、資金を借りやすくするなどの金融的な支援、指導ができるように、振り分けるべきだと思います。

安達 でも、日本の農業だって明日は明るいよ、あなたたちみたいな人たちがいるかぎり。私は五、六年前お先真っ暗に思

っていたが、このごろはその頃より楽観論者になった。農業主体があるかぎり、日本の農業の未来は明るい。

鶴山 去年のコメ騒動で、はっきりそう思ったんです。で、農業を次のステージにまでもっていかなくてはならない。今、外国の輸入野菜がかなり入ってきていますね。実はトマトも危機感があるし、八代のイグサも危機感があるんです。

今、私たちは一次産業をやっていますが、トマトを野菜でなく加工をして果物化するといった商品化をして、二次産業まである程度行きました。そして、三次産業も始めているわけです。

安達 自分たちで売っているんだからね。

鶴山 実はこれはこうやってできているんですよ、というサーピスまでやっているわけでしょう。

安達 コンピュータを使って、四次産業までやっている。

鶴山 次は第五次、今度は「遊びに行きたいなあ」というのがくる。「うちの農園に遊びにいらっしやい」とは、外国産では絶対言えないことです。外国産の弱みはつくついているところが見えないことだと思うんです。

外田 世の中を見ていると、地域特産品で一時期パワーツと売れるものがあるんですが、そのうち競合するところが出てきて、特産品が特産品でなくなっていくという現象がありますね。

鶴山 まったくそうです。

外田 そうすると、お二人は農業をやっているあいだは、次から次へと走り続けなければならない。それもきついのではない

いかなと思えますが。

鶴山 よそがつくる前にお客さんを引きつけてしまうことですね。たとえば、熊本県産でないと馬刺しではないんだというのを、ここに来て体験させて、買わせるようなものです。とにかく買いにいらっしやいよ、そして買うのはその山村全体のなかの品物なんだという感覚を、消費者に持たせるわけです。そうでないと、やっぱり頭打ちになる。

たとえばトマトというと、私の温室に来てもらって、ここでとれたトマトなんだというのを消費者に最初に教えるんです。その風景が浮かぶようにする。店で同じように並んでいたら、やっぱり風景の見えるそのトマトを選んでしまうといった、販売のやり方をしないといけない。そうした第五次産業まで取り込まないと、絶対にダメになります。だって、アメリカや中国あたりで、宮本さんみたいな施設を持って行つてついたら、どんどん輸入されてきて、単価的には競争できなくなる。

安達 あまりうまくなくて、農業まみれのものが消費者のところへいくのが現状です。生産者が少ないから値段が高いのは仕方がないということでは国内はどんどん空洞化してしまふ。このごろはベトナムのキャベツがどんどん入ってくるし、おせち料理の材料の半分は中国などからですよ。

問題は消費者価格をどうやって下げるか。農家の手取りをもうちよつと多くする方法はあると思う。それは、今の農業一六〇

年体制をぶち壊せばいいんです。ぶち壊すのはあなたの方しかない。だから、私は「脱藩」を勧めますね。

加藤 山形のサクランボなんて、私はそう長くは続かないと思います。立派な桐の箱に入れて、一万円ぐらいのがありますね。アメリカなどで同じようなものはいくらでもあるから、桐の箱にアメリカのを入れたって構わないわけですよ。だから、山形のサクランボは危ないと思いますが、どうでしょう。

鶴山 山形のサクランボがつぶれるんだつたら、同じ山形の農家がサクランボをつくってきた時だと思います。というのは静岡の一個二万とか二万円するマスクメロンが何でそのままやってこられるのかというと、そういう高級ブランドイメージを最初につくったからです。

宮本（慶） 静岡のメロンと同じレベルのメロンは熊本でもできる。でも格段に価格差がある。それはどうやっても崩せないですよ。

加藤 格段の差といっても、品質的には同じでしょう。

宮本（慶） いや、ブランドです。ですから、先ほど走り続けないといけないと言われましたが、私が何でこんなに急いでこのトマトをやったかといったら、人がやらないうちにやって、もうここでのないとダメだという評価を一日も早く確立したかったからです。それで、あんなに急いで投資した。

安達 このごろ、フランスのハウスワインなども三百円ぐらいで買えるんですね。お酒などから価格破壊が起きて、今度は

コメが下がりますよ。相当変動が起きると思う。だから、今のうちに儲かる時にはうんとその上に乗っかって儲けて、それをどこかに投資して、貯めたらいいですよ。十年たつたら必ずガラリと変わる。

◆自然の生命力に向きあう百姓の魅力

安達 あなた方がいいのは、いくら失敗を重ねても、家と土地は残る（笑）。「樅の木は残った」というのがあるけれども、冗談じゃない、会社だつたら全部なくなってしまう。家と土地があるのは強いですよ。

鶴山 台風十七号だったかな、あの時はトマトを見ていて、本当にどうなるかと思いましたよ。でも、トマトの生命力は強いですね。壊滅的だと思ったのに復活して、むしろ収量が増えた。ああいうのを見ると、やっぱり百姓っていいなと思うんですよ。

宮本（慶） あの時は、葉っぱは皆むしりとられてしまっていた。でも、あくる日ぐらいいから、そこから芽がパツと出て、すごいですよ、自然は。

安達 被害があつても、九州だと翌年にはちゃんど持ち直すんだもの。東北があんなことだつたら、回復するのに三年ぐらいかかりますよ。

宮田 昔の日本の農業というのは女性が握っていたと言われて

ていますが、お二人の素晴らしい奥さんは、今のお二人の考えにすべて賛成していますか。あるいは異論を唱えておられる？

安達 私の感じでは皆女房が握っていて、あなたは好きなことをやりなさいよと、掌で踊らされているんですよ(笑)。

宮本(慶) とにかく私の場合はカネをかけてやっていますから、それを許してくれたというのはたいへんなものですよ。

鶴山 宮本さんの奥さんはそうですね。私も知っているし、だいたい紹介したのは私なんです(笑)。

宮田 農家の娘さん？

鶴山 そうです。本当は跡取りだったんですよ。私は恨まれちゃって……。

安達 跡取り娘をもらって継承すれば農地は倍になる。

鶴山 離れているので、農地を一緒に寄せられませんでし
たね。

それとは別に、施設園芸というのは水稲部分を切り離さない
と、割が合わなくなるんですよ。施設園芸は、できることなら
一町ぐらいでやったほうが、経営的にはものすごく楽です。な
まじっか農地があるものだから、宮本さんはだいぶ苦労したん
です。それに、彼の場合はミカンもあつたし。

宮本(慶) 本当は水田は切り離したくない。私も昔の人間
ですから、農業の基本はやっぱり水田のコメにあると思ってい
るんです。それに、コメづくりは自分自身も好きなんですよ。

見えて、一日一日変わっていくでしょう。トマトだってそう
なんです。その変わっていく姿にはやっぱり何かいいものが
あるんですね。

安達 お宅は山はあるの？

宮本(慶) それもまたいろいろ話があるんです。私は四十
六年に高校を卒業しましたが、四十八年ぐらいにミカンが暴落
する以前はずっと相場がよかった。それにのっかって、うちも
国営事業に参入したり、山を開墾したり、「うちの経営はミカ
ンで行く」と親たちは決めていました。

それが高校二年生の時に愛媛に実習に行つて、二週間ぐら
い農家に泊り込んで学んできたのですが、そこで、いろいろ考
えさせられて、三年生になった時に突然「ミカンはこれから先
ダメになるから、もうやらない。園芸、野菜のほうに行くからね」
と言つたら、お袋が泣いて、「この親不孝もの」と言われたん
です。うちの場合は急傾斜地でトラックが入っていきなくて、
手でやっていたんですよ。コスト計算してみれば分かることなの
に聞いてくれない。「自分たちが骨身を削って汗を流して開墾
してきた土地をどうするんだ」の一点張りです。

でも、私から見れば、これから先は自分で家の経営を守つて
いかなければならないのに、何で利潤が得られないのが分かっ
ているミカンをつくらなければいけないか、納得できないわけ
です。だから、私はずっと親不孝ものですよ。

加藤 今は喜んでおられない？

宮本（慶） いや、分かりませんね。お前たちがミカンの手入れをしないから、おれたちは年取っても仕事をしなきゃいかんと言っていますからね。

安達 あなたがじいさんになったら、孫を連れて山仕事をすればいい。

宮本（慶） それは私も考えているんです。

農業をするパターンにもいろいろあって、カネをかけてやればリスクが多いし、他の産業との競争にもなってくる。そういったところに自分の身を置いて農業をやっていくのか、はたまた自然農法や有機農法をやって、消費者の方と一對一ぐらいの付き合いで、自分の身を守っていくのか。それは千差万別であつて、どれでもいいと思うんですよ。

だから、自分が何をやりたいかを考えることがいちばん大切なんです。それを考えずに、農協や行政が言うことを聞いてやってきたから、皆がブーブー言っているわけです。本当は自分に責任があるのに、勘違いしているんですよ。

加藤 お話も尽きませんが、今日はこのへんで。どうもありがとうございました。今日は現代の篤農家にお目にかかった気がしました。これで、日本農業は絶対安泰ですね。

（第三十一回 一九九五年二月十八日）

ふるさと金山町に生きて

●講師 岸三郎兵衛・林業家／現三英興業(株)代表

取締役社長

渡部俊治・大工職人／現渡部建築棟梁

栗田和則・「暮らし考房」主宰／現「暮らし

考房」主宰、東北農村文化協会代表委員、

共生のむらすぎさわ代表

〔出席者〕岸 宏一／山形県金山町町長 加藤秀俊／放送教育
開発センター所長 安達生恒／社会農学研究所所長 川喜田
二郎／東京工業大学名誉教授 須藤 謹／放送教育開発セン
ター助教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮田 登／神奈川大
学教授 米山俊直／放送大学教授

◆林業の未来のために

加藤 今日には金山の現場で活躍されている方々をお招きして
おります。順に、今なきっているお仕事や当面する問題、将来
の構想などをお話したいと思っています。

岸(三) 今日は遠方から、はるばるおいでいただきました

ありがとうございます。

私は、林業家という立場から、現在の金山の姿について、若
干お話を申し上げたいと思います。

先生方は、先ほど町の界限をご覧になったようですが、非常
に杉山が多いことに改めて驚かれたのではないかと思います。
金山は、山形県内でも有数の杉の適地で、加えてかなり高樹齢
の古い林があることで知られた場所です。

いうなれば、小さな林業地を形成しているわけですが、林業
地を形成するにいたったいちばんの原因は、単に杉の適地であ
るということだけでなく、大規模な林業があるからなのです。
人工造林が進んだ明治、大正の頃、田畑を所有していたいわゆ
る地主階層が同時に商業等をやっていました。その蓄積を山林
に向けていった結果、それが年を経て、いま現在、八十年生以
上のかなり樹齢の高い木が残っているのです。

町内をご覧になっておわかりのように、山村でありながら、
かなり農地があります。また、羽州街道という交通の要衝にあ
りましたので、商業による蓄財ができたものと思われまます。か
くいう私の先祖なども、そのようにせつせと山林に金をつぎ込
んできて、今があるわけです。

金山町には数人の大規模な山林家がありますが、戦前において
は、ほとんど山林を伐採することはありませんでした。デイリ
ーワークにあたる商業と、不労所得の最たるものであるコメの
収穫で普段の生計をたてていました。

ですから、林業専門というかたちになったのは戦後のことです。大規模林家というのも実は、戦前あるいは戦中に商業から手を引き、戦後の農地改革で田畑を手放していき、いやおうなく林業中心にならざるを得なくなった結果です。

戦後の林業については、復興景気によるたいへんいい時期もあったようですが、私がおもひのころついた時にはすでに、外材の流入など、林業にとつては厳しい状況が出てきていました。

この五十年を振り返ってみるとまさしく、いい時期からたいへん厳しい時期まで、足早に通り返ってきたような気がします。戦後二十周年は伐れば売れる、また労賃もたいへん安い時代でした。ちなみに、木は石で計ります。尺貫法の時代が過去のものになったにもかかわらず、林業家は相変わらず石という単位を使っています。戦後間もなく生まれた私の年代でも、立方メートルより石のほうがピンとききます。

労賃について言うと、一石（十立方尺）の木を伐採すると、五、六人雇えた時代がありました。

その後、木材価格が物価上昇の急先鋒だと言われた時期もあり、外材がかなり入ってきました。外材の流入、また、労働人口が農山村から都市部に流出したということもあり、材価は低く、併せて労賃も上がってきています。現在では一石を伐つても、およそ〇・数人の人間しか雇えなくなっているという厳しい外的条件があるわけです。

さらに追い打ちをかけるように相続の問題が出てきました。

戦前の家督相続の時代から、戦後は均分相続の時代になりました。私のところもそうですし、大規模、小規模を問わず山林家には重い負担がかかっています。特に、大規模山林家の場合は、相続による負担がかなり大きくなっています。

私のところは、通称、「いちやま」という屋号で呼ばれておりますが、私で八代目になります。現在、NHKテレビで放映されている八代目の将軍吉宗は質素儉約を旨としています。私は吉宗ほど偉くはありませんし、それほどしまりやでもないのですけれども、林業專業でもあることですし、何とか林業にこだわりの経営をしていきたいと思っています。材価を上げることやコストダウンを図ることは、花開くまでにずいぶん時間もかかりますし、すぐにはその成果が現れてきませんが、努力しつつ、林業をバックボーンにしながら、山林を持つ、あるいは金山に住むということに何か付加価値を付けられないものか模索しているのが現状です。

林業の場合は農業と違い、毎年毎年、収穫をしなければならぬという業種ではありませんので、そういう意味では比較的じっくり考える余裕があります。山に対する作業計画などについても、今年の計画を来年に繰り延べたり、再来年の計画を今年に回すとか、かなり柔軟性があります。そうした柔軟性を生かしながらいろいろ検討をしています。

金山町の場合、五、六年前までは資源としての立派な林があるというところで有名でしたが、最近、製材の過程で丸を四角

にひくだけではなく、防腐加工や防炎加工をする。あるいは、それをかつらむきにして集成材をつくるという工場がすでに三つできています。こうした動きをたいへん心強く思うと同時に、林業家としては、そうした外的な木材利用工面がなされることを単純に喜んでいただけでなく、それらの新しい方向を目指している企業に対し、いかにわれわれが的確な材を出していくか。また、どういふふうに必要なに対して応えていったらいいかということも課題であると思っています。

いずれにしても、林業家としては、自分の努力だけでは何ともならないような状況のなか、何かをしなければいけないと模索中です。林業を力強く盛り立てるところまではいっていいないということに内心忸怩たる思いがあります。後ろ向きの話で申し訳ないのですが、とりあえず、今の状況について申し上げます。

加藤 ありがとうございます。では、次に渡部さんお願いします。

◆「こだわり」に生きる大工職人として

渡部 こんばんは。私は十八で大工になって、三十年になる者です。

主に金山型住宅建築を手がけています。すつきりとした切り妻屋根、白壁、下見板張り、三つ揃って初めて、金山型住宅と

言っています。目のつんだ木目と白壁の調べがたいへん快く、同じような家が立ち並べば、小京的な趣がだせる。そうした方向で私たちは仕事を手がけているわけです。

私は、伝統的なこの金山住宅をつくる時に、「こだわり」という言葉が好きで、「伝統にこだわれば」、「木にこだわれば」、「かたちにこだわって、さらによい家を」と思いながら仕事をしておりです。

木を人生にたとえるのはちよつとおかしいかもしれませんが、木は二度生きると私は思っております。

植林されてから、業者さんの手を借りて杉が負けないようにほかの草木を毎年刈り取ることを十年ぐらい続けます。これは、風通しもよくなって杉の生育にたいへんよいのです。そして、三十年から四十年たつたところで枝払いをします。そして、七十年、八十年、金山杉と言われるまですくすくと育ちます。通常、杉は植え付けてから五、六十年後に伐採しますが、金山町では平均、七、八十年という大径木生産をしているのが特徴です。その間、私たちに縁を与えてくれたり、空気をきれいにしてくれたり、心をなごませてくれたり、たいへん私たちのためになってくれています。これが木の第一の人生だと私は思っています。

その後、伐採された材木が材木屋さんに行き、梁材になったり、柱材になったりします。そして、私たち業者に身請けさせます。これからが木の第二の人生です。

その第二の人生を、生かすも殺すもわれわれ職人の責任だと私は思っています。ここにこだわりを持って、木の性質を十分に見極め、適材適所に配分してやるのが木の第二の人生を全うしてやることではないかと常に思いながら、仕事をしております。

私は、仕事の一服の時など若い衆に、木のことだけではなく昔からの風習や言い伝えなどをよく話してやります。仕事の話をするとうぜん耳も傾けない者が、そういった昔の言い伝えの話などをすると、たいへん興味を示して乗って聞きます。そういう効果もあり、いろいろな風習などにもこだわりを持っています。

たとえば、建前たてまえです。なぜ、建前に五色の旗を立てるのか。昔からやっている、旗を立てての厄払いとして普通には済んでいるのですが、「本当のところはなんだ、大工さん」とお客さんに聞かれることがあるわけです。

それで、五色の旗というのは、東西南北にいる四神に関することで、この色は神様の色なんだと説明しています。

「北は玄武の山があり」というように、北は玄武という神様が山に住んでいて、色は黒です。黒が時代的に途中から変わって、今は紫になっています。「東は青龍の川があり」というように、東には青龍という神様が川のなかに住んでいます。その色が青なんです。「南は朱雀の平野がある」。平野のなかに朱雀という神がいて、色は赤です。「西は白虎の大地あり」という

ように、広い隣村に続く大きい道のなかに白虎という神様がいて、色は白なんです。その四つの神様に、家に降りてきてもらうために、どこからでも見えるように旗を高く高く立ち上げて、安全堅固、繁栄を願うのです。

もう一つ、黄色を入れて五色になるのですが、その黄色は何か。四つの神様が非常に個性が強くて喧嘩をするので、取り持ち役をするのが中央に居座る黄幡おうばんの神様で、色は黄色です。

そういうことを建て主さんに説明しますと、たいへん感動さちそうしてくれ、ご祝儀もたいへんはずんでくれる(笑)。何と言いますか、信頼感もそこで非常に高まって、仕事もやりやすくなるんです。そういうことが大事なんだと私は常々若い衆に言っています。

また、即後継者育成ということになるかどうかわかりませんが、このあいだ、中学生が一日大工仕事体験で来た時に現場掃除してもらったんですが、一服の時そういった話をしてやったら、大工の道に乗り気になりました。「棟梁、高等学校を卒業したら、おれ、大工になつかな」なんていう子が二人ばかりいました。私のところにも来年、高校卒業者が一人入ります。ですから、こういった話をするのも、けっこういいものだと自分で勝手に思ったりしています。

いつまでも木にこだわり、伝統、かたち、風習にこだわりながら、大工として金山職人の誇りを持って頑張っていきたいと思

います。

加藤 では、最後になります、栗田さん、どうぞ。

◆「知恵」と「工夫」で経済合理主義に抗して

栗田 私の家は、ここ役場から車で十二分ぐらい、たいへん便利になったというものの金山町のなかでいちばん山奥で、いちばん小さくて、いちばん不便と言われる、十五戸からなる集落にあります、農業と林業をしています。

たまたまかもしれません、昭和三十五年に農業基本法ができた時に、中学を出まして、それから定時制高校に通いながら農業を始めました。振り返ってみますと、農業基本法以来三十五年、時代のなかで翻弄されながら生きてきたなという思いをつつづく持っております。

特に、減反政策が二十五年続いて、コメはつくらなくてもいいのだ、採算に合わなければ田畑は荒らしてもいいのだという風潮ができてしまい、またそのことに対してさっぱり後ろめたさを感じないような農村の環境ができてしまったという思いを強く持っております。

確かに基本法は、新しい政策というかたちで出たものですが、そのことがどうもわれわれ農家にとっては、ますます不安を増長し、先行きに希望を失わせてしまったのではないかという気がします。

そういう認識はありますが、私としては自分の住んでいる村で生き続けたいという思いを持っています。実は金山というところは、戦後の社会教育がたいへんさかんなところだったので。私自身、そういうなかで育てていただいたという気持ちがあります。「この地域で農家として何ができるか」ということ、「仲間と一緒に何ができるか」という問いが習性のようなになっているのです。

その一つの例として、この地域の自然条件を生かした農業を考えた結果、冬の農業ということで、「山菜研究会」を始めました。その時に、いちばん心したのは、この地域に合った開発をどういうふうにおこなっていくかということでした。後発の産地ではありましたが、マルチ栽培や水耕マットを使って促成栽培をするという新しい技術も、農協の営農指導員と一緒に考え出してきました。

もう一つ心したのは、そうした労働に見合う所得をどうやって確保していくかということです。産地として新参だったので、「金山は新参者」というキャッチフレーズをつくって、どうやったら一流の産地になれるかと、販売作戦を展開しました。

その一つは、ワンランク上の差別化作戦という規格を吟味するという方法、もう一つは、ゴールドシールを貼るといイメージ作戦です。さらに、栽培面積あるいは出荷量に応じて、販売対策費を農家自身が拠出していくという方法で市場対策をするということ。おかげで、金山町産のタラノメは、いま関東

では、太田、築地を合わせて五市場に出荷していますが、側芽物としては、日本でいちばん長く、最初から最後まで生産される産地として高い評価をいただいています。

これらの努力をしながら私は、もう一方で、農業はお金を儲けるだけではなく、いかに農業することを楽しむかが重要だと思ってきました。その一つの仕掛けとして、タラノメの場合には特に女性が働きの中心になるものですから、「山菜は女性が主役」というキャッチフレーズをつくって、女性の名前で出荷をし、代金も女性の口座に入れるという方法を取りました。

その後、九州の大山町から借りたアイデアですが、「タラノメを売って海外へ行こう」というキャッチフレーズをつくりました。一バック五円を三年間積み立てて、四年目には海外研修に行くという具体的な方法を取りました。四年目には、町をはじめ県などいろいろるところからご援助をいただいて、女性を中心に山菜研究会だけでヨーロッパへ行ってきました。

その旅行に関しても、私は今の時代というのは個人個人がどうやって自分に自信を持っていくかがいちばん大事であると思つたので、訪問先でのあいさつは必ず一人ひとりが交代です。あるいは壮行会、報告会、報告書等についても、全員が「書き」「話す」、かたちにこだわりました。

そういう一方で、もう一つ、地域条件を生かしてどういうふうに豊かに暮らしていくかを「考える」必要があるということから、全く個人的なものが、「暮らし考房」という小さな

ログハウスを自宅の隣につくりました。家の山の五十年生の杉の間伐材を利用した、手づくりのものです。そこを基地として、ファームステイや勉強会をしながら、農山村での豊かな暮らしを探っています。

「伝承」という要素もあるし、新しく何かをつくっていく必要もあるだろうと思っています。とりわけ、今までの農山村にはなかった「個人の能力」を生かした農家らしい生き方を探りたいと思っています。特に強調しているのは、農業労働は自己管理労働だということです。そうしたものを生かしていく試みとしての、いろいろな自分たちの暮らしぶりを見ていただいていますし、人の話も聞いたりしています。

たいへんうれしいことは、「暮らし考房」を始めて、県内はもちろん、県外からも研修者がいらしたことです。特に農家の女性の方が多いのですが、参加者は二年十カ月ほどで千五百〜千六百人になろうとしています。

ここでの「暮らし」を見ていただくことで、それぞれの方が自分の住んでいる地域でどういう暮らし方をしたらいいかを考えるきっかけにしてほしいと考えています。

さて、昨今の日本の経済合理主義、またそういったモノサシで測る時代のなかで、農業をしたり、農山村で暮らししていくには、それとは別個の価値観を持たないと、「地域」で生活し続けることはできないという思いを強く持っております。そうした価値観をどうやってつくっていくかということから、内山節

さんという哲学者をお呼びして、この十五戸の山奥の村で哲学講座を開いています。

「労働する」とか「自然とかかわって暮らす」ことの意味合いを理論的にきちんと皆で考えていきたい。内山さんには向こう十年間、何も生まれないかもしれないけれどもやってほしいとお願いしています。今年で二回目を終えました。

もう一つ、価値観を変えていくためには、よそのところの人の言葉が欲しいという思いがありまして、グリーンツーリズムの試みとして、都会の人をどんどん受け入れています。都会の人と村の人が言葉を交わすなかで、自分たちの村のよさや農業の大切さを再認識していきたいと考えています。

それに際しても、ヨーロッパでの農家民泊を経験した折りにその姿に感銘を受け、農水省の言っている「農家民宿」はダメという気持ちが強くなったので、ドイツ語で休暇の家という意味である「フェーリエンハウス」という呼び名のグループをつくって、農村で過ごしてみたいという人たちを迎え入れています。

この活動の内に、自分たち農家でも人の役に立つという運動性を見出し、自信を持っていけるのではないかと考えています。現在、東京農大の農林塾というところの学生たちと、宮城学院女子大の学生たちに、ファームステイというかたちで、農業体験してもらっています。自分たちも何らかのものを伝えていくことができるし、向こうからも逆に、指摘されてはつと

気がつくこともたくさんあります。われわれとしては、「未来の消費者」である学生たちに、短い滞在期間ではありますが、実感としての農業や農村をつかまえてもらうための運動であると思っています。

さらに、先ほど話をされた岸さんに代表になっていただいて、今年初めてヨーロッパの学生の受け入れをおこないました。各農家に分宿をして、農業をしながら農家と接触してもらうという試みです。

このように、地域に住んでいても世界に視野が広がっていくという環境をつくっていきたい。いろいろな仕掛けをしながら、今、いちばん大事なのは、自分たちが「地域」に暮らし続ける、あるいは農業をし続ける自信と誇りと希望を持つことだと思っています。

最後になりますが、私たちは微力ながらこの地で、自分たちの世界を努力してつくっていきませんが、今日のような、二十一世紀フォーラムの皆さん方が出される見解は何と言っても大きな影響力を持ちます。ぜひ、金山に住んでいる人たちが、これからの金山についての自信と希望を持てるような、励みになるご見解を出していただきたいと願ってやみません。

◆ 林業労働力の確保をどうするか

加藤 三人から、駆け足で、現場からのお話をうかがいまし

た。まず、長老格ということで安達先生からご質問をどうぞ。

安達 実はこちらをお訪ねするのは、二十年前を初めとして、三回目なんです。いま資料を見てみますと、驚くなかれ、樹齢六十年以上の森林が八百二十三ヘクタールあるというのですから、金山の林業は成熟段階にきているといえます。

ご承知のように、いま木材の価格は低迷していますが、一、三十年ぐらい先を見越しますと、外材はあてにならないし、その頃にはいよいよ出番になってくると思うのです。お話をうかがうと、現時点では林業経営はたいへんなようですが、長期に展望すれば、たいへんな財産をおつくりになったと思います。

ですから、将来伐採した後の植林に要する林業労働力をどう確保するかがたいへん重要になってくると思うのですが、いかがですか。

岸(三) お尋ねの造林も含め、いわゆる林業労働力が確保できるかについて、二十数年前、私の山を中心に、林業労働者の雇用という観点で、大学の先生に調査レポートを出してもらったことがあります。金山のように農家がある地域では、農繁期以外の農閑期の労働力の余剰労働力をあてにする限りは大丈夫だろう。抜本的な農業構造の変化がなければ、まず安泰でしょうというのが、かれこれ三十年ぐらい前の話で、当時、学生で林家に残ることにした私には、ひとまず安心材料だったんです。

その後、林業従事者は春の雪どけのように減っていき、また、

農家のほうも決して人員は余剰ではなくなり、むしろ兼業化、機械化がますます進んでいく。そんななかでなかなか林業にまで人手がまわるわけはなく、事実、一時期、人がたいへん少なくなった時期もありました。しかし、現在、私のところは法人をつくって、十名ほどの人を雇用して、機械——林業の場合、機械と言っても原始的な機械の部類に入るのでしようが——を使いながら、極力自分のところでまかなうようにしています。

私どもの会社にしても、先ほど栗田さんが農業に対して夢を語られたタラノメ預金のような、何か張り合いがあるようなかたちにもっていきたいと考えています。

従来、立木を販売する場合は、立ったままの状態で買い手に対し値踏みをし、山で商売を成立させ、伐つて運び出すのは買い手側というかたちでできました。

そこを、伐採までかわらない手はないだろうと考えたのです。今は、伐採、搬出に関する機械の革新も進んでいます。経営的には、自分のところで伐採、搬出することが必ずしもプラスではなく、森林組合とかよそへ頼んだほうが効率がいいのですが、全プロセスにかかわるという点で、社員のモラルアップにもなりますし、若い人はやはり機械にそれなりに興味もあります。やり方によっては伐採の能率が上がるといふ励みもありますので、研修会へ派遣するなどを心掛けながら、若い人に多少なりとも夢が与えられるようにと考えています。

このように林業そのものに生きがいをどこかで見つけられる

ような工夫をすることに加え、一方で、極力コストダウンに仕事を発生させるような工夫をしています。

昨年、十ヘクタール下刈りがあったとすれば、その反動で落ち込み今年は逆になかったりということがないよう、「この時期にはこういう仕事がある」という目安を、働いてもらうほうにも予想できるように心掛けてやっています。

たまたまいま私どもの従業員はまだ若いですが、将来的に見ると高齢化の問題も発生するでしょうし、まだまだ積極策とは言いい切れませんが、長い目で見た林業労働力の確保に努めています。

◆林業を脅かす相続税問題

安達 町全体で林業の将来に備えて何か組織をつくらなければいけないのではないのでしょうか。

宮崎県の奥に平家の落人集落といわれる榎葉という村がありますが、その一つ手前に諸塚という村があります。九六%ぐらいが森林ですから、山村というよりも林村と言っていいでしょう。

そこで、かつて村長が——彼も四十五ヘクタールぐらいの山持ちだったのですが——林家の後継者難解消に、「国土保全森林作業隊」というのをつくったんです。毎年、二十代の若い人を試験して採って訓練し、かなり育っています。

だいたい農家や林家の跡取りですから自分の山からの稼ぎもあり、あとは全く隔週週休二日のサラリーマン的労働で、集落、山全体の管理労働をして、二百万ぐらいの現金収入が入り、合わせて役場の職員並みの所得保証になるわけです。年金もあるし、定年になったら後は自分の山の経営をすればよい。

村全体の山の管理の仕事も、だんだん高齢化すると、各戸から一人ずつ出せといっても、たちゆかなくなることを見越してつくられたシステムで、将来この隊員を五十名ぐらいまでになると、村の山全体が管理できるという構想になっています。

金山も、二、三十年先のいけばん大事な時になって、山の財産である材はできていても、人手がないでは困るわけで、今からこういうことをお考えになってはいかがでしょうか。

岸(宏) 諸塚の村長さんのお話もよく存じあげていますし、その他、熊本県小国町では悠木ゆぎの里という第三セクターの会社をつくっておりますし、愛媛の久万町でも、役場が出資して会社をつくり、林業労働者を集めて、それぞれ成功しています。

聞くと、車でサラリーマンスタイルで出社して、事務所で見替えて現場に出る。こういうスタイルに、今の若い人たちの好みが象徴されているような気がします。

また、そうした管理システムを町々でつくることも大事ですが、流域全体を網羅した、しかも機械化された第三セクターの会社がこれからは必要になってくると思います。

たとえば、最上地域は新庄市を中心に一市四町三村あるわけ

ですが、最上林業という会社をつくり、補助金を受けて、様々な機械化をしてみました。そういうかたちで広域的な取り組みも両方考えていかなければならないと思っています。

米山 先ほど杉の林を見せていた দিয়ে、その時もお話があったのですが、相続の問題は非常に大事ではないでしょうか。現行の相続のかたちでは、林業を維持していくのはたいへんだということですが。

岸 (三) 二回相続を繰り返すと財産はだいたいなくなるということは、林業に限らず言われています。

特に林業の場合、造林から伐採まで百年とか百八十年という長いサイクルのなかにあり、極めて換金性に乏しく、いったん始めたらかなかなか手を引けないということがあります。ですから、相続税は厳しく響いております。

私の家の場合、戦後、祖父の代、父の代と二回相続していますので、私が死ぬとまず終わりということでしょう(笑)。

祖父が亡くなって、一気に相続税は払えませんでしたから、十五年延納し払い続けて、終わってほっとしたせいなんでしょうか、父は二年後に亡くなりました。父が亡くなって十年ですから、およそその二十五年間、所得税と相続税をアベックで払っている勘定になります。たぶんこの先十年延納するなかで、母に何かがあるとすれば、おそろくずつと相続税と所得税を払っていくことになると思います。

端的に言いますと、相続税でいちばん困りますのは、計画が

かなり狂ってくることです。本来、八十年で伐採をしていたものも、相続税の支払いのために八十年を下回るようなものでも伐らざるを得ない。常にそういう逆算の構図を頭に置いていなければなりません。

もつとも戦後、林業專業になつて以来、生活費がこのぐらいかかるからという逆算のもとに山を伐ってきたわけですから、相続税だけの問題ではないのですが、相続税の発生により、伐らざるを得ない量が格段に膨れ上がっていることは事実です。

そのような状況下で、林家経営ははつきり言つて本当に難しい。

たとえば、森林組合に、それなりの能力、機能があれば、すべて組合にお任せしてやつていくほうが、本当は経済的にはいいのかもしれませんが。しかし、栗田さんの場合は農業もやつておられるからいいですが、林業以外何もやっていない人間が全部組合に預けてしまったら、果たして私は何なのでしょうということになります(笑)。

そんなわけで、やせがまんのお気はあるのですが、先ほど申し上げたぐらいの人数を雇用し、職員のモラルアップのために、投資としては多少大きいですが、機械を導入していくことなどをやつております。

岸(宏) 相続税の問題ですが、三郎兵衛さんの場合は二ヘクター以上の山ですから、かなり大きいわけです。相続税の最大の問題点は、二重課税になることです。相続税を払うた

めに木を伐ることによって発生する所得税も払わなければいけない。それでは物納しようかと言うと、今度は林業としての規模が満たせなくなるという林家としてのジレンマがあることを、よく理解していただきたいと思います。

◆「楽しい農業」を目指して

加藤 林業のほうから少しお話が離れますが、渡部さん、先ほど、すっきりした切り妻屋根の金山型住宅と言われましたが、この型はいつ頃から伝承されているものなんですか。

渡部 うちは大工を細々とやってきて私でいたい八代目なんです。じいさんの話を聞くと、そういつた切り妻型というのはだいたい前から金山型としてあつたらしいです。

金山では金山型住宅を奨励しています。街並み景観づくり百年運動を始めて、金山型にした建物でコンクールをしています。金山型住宅という言葉がひんぱんに出てくるようになってきたのは、そういう条例ができてからではないかと思えます。

加藤 資料を拝見すると、千八百世帯のうち約二百世帯が大工さんということですが、これはいへんな職人集団ですね。

このあいだ、千葉で金山職人の方が住宅を建てておられたのを、着工の時から完成まで一通り拝見したんですが、他の地域の大工さんとやり方が違うという印象を持ちました。

渡部 まず、構造に気を使っています。雪国なものですから、

がっちりして、大きい部材を使う。梁関係は特に大きいものを使います。また、杉の町ということで、柱や造作材など見える部分に非常に目のこんだ材をふんだんに使います。そういうことで、他の大工さんの建てたものと比べると、金山の大工さんが建てたものはちよつと違うと言われますね。

岸(宏) 柱は、普通東京あたりですと、三寸五分のを使うのですが、金山の大工さんだと四寸角の柱でつくるといふように構造材に頑丈なものを使うという特徴があります。

舛田 町で住宅を新築、改築する場合に補助金を出すということですが、金山型住宅であるということが条件になるんですか。

岸(宏) そうです。三十万円出していますが、切り妻屋根の勾配や屋根の色など、すべての条件を満たしていないと補助しません。

舛田 栗田さんの「暮らし考房」でやっておられる活動と、タラノメ栽培をする山菜研究会の関係はどうなっているのですか。山菜研究会というのは、集落のなかだけのものですか。

栗田 いえ、町全体のなかでの組織です。先ほどは言葉足らずだったですね。組織としては山菜研究会と暮らし考房は全く別のものです。

山菜研究会は九年前に私が呼び掛けをして仲間を集めて、タラノメも私が導入して、一緒にやり始めたものです。そして皆でヨーロッパへ行って、帰ってきてから、フェリーエンハウス

というグループをつくって、都会の人を受け入れることをやり始めたのです。

情報発信もいわゆるコネは私のほうが「暮らし考房」をしている以上、他の連中よりありますので、だいたいは私が受けてそれを農家に分散させています。そんなわけで、別組織といいいながら入り交じっているわけです。

私がある仕掛けをして、町の連中に手伝わってもらいながら町全体でやっていくというかたちなんです。逆に言うと私の活動も山菜研究会があるからやれるところがあるのです。お互いに持ちつ持たれつのなかでやっていると思っています。

須藤 この山菜研究会のメンバーの方々は、農業をやるかわら山菜も一緒にやっておられるというかたちなんです。それとも、たとえば、役場勤めとかサラリーマンといった方々も、農家の人と一緒に山菜をやっておられるのでしょうか。

栗田 結果的には、皆、農家です。ただ、男は農業をしても、女の人は勤めに出ているケースもあります。夜や暇な時に手伝うかたちの、いわゆる兼業農家ですね。

安達 山菜研究会のメンバーは何人おられるんですか。また年間売り上げはどのぐらいですか。

栗田 今年は十七人だそうです。また売り上げは、二千六百万円ぐらいで、非常に小さい組織です。

安達 では一人当たり平均して、百五十万円ぐらいにはなりませんね。

栗田 ただ、非常に小規模の、三十万円ぐらいの人が三軒ほどおられます。二百万を超える人が五、六人ぐらい、いちばん多い人で四百万円ぐらいでしょうか。

安達 タラノメを「栽培」するわけですか。

栗田 タラノメの非常にいいところは、夏場はほとんど手間がかからないことです。畑に栽培しますから。冬はビニールハウスのなかの促成です。

安達 そうやって高品質のものを高値で販売しようということですね。まだまだ伸びそうですか。

栗田 実際はあまり伸びないです。農業より他の仕事のほうが手つとり早いからではないでしょうか。

須藤 山菜といってもいろいろあるなかで、タラノメになった理由はなんですか。

栗田 ほとんどの人が野菜をつくったり牛を飼ったりして夏の農業を持っていたので、冬場の農業が欲しかったんです。冬やれて夏の他の労働にあまり食い込まないものということが一つと、経済性という条件から、タラノメに行き着いたんです。

安達 あなたの「考房」の研究テーマは自然と共生するということですが、この自然条件をうまく利用して、一緒に生きて、楽しい生活をするために、山ぶどうをとってきてワインをつくるとか、ヤギを飼って、カマンベールチーズをつくるとかはどうですか。ワインとカマンベールチーズがあれば、あとはもういりませんよね。もっと楽しんだらどうでしょう。

金を取るのが主目的なのか、自然と共生して楽しみながら金を取るのか。たぶんあとのほうだと思っので、それだったらタラノメばかりではなくて、もつと広がる可能性も検討してみたらどうでしょう。

◆イザベラ・バードと「妹の力」

宮田 今度は経済効率と全く関係のないことでお尋ねしたいのですが、イギリス人の旅行家イザベラ・バード女史が明治期に金山を評して「ロマンチックな雰囲気のある町」と『日本奥地紀行』のなかで書いています。非常に文化の奥行きが深いところだという印象を彼女が受けたことが、われわれには読みとれます。

確かに、歴史的には、羽州街道の宿場町から発展し、たいへんにぎやかな街道筋の町だったものが、だんだん林業の町になり、今では職人さんの町になっている。そして、ユニークな街並み景観条例に見られるような新しいまちづくりがおこなわれているのは興味深いことです。

先ほど町に入る時、町の風景が遠野とよく似ていることが印象的でした。峠を越えた瞬間に三つの山が見え、その三人の山の女神が語りをしてしているイメージが、瞬間に目に入ったのです。風水的にも非常に優れた地勢の町ですから、非常に安定した「王国」が栄える兆しがありますね。ずっといい町として育

つと思えます。

また今日このフォーラムで話された三人の方も、人品骨柄も卑しからざる方々ばかりという印象を受けましたが、惜しむらくは女性あまり前に出てきておられないことです。文化は女性を中心として醸成されるといふ面があるわけです。神室山が修験道の山ということで、女人禁制の伝統があるのかもしれないが、女性たちが語り継いできた昔の伝説とか、先ほど渡部さんがおっしゃっていた大工さんの建築儀礼にともなう話など、いろいろな伝承がここには秘められているという気がしてならないのです。金山町史、あるいは歴史、民俗といった出版物はたくさんありますか。また図書館や資料館などは計画されていますか。

岸(宏) 金山町史はもちろんつくってあります。図書館もささやかなものですが、あります。しかし、民話や伝承の類についてまとめた本は、まだないのではないのでしょうか。町史編纂室はずっと継続しておりますが。

確かに先生がおっしゃるように、いかにも文化の香りはするんですが、どうも詩人とか哲学者などを輩出しなない町でもあるんです。あまりきれいだから、そのきれいに感受性が慣れてしまつて鈍くなるのかなと思つたりもします。

すぐ近くの真室川町の安楽城あんらくじょうというところは古いわらべうたが伝わっているのですが……

宮田 真室川音頭といった民謡のようなものですか。

岸(宏) そうですね。

宮田 それに匹敵するものが、私の直観では金山にもあるはずですよ。

岸(宏) 番楽と獅子舞、歌舞伎はありますね。

宮田 しかしそれは昔、男中心の芸能ですね。女性の秘めた力がきつとあるはずですよ。

風水がびたりと決まった町で、ロマンチックな雰囲気がありますが、それはどこから来るのだろうかと思いつながら町を歩いてみましたが、まとまって出てくる伝統文化がまだ不足しているような気がします。

経済効率を非常にきちんと計算された上で、その余剰としてだんだん文化が豊かになってくれればいいとお考えになっているのはよく分かります。栗田さんの言っておられる新しい畑作農民としての生き方、渡部さんのような、非常によい意味での職人かたぎをここで生かしていくという姿勢もあるし、岸さんの林業に対する誇りもお話を聞いていてよく分かりました。今日は女性が話されなかったのが残念ですね。

加藤 宮田さんは、柳田学の『妹の力』の系統で、女性の秘めたる力をいつも言っておられるんです。『女の霊力と家の神』という本も書いておられますし。

岸(宏) 実際は、力はあるのですが、どうもこの町は、表に出てくるのは男性が多いようです。議員などでも女性はいません。だかつて一人も出ておりません。

加藤 栗田さんの場合も、「暮らし考房」で、奥様が草木染などをやっておられるということですね。

米山 これから金山町の女性の力を発掘していただくというのを、一つ宿題にしてもいいかもしれませんね。

(第三十三回 一九九五年十月二十一日)

星と神楽の里

〔岡山県美星町〕

●講師

杉原 昇・岡山県美星町町長（当時）
神崎宣武・宇佐八幡神社禰宜／現宮司

〔出席者〕安達生恒／社会農学研究所所長 須藤 護／龍谷大学教授 米山俊直／放送大学教授 永野芳宣／（財）政策科学研究所所長 小浜政子／（財）政策科学研究所主任研究員

晩秋の吉備路、美星町を訪れた研究会一行は、星の郷青空市や歴史公園「中世夢が原」、天文台を見学した後、夜半から、七年に一度の荒神式年祭の神楽を鑑賞した。吉備高原上ではこの季節、毎週どこかで神楽がおこなわれ、風にとつて太鼓の音がこだましているということである。

◆町の活力のために

安達 本日は加藤先生の代わりに私が進行をいたしますが、実は二十数年前に、もっぱら農業をどうするかということまで美

星町には五、六度うかがつており、ご縁があるわけです。

杉原 皆様、今日お着きになりました町内を少しご見学いただきましたが、わが町はだいたい標高が三百一、三十メートル、岡山県南の平野から一気にながら上っておりますので、地形的にも環境的にも県南の都市から最も近いということで親しまれていく地域です。

昭和二十九年に四村が合併して美星町が誕生し、当時は一人の人口が、今は八千二百人という過疎の町になっております。

そういう時代の変遷のなかで、過疎化を何とか食い止め、あるいはまた町の活性化を図っていかねければと頑張つてまいりました。今日ご出席の安達先生には二十数年前、農業、畜産振興のピーク時にいろいろご指導いただいております。農水省などの総額約二百億円ばかりの国の予算による補助事業を導入いたしました。

と同時に、当時としては先見性があつたと思いますが、これからは産業にしても文化にしても、それを運んでくるものは道であるとして、道路改良を優先しようということで着手いたしました。道路改良率は県下でも屈指で、美星は道がよいという定評があります。

その後農業事情も変わり、定住、あるいはＵターンの推進をより真剣に考えなければならなくなり、そうした方向づけを十数年前にいたしました。自治省からリーディング・プロジェクト第一号の採択を受け、これによる「星の郷中世吉備の荘いきい

「中世夢が原」の整備となりました。

今日、ようやくそうしたそれぞれのプロジェクトが一段落いたしました。それなりの成果を上げつつあるわけです。一方、農業事情は変わってまいりましたが、二百億円からの投資をしておりますので、これを何とか活かそうと、時代の自然志向、本物志向を睨んで、生産者、消費者との直結による流通として展開しているのが、今日ご覧いただいた、産直プラザの中核「星の郷青空市」です。現在では五億円に近い売り上げとなり、休日には千五、六百人、平日でも六、七百人が近在から詰めかけている状況です。結果的にはたいへん自信を得て手ごたえを感じております。

こうしたこととリーディングプロジェクト起源の歴史公園や天文台が相乗的に効果を上げられるよう、これからの町おこしを力強く進めていこうと取り組んでいる次第です。

安達 私がかつてうかがった時は、畑の灌漑施設や土地利用が問題になっている時でした。いわば下部構造の問題でしたが、今日来て驚いたのは、文化的な施設がすっかりでき上がっていることです。天文台ももちろんそうですが、「中世夢が原」はおそらく十五世紀ぐらいの村を復元されたものでしょうが、現代のわれわれの生活の起源になっているようなものの復元が見事ですね。

明治村などは生活と切れた展示になっていますが、ここは住

民の生活の歴史の上に展開されているところが、たいへん気に入りました。全国あちこち歩いていますが、こういう町づくりはありません。

杉原 美星町が農業を守っていくためには、工業化、また都市との交流が重要です。

さて、私は昭和五十七年に就任しましたが、これまでおこなった町おこしを少しご説明したいと思います。

まず、美星町の「繁栄条例」というものをつくりました。これは過疎化の一つの歯止め、また同時に町民にも希望と活気を出していただくという意味もあります。こうした条例は、五十九年頃は全国的にまだ珍しい時期でした。

順に説明しますと、「産業振興」は特産品の開発などを助成して奨励していこうというもの、また「町民チャンピオン制度」というのは、町民が誇りを持つためにということですが、ファミリー年齢が三世代で三百七十歳というのが今チャンピオンです。それから結婚の媒酌、これもチャンピオンは七十六件、また少子化時代ですが、工宝はいま五人というのがいちばん多い。そういう人をチャンピオンとするなど望まれる家庭を奨励していこうとしています。

その他「結婚祝い、仲人謝金」、Uターンの家族には「Uターン奨励金」を、卒業後定住したのものには「留町奨励金」(礼服一着)、少子化対策として第三子以上は「出産奨励金」(平成三年の改正で五十万円)を差し上げることになっております。ま

た、長寿記念、あるいは、献身的に家庭介護をやられている方の顕彰などを併せまして、「繁栄条例」としております。

また、これまでの事業として、美星七福神勧請というのがあります。高齢化社会になってお年寄りが増えてまいりますから、お年寄りに美星へたくさん来てもらうためにはと思いますして、宗教法人を誘致しました。

これは真言宗系で怪しげなものではありません。院主さんのアイディアで宗旨を問わず誰でも信仰できるものとして七福神を祀りました。地域の人にお守りしてもらうことは活力になりますし、年間四万人ぐらいの参拝客が遠方からもきています。

全国的に有名な「美しい星空を守る美星町光害防止条例」は平成元年に制定いたしました。これは昭和五十九年に、倉敷にありました天文台が都市化を避けて美星町へ移され、一躍、星空と美星町が結びつけられ、観光客、視察の方が非常に多く来られた。だんだん「美星町は星の町」と言われ出したので「光害防止条例」をつくろうということになったわけです。日本で初めて、どこにもない条例で、お手本としてはアリゾナ州ツーソンの条例を参考としています。

これが結構難しく、最初はいろいろ提案しても、町民の方は昔の防空演習や灯火管制を連想します。つまり、「明るくして活性化するというのなら話はわかるが、暗くして活性化するというのはわからん」とさきさん言われたものです。全国で初めての条例でしたから、マスコミが総動員で応援してください

ました。

こうして、一躍「星の町」ということで売り出してまいりましたが、それならひとつ町営の天文台もつくろうではないかということになり、美星天文台を平成四年、五年でつくったわけです。当時は勢いに乗っていましたから、「どうせつくるのなら日本一を」と、民間では一メートルという天文台はなかつたので、百一センチにしました。今では追い越され三番目ぐらいになりましたが（笑）。とはいえ公共天文台では内容がいちばんと自負しています。京大の名誉教授の小暮先生という方を台長にお願いしております。

それから「中世夢が原」ですが、天文台より一年早く平成四年に開園しました。当初は珍しいので爆発的に年間約十万人近いお客さんがありましたが、その後、若干減って、いま六万五千人ぐらいで安定しています。これから馬力をかけて回復していくというつもりであります。

最後に、最初に少し触れた星の郷青空市についてお話ししたいと思います。昭和五十九年に無人市場から発足しましたが、年を経るにつれて実績も上がってきて次第に大きくなり、今の観光センターも併設して「産直プラザ」という総合的な市場にいたしましたのは、ちょうど政府がふるさと創生事業で一億円を配っていた時で、これを二年積み立てて基本的な用地買収、施設整備を町がやりました。あとは若い農業後継者に自由にやってみなさいということで、運営は全面委託しております。

したがって、若い人たちは非常に希望を持ってやっております。そういうことが両々相まって今日の発展につながったわけです。これからもさらに充実してこの成果を伸ばしていこう、そして美星の農業を守っていこうと思っておりますが、そのための基盤がだいたいできたのではないかと思っております。

◆少子化対策と光害防止条例

須藤 送っていただいた資料を拝見したいへん興味深かったことの一つに、自治公民館があります。先ほど町長さんが、ここに住んでいる方々が自主的に自分たちで考えて、長い積み重ねのなかで生まれていったとおっしゃいました。それと違って、一般の公民館というのは県や町が補助を出して、講演会とかコンサートといったイベントをやりなさい式のもんです。

自治公民館は沖縄にもあって、沖縄の場合は本場の意味での自治活動をおこなっている公民館が多いのですが、この自治公民館は、どういうシステムで活動されているのか、それが農業生産や文化事業開発とどう関係しているのかお聞きしたいのですが。

杉原 昭和三十年代に文部省が自治公民館協力活動というものを奨励しまして、全市町村で公民館活動が展開されました。しかし、これは教養文化啓蒙もありますが、言葉は悪いのですが、「行政の手先」的色合いが非常に強かったわけです。

どうしてもそういうきらいがありましたので、昭和四十一年に美星町では、いち早く「自治」という言葉を冠して「自治公民館」といたしました。われわれの地域はわれわれの力でつくっていく、ということ。「自治」という名をつけたわけです。具体的には、これは町内会の連合体であって、だいたい七、八の町内会から構成されています。多いところで二百戸、少ないところは五、六十戸という規模で大小があります。これは旧村の大字であるというようなことなど、旧慣を尊重して、コミュニティの図りやすいようにつくつてあるためで、二十一あります。

道路の管理やいろいろなイベントなどにも、自治公民館がこぞって競争的に参加してくれることになりました。

美星の場合はこれが現在の町の発展に、たいへん大きく貢献していると言えます。たとえば地域の要望、お願いといったことも、自治公民館がまとめ役になってやってくれます。自治公民館管内の道路改良をする場合なども、地権者の同意、用地買収などをすべて大々的にまとめ、町のほうへ持っていくという仕組みになっているので、行政としてもたいへんにありがたい。

その後、住宅団地ができてまして公民館組織を一つ増やして二十二になつていますが、それぞれの自治公民館に対して補助事業として、コミュニティハウスもいま建てています。これなども町が八割助成しまして、二割を地元負担としています。自

治意識を高めるためです。

このシステムはよそからも視察においてになります。皆さん驚かれるのは、公民館長、教養部、生産部、生活部、体育部などいろいろな部の役職が全部無報酬だということです。

永野 町長さんがお話になられたなかで、私が非常に感心したのは、美星町の繁栄条例をおつくりになって、たいへん具体的に少子化対策、あるいは過疎化対策をやっておられることです。

私自身、人を増やすということを日本は本気で考えないと、この先えらいことになるのではないかと思っていた矢先こういうお話を聞きましたので、先見性にたいへん感心いたしました次第です。

お聞きしたいのは、一つはこういうアイディアは、もちろん町長さんがお考えになったのだらうとは思いますが、どういうところから出てきたのか。それと、Uターン奨励金はいいいのですが、戻ってきた方が希望を持って働く、定住できるような政策がさらに重要だと思えます。そのあたりも何か考えておられるのでしょうか。

杉原 切実に先々を考えて今のような構想をやっておりますと、ヒントがいろいろ出てくるわけです。光害防止条例は専門家の知恵を借りましたが、繁栄条例は私が考えました。

これから本当に少子化問題はいけば大きな問題ではなからうかと思えます。私は視察でおいでになった方に光害防止条例

を説明する場合、このごろは夜まで明るくして、しかも金をかけて遊ぶ。そういうことが少子化を招くもとであると(笑)、これはジョークですが、言っています。

昔、江戸時代以前は、一般庶民は夜でも灯芯に火をともし種油を買うお金に困っていた。中流以上の家庭でなければ、夜は早く寝たわけです。

ですから光害条例は基本的にはできるだけ自然な夜空を取り戻そうということですが、昼はどんどん働いて夜は暗くして皆さん早く休みなさい。そうすれば子どもが増えるんです(笑)、という意味もある。なかなかそういうわけにはいきませんが、いろいろ考えていると面白いです。

職員のアイディアも「一人一提案」ということで募集しておりますから、そうしたアイディアも起用しておりますが、まず首長たるものは率先して考えなければならぬ。しかし考えようによつては、給料をもらって、しかもやりたいことがやれるわけですから、これぐらいよい仕事はありません。私はいつも寝床のなかでいろいろアイディアを考へるんです。当面のことだけではなくて先のことまで考えていきませんといふ発想が出ませんね。

また定住促進についてのご質問ですが、企業誘致もどんどんやりまして、働く場をつくる。それから住宅もつくっていかなければいけません。このところ企業誘致はちよつと一服しています。ご承知のような不況でもありますし、あまり企業を誘

致しても、今度は地元努力が欠乏してしまうからです。

また、誘致に関しては、いい企業を選んで入れなければいけません。環境問題などもありますから、どんな企業でもいいというわけにはいきません。それから社長、重役に優れた人がいる企業を選ぶ。そういう点ではずいぶん吟味しまして、いい企業を誘致していると思います。

◆ 神楽と文化財指定

安達 次に、本日これから拝見する神楽に話を移したいと思っています。神崎さんに詳しいお話をお願いしたいと思います。

いただいた資料では、ここの神楽、備中神楽は土着の古いものと、文化・文政期に京都で学んだ国学者西林国橋がつくったものが混じり合っているのが特徴ということでした。この古い神楽と新しい神楽はどういう位置づけになっているのか、お聞きしたいのですが。

神崎 早稲田大学の本田安次先生が、文化財指定のマニキュアとして神楽の分類を出されましたが、それが民俗学のなかでは、フォーマルな、基本的分類になっています。これを批判する人はたくさんいまして、私もなども一時、別な分類法を使いましたが、行政上はこの分類が広く通っています、以下の四つです。

一つは巫舞、巫女舞の系列で吉田神社系の神楽です。巫は

男神主、その女性版が巫女。つまり、白衣を着た上に千早を羽織り、面を付けず冠を付けます。そして鈴と扇で舞う。神事的な要素が強いものです。

次は、出雲神楽系ですが、これは出雲の神楽ということではなくて、「出雲神話や高千穂神話をモチーフとして演劇化した神楽」を指します。

もう一つは江戸中心の里神楽系で、この系統は山の神やおかめ・ひよつとこのたぐいが出ますが、これをずっと遡ると、東北各地に分布する山伏神楽に起源が求められます。山岳信仰から発した山伏神楽が、里へ下りた段階で江戸神楽にもなったわけですね。最後の一つは伊勢神楽系で、この系統の特徴は獅子頭が出てくることです。

大きさはな分類としては、巫舞、巫女舞系。神話をモチーフとしたもので「神能」とか「神代神楽」と呼ばれる神楽の系統。

一般的な宮神楽と荒神(式年)神楽

分類	宮神楽	荒神式年神楽
神事的な演目	禰舞 導き舞 猿田彦舞	禰舞、白蓋神事、役指し舞 導き舞 猿田彦舞、五行幡割り、布舞、 綱舞、託宣、石割り神事、剣舞
芸能的な演目 (神代神楽)	国譲り 大蛇退治	岩戸開き 国譲り 大蛇退治
その他の演目		吉備津、玉藻の前、お田植え、 三韓、お多福

それから山伏神楽、江戸里神楽系。それから最後に獅子舞を中心とした伊勢神楽系。まあ、起源や分布を異にする様々な神楽が日本中にある、ということですよ。

このあたり、吉備高原上の神楽を備中神楽と呼んでいますが、これはあくまで戦後のくくり方、すなわち文化財指定を受けるがためのものです。われわれが普通に会話をする時に、「今日は備中神楽がある」などとは言わないわけで、ただの「神楽」と言います。それは他の神楽も同じで、全国そうです。あくまでも、文部省、文化庁が区分けする時につけている呼び名と理解ください。

それを「備中神楽」とまとめたばかりに、地元の人にも誤解が出てくる。つまり、神代神楽イコール備中神楽と短絡的に考えてしまう。普通演じられるのは、神代神楽が中心ですからね。

神代神楽というのは、文化・文政期の、一八一〇年代から二〇年代に西林国橋という、美星より少し北の、今の高梁市福地^{ふくとけ}というところの神主が創案したものです。彼が国学を志し京都に行くわけです。そして吉田神道を学び、吉田山で修業をした。その時に、京都の町のなかにある様々な芸能を集めた。また、吉田神社にはもちろん全国から社家筋が集まりますから、そういう人たちの情報も取り込んで神代神楽を編じました。その神代神楽のなかには、出雲神話系として「天の岩戸開き」、「大國主命の国譲り」、「素戔嗚尊の大蛇退治」があります。それから出雲神話とは別に吉備神話によるものがある、「吉備津彦

命の温羅退治」が入っております。

ですから、西林国橋創案、構成による四幕の神楽が文化・文政期から表に出てくるわけです。

今日、ご覧になればおわかりになると思いますが、これらは非常に演劇性が高いもので、腰を下ろした静かな舞から、飛びまわる激しい舞、それから合戦もある。また、退屈した頃に茶利^{ちり}という滑稽役が出てきます。こうした構成ですから、観る人には、面白い。また、芸の上ではたいそう熟練度が必要とされます。

西林国橋を開祖とした形の神楽集団——このあたりでは神楽太夫といいますが、そこで師匠、弟子の関係ができて、その徒弟制のなかで修業をおこなうことになった。だいたい六、七人で一つの神楽社をつくり、その社中の編成が進みます。

神楽太夫は副業なのですが、祭りの時期は専業になります。平生は農業あるいは普通の勤めをしながら祭りの時には神楽太夫になるといやり方が、今も続いています。そうした神楽太夫が神代神楽を中心に興行するので、西林国橋、神代神楽イコール備中神楽というように短絡化したわけなんです。

◆ 中世を色濃く残す荒神神楽

ところで、今日ご覧になる荒神式年祭というのはこのあたりでは七年に一回おこなわれるものですが、ここで演じられるの

が荒神神楽です。毎年おこなわれる氏神の例大祭の宮神楽とは、同じ備中神楽といっても色彩を異にします。

氏神というのは、よほどの特例を除くと、近世、幕藩体制のなかの村の鎮守です。また、その祭りは秋の豊作祭りであって、そこで演じられる神楽は先ほど言いました西林創案の神代神楽を中心とした神楽で、宮神楽といえます。

氏神は近世の幕藩体制による村の制度として頭に戴くわけですが、もちろんそれ以前に有力筋の氏族は氏神を持っておりました。そういう場合には、たとえば杉原一族なりが持っていた氏神をそのままスライドして村の氏神にした場合もあります。それ以外に一般的なものは新たに八幡さまを勧請してきているケースです。宇佐や鶴ヶ岡、岩清水からではなくて、ただの八幡さまですが。八幡さまは武士の覚えめでたき神さまですから、八幡さまを持つてきたというのがいま一つの氏神のルーツになっています。

それに比べて、荒神信仰は中世的な集落単位から発達します。だから産土荒神ともいい、産子うぶこともいう。このあたりの荒神は土地の親神として崇められてきたのです。荒神イコール火の神ではありません。

荒神には五つの神徳がありまして、木火土金水、すなわち木の精霊、火の精霊、土の精霊、金の精霊、水の精霊です。この五つのエレメントは日と月をのぞくと森羅万象のほとんどすべてを司るわけですから、村を開墾する時の自然崇拜にはじまる

と言えます。

こうした信仰を背景に、現在に至るまで荒神式年祭は荒神集落を単位として七年に一回、ところによっては十三年に一回とっておこなわれてきました。この七年、十三年という節目は仏教的な回忌思想が転じたもの、としてよいでしょう。神仏混淆の所産です。ゆえに中世的であると言えるわけですが、そうした古い信仰形態が、このあたりでは非常にしつかり根づいて伝わっています。

こうした歴史的な傾向は中国山地、だいたい備中、備後に濃厚なのですが、少し里へ下りてゆきますと、近世系の氏神祭り一辺倒になっている。中世の歴史があってもそこはネグレクトされる。美星町あたりにこれが残っているのは、逆説的ですがその僻地性にあります。これだけ主要街道、城下から離れた高いところの上がりますと、幕藩体制の権力はほとんど及ばなかったわけです。

そうした「中世的なもの」が七年に一回の荒神式年祭で表出する。そこでの神楽は神代神楽ももちろん含みますが、神代神楽以前のものが表出するわけです。

それは何かというと、祈禱神楽です。文部省、文化庁が意識的にこれを神楽分類のフォーマットから外しているのは、政教分離という原則から、神主が介在する神事は文化財に指定しないということを決めているからです。

祈禱神楽は、神さまを降ろす祈禱、託宣などからなっています。

す。

荒神神楽の最初の頃に、「白蓋神事」というものをおこないます。神々を勧請し鎮座を願う神事です。神殿の天井に吊り下げた、和紙を複雑に切った白蓋というものを引いて、四方を固めます。白蓋は上下左右静かに、また時には激しく引かれて動き、いかにも神さまが降りていくかのように表現されます。

白蓋神事は、全国の神楽にかなり共通して見られます。それを動かすとはかぎりません。仏教という天蓋、ここにも中世系の神仏習合のあとがみられます。

さて、神さまがその地へ降りるためには座を清めなければいけない。清めるためには櫛で清めたり、あるいは幣で清めたりします。白蓋神事の前にそれがあり、白蓋神事のあとに祭典が続きます。これも、神楽の原理原型というものです。

それから神楽もいちばん最後になって夜が明けきった頃おこなわれるのが託宣で、これももちろん祈祷を含みます。荒神神楽が終わりまして、荒神さまのご機嫌うるわしければ、これからの七年間を吉調で占うという神事です。

米山 石割り神事の話先ほど聞きましたが。

神崎 本来は荒神がとりついて神懸かりになったかたちで、石割りをするものです。この石割りというのは開墾儀礼を象徴するものであろうと思われまます。焼畑をつくる際に石を割ってとり除くという作業からなるのでしょうか。

石割りの時に唱える文句は「いにしえの山を開きて畑をつく」という言葉から始まり、「石は玉になり、玉は土に帰る」というふうにつながります。

しかし、こうした祈祷神楽の部分、神事と言われる部分はだんだん伝わりにくくなっています。

つまり、一般的に文化財指定の神代神楽、神主が介在しないところの芸能にスポットが当たがちです。祈祷神楽も今ももう神主でもできる人は少なくなっているのです。神楽太夫がおこなうようになってきています。そもそも神事です。言葉の意味合いが難しく伝わりにくいのです。

今夜の荒神神楽のなかで、白蓋神事、五行旗割り、布舞、石割り、託宣というのが、普通では見られない、荒神式年祭のみに出てくる非常に中世的なもので、よくご覧下さい。五行旗割りの五行というのも、まさに神仏混淆という意味で中世的です。正確には道教の思想が問答化されたと言わなければ、道教を入れたこと自体が神仏混淆とも言えます。なお、この五行神楽は以前は中部地方にも東北地方にもあったようですが、今日伝えるのは備中地方においてのみです。

◆地域に密着した荒神神楽

安達 町民のなかには女性も男性も年寄りも子どももいるわけですが、大きっぱいって人気のあるのは、荒神神楽ですか、

神代神楽ですか。

神崎 神代神楽を中心とした氏神の毎年の祭りが宮神楽であるのに対して、荒神神楽はお宮ではなく、荒神の社自体小さいということもあり、その周りの畑や田んぼでおこないます。それも昔のいわれで言うと、集落ではじめに開かれた由緒ある荒神さまの前の畑ということに決まっています。そうした荒神さまは、このあたりでは別名「**臍**の緒荒神」といいます。臍の緒がつながった、つまり血族、親族はひととおりお客で呼ばなければいけない、という習わしがあります。

氏神のお祭りでは各家がお客さんをするということはあまりしませんが、荒神式年祭では、そういうことで物入りであるし、人も集まりますし、神楽に対する「花」も多いですね。人々の帰属意識は、宮神楽より荒神神楽のほうに強いでしょうね。

安達 そうすると荒神神楽のほうに、集落の生活に密着しているわけですね。

神崎 そうですね。それに対して神代神楽はストーリー性があるもので、よそからきた人にはわかりいでしょう。しかし、今日の荒神神楽にも神代神楽は出るんです。岩戸開き、国譲り、大蛇退治、これは神代神楽です。

安達 このあたりでも、かなりうまい方たちが、いろいろなところへ引つ張られて、よそへ出て興行をするようなプロ集団になっているのですか。

神崎 なっています。今日演ずる矢掛社というのも玄人神楽

社の一つです。備中神楽に関してだけは、いま後継者不足とはまったく無縁です。神楽社だけでももう五十を超えていますし、神楽太夫と自称する人は五百人を超えています。

杉原 公民館活動のコースのなかで、素人が上手になって、プロの社中に頼まれれば出かけていく。そのように自然に玄人になっていくんですね。神崎先生がおっしゃるように後継者不足という問題はありません。若い人がどんどん習いますからね。

安達 石見神楽などはすっかり興行化してしまつて、今おっしゃつたような古い神事といった雰囲気はありませんね。

神崎 石見神楽の場合は、「ふるさとの歌まつり」に出したのがいけなかつたんじゃないでしょうか。あの番組はいろいろ操作があつたらしく、たとえば八岐の大蛇をいくつも出せということになった。舞台は八畳サイズなので、今晚ご覧になればおわかりになりますが、大蛇が五つも六つも出たら動かせん。それなら舞台を取つ払つて、広げば、あるいはステージでやるということになってしまう。石見神楽がどうこうということではなくて、時流に乗りすぎると型を失うことになってしまふ。

杉原 一つのショーのようなかたちになってしまう。

安達 このあたりでは太鼓は長いバチのものですか。

神崎 いいえ、和太鼓を細打ちで、横打ちにします。リズムの微妙な変化をつけるには和太鼓と細打ちがいいんです。

神楽太夫の人に言わせると、太鼓で舞うと言います。備中神楽では太鼓が芸事の決め手になっているわけですね。

安達 楽器は基本的に太鼓と何があるのですか。

神崎 太鼓と鉦で、ここでは笛は入らないんです。このかたちは珍しいもので、その分だけ太鼓に頼るわけです。

安達 ほかのほとんどのところは笛が入りますね。

杉原 石見神楽なども太鼓はいいけれど、笛は騒々しいですね(笑)。

安達 私の知っている人に神楽太鼓の音の好きな人がいて、神楽の季節はだいたい十月の終わりからですね。そうなると落ち着かなくなつてうちの仕事を何もやらなくなる。奥さんが本当に神楽は困りますと言っていた(笑)。そういう人がいますか。

神崎 神楽太夫になる人はだいたいそういうタイプの人ですね。玄人になるといふ時には、ほとんどの人が家族の反対にあうようです。

◆神楽の将来を見据えて

小浜 神崎先生にお聞きしたいのですが、今の若い人などは結構、歌舞音曲のようなものが好きで、和太鼓の「鼓童」や「鬼太鼓座」の公演も人気があるし、入団する人も結構いると聞きます。いま神楽囃子を聞くと落ち着かなくなる人の話がありました。神楽が、たとえばUターンの牽引力になるといふことはないのでしょうか。

神崎 そこまではちょっと期待できないと思います。町長さん、神楽があるから若い人が帰っておりますか。

杉原 神楽の時期に帰省することはありますが、そのために帰る人というのは聞いていませんね。若い人はそもそも歌う歌が全然違うでしょう。

今日の音楽と比べると、神楽は単純ですから。

神崎 ただ、この神楽でも再編成をして都会へ持ってけば、若い人がもてはやしてくれると思いますが。しかし、ここでこういうかたちでやっているかぎりでは、それほど若い人がついてこない。「鬼太鼓座」などの場合は広く公演をしますから。

杉原 岡山の駅前の地下街にある一番街など、お客さんが多いショッピング街で神楽の実演をすることがありますが、黒山の人ばかり。それも、ハイカラなショッピング街ですから若い人が多い。しかし、それは都会の話であつて、神楽があるから地域に帰るといふことはないですね。

神崎 しかし、言われたような問題はこれから出てくると思います。つまり、演劇化して、場合によっては国際化もしようとしてみると、この地域のなかでの祭りとのつながりがどんどん薄くなつて、変化が生じてくるであろう。ですから地域社会のこうした行事の維持が大事なのか、神楽をもっとよそへ出してにぎやかにするのが大事なのかという選択が当然将来的に出ると思うのです。

今の若い人たちは、むしろ地域とかお宮とかのつながりが意識の上ではどんどん希薄になっていて、衣装を着て舞えばいいということになります。神楽のみならず祭りそのものの世話役を務める当番、当番組というのは重要な役回りですが、こうした神事をやるにあたっての作法もどんどん忘れられてきています。仕方がないと言えば仕方がないでしょうが、やる以上「型」を伝えなくてはならないでしょうね。祭りにしても神楽にしても型どおりということは窮屈に感じないが、それをすることで地域社会の結束が生じ、アイデンティティが高まると思えます。これ以上に効果的な地域社会の維持法はないかもしれませんね。

これは、宗教行事ではない。地域社会の確認行事以外の何ものでもないでしょう。まあ、神楽について言えば、そこで楽しみが共有できればよろしいんですが(笑)。

杉原 皆さん方、神楽は初めてでしょうか。今日は楽しみにしてください。それから、大きな斎燈を焚きますが、夜は冷えますから初めての方にはちよつと寒いかもしれません。

安達 神楽って一杯飲んで行くものなんですよ(笑)。

米山 安達先生、さめる頃がつかいやすいですよ(笑)。

安達 朝の七時までやると聞きましたが。

杉原 七時では済まないでしょう。

神崎 八時頃までかかるのではないかと思います。

永野 式年の七年ごとというのは、どういうことで決まった

のですか。

神崎 やはり仏教の回忌年数です。神仏混淆の「仏」の要素だと思えます。

杉原 私の地域の下田荒神は毎年やっていますよ。

神崎 今日の祭りは神主が仕切りますが、このあたりの荒神神楽で面白いのは、神主と僧侶が同席する。まさに神仏混淆が集落によっては残っています。こここの又岡、友成の集落がそうです。

安達 神楽のセリフはたとえば戦前と現在で変わっていると
いうようなことはありませんか。

神崎 だいぶはしょっております。ですから、国史を思い出して見ていただくと、辻つまが合わないところが出てきます。

美星町でもビデオを撮りましたから、最低限の基準は残してありますが、その基準に達するまでに、基本的には口承芸ですから相当省略、変化があるはずですよ。ナギナミのミコトなど平気で言ったりしますが、文脈で考えてみるとイザナギ、イザナミのことなんです(笑)。

神楽はとにかく神さまを楽しませる、神さまをもてなして、こちらの言うことも聞いてもらう。ですから、本来は、祈願の要素が入ったおこないごとくはすべて神楽です。いくら民俗芸能とはいえ、その原則がなければもう神楽ではない。

これまでも、いろいろな神楽があったはずですが、それを時の為政者や文化人がまとめて体系づけていくという操作を何段

階もしている。それが神主であつたり、坊さんであつたり、山伏であつたりという例が多いのでしようね。ただ、その場合、地域社会の維持や発展のための再編や改革でなくてはなりませんね。

安達 さて、話は尽きませんが、そろそろ神樂を見に出かけましょう。遅くまでどうもありがとうございました。

(第三十五回 一九九六年十一月十六日)

神楽とワインの里

「岩手県大迫町」

●講師 村田柴太・岩手県議会議員、元大迫町町長、

(株)エーデルワイン代表取締役

現岩手県大迫町町長、(株)エーデルワイン社長

〔出席者〕加藤秀俊／中部高等学術研究所所長 安達生恒／社会農学研究所所長 川喜田二郎／東京工業大学名誉教授 神崎宣武／宇佐八幡神社禰宜 佐々木高明／国立民族学博物館名誉教授 須藤護／龍谷大学教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮田登／神奈川大学教授 米山俊直／大手前女子大学学長 永野芳宣／(財)政策科学研究所所長

指定されている。

◆早池峰から世界が見える

村田 諸先生にはお忙しいところ、遠いところまでお運びくださいましてまことに深く御礼申し上げます。

私が初めて加藤秀俊先生にお目にかかったのは昭和五十六年、ともに「岩手県青年の船」の講師として、三百五十人ほどの青年男女諸君と一緒に東南アジアを巡航した旅の時でありました。そして、そのクルージングですっかり親しくさせていただきました。

その時に大迫の話をいたしましたからでしょうか、「青年の船」から下船後まもなく、町長の郷里が気にかかるとおっしゃって、二月の寒い頃でしたが訪れていただき、ワイン、どぶろくを味わっていただいたり、町の素朴な青年たちとも触れ合っていたきました。その先生の来町が私の町長時代において、ワイン、また村づくりに対してより第三者的な目で見て、論理的に反省をする、一つの大きなきっかけになったのではないかと、いまだに感謝いたしております。

その時のお話は「早池峰から世界が見える」というテーマでしたが、いま振り返っても、あの時の先生の鋭い観察はすこぶる印象的なものでした。閉鎖社会であった大迫町は、いわば鏡を持たない民族のようなものだったと思われれます。何の因果か

北上山脈の主峰、早池峰山麓の大迫町は、標高百〜二百メートルの傾斜地と少ない降雨量、昼夜の寒暖の大きな差に恵まれたブドウ栽培に最適な気候で、人ぞ知る岩手県産のワインの里である。研究会一行は「ワインシャトー大迫」等の見学の後、山伏神楽として名高い早池峰神楽のうち、大償の集落に伝えられている大償神楽を鑑賞した。日本の舞の源流といわれる早池峰神楽は、昭和五十一年に国の重要無形民俗文化財第一号に

山のなかの妙なところに生まれたものだなという劣等感を持ち、愚痴をこぼすばかりであった。また、人の足を引つ張るといふようなこともたいへん目立つ社会でした。

加藤先生の来町は、貧乏だけれども内に秘めたものがあるはずだ、そしてその象徴が、早池峰の持っている様々な素材であるに違いない。そういう確信を醸す機縁となったと思います。

さて、それ以前にももちろん胎動がありました。早池峰に咲くエーデルワイス（ハヤチネ・ウスユキソウ）は、ヨーロッパのアルプス文化の象徴でもあるエーデルワイスと兄弟の花だということに思い至り、昭和三十七年に、オーストリア大使を訪ねて姉妹都市の申し込みをしたのです。三年経って、当時の外務大臣が岩手出身の椎名悦三郎さんであったことも幸いしてか、当時の法眼晋作駐壇大使が町を訪れてくれ、ベルンドルフという町が姉妹都市に決まったと教えてくださいました。そして昭和四十年にオーストリアのベルンドルフという町と姉妹都市になったのです。

当時、議会においても、姉妹都市といっても、カネばかりかかるのではないかという議論がされました。そこで私は「いや、やってみなければわからないと思う。姉妹都市にはいわば清涼飲料水みたいな役割があるのではないか。たとえば、早池峰に登る時に、喉が渴いたら谷川の水をフキの葉っぱで杓って飲むが、その水のうまさというものが行政にも必要なのではないだろうか」と説得し、ベルンドルフとの姉妹都市提携を進

めました。

◆ 縄文以来の酒造りの伝統を生かして

偶然の暗合ですが、姉妹都市のプロポーズをした昭和三十七年は、ワイン造りの申請をし、仮免許を受けてワイン造りを始めた年でもあったのです。それから三年経って永久免許が下りました。それはちょうど姉妹都市が決定した昭和四十年のことです。その意味で、昭和四十年は、大迫町にとってひとつの画期的な出発の年だったのではないかと思っています。三十七年から始まったので、わが町の「エーデルワイス」は四十年近い歴史を持つことになりました。

私は昭和四十二年に初めてベルンドルフを訪れた時、いわゆる「ワインの魂」ともいうべきものに出会いました。ベルンドルフの隣にクロスターノイブルクという古いワインの町があります。その三百ヘクタールのブドウ畑、それから生まれる数々のワインケラー、またホイリゲというワイン酒場も訪れましたし、神々に捧げるワインの儀式も拝見しました。その儀式で私はもてなされたのですが、市長の配慮でしょうか、フォークソングのグループが合唱で迎えてくれ、大きなワイングラスで、いわゆる回り盃をしたり、気焔をあげている姿を見まして、「なんだ、大迫とそっくり同じじゃないか」と思った次第です（笑）。

あちらでは、小さなワイン酒蔵でも、ワインケラー・マイスター、おそらく蔵を開いた修道僧でしょうか、木彫りの像などを飾っていきまして、確かにここではワインは国民酒なんだなと思えました。

私どもはサントリーともずいぶんお付き合いをしております、工場見学などもしています。素晴らしいワインをつくっておられますが、ただ、神々を祀っているようなことはありませんでした。ホーロータンクで物理的に醸しているという点では、マンズワインも十勝ワインもまた、神様を祀るような醸造所ではありません。

ところが翻って考えてみますと、私ども大迫の文化を支えてきたのは、日本酒であり、どぶろくであり、サル酒です。サル酒などという民間薬的な印象がありますが、言ってみればワインです。サル酒は縄文時代から飲んでいるわけで、実際ワインのデカンタのようなものが大迫の縄文の遺構から何本も出土しています。そういう意味では立派にワインの伝統があるわけです。

また、昔から過疎地であるがゆえに、南部杜氏の出稼ぎの発祥の地でした。いま大迫の町民は、年間百二十人ぐらいが季節労働者として外に出て行っておりますが、昔はもっとさかんでした。冬場の六カ月はほとんど大迫に在籍せず、異国の世界で生きています。そして外の世界の情報はその人たちによってもたらされていたのだらうと思います。

また、酒造りにしても、きちっとした清潔な管理をおこなう、酵母醗酵は無菌状態にして進めなければならぬという、プロセス管理の大切さも彼らは知っていたわけです。しかも、その年々のお米の出来具合、神に捧げる祈り、酒造りを支えてきた民謡の数々などが大迫には潤沢にありますので、その延長線上にワイン造りを据えたいと思っただけです。

町名物のワイン祭りもそうした考えから由来しております、乙女が裸足でブドウ踏みをしております。彼女たちも最初はずいぶんおしよす（恥ずかし）がりましたが、今ではなくてはならないお祭りの一つになっています。

◆地元のブドウで地元民が呑むためのワインを

「エーデルワイン」は長い歴史をたどってきましたが、日本で第一次ワインブームが起きたのは、昭和三十九年のオリンピック、引き続き続いての万博が契機だと思えます。そして、オイルショックの頃に外国のワインがたいへん入ってくるようになります、その後の好景気のもとで、ワインは高価であればいいというような風潮になりました。

しかし、私の狙いはあくまでも大迫の町民と岩手県民にワインを馴染ませたいというものでした。一つは、地元のプロウ栽培農家にワインの味をわかってもらえなければいいワインはできないということ。また、ワインは遠隔地まで運送しても経済

的に引き合わないからです。ですから、安い値段で、しかも当初はラベルも私自身が夜なべ仕事で描いたウスユキソウの絵と似たものでお茶をにごしていた(笑)。

それがオーストリアとの提携もあって、ラベルもドイツ語にしないでほしい、字引を引き引き、いろいろ言葉を並べて、町のお医者さんなどに見てもらおうと、「ここではウムラウトが必要」とか「スペルがちよつとおかしいぞ」などとばかり言われるので、「ラベルではなく中身を見てくれ」と言いましたら、「ワインというより、これは酢だな」と言われたりしたものです(笑)。

また、ブドウを三日も四日も工場の外に放り出しておいたのが腐ったことがあり、新聞ダネになって、「怒りのブドウ」などと書き立てられたりした。どうしてここへスタインベックが出てくるのか(笑)、落ち込んだりしましたが、なかなか気の利いた新聞記者がいるとは思ったものです。当の記者は私の来訪を知り怒鳴り込まれたと思つたでしょうが、「いや、私はほめに来た。ああいう腐つたブドウは使いませんよということを示したことになるので、お陰さまでたいへん宣伝になりました」と言つたものです。

しかし、こういうショックがいろいろありましたので、これではいかんと思ひ近代化を思い立ち、改めて資本金一億二千万円の会社組織を昭和四十九年に設立しました。

もとの赤字会社を引き継いだものですから、当初は資金的に

もたいへん窮屈でした。最初はハジキブドウ(市場出荷の生食用の規格にあわないもの)の赤だけを使い、年平均の仕込み量は約五、六十キロリットルでした。二十五年経って、去年が瓶で二百三十キロリットル、今年は二六%増の仕込み量で約二百九十九キロリットルになりました。

ワインはどうしてもその性質上三年は寝かせなければならぬので、その間の金利もかかります。五年、十年と長く寝かせておく割合は、今のところは五%ぐらいで、残りの九五%は赤も白も三年物のフレッシュワインとしてどんどん出荷します。ちなみに清酒は七〇%ぐらいを一年物の新酒として売っているそうです。

しかし会社はずつと赤字続きでした。つくつても売れる可能性がないのです。五十キロを仕込みますと、そこから四十八キロぐらいい醸造され、タンクに貯蔵されます。ところが、いくら私を持ち歩いて宣伝して町民に飲ませようとしても飲みやしません。三十キロリットルぐらいいしか売れない年が続くと、貯蔵量がどんどん増えて、たがが少なくなっていくので、仕込み量は抑えていかなければなりません。

また、当たり年でも非常によいブドウができた時ほど、市場の値段が高いですからワイン会社よりも生食用の市場に行つてしまいます。欲しい時には入つてこなくて、糖度の低い品質の悪いブドウの生り年にはわが社にドツと持ちこまれてくるわけです。そうはいっても農家は株主ですから、無理をしてタンクを

増やし、仕込むということもありました。すると、資本を寝かせてしまうことになり、企業体としてはたいへん回転の悪い状態になってしまいました。

こうした状況が徐々に是正され、二百トン仕込めば二百トン売れるというような状態で、バランスがとれてまいりました。そして、五年物、十年物を熟成させる余力もようやく生じてきました。

バランスがとれてきた矢先、昨年からマスコミなどが赤ワインをもてはやしてブームになり、従来白ワインに比べてほとんど売れなかった商品が、爆発的に売れるようになりました。赤ワイン「月のセレナーデ」などは、去年の売り上げは前年比三倍増です。

また、今日のお昼に白ワインを召し上がっていただきましたが、これは山の背後地に松林の見える丘にある三ヘクタールの畑で、試験的に栽培したブドウからつくられています。県からも補助金をもらいましたが、町で圃場をつくって、リースリング・リオン、メルロー種などを栽培しています。この圃場からできるワイン——五月長根葡萄園の白は、「国税庁の国内産ワイン鑑定コンクール」の年間ランキングにおいて、国内産のワインメーカーとしては珍しい連続Aランクをいただいでおり、ほかのワインに負けない逸品です。

もう一つ、私どもは他県からのブドウは一粒たりとも入れていません。完全に岩手県民のブドウ畑のブドウで、農協を通じ、

あるいは経済連の系統で一元素荷されたものを仕込んでおります。これは少なくとも他県では見られないことです。

資本構成は農民資本であると同時に自治体資本で、現在、一億一千九百六十万円になります。そのうち大株主オーナーの八〇%が、岩手県、経済連、隣町の紫波町、そして大迫町です。紫波町はブドウの大産地で面積は大迫町の倍あります。経済連の傘下には農協が控えています、全体の五〇%が経済連を含めた農協資本です。そのため政府資金の導入も可能であったわけです。

農林業公庫から借り入れた当時に、「この九千万円は本来ならば公庫の仙台支店で取り扱いするレベルの金額だが、本店直轄で貸し付けたい。よろしいか」と総裁の二下問がありました。「結構ですが、それはなぜですか。私どもへの監督を強めたいからですか」と聞くと、「いや、そうではなくて、時々行って飲ませてもらいたいからだ」(笑)というお答えでした。

確かにその当時、農林業公庫資金は、自治体、あるいは農業生産の公共的な性格を持っている組合しか融資対象にしなかつたわけです。一介のブドウ酒会社、一介の第三セクターに対して貸したのは初めてでした。前例がないのでその行く末を直接見守りたい、それで時々行った時にワインを飲ませてくれというわけなのでした。

営業利益も、最初は百万、二百万円程度のオーダーでしたが、去年は一千万円程度、そして今年は三千九百九十万円の利益を

計上することができました。これはこのところのワインブームに助けられたということもあります。

◆「南部煎餅」のような素朴なワイン造りに賭ける

また、マンパワーの点で見ますと、少数精鋭主義で、社員員の平均年齢は三十六・五歳の若い会社です。年寄りという社長長の私と、県庁からきた常務が六十歳ぐらいのほかは、みな二十代、三十代で固めておりまして、たいへん張り切つてやっています。

問題は、人件費のベースが低いことです。現在十四人でやっていますが、昨年から今年にかけての急激な売り上げ増によつて、原料のブドウも今まで考えも及ばなかった、倍以上の仕入れをしなければならぬ。また、ワインの仕込み、管理、瓶詰め、飛躍的な強化を図らなければなりません。そういうこともありますので、利益が出たからといってむやみに喜んでいくわけにはいきません。給与ベースの改善が必要ですし、人的な能力ももう少し拡大を図り、補強をしなければいけない部門もあると思います。

さらに、私が町長時代に、先ほど申し上げたオーストリアのクロスターノイブルクに三年間ワイン留学をさせ、オーストリアを中心に、ドイツ、イタリア、その他で勉強をした青年が現在常務になっており、ヨーロッパとの窓口にもなつております。

今年の八月一日からまた半年ウィーン大学の外国語専攻科でドイツ語の勉強をし、そのあと二年間、ワインの専門学校でゆつたりと勉強をさせる予定です。

施設の機械は、イタリア、フランス、ドイツから仕入れたものですが、その後、シャンパンなど、いわゆるスパークリングワインを造りたいと考えました。中小企業庁の補助事業として「知識融合化事業」というのがありますので、その補助申請をし、指定を受けてスパークリングワインの開発に取り組んだわけです。

発泡酒の酵母は、世界五大陸にあるスパークリングの産地から代表的なものを送ってもらいました。製造テストをして、大迫のブドウに適合したスパークリングワインを二、三十本つくってみましたら、その結果、シャンパンの本場であるシャンパーニュ地方の酵母にかぎることになりました。図らずも、すごい菌があるものだなあと思いました。

現在、私どもでつくっているスパークリングはシャンパーニュから取り寄せた菌を培養し、イタリアから仕入れた八十度という低温で殺菌をする機械を使つてジュースを絞り、そのジュースをベースに酵母で醗酵させています。

それが、わが国で初めてつくり出されたロゼタイプのスパークリングです。シャンパンという名前はシャンパーニュ地方産以外使つてはいけません。それには「ローゼン・シュトラウス（バラの花束）」という名前を付けました。輝くような口

ゼタイプで色彩がとてよいと評判で、クリスマス、誕生日、ご祝儀用にたいへん喜ばれ、うれしく思っています。

先ほど申し上げたように、今年の場合は約四千万円の利益が計上されました。去年の一千万円の利益の時には、株式が一億二千万円という頭でかちの会社ですので、株主の方々に平等に配当するためには一株当たり一%にもならないという格好です。ですので、株主のなかで市町村に寄付をするという形式になっています。それはブドウ産業のために使うことを期待して、大迫町と紫波町と産地の数町村に差し上げておりますが、これとても三百万か四百万程度しか差し上げられませんでした。

それが今度、四千万円ということになりますと、今まで考えた以上の処理をしなければなりません。内部留保もありますけれども、生産者の方々の圃場の拡大、品質の向上、集荷体制の問題、それから販売拡充のための有効なPRの手段、そういうことに投資しようかということいま研究をしています。

ここで注意しなければならないのは、ワインブームに追われ、設備投資を過大にしてしまうことで、それはもつとも危険なこととして警戒しなければなりません。まずブドウ畑を確保し、それがある程度順調に伸びていくにつれて、ワインの増量も期することができるといふかたちになければならないと思っております。

「今が儲けどきだ」ということで、外国から安価なジュースになったものを仕入れて酵母で醗酵させ、国産ワインとして売

っているところもあります。そういうことを一度たりともすると、地酒の本当の素朴な意味が失われていくのではないかと。顔つきはみつともない、いわば南部のごま煎餅みたいなワインだけれども、ここで頑張ろうじゃないかというのが、いま私どもの置かれた立場ではないかと思えます。

こういうやり方は困がゆいところも多々あるかもしれませんが、あくまで「神楽とワインの里」でやっていきたいのです。昭和四十二年、私が町長時代に、モデルコミュニティということで、自治省の指定を受け、施設をつくっていった際のキャッチフレーズが「神楽とワインの里」でした。初め私が「ワインと神楽の里」でどうだと言ったところ、神楽人の連中に、「町長、神さまをあとにもつてくるとは何事だ」と怒られました(笑)。私が謝って、「神楽とワインの里」になったわけです。この「神を祀って酒を醸す」精神は今後とも大切にしなければいけないと思っております。

◆ 土壌の改良とブドウの確保の問題

安達 ヨーロッパで、ブルゴーニュなど、ワインの名産地を訪ねますと、歴史的に見て、教会や領主が莫大な金を出して徹底的に土壌改良をやっています。

大迫では、今のところは「エーデルワイン」の会社と農協の系統が一生懸命技術指導をなさっていると思うのですが、これ

からの競争社会に備えて本当に良質のものをつくるためには、やはり直営か契約にして、株式会社「エーデルワイン」が土壌について生産者を徹底的に管理できるようなシステムでなければならぬと思うのですが。

村田 そこまでシビアに管理すれば安心である面もありますが、このあたりはもともアメリカ系のラブラスカ種の大粒種の産地で、生食用市場だったわけです。そこへワインが後から来たという、ちょうど十勝ワインと逆のかたちです。ですから、価格形成では市場出しが頼りになるという意識がここでは強いのです。「こちらはワイン品種で、契約ですよ」、「そちらは市場出しのほうを優先しなさい」というかたちで協議して配分するわけです。生産者代表、経済連の代表、農協の代表がみな株主であり役員として入っています。

そして、今年の見通しとしては、キャンベルス、アーリーはこれだけ欲しい、リースリングはこれだけ欲しいというかたちになります。リースリング醸造用種は全量買い上げです。価格がいったん設定されたら、系統化されていますから、命令一下、その条件が達せられるよう傘下に入ってくれます。ただ、青果市場は流動的な面があり、「いや、おたくへ出すつもりだったが、市場が高いのでそっちへ出す」ということはこれまで往々にしてありました。そうした不安定性を排除するためには、やはり先生がおっしゃるように、契約や直営という仕組みがないと不安な点があります。

私としては、生食用市場向けの圃場の生産者については、今のような条件で価格の取り決めをする。そして、ヨーロッパ品種については直営でというふうに切り替えていこうと思つていますが、現状はまだそこまでいっていません。

現実には、町や県で指導や補助をしてつくった圃場が私有財産になる。そうした人たちがまとまってつくつたのが五月長根葡萄園組合で、そこと価格の交渉をするわけです。

また、普通、農協の集荷合計で手数料は二%で、市場に出せば三%、五%取られますが、ワイン用のブドウの奨励のために、農協ではその二%の分を補助しています。さらに、県北の遠いところは、遠いことが不利益にならないように、集荷奨励金というかたちで、キロ数に応じてワイン会社が運賃の助成をしています。けれども、契約栽培、あるいは直営というかたちにまではまだなっていない。

今のところ私どもは弱い立場でありまして、鉦かねや太鼓を使つてもブドウが欲しいという状況におかれています。ですから、農家の要求がどういふところにあるかもっとよく掘り下げて聞いて、安定的な集荷体制にしていかなければならないと思つています。

米山 土壌の改良まで、会社として干渉できるかということはありませんね。それは必要ですか。

安達 北海道の富良野も全部契約制です。また、山形の月山ワインは農家自体が山ブドウを採ってきて、自分で品種改良を

やっているんです。農民自体がやっているから、かなりいいものができるところです。直営といっても徹底的な土壌改良をやらないと、どうもいいものができないようです。

◆ブドウづくりからワインへの道

加藤 大迫の歴史を振り返ると、ずっと畜産をやってきていたわけですが、「牛、馬ではあかん」という見切りはどの時点で、どういう理由でつけられたのですか。ワインに切り替わるきっかけになった時のことをおうかがいできますか。

村田 ここは南部馬の産地としてかつて栄耀栄華を極めていました。古くは林業がさかんで、薪炭を馬が運んでいました。そうした時代以降は養蚕の産地でした。生糸の工場があつて、明治時代から三百人ぐらいが就業していたわけです。また、タバコの葉の産地としてもかなりのものでした。ところが、それらの生業がすべて、昭和九年の大冷害、三陸大津波などで大きな打撃を受け、太平洋戦争に突入していくにつれて半ば崩壊していききました。そして戦後は、馬はどんどん減っていき、木炭は売れなくなる。さらに追い打ちをかけるように、昭和二十二年にキヤスリン、アイリーンの両台風が早池峰を目指してやってきて、大水害をもたらしました。

このようにして、戦後の十五年間ぐらい疲弊のどん底にあつた大迫町民が何かいい産業がないかと思案していたところ、国

分謙吉さんが知事になられた。国分さんは「農民知事」と呼ばれただけあつて、よく土を舐めては「うん、これは酸性だな」などと言いながら県内を歩き回るような方でした。その国分さんが大迫を訪れて、昭和七年頃に植えた、五十アールぐらいのブドウ畑でブドウをかじってみたんです。私はその頃学生で、ちょうど夏休みで帰郷していて、国分さんを案内していたのですが、「いやあ、町村長さんたちよ、ブドウもいいんじゃないか」という話になったのが、きっかけでした。

国分さんは県議会の方々に話を通されて、わが国で初めての山間傾斜地ブドウ試験地というものを県立のかたちでここへ誘致されたわけです。そこが一つの精神的よりどころ、技術のよりどころとなつて、ブドウの産地化が徐々に進んでいきました。そういうかたちで、紆余曲折はありましたが、昭和二十五年から三十年の初期までの間、新しい産業としてのブドウに取り組みました。剪定の仕方にも長柄剪定がいいか、短柄剪定がいいかなど試行錯誤でしたし、土壌管理も全然なっていないし、薬剤防除の施設も未整備ということで、町が手厚い補助をした結果、いったんは七十ヘクタールまで棚掛けをしたのですが、その後バタバタと廃園になってしまい、昭和三十一年、三年頃には十ヘクタールぐらいしか残っていませんでした。それではならじと、昭和三十三年頃に農協がブドウの再建計画を立て、農林中金からプロパー資金を借りて農民に貸し付け、ブドウの復興を図っていきました。

昭和三十三年頃は国分さんがまだ知事をされていて、私どもは毎年ブドウを届けていました。「ブドウの香りっこ嗅ぎたくなつたな」と電話がきますと、箱に詰めたブドウを知事だけでなく県庁の役人の人たちにも一緒に送って、ブドウの香りを県庁中まき散らしたものです。今だと、官官接待でたいへんな問題ですが(笑)。そういう流れのなかで国分さんから、「町長よ、ブドウ酒つこつくらねえか」という話があり、実際知事自ら甲州まで足を運んでいます。

その頃は、市場出荷にならないハジキブドウが二〇%を超えていたんです。それだと、豚や牛に食わせるしかないで、付加価値を高めるためにもブドウジュースを加工する工場誘致をまず考えました。

加藤 村田さんはその時はもう町長でいらしたわけですか。

村田 町長になる前の、農協の組合長の時です。商工会の会長もやっていました。町長になったのは昭和二十五年の春です。何とかブドウ酒をとということで、やるよりしようがなかったわけです。

須藤 池田町のワインよりもこちらのほうが早いですか。

村田 池田町の丸谷金保さんかねやすと付き合うようになってから聞いたところ、アムレンシス(チョウセンヤマブドウ)を発見し、ブドウ酒研究所をつくつたのが昭和三十七年ということで、仮免許から始まりますから、私のところとはほぼ同じ時期です。しかし、池田では初めからワイン用に開発の目標を絞っていて、

生食用は全然念頭になかったようです。

須藤 池田町との技術交流は特になかったわけですか。

村田 当初のブドウ酒会社がいきつまっていたとき、一度技術交流の話もありましたが、風土条件が違うのでそれはご破算にして、改めて県内の隣近所でやろうということになって、隣り町の紫波町と取り結び、新しい会社をこしらえたのです。

◆ 経済万能主義が荒れ狂う時代に抗して

永野 先ほどのお話ですと、三年かかったということですが、最終的にはベルンドルフと姉妹都市関係を結んでおられますね。国際交流がうまくいくためのポイントは何かということをご経験からおうかがいしたいのですが。

村田 長崎から始まった姉妹都市運動は、東京、横浜、大都市などでは商工会議所、銀行や、いわゆる国際通の方々が中心になって取り結んでいる例が非常に多いのです。当時は、大迫のみならず、町村の段階で姉妹都市という発想はまだなかったんですね。

そういうなかで、早池峰山がなかったらいいのになあとというマイナスの発想ばかりしていたのが、ウスキソウとエーデルワイスが姉妹花ということ、山男たちとどぶろくを飲みながら話し合った時にたまたま聞いていたんです。

それで私は照会の手紙を書いた上で、オーストリア大使と直

談判しようと思つて南部鉄の花瓶と蓑の二つを担いで出かけた。当時の駐日オーストリア大使は「ワンダフル。オー、レインコート!」などと言われまして、非常に気さくな、いい方でした。しかし、「あなたが希望するようなお嫁さんを見つけるまでには、三年は見ていてください」と言われ、気の長い話だなおも思つたのですが、「どうぞよろしく」と言つて、そのまま私は日常の仕事に忙殺されてしまつていました。

ちょうどワインの免許が本免許になつた矢先に、「姉妹都市ベルンドルフと決定せり」と外務省のほうから通知がきて、また法眼大使からも通知が来しました。期せずしてそういうことになつたのです。

そこで、本免許のワインの名前をどうしようかと役場の職員に諮つたところ、「エーデルワイスの国と姉妹都市になつた年だから、エーデルワインでいいんじゃないですか、町長」、「それはいいなあ」ということになりました。

永野 最終的にベルンドルフに決まる前に、ほかのところと交渉をなさつたわけではないんですね。

村田 ほかの町とは交渉していません。ただ、私は当初、軽工業という観点から、スイスを考えたんです。三協精機の山田正彦社長が早稲田の先輩で、「オルゴール、いいぞ」という話だったので、オルゴール工場の誘致をしようかと思つていました。ちょうど全国的に工場誘致が始まつた頃です。私が松方三郎先生に「この姉妹都市はどうでしょう」と手紙を書いたと

ころ、「下手な工場誘致なんかしなさんな。オーストリアと姉妹都市友好は結構だが、妙なバンガローやリフトなどはつくりなないようにしてください。ちっちゃいミュージアムでもつくりなさいよ」というアドバイスをいただきました。それが現在の山岳博物館です。日本一小さい博物館ですけれど。

それは工場誘致時代、経済万能主義が暴れ狂う時代を迎える直前の頃だつたと思います。それゆえに、「売れるか売れないかわからないワインをつくつたり、姉妹都市といつても行政効果としてどうなのか全くわからない。わけのわからないことばかりやつている町長だ」とずいぶんやつつけられたものです。そういう時代だつたんでしょうね。

永野 相手の町の規模や、同じような産品があつて交流できるということが重要だということですね。

村田 そうですね。日本では現在、三千五百町村あつて、市長会と町村会に分かれています。オーストリアではそれらをひつくるめたシュタット(市)と呼ばれる行政単位が千七百あるそうです。そのなかで、私は大迫という特有の自然と歴史、伝統を条件として提示しているわけですから、それに適合する山と川のある町、しかもエーデルワイスの咲いている町ということになると、やはり探すのはひと苦労だつたと思います。三年かかつて選んでくれただけに、とてもうれしく、しかもベルンドルフに行つてみると地形や気候などがそっくりなんです。

川喜田 法眼普作さんのお名前が出ましたね。

村田 あの方にはちょうど姉妹都市になった時に駐壇大使でした。それ以来のお付き合いで、退官されてからも何回も大迫に來られています。

◆酪農とワインと

神崎 ワインと併せてチーズもつくられていますね。

村田 チーズは寒さが出てくる秋頃からつくり始めます。

神崎 ワイン工場でおつくりになるんですか。

村田 ワイン工場とは別なところです。

川喜田先生が北上山地おこしのために企画された、岩手県北の岩泉町でおこなわれた安家大学で出てきた話なんです。「今はプロセスチーズばかりでどうも面白くない。臭いブルーチーズやカマンベールも食べたい。これとワインとは合うぞ。やってみないか」ということで、私が主催して北上山地振興講演会をやりました。その時に、藤村志保さんや東京農大のチーズやワインの専門家である柳田藤治教授が外国のナチュラルチーズをごっそり持ってきて、町民に食べさせてくれたんです。おばあさんもおじいさんもあのくさいのをよく食べたんです。それを見て、「これはいける」と思ったんです。どうしたわけなのでしょう、都会の日本人でもあまり食べないようなチーズを食べ、「これ、なかなかいいなあ」などと言っていたわけです。それから酪農青年が四、五人集まってチーズづくりを始めた

わけです。秋口になると始めて、最初はワインハウスの調理場でやっていました。福島のように勉強に行ったり外国に留学したり、自分たちで勉強して、いまヨーグルトと一緒に「早池峰醍醐」というブラウン・スイス種の乳牛を飼ってナチュラルチーズもつくって売っています。秋口になるとつくり始めていたのですが、町のお世話で施設が整ってきまして、平年化したつあります。

佐々木 先ほどのお話からすると、馬から牛へ、牛からワインへとという段階で進化していったのでしょうか。あるいは牛、つまり酪農が町のメインの産業になりかけた時期があったのでしょうか。

村田 いま乳価の問題でビクビクしていてトン数も少し減っています。酪農は今でもメインになっています。酪農用の五六百と肉牛を合わせて千頭ぐらいでしょうか。そのなかにブラウン・スイス種のような乳質の濃い、ヨーグルト、チーズに最も適合するものも入っています。皆が皆ではありませんが、なかなか酪農青年として勇氣に満ちた人間もいます。

佐々木 そうした酪農がかなり定着するのは、これまた昭和三十年代ですか。

村田 そうです。早池峰山麓酪農指定地域ということで指定を受けたのが昭和三十五年頃です。肉牛のほうは四十五年頃に市場から出ておられます。

加藤 お話たけなわですが、実はこのあと早池峰神社までご

案内いただき、そのあと神楽もありますので、このへんで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

(第三十七回 一九九八年六月二十日)

白山ろくの農民の 知恵と樹皮文化

●講師 織田寛嗣・石川県立白山ろく民俗資料館館長

〔出席者〕加藤秀俊／中部高等学術研究所所長 安達生恒／社会農学研究所所長 佐々木高明／国立民族学博物館名誉教授 須藤護／龍谷大学教授 舛田忠雄／山形大学教授 永野芳宣／(財)政策科学研究所所長 小浜政子／(財)政策科学研究所主席研究員

研究会は、九九年十月、石川県白山ろくの白峰村を訪れた。山深いこの地の民俗資料館内には、焼畑農民の作り小屋も含めた民家が数棟移築され、江戸期、明治期の暮らしがうかがわれる展示になっている。

館長の織田寛嗣氏から、焼畑民の生活の知恵ともいうべき、作業着、民具などについて説明を受けたが、ディスプレイが進むうち、この地に樹皮等を利用した一つの文化体系が根づいており、その保存、収集はいかにあるべきかが議論の焦点となった。

◆焼畑民の知恵は生きている

佐々木 私が白山ろくに初めて調査に入ったのは昭和三十五年頃、手取川ダムができるかなり前で、ダム工事が始まって以後も、ダムに沈む集落の閉村式にも出ました。事前資料として配付した「山民の生業と生活・その生態学的素描」(国立歴史民俗博物館研究報告)第十八集所収)も含め、論文等もいろいろ書いた、馴染み深い土地です。今日は先ほど展示を見せていただいた資料館の織田館長さんに、白山ろくの生活文化についてお話をうかがいたいと思います。

織田 今日おいでの皆様は民族・民俗学の権威の方々ばかりですので、私が講演申し上げるのも憚られるところもあり、この資料館の収集品、また収集のプロセスで疑問が出てきたことに關して、むしろ先生方にご意見をうかがうとうかたちで話を進めさせていただきます。

まず、収集品をいくつか見ていただきたいと思います。うちの職員が昔の焼畑民の装束をしていますが(写真1)、昔から、といつてもなにごん記録がありませんが、昭和初期まではこういう格好で、雪下ろしや木材運搬といった冬の作業をしています。頭にかぶっているのはヒノキガサですが、これは四、五キロ先の深瀬という集落で民具として生産されていたものです。ヒノキでできていますが破損しやすい部分にはサクラの皮

写真1



を補強材に使うという知恵が施されています。

また、このカサは、作業する時に視野が広くなりますし、風通しがよく汗が出にくいという点で、雨具としても現代のカップよりはるかにまさっていると思います。特に焼畑をやっているから、畑焼きをする時には普通、熱が押し寄せてきてまともに見ていられないのですが、カサの角度を傾けて調節しながら作業しますと、熱が防げますし、視界もコントロールできます。単なる雨具以上であり、また畑焼きの時にこれ以上の熱よけはないと言えます。

次にミノですが、これも雨具としては一見重そうですが、肩が凝らず、軽くて仕事しやすいのです。今のカップのように袖から着込みますと、雨よりもなからの汗で濡れてしまします。その点、こういったミノは風通しがよくて仕事しやすい。現代人はいまだにこの知恵に遥かに及ばないと思います。白峰ではエナガスゲと呼ばれ、正式な名前はありませんが、栽培植物でつくったものです。

次に履き物ですが、これが冬の履き物で、今言うスノーシューズです。国指定の重要有形民俗文化財になっています。ハバキ・ユキワラジ・ズンボロ・キビシヤテの四点セットになっています。

脛に当てられているのがハバキと呼ばれるもので、ガマで編んであって、雨や雪に濡れにくいと言われています。

次に足に履いているズンボロとユキワラジですが、紐にシナノキの樹皮が使われています。このことも重要有形民俗文化財に指定された理由の一つです。ワラ製品ですと、寒冷地ですから、凍った後で脱ぐ時に紐が解けなかつたり、凍ってちぎれたりします。それで昔の人たちはシナノキの樹の皮で編んで紐をつくったわけです。必ず蝶結びというか、どこを引っ張っても解けるような結び方をした。こういう細かい知恵、特徴も含めて文化財に指定されています。

それからカンジキですが、たとえばここから十キロほど下のほうに行きますと、雪が湿っているのです、その雪質に合わせて、平らなつくりになっています。ところが白峰へ来ますとだんだん雪が変わってきますから、雪を踏み込めるように曲がらせてカンジキに勾配がつくようになります。これも雪道をいかに歩きやすくするかの知恵だろうと思います。

そして、着ている作業着をデタチベといいます。今の作業着に負けないくらい働きやすく、特に袖の部分が現代のものに比べて、動きやすく、風も通るようになっています。この知

恵も今の人たちに見習ってほしいと思います。

佐々木 よく見ていただきたいのは、ミノの裏側なんです。外側から見るとガサついていますが、なかはきれいに編んでありますので、実は大変着やすいようですよ。

織田 この編み紐もワラでなくてシナノキの皮を縄に編んだものです。

次に手に持っているものをご覧ください。コシキと言います。これはいろいろな目的で使います。いちばん多いのは雪下ろしです。昔は屋根の雪を豆腐のようなかたちに切っては下ろしたのですが、その時に切り分けるのに使います。また、山を歩く時に、杖ゴシキといって、杖代わりに使ったりというように、いろいろな用途のコシキがあります。

佐々木 材料は何ですか。

織田 プナです。ここでは現金収入が少ないですから、冬仕事として、夏のあいだによい性質のプナ材を取ってきておいて、コシキづくりをしたものです。プナ以外の樹種でつくると簡単に折れてしまう。たとえばホオノキのコシキはつくりやすいので、いまだに使われていますが、私の経験でも、ちよつと多めの雪を下ろすと折れてしまいます。その点プナはかなり粘り強いのです。

加藤 これらのミノやカサを編むことのできる人はまだおられますか。

織田 無理矢理探せば一人ぐらいはいるという程度です。

佐々木 私の記憶ではカサは深瀬の集落でたくさんつくっていましたがね。深瀬というのは行政区分では尾口村になります。ここ白峰村では結局のところカサはつくっていませんでした。ようか。

織田 つくったという話は聞かないんですが、編み型が収集されていますので、つくった人もかつてはいたのではないかと思います。

佐々木 深瀬の集落が手取川ダムに水没したために深瀬のカサもなくなっていました。かつてはこのような山のなかでも、かなり專業化が進んでいたわけですよ。

◆知恵といわれるものの根拠は？

織田 次は、焼畑の草取りの格好で、昔の女の人たちのデータチベ、作業着です(写真2)。腰にぶら下げているのがカギと言われます。ちょうどヒエやアワの草取りの時分、ブヨやこの



写真2

あたりではカーメと呼んでいるマメカのたぐいにたかられるんですが、真っ赤になるほど血をどっきり吸う痒い虫です。それをよけるために先端に火をつけて、その煙で力を追い払いながら作業をするわけです。

佐々木 なかには何が詰めてあるんですか。

織田 ポロを詰める場合もあるし、ヒエとかアワの穂を取ったあとの穂殻を詰めたりもします。

このあと、民具をご紹介します。ヒエやアワの穂を取って入れる籠がありまして、まとめてヘジナカゴと呼んでいます。用途によってつぶれヘゴとかヘゴとか呼んでいます。ヘジナの材料には、このへんではヤマモミジを使います。昔の作り農民はこのヤマモミジを切る時に、だいたい地上四十七センチぐらいまでを残したんです。豪雪地帯で根曲がりしていますから、内側の半分だけを切るようになります。ある程度技術がいりますが、薄く剥がれる性質があるので、ナタで剥いだそうです。昔の人は特殊な道具を使いませんでした。ヤマモミジ一本で約一籠編めるそうです。

この根っこを残すという習慣は、山から持って来る時に余分なものはいじめることではないから、また、根曲がりした内側は柔らかくて作業しやすいからだと思うのですが、研究者はそれでは面白くないのか、自然を大事にする作り農民の知恵というふうに言っています。しかし、こういう解釈には私はいささか疑問があります。

さて、タビノ(写真3)という文化財に指定されている民具を照会します。これはガマという植物で編んでありますが、縄または底材はシナノキの樹皮でつくってあります。このなかに食料品を入れて運んだり、弁当を入れてリュックサック代わりに使ったりしたわけです。

ガマは雨や雪に濡れにくい。底はシナノキの樹皮でつくってありますから、冬、豆腐のような食べ物を入れて運ぶ場合でもなかの豆腐は凍りにくいということがいえます。研究によると、シナノキの樹皮はマイナス七度まで凍らないということが言われているようですが、作り農民からは、樹皮は凍りにくいから使ったのだという理由があるとは特に聞いてはおりません。材料の選択等に特段の見識があったのかどうか、皆様のご意見をお聞きしたいのですが。

佐々木 ガマともう一つ別の素材を低温実験室で凍らせてみれば、結果としてガマのほうが凍りにくいということがあるかもしれません。しかし、一般に、農民のほうが道具をつくる時には、手に入りやすい、細工がしやすいということが第一条件ではないのでしょうか。

織田 タビノがつくられているのはこの白山ろくだけではな

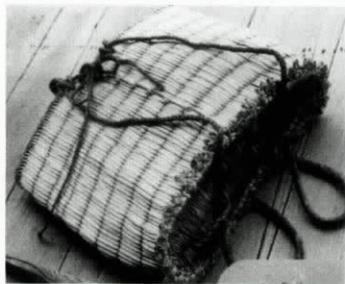


写真3

いと思うのですが。

須藤 これは、民芸品のように一個一個を丁寧につくるといふよりも、大量につくることが多いと思うのです。お母さん用とか子ども用とか、一軒の家にいくつかストックしておかないといけない種類のものですね。また壊れたりするから、補修をしなければいけないことを考えると、いま佐々木先生がおっしゃったように、やはり手に入りやすい、細工しやすい、壊れたら修理しやすいという条件を優先して考えたほうがいいのではないのでしょうか。

加藤 須藤さん、これの名前なし呼び方ですが、ほかのところでもタビノと言いますか。

須藤 会津ではエジッコと言いますが、使い方は同じです。

織田 やはり樹皮に関してですけども、先ほどもお見せしたユキワラジですが、ワラジの紐にシナノキの樹皮を使ってあるんです。出作り農民から直接聞いたんですが、ただ丈夫だからとシナノキを使ったのではないということです。雪道を一人で歩いているような場合、疲労して腹が減って、私も体験しています。もう手も足も動かしたくないような限界状況になることがある。そんな時に万が一にもワラジの紐が切れた場合、遭難の可能性があるわけですから、これは「命をかけた知恵」だと言っている。

佐々木 確かに事実としてシナの皮のほうがより丈夫でしゅうが、そこまで言えるかなという気はします。

須藤 シナノキは当然丈夫ですし、このへんですと非常に取

りやすい木なのだろうと思いますが、その接点の部分はワラとシナノキになりますから、紐が切れるとすれば、ワラとシナノキとの繋ぎ目だろうと思うんです。そうするとやはりワラの強さが基本になるのではないですか。

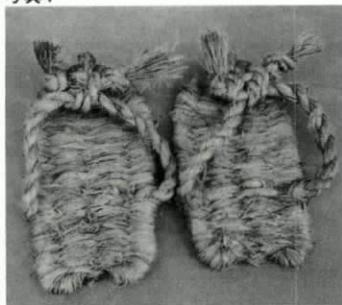
織田 次にアシナカです（写真4）。普通のワラジに比べてかかとの部分が地面につくくらい短いんです。このアシナカについては、出作り農民の多くが言うんですが、これを履いて草むらや雑木林に入るとマムシに噛まれない。へびはカタツムリに弱く、鼻緒が蝶結びに立っていて、カタツムリの角に見えるのでへびが噛みつかないと言うわけです。

佐々木 私はよく読んでいませんけれども、アシナカの研究については興味深いだぶのものがありましたね。

加藤 「アシナカ」という雑誌もありましたね。ただ、こういう俗信と実際に噛まれないかどうかということとは全く違うことでしょう。鼻緒のかたちや理由というのだったら、ワラジだって同じようにカタツムリの角に見えると思えますが。

須藤 へびに噛まれるようなところへこれを履いて入っ

写真4



ていくわけですね。

織田 出作りの子どもはそうですね。

須藤 そうすると、山仕事や畑仕事などの仕事に履いていくということはないんですか。

織田 その場合はワラジですね。

アシナカはちよつとお使いに行ったり、子どもが遊びに行ったりするためのもので、どちらかというと子どもが履いたんです。

須藤 はきものに使い分けがあったわけですね。ワラジとアシナカの製作工程を考えると、ワラジのほうがより複雑で、山仕事や畑仕事に耐えられるよう丈夫につくられていたと思います。

これに対してアシナカは足の半分の長さしかなく、鼻緒をたてる必要もないので、ワラジより短時間でつくることができる。白峰村では主に子どもが履いたようですが、ヘビに噛まれないという俗信を信することで、子どもにアシナカを履かせたのではないのでしょうか。

◆言葉にこめられた心情の理解を

織田 さて、本題に入りたいと思います。「出作り」の生活、民俗に関しては研究者の方々が従来もたくさん書かれているわけですが、この土地の農民の心情を正確に伝えてほしいという

ことを一言申し上げたいのです。

たとえばここでは蚕とは言わず、蚕様と言います。いま資料館で特別展をしています。「蚕様」という言葉には農民の心情が表れているんです。また、オジヨロウサマとここでは呼んでいる植物がありまして、実際はウバミソウなんです。利用期間が長く、山菜がなくなつてから後も利用できる。つまり、身を売って家族を救うという女郎にたとえて、「お」と「様」をつけて有り難いという心を表現していると考えられます。

また、出作りを研究された方は必ずウシクビコジキ（白山ろくの出作り農民が冬に福井方面、特に若狭の町へ出て門づけをする）のことを書いています。今この言葉を言うと、地元の方はかなりショックを受けたり、若い者は抵抗するわけですね。白峰は昔から、全国的に娘を売るような時代であっても、娘は絶対売るなどという伝統がありました。白峰には娘を売った記録は一軒もありません。ですから、これには乞食をするようでも娘は売らないという心が込められていることと、もう一つは、浄土真宗に変わる前はこのへんは曹洞宗でしたから、托鉢という制度に馴染みがあつて、コツジキと呼んでいたこともあると思います。

おそらく、坊さんがやって来て、困っている農民に向かい、「おまえら娘は売るな、勝山や若狭に行つて助けてもらいなさい」と言つたのではないか。そうしてみたら、「聖なる地、白山からおいでなかつたか」といつて大事にしてくれた、という

のが起源だと思ふんです。ところが、今では乞食という言葉の
マイナスイメージが残つてしまつてゐる。

佐々木 私もコツジキから来ていると思ふんですが、いつの
間にかそういう言い方になつたんだらうと思ひます。迎えるほう
うは、あれは白山の麓から来た「まれびと」という意識があつ
て、今われわれが言つている乞食という感覚とは全く違ふよう
に認識してゐたと思ひます。

つまり神の山である白山を背負つてやつてきた「まれびと」で
すから、迎えるほうこそお米を出したり、托鉢に應ずるわけ
して、行く人も今の言葉で言へば、冬のあいだのアルバイトの
ようなもので、心情的に卑屈になるようなことはなかつたと思
うのです。

加藤 乞食という言葉をも今のように差別的に使うようになつ
たのはそれほど古いことではない、極めて新しい現象だと思ひ
ます。私も織田さんがおつしやつたように、コツジキのことだ
と思ひます。

佐々木 コツジキといへば、六波羅密寺に残つてゐる空也上
人像などは典型的なコツジキの例です。シカの皮を着て、聖な
る托鉢に出ている立派なコツジキ像なんですね。ウシクビコジ
キという言葉に関しては、村のほうでも誤解するし、周りのほう
でも誤解するといふダブルの誤解の構造ができあがつてゐる
のではないでしようか。

◆白山の養蚕技術はどこからきたか

織田 もう一つ言葉のことですが、出作りの研究をされる方
は、ヒエ、アワを言うのに、雑穀という表現をされてゐます。
これは研究者が「出作る」農民の心情を考えずに、単に分類
学的に使われたのではないかという気がするんです。焼畑の研
究のなかで使われる雑穀という表現は地元としてはちよつと抵
抗を感じるのですが、いかがなものでしょうか。

佐々木 まずアワですが、アワは不思議なほど方言が展開し
ておらず、沖縄の端から北海道まで全国でアワと呼ばれていま
す。せいぜい、沖縄でアワの「ワ」の発音がちよつと軽くなつ
て「ア」に近いのがあるくらいです。新しく入つてきた四国ビ
エは、ここではカマシと呼ばれてはいますけれども、それと対照
的に、アワというのはものすごく古い時代に一様に広がつたん
だと思ひます。

また、雑穀という言葉ですが、私は雑穀という言葉をかちつ
と定義してゐます。つまり英語の「ミレット」の訳であつて、
夏作のイネ科の作物の総称なんです。イネ科の作物のなかには
ムギに代表されるような冬作のものと、春に蒔いて秋に収穫す
る夏作のものがあつて、イネ科の夏作物については、英語で
「ミレット」、ドイツ語で「ビルセ」といふ言葉があるので、そ
れに対応する訳として「雑穀」になつてゐるわけです。

以前、ある大学の講義で「ムギという言葉を英語でどういうか」と学生に聞いたことがあります。彼らは「ウィート」とか「バーレイ」とか答えるんですが、それは、コムギ、オオムギであつて、ムギではない。要するに英語にもドイツ語にもムギという総称の単語はない。冬作のイネ科の作物をつくつていゝ文化には、日本語のムギにあたる総称名はないということです。

それに対して東アジアの主作物は夏作のイネ科作物なんですが、ヨーロッパ語ではそれに対応するのは総称名称しかない。この関係は、ヨーロッパにムギという単語がないのと同じであつて、東アジアでは総称でなくアワとか、ヒエとかキビとか言つてゐるわけです。そもそもイネも夏作のイネ科作物の一つなのであつて、夏作のイネ科作物を雑穀と言ふのなら、イネも雑穀の一種なのです。

ただ、雑穀という言葉に少なからず差別を導くような音があるのは残念です。一つは日本の農学がいけない。日本の農学部には作物学科というのがありますが、作物学科の主任教授はイネカムギの専門の人しかありません。その意味で日本の農学そのものがヒエ、アワをはかにしている。

織田 わかりました。ようやく納得がいきました(笑)。

加藤 私も佐々木さんの書物を読んで雑穀という言葉の意味を勉強した人間の一人なのですが、何か適当な言葉がないかと思つて、昔はどう言つていたのかと考えると、五穀豊稔と言う表現がありますね。「五穀」がこれに当たるかと思つて文献を

調べたんですが、中国では時代によつて五穀の指すものもものすごく違います。

佐々木 マメが入つたり、ムギが入つたりしますね。

加藤 五穀が何であるかがはっきりしなくなつたので、雑穀という呼び方がいいかどうかは別として、他に呼び方がなかつたということでしょうね。

佐々木 もう一つ言葉の問題で気になるのは、「出作り農民」という言葉です。研究対象になつた人が自分で出作り農民とは言つていないわけですから、これも考えてみれば専門家がつけた特別な名前ではないでしょうか。

加藤 これは学者がつくつた言葉でしょうから、それを自ら担ふ必要はないと思います。

佐々木 一般に言われている「季節出作り」(春・秋に出作り地と母村の間を往復するもの)から「永住的出作り」(母村には住居を持たず、出作り地で越冬し、常住するもの)へ移行したという仮説も信憑性に乏しいという気が、私はしています。ここ白峰の長坂家などの例を見ますと、むしろ話は逆で、いわゆる「永住的出作り」が先で、後に地下(母村)に家を構えるようになるわけです。

織田 現在、白山ろくの出作りの起源は、本村に人口が増えた結果、農地が不足し、白山ろくに農地を求めて自然発生したというのがほぼ定説のようなんですが、佐々木先生の本を読んで、逆に、先住民が焼畑農業の技術、養蚕の技術を携えて本村

へ入ってきたという伝承説が可能ではないだろうか、いささか無理矢理ですが考えておきます。ちよつと飛躍するかもしれませんが、中国の雲南省やブータンあたりから渡来したと考えられないかなと思つています。

高度な養蚕技術は、原種も含めて、大陸から来ないと、白山ろくで自然発生的にはとても生ずるものではないと思うんです。

佐々木 いま養蚕は蚕を飼つておられるわけですね。学名で言えばあれは *bombyx mori* という蛾の幼虫です。雲南やブータンではその *bombyx mori* という蛾の幼虫ではないものを使います。

絹を吐く虫という意味で全部ひつくるめて仮に絹糸虫と呼ぶと、数百種類に及ぶ絹糸虫がいます。ヤマユガ科とカイコガ科という大きな科が二つあって、その科のなかにさらに属や種に分かれるわけで、ものすごい種類がありますが、雲南やブータンあたりではそういう「絹糸虫」を半野生で利用したりしているのです。

このあたりで、古い昔に、蚕以外の繭をつくるような虫を飼つたり、あるいはそういう虫の繭を山へ行つて取つてきたりしたという伝承はありませんか。

織田 天蚕は今でもあります。一種類しか見ていませんが、ちよつと青っぽい蛾で、いまだに繭をつくつています。

佐々木 資料館で復元される時に、そういう古い養蚕業、つ

まり絹糸虫全体を見通したものの名残を追跡・調査されると、たいへん面白いものになると思いますね。

加藤 私はお蚕さんのことはあまり知りませんが、須藤さんは詳しいでしょう。沖縄の与那国に行くと、大きな山繭で、蛾自体がものすごく大きく、怪獣映画を見ているようなのがいますね。八重山繭もその手でしようが、沖縄でつくられている絹織物はお蚕さんからつくられたものではありませんね。

佐々木 蚕ではない絹糸虫の一種の繭からつくられたものですね。

私がアッサムで見たエリーという種は、ヒマの葉を食べるのですが、蚕よりちよつと大きいかたちですが、体がやや四角い。日本の蚕は丸いでしょう。また、その紡いだ糸ですが、スライドで撮つて映るぐらい太い。したがって、できたその糸で織りあげた織物はゴワゴワした感じのものです。

加藤 タイシルクがそうですね。ゴツゴツしています。とりわけ山地民のものがそうですね。

佐々木 そういう蚕とは異なる多種多様な絹糸虫のなかから蚕がセレクトされて出てきて、技術的にも洗練されていつて「お蚕様」になったのでしょう。

加藤 雑穀のなかからイネだけが傑出したのと同じように、絹糸虫のなかの一つだけが卓越してしまつたのでしょうかね。

◆ 樹皮文化の系譜

佐々木 私が今日お話をうかがっていて非常に印象的だったのは、最初のシナの皮にはじまって、カエデの皮、サクラの皮など、いろいろな木の皮を使う樹皮文化がこの白山ろくの地域に根付いていることです。従来こういつた文化はほとんど無視されてきた。というのは時代が下るに従って、陶器が出てきたり、あるいはワラが出て来たりしたからです。稲作が日本全体に浸透していくと、樹皮の使用がワラに置き換えられていくという構図があります。しかし、アジア全体を見ると、落葉広葉樹林帯（私のいう「ナラ林帯」）は非常に樹皮利用がさかんなところなのです。

樹皮の文化について、岩手県博にいた名久井文明（いづみぶんめい）さんが最近、吉川弘文館から『樹皮の文化史』という大きな本を出しましたが、「樹皮をよく使う文化」は、改めて見直さないといけないと思います。というのは、これらの伝承技術は消滅の一途をたどりつつあるからです。たとえば緊縛材のネソなども、もとは樹皮でくくっていたのが、縄でくるるやり方になってしまっている。もはや技術もあまり残っていないし、材料もなくなってきています。

落葉広葉樹林帯の文化というのは極めて樹皮への依存度の高い文化だったと思います。東北アジアの場合では、樹皮といっ

ても多く使われるのはシラカバです。ですから「樺皮文化」という言い方を中国の人はよくしますが、日本の場合はシナノキ、カエデやサクラとか、そのほかいくつかあって、その時々に応じて上手に使い分けているのが特徴です。こういつた樹皮利用が焼畑の文化などと結びついて展開しているところがたいへん面白いと思います。

ところで、このあたりの樹皮の利用という点では、やはりシナノキがいちばん多いんですか。

織田 そうではなくて、このへんはシラカバがありませんので、ダケカンバです。ダケカンバは補強材にも使われていますが、たいまつとか火のたきつけにかなり使われています。標高の高いところの出作りの人はダケカンバですし、ちよつと低いところの人はウダイカンバですが、いずれにしてもカンバの木を使っています。

佐々木 たきつけ以外の加工用としては何の木が多いのでしょうか。

織田 急に言われてもちよつと思いつきませんが、葉草というか葉にはかなり使っています。メグスリノキなども今は幹まで売っていますが、もともとは樹皮を使いました。

佐々木 そういつた樹皮利用は、たとえば織田さんのもう一世代上だったら誰でも知っていたのでしょうか。あるいはもうちよつと世代をさかのぼらないとわからないのでしょうか。

織田 出作りのの方が上手に使っていますね。たとえば風呂桶

から水漏れした場合なども、木の皮で上手に修理したりします。

佐々木 こういった知恵の伝承ですが、たとえば長坂さんはいま百四歳だそうですが、あれぐらいの年齢で出作りをやっていた人たちだと、たいがいわかるのでしょうか。

織田 あの長坂さんでさえも、父親に習ったという知識しかないわけです。

資料館でも、資料整理の段階でもはやわからなくなっていることがたくさんあります。

須藤 ウルシを掻いたりする場合も、いわゆる「殺掻き」と言って、もうその木は殺してしまうという掻き方と、何回も何回も掻くことを想定した掻き方とがあるんですが、そういう細かな木の使い分けまで資料としてストックしていただけると非常にありがたいですね。

佐々木 樹皮にこだわりますが、ネソというのはそもそも一種類ですか。それともネソと言われる「縛るもの」には、植物として何種類かあるのでしょうか。

織田 私の感覚では、ネソと言うと、縄の代わりをする灌木の総称です。このへんの人にとってはネソと言えばマルバマンサクのことなんです。素人ですとマルバマンサクでないと折れてしまつてネソに使えない。ところがちよつとベテランになつてくると、ナラであろうと、リョウブであろうと、何でもネソとして使つてしまう。そういう人たちにとってはマルバマンサクに限定せずにネソと言っています。

佐々木 以前、尾口村で、ネソと言つたら幾種類もあるんだと聞きました。いちいち樹種までは聞けなかったのですが、どうも聞いていると、ネソというのは緊縛材、縛る材料の総称なんです。ただそのなかで、尾口村のちよつと南、やや下流域のほうと、たとえば河内谷から上流のほうの市ノ瀬あたりでは高度差が三百か四百メートル違いますね。そういったところの間で、ネソというのが、それぞれ同じなのか、違うのか。これを詳しく調べる必要がある。

織田 たとえば農作物入れとして使うヘジナカゴですが、河内谷あたりへ行つてヘジナと言えば、ヤマモミジです。ところがこつちへ行くとウリハダカエダをヘジナと言つてみたり、イタヤカエデをヘジナと言つてみたりする。ですから、ヘジナというのは、そういう籠材の総称であると言えます。

また、小物入れのコツラもそうです。マタタビをコツラだと言つて出作り地と、ヤマブドウをコツラだと言つて出作り地があるのでわからないんです。ですから、コツラというのは籠に編んだ紐状のもの総称だというふうに解釈しておかないと理解できません。

佐々木 そういうのをエスノタクソノミー（民俗分類学）と言つてわけです。

◆知識体系と呼称の関係

加藤 佐々木さん、樹皮の文化と言われて初めてはつと気がついたので、樹皮を非常によく使っている文化としてはほかにどういふ地域がありますか。

佐々木 私の知るかぎり、たとえば黒竜江の流域の地域は全部そうです。それからアイヌの場合はアットゥシという有名な織物がありますが、あれはオヒヨウの皮を剥ぎ、その樹皮から繊維を取ってつくるわけですから、広い意味での樹皮文化と言えます。ですから中部日本から東北地方、北海道からずっとシベリアにかけてが樹皮文化地帯だと言えろと思います。飛躍しますが、縄文化のなかにもずいぶんあつたはずだと思います。遺物として出土してきませんから、なかなか立証は難しい。

織田 あと、樹皮利用とは違いますが、アカソとかマオウとかイラクサの繊維利用もあります。

佐々木 それらを蒸して晒して叩いて樹皮にして着るわけですね。落葉広葉樹文化というのは、そういった樹木ないし植物繊維の高度利用をかなりやっていると言えます。

織田 アカソ（地方名Ⅱオーロ）が多く使われていました。ヤブマオ（地方名Ⅱマオウ）はアカソと同等の繊維ですが、自生する量が少なくあまり利用されていません。

イラクサは当時の高級な繊維でしたが、自生する量が少ないため、トノサマカタギと呼ばれ儀式などに使われるカタギ等の高級衣服の繊維に使われました。

今のカンジキ綱が入ってくる前、アカソよりもアサよりも最

高の紐と言われたのが、イラクサの縄であつたのです。

加藤 今でも使っているのですか。

織田 今は使っていません。

佐々木 ちゃんと利用できるまでに手がかかるのです。イラクサですから、取ってくるのもたいへんですが、それを蒸したり、叩いたり、剥いたりする工程がたくさんある。ですから、簡単な繊維がスツと外から入ってくると、またたく間に全部だめになってしまう。

舛田 アオソ（カラムシの茎の皮から取った繊維）は魚を獲る網にも使ったんですが、それからアサに変わり、綿糸に変わるといふように、どんどん変わっていくわけです。植物繊維はいろいろなところに使われているんですね。

佐々木 それらを一つひとつ識別するだけの、エスノタクソノミーというか、俯瞰する知識がないといけないわけで、そういう意味で、植物利用に関するものすごい知識体系がこの地域にも連綿とあつたでしょうね。そういう知識体系と民具、すなわちいろいろな技術が対応しているわけです。

須藤 すごく面白いですね。ところで、ここでは竹は自生しませんか。

織田 このへんの竹は千島笹と呼ばれる細い根曲がり竹や煤竹と呼ばれるもので、いわゆる孟宗や真竹というのはここから七、八キロ下の集落にはありましたが、白峰には珍しかったです。

須藤 一般的には、竹細工とワラ細工に代表されるような民具の体系があるんですが、そのいずれもここにはないということになりますね。この樹皮利用を見ますと、たとえばウリハダカエデやマタタビなどを竹の代わりに使っています。竹、ワラ両方の大きな体系がなかったことで、かえって非常にこまやかな樹皮利用が発達せざるをえなかったのではないのでしょうか。

佐々木 ワラ利用と竹利用は温暖西南日本型です。それは照葉樹林文化、あるいは稲作文化の産物と言えます。それに対して、ナラ林文化≠非稲作文化のきちつとした体系が、この地域ではできあがっていたということではないでしょうか。

後世、稲作文化が政治と結びついて強力になり、それがこの地域にも進出してきて、この地域のいわゆる「おやつさま」層は稲作文化と結びついて中世ぐらいにここへ入ってきた勢力かもしれません。しかし、それ以前の非稲作の文化は、伝統としてこの地域に古くからあったものだと思います。対比してみたら非常に明快だと思いますね。

須藤 竹細工よりもマタタビ細工のほうがつくり方が複雑で、しかもこまやかな使い方をしないと長持ちしない。

加藤 私は四十年前に岩手県の山村でアケビでつくった籠を買ってきたんですが、これはいまだに活躍している。竹細工のバスケットやらほかの材料でつくった袋ものはだめになりましたが、アケビの籠だけは四十年たってもピクともしない。そう

いう確固とした技術がおそらく樹皮文化と結びついてあると思います。

織田 籠類はここではコツラと呼んでいます。そして、コツラと言ったらアケビの蔓、ヤマブドウの蔓、マタタビの蔓などです。

佐々木 コツラという言葉はさっきのネソと同じで、そういう材料になるようなものを一括した総称名詞で、それと別にきちんとした固有名詞がある。ある種の用途を見越して総称名詞ができてくるわけで、それを支える文化体系がきちつとできていることを意味していると思われれます。

加藤 抽象名詞化されるということは、そういうことですね。佐々木 われわれが緊縛材と言っているものにネソという単語があったら、バスケットメーカーキングの植物繊維というのに、今のコツラが対応するわけで、概念がしつかりできている。

須藤 体系立っているというのが面白いですね。

佐々木 織田さんはコツラと言うと、それは何、何、何とパツとおっしゃるわけですが、そういうこと自体が稲作文化のなかにはないわけです。

須藤 山の利用をかなりきちんとやっていたところでは、そういう体系ができあがっています。たとえば先ほどのネソは会津ではネジリと言いますが、ナラの若木を使ったり、サルズベリを使ったり、いろいろな木を使いますが、やはり総称なのです。

加藤 実ほたいへん重要な問題に今さしかかっていると云えます。つまりこの場所ではこう言う、ところがあちらへ行くと別の名前と言う。だから混乱してわからないというのは発想を逆にすべきなんです。そういうものを含めてくりができて、一つシステムができていうことで、立派なこととして評価すべきではないか。混乱しているのではなくて、むしろ整理されていると言えます。

須藤 非常にきれいに整理されている。それがまた材料を取ってきて加工する段階から、使う段階でまたもう一段階整理されていますね。

佐々木 そういう意味では植物利用のバリエーションが非常に豊かで、その植物利用のバリエーションの豊かさに応じて様々な名称が分化し、あまり分化しすぎると具合が悪いので、そこでスッと総称名称をもってきているという素晴らしい文化と言えますね。

今日はたいへん面白い話を聞かせていただき有り難うございました。

加藤 終わりのほうで樹皮の問題が出てきましたから、資料館で樹皮の問題を分類して一度展示なさったら面白いかもしれませんね。

(第三十九回 一九九九年十月十六日)

激動期の 農業と農村を見つめて 〔第六次産業の創造〕

●講師 坂本多旦・(有)船方総合農場代表取締役

〔出席者〕加藤秀俊／中部高等学術研究所所長 安達生恒／社会農学研究所所長 佐々木高明／国立民族学博物館名誉教授 須藤 護／龍谷大学教授 舛田忠雄／山形大学教授 宮本千晴／マングローブ植林行動計画スタッフ 米山俊直／大手前大学学長 小浜政子／(財)政策科学研究所主席研究員

島根県松江市を訪れ、山口県から農業経営家の坂本多旦氏を講師に迎えて討論会をもった研究会一行は、オブザーバーとして参加した当地の「山陰農業フォーラム21」のメンバーと交流。また、翌日には、地域共同体の再生へ向けて独自の哲学をもとに事業展開をおこなっている木次乳業の諸施設を見学した。

◆「村に残りたい」という切なる気持ちから

坂本 私 は昭和三十五年に就農してから後、ずっと村に留まり、農業生産法人という、農業の法人化にこだわり続けてきました。村の連中には突然変異とか徒花とか言われていますが、いわば“新品種”でありたいと思います。三十年間、農業経営の改革を目指して実験を重ねてきました。

それらの試みはすべて、多様化していく日本の農業のなかで、「村に残りたい」、「村で農業を続けたい」という一念からの発想でありまして、けっして何かのモデルになるようなものでもなく、また私は法人経営を謳っておりますが、法人でなければ日本の農業はたちゆかないというような、狭い考えは持つておりません。むしろ一つの戦略としては避けては通れないというスタンスです。家族経営がまさに理想の姿というのはこれから変わらないし、三十年、法人を体験してもその気持ちは変わっておりませんが、グローバル化のなかでここまで農業、農村が窮地に追い込まれ、鎖国もできないわが国にとつて、法人化は解の一つだと思います。

たとえば、教育は今日の本題ではありませんが、今の三十代、四十代以下の人は、豊かななかで「与えられること」に慣れ過ぎています。財産をもらう、お金をもらう、学費をもらう、すべて、「もらう」という姿勢で生きてきております。昨年もわ

れわれの農場に就農したいと戸を叩いたのは八十五名で、採用したのが七名ですが、そんななかでも、一年はもつてほしいと思うわけでして、できればそのうちで三名、村に残ってくればこれは大きなことではないかと思っている状況です。農業の問題は教育にもかわっているという点も頭のどこかに入れておいて、話をお聞きいただきたいと思います。

島根県の津和野と県境を接する山口県側がわれわれのふるさとです。山口県阿武郡阿東町徳佐という、旧徳佐村地区です。水田が二千ヘクタールあり、海拔三百五十メートルの、まさに中山間と言える村で、中国山脈の頂上にある自然豊かな町です。山口県では農業振興地域ということで、基盤整備も九〇%以上済んでおりまして、県には非常に力を入れてもらっていますが、西日本の農業ですから、多様な農地、多様な農業であることに変わりありません。

昭和三十五年には当時の徳佐村に就農したのですが、その当時はまさにわが国は工業立国へ向けて大発展の途上にあり、高度経済成長のなかで、私たちの村でも、ほとんどの若者は関東、関西に向けて集団就職に旅立ちました。私は自立経営を目指していましたが、三十九年に集団就職で都会へ出たけれども帰農したいというある青年との出会いがあり、それが機縁となつて、昭和四十四年に船方総合農場というかたちで、村に残りたい、村に帰りたい者五名が集まって“生き残れる”農業を目指してスタートしました。経営基盤が一ヘクタール以下の規模

の農家は私の村にもたくさんありますが、これから高度経済成長という時代、また、農業基本法も成立して、国際社会のなかでのコストダウンという大きな時代の流れのなかで、法人化はある意味で必然でした。

国も農業基本法をつくり、選択的拡大と言っているわけですから、スタート当時のわれわれの意気込みはたいへんなものでした。世界に追いつけとばかりに、対等に闘える大規模農業をやろうと、アメリカとかオーストラリアにも行けるだろうと、一つは酪農を目指しました。また、カネも土地もない仲間ですから、施設園芸として、海拔三百五十メートルの地の利を生かすため、シクラメンを選びまして、当初は園芸と畜産というかたちで出発しました。その後、酪農というかたちで再出発し、五十年代は畜産、酪農を大規模化することで生き残れる農業に取り組んでいったわけです。

◆異分子への風当たり

ところが、大規模化して牛が四百五十頭程度の規模に到達した昭和五十七年頃、地域環境への影響問題が出てきたのです。狭い村なのですが、谷々に水利権があつて、生活水と農業用水とに分けているのですが、地域から六百五十人の反対署名を出されて、村から出ていけということになりました。

違法な行為をしていたのではありませんが、当時、水田です

と一ヘクタールから一・五ヘクタール、酪農ですと二十頭で食べていける価格の時に、われわれは規模拡大を要領よくやったためにそれなりの利益が上がったわけで、地域から見ると異分子に見えたのは当然です。

六百五十の反対署名に対して、賛成派もいるわけで、村が二分していきました。悩み抜いて代表者とも話をしたのですが、結局、平行線をたどりました。私どもの仲間は戦後の資本主義社会における農業はコストダウンであるという考え方を基本にしています。コストダウンというのは、大規模な農地、地域をいかに機械化し、いかに少ない人間で村の土地を支配するかということになります。

ところが、村というのは多数決の世界でして、町長さんも町会議員さんも農協の理事さんも有権者の一人一票の力に強くコントロールされているわけです。もし、町長が私を支援すれば次の選挙では負けてしまうので、いきおい事業認可も出せないということになる。法的には違法ではないのですし、相当の投資もしたので、裁判に訴えようかと思わずに悩ましました。

ところが、その頃私が一日置いている方から言われた「あなた、裁判に勝つても村の生活に負けますよ」というひとことで気持ちが決まったのです。このひとことはまさに日本の農業、農村というものを象徴していたと思います。裁判に勝つということとは正しいということですが、村の生活では多数決に負けただら生きていけないわけです。改めて、すごい村だなと、自分の

生まれ育った村を見直し、私はその道を選ぶべきだと思い至りました。戦乱の戦国時代などを生き延び、戦いに疲れた果てに、集落を形成して水を分け合って長年やってきた歴史の積み重ね、生活の重みがそこにはあるんです。定住再生産という言葉が私のなかで膨らんでいった。

ここで大きく視野が開けたのです。定住して再生産することこそ、二十一世紀に地球の人口が百億になる時、火星のフロンティアを開拓できればいいですが、そうでなく百億がこの地球に住まざるをえないとなれば、日本の先人たちが五千年の歴史を通じて築いてきた文化、営みが非常に重要ではないか。まさに理屈抜きでの現場での体験だったのです。

そこで、地域といかに連携した農業をするかということ、地域複合営農への取り組みを始めました。

われわれは親父の農業はためだと大規模化したのですが、先人たちの農業をもう一度見直すべきだと考えました。私の親父などは一・四ヘクタールで牛を三頭飼って、稲わらを食べさせ、その牛で田んぼを起こしということをやってきたわけですが、それこそが経済合理性の真髄であって、歴史の重みを感じました。具体的には、私たちが水田を所有することはできませんでしたが、地域の農家はほとんど兼業化して無畜農家になつていたわけですから、地域に代わってわれわれが牛を飼っていると考えればいいのだと、発想の大転換をしまして、地域の無畜農家から稲わらをもらい、われわれのたい肥と交換する運

動を起こしました。

当時は増産体制真っ盛りでしたから、たい肥などを入れるなどというやり方は全く歓迎されず、むしろきちっと化学肥料の投入量を計算して設計通りコメをつくるほうが収量が上がるというのが通念でしたから、当初はたいへんでしたが、じいちゃん、ばあちゃんあたりから理解が始まりました。その代わり、「おれらは年とつたから稲わらが欲しければうちの田んぼを刈り、乾燥せい」ということで、農協にライスセンターとコンバインを買わせて、私たちが農協に代わって作業をし、稲わらをもらってサイロで乾燥というように、地域の無畜農家二百軒ぐらいとお付き合いが始まりました。

しかし、地域複合営農に移行したのはいいのですが、コストは逆上がってしまい、法人の経営自体は厳しくなってくる。コストを切り詰めようとすると、地域と喧嘩になってしまうし、仲良くしようとすればコスト高になる。

そのように行き詰まったところで、消費者はいつたいたいどう見ているのかという発想の転換になったのです。というのは、われわれの七〇％は全くの町から来た連中で、その意味で船方は農業をしたけれども基盤がない人を受け入れる場だった。東京で営業を七年やった青年から「農業者は消費者に対して何もしていない。農協まかせ、国まかせ、流通業界まかせ、量販店まかせというようにすべて人まかせではないか。これではあなた方は一生利益を吸い上げられるだけです」という厳しい批

判が出たんです。

◆都市農村交流事業が開拓した消費者層

そこで、次の展開が生まれました。農場へ遊びに来させるというものです。従来は、遊びに来る人がいると、母牛が乳を出す邪魔になる、また、あなた方に乳を売っているのではなく農協に売っているのだから関係ない、という態度だったのですが、町から来た連中が猛反発したのです。わざわざ農業に興味を持って入ってくる人を追い返すなんて、これは千載一遇のチャンスなんだと言っんです。一理あるなどいうことで、昭和六十年に都市と農村の交流というテーマに分け入っていった。農場に入ってきた人を受け入れることを始めました。

山口県の農協中央会がその計画を知りまして、同じく都市農村交流の課題があるから一千万円出しましょうということになり、われわれの農場で「わんぱく農場」と銘打ち、一日農場を開放して、許される限りの好きなことをさせてやろうということになりました。そんなことをすると、臭い、不潔だと町の人に思われて、かえって嫁が来なくなると、長老たちから反対もあったのですが、何とか理解してもらい、結果的にはたいへんな人気になりました。

入園料は取らない、また、三十八ヘクタールのうち八ヘクタールについて農業を邪魔しないという条件で開放しました。三

年生の副読本で農業が出てくるといふことで、小学校三年生の子どもとお母さん、二百五十組をまず招待しましたが、小さい子も三年になるのを待っているという声が出て、農協のほうもやめられなくなり、わが農場で三年、他の地区で三年、合計六年間この交流事業を続けたわけです。無料で招待するので、「ゼロ円リゾート」と呼んでいます。

私たちは子どもたちの様子を目の当たりにして、農村の役割の大きさを知りました。うさぎを抱いて、「おじちゃん、なぜ、温かいの」と質問が出るように、動物や自然との接触がきわめて少ないのです。なかには、ウサギなどに暴力を振るう子どもも出ます。動物愛護協会からはクレームが来るかもしれませんが、子どもたちが命というものを体感する機会になればと思います。

このところ、十七歳の殺人、暴力が頻発していますが、このあいだもわれわれのミーティングで、「おれたちがやっているのは無駄なようだが、まんざらそうでもないのかもしれない」という話になりました。教育的効果という点で農業の役割はすごいというのが昭和六十年以降の交流の実感です。

この来園者のお世話をする係として、図1にあるように、都市農村交流の株式会社グリーンヒルATOが船方農場の次にできました。

というのは、実際農場を開放して、イベントをやりますと、来訪する町の人、つまり消費者は農業の常識を知らませんから、

図1 船方農場グループの組織構成



常識では考えられないことをやってみよう。それを農業生産者であるわれわれがお世話していたらたいへんコストとなってしまふ。これではゼロ円リゾートもやってみないという声が出たところ、消費者の方三十九人が、ではわれわれも出資しようということでこの会社ができたのです。ヒノキ林のなかでパーベキューができるかたちになっておりまして、農場内の案内係も置いてあります。

が、来園者の七〇％は弁当を持ってきて、ゴミを置いて帰るだけ、都市農村交流は儲けのためにはとてもできるものではありません。本来、公共団体、第三セクターしかできないものです。われわれは民間でやっていますが、最近法律ができてPFIという概念を私も知ったのですが、知らずにPFIのようなことをやっていたんだなと思った次第です。

今でも幼稚園の子ども、小学生の子ども会などが多いのですが、子ども会にはお金がありませんので、パーベキューのようにおカネは落ちません。ある時、お母さま方と学校の先生が来られて、毎年来ておカネも落とさず申し訳ない。パーベキューをする予算は子ども会にはありませんが、せめて少し高くても牛乳なら買いましようという話が相手方から出た。食品衛生管理方法というものがあるから、工場をつくって営業許可をとらなければあなた方に売れないんですよと説明しますと、では加工場をつくったらと言う。そんなカネはないと言いますと、では私たちも出資しましようということになり、三番目に「みる

くたうん」という農産加工する法人ができたわけです。

この株式は一般公開したので、検事さんから大学の先生、お坊さんから消費者であるお母さん方まで、いま七百人ぐらい株主がいますが、一億五百万円ぐらい集まった。私はこの動きをまだよく押さえきれていませんし、将来どうなっていくかわかりませんが、消費者を巻き込んでいくというのが私の思いです。で、「みるくたうん」で乳製品、肉製品事業をいま進めています。コストを切り詰める地域との関係が悪くなるので、高値でもよいという消費者を開拓するという事です。これは食料自給率を上げるという課題とも大きくリンクしていると思います。

食料自給率は四五％で何とか決着したのですが、趨勢では三八、あるいは三五％まで落ちる可能性は十分あると思うわけで、もう土俵際だと思えます。自給率は三五％になっても農業は残り得ると思いますが、そのためにはこのような仕組みを考える必要があるのではないのでしょうか。スーパーの食品棚に外国産品がどんだん並んでいくなかで、わが国の農産物を意識的に選択しておカネを払う仕組みを整えなければ、いくら声高に自給率を叫んでも、自給率は上がらないのです。

◆生命総合産業としての第六次産業

こうして、気がつきますと農業生産の一次、加工の二次、交

流の三次という一、二、三の法人ができていました。しかし、これは法的にはあくまでも独立した法人で、これを長期的な農業応援団としてのグループにしていくなには六次化していかなければなりません。一次、二次、三次産業を足しても掛けても六になるといふ意味での六なのです。単なる連携や契約ではだめだと私は思っております。真の六次生命総合産業にするには、これをどう組織化するか。その際には競争と協調のシステムづくりが重要で、それは国際競争に勝ち抜くためでもあります。実際、船方農場の原乳を「みるくたうん」が買うわけですから、会議をやってもカンカンガクガク、船方農場は「みるくたうん」に原乳を高く売れば給料が上がりますし、「みるくたうん」は船方からの原乳を買い叩けば給料が上がる。しかし、最後のところで折り合わないと、船方グループ自体が生き残れないということ、着地点を見い出しています。

現在、農協法のためにこれら法人と法人を束ねることはできませんので、中小企業等組合法に基づく事業協同組合となっています。地域の農家五戸にも参加いただいて、八組合員です(図一)。そのうち、農家が二、農業経営体が二、商業経営体が二で、みどりの風協同組合は農業者が組織する団体です。農村、農業がイニシアチブを取ることができるシステムにしてあります。関係者は、消費者とか出資者を入れますと、約千人ぐらいの仲間になるわけです。

船方農場グループの就業者状況ですが、今グループ合計で五

十五名働いております。男性が三十三名、女性が二十二名です。農家出身が十六、これは阿東町の出身者でして、非農家出身は三十九名。いかにたくさん村の外部からも受け入れられているかということがわかるかと思いますが、昭和五十年代、反対署名があった時はこの村外出身者が多いことが異分子に見えたので、村の人から見ると、どんどんよそ者が入ってくるということで、危惧をもったのだと思います。時代が変わるのに三十年かかりました。

年齢別に見ると、二十代から六十代までおりまして、平均年齢が四十五歳で、やや若めです。平均年齢は五十歳ぐらいが本当は最適値ではないかと思えます。二十代が二十名いるのですが、それが六十代の七人と入れ替わると、収益がもっとよくなる人員構成と言えます。二十代はコストがかかるわりには、最初の二年間は半分しか稼ぎが生まれません。農学部博士課程を出たと言って面接に来ますけれども、二年間は全然カネになりません。その代わり大学を出た青年はその後成長がはやく、五年おきますと、われわれ以上の知恵が出始めるのですが、問題は当初の二年、三年間のコスト負担です。夢を描いて、ものすごく冒険的な実験をやるので、よその部分の利益も食ってしまう。しかし、積極的に若者を採用しないと、担い手、後継者が育たないというジレンマがあるわけです。

売り上げですが、農業関係の売り上げが二億九千五百万円で、加工関係が三億四千四百万円、交流が六千万円、管理関係

が六千百万円ということで、グループ合計で約七億六千万円の売り上げです。以上が船方農場の現状です。

では、船方農場はこれから何をするのか。消費者に対峙してみても、いちばん船方農場として消費者に信頼されたのは牛乳とコメでした。アイスクリームをつくったり、また、いろいろな加工場もつくったのですが、結果的には、牛乳そのものを届けするのがいちばんだったという動かしがたい事実がありました。今はまた、コメのおいしさに定評が出始めています。牛乳加工品のブランドもなかなかできませんでしたし、やはり地域、風土のなかではぐくまれた歴史的産品の力の強さをつくづく思い知らされております。

◆ 旧村を単位として広域連携を

まとめとして、農業・農村づくりへの私なりの視点、課題提起、提案をいくつかお話ししたいと思います。

まず、担い手問題ですが、これは若者の農業離れや集落の生産機能の衰退等要因はいろいろありますが、根本にあるのは、「農業Ⅱ家業Ⅱ相続継承」という概念が、新規担い手の参入を妨げていることです。また、相続というのは分割していくことが基本概念ですから、それもネックになっている。

従来の相続は土地の継承です。経営と土地は農業の両輪ですから、これを一体的に継承するシステムをどうするかが問題で

す。

また、経営者意識のある担い手が極端に減少していることも問題です。今の若者が責任回避型で、権利は欲しがるのですが、決定権者になりたがらない体質であることと大きく関係しています。これは農業に限らず、中小企業、農業の担い手に共通の問題だと思われまます。

農業の持続的な発展への取り組みとしては、農業構造を経営農業と自給農業からなるものとして、農政そのものを構成しなおすということをご提案したいと思います。私は農業界もセ・リーグ、パ・リーグ方式で編成しようという言い方をしております、どちらがセ・リーグかと気色ばんで聞かれることもあるのですが、ともかく、今の構造を束ねると時間のかかる問題ですが、そういう発想があるのではないかと。

また先ほども少し話しましたが、農業における競争と協調のシステムとして、生命総合産業という概念が重要ではないでしょうか。「一掛ける二掛ける三」の話をしましたが、一次産業である生産、加工、販売・交流を足し算で六にするのではなく、絶対に掛け算で六にしなければならぬんです。今の地域は、どうも足し算で地域づくりをしているような気がします。農村に交流や加工拠点をつくるけれども、資源は外国から持ってきているというものが多くからです。本場に村のものを使っていいのか。足し算で本場に大丈夫なのか。農村は生命総合産業としての掛け算に執着しなければいけないのです。

さて、それでは具体的にはどうするかが問題になります。

昭和二十年、戦争で負けた後の胃袋ゼロの時代から始まる消費の構造は、コメでも肉でも何でもいいから食うものをつくれというのが国の至上命令でした。その政策下、生産物を市場に出し、高度な技術を開発し、その技術を普及するという役割を担ったのがJAだった。生産については農地改革によって画一的に一ヘクタールとされ、同質的なものでした。そうした国家的指導は戦後の復興期には役立つとは思いますが、問題は成長・成熟期に入った時の消費行動をどう見るかということですよ。私は多様化ということで、こう見ているんです。

成熟期には消費構造は、二〇、三〇、五〇%の比率で、特産品を含む高級品、良品、輸入を含む一般品という階層に分かれる傾向があると言えます。上位には二〇%の貴族的ソサエティがあって、ここは痩せても枯れても高級なものを食べるわけですが、残りをカバーする中間層は、三〇%は良品を時々食べ、常時は輸入品を食べるといふ構造にはぼなっているのではと考えます。

つまり、肉を年間十回食べるとするならば、今日は親戚も来るから和牛にするが、日頃は「母ちゃん、外国の肉だよ」というような感じですよ。そして、二〇%の——教授が社長かは知りませんが——の層は、松阪肉を食べているといった消費行動であると私は見えています。

問題は、こういう成熟市場になっているのに、生産構造がミ

スマッチを起こしていることです。それぞれの地域で、それぞれの技が必要で、売り方も、普及の仕方もあるに合ったものがあるでしょう。自分たちのつくる地域の風土から見て、この三つのゾーンのどこに入るのかを決める。こういう戦略を取った時、初めて「六」次産業の可能性が出てきます。

消費に対して生産がスマッチを起こしている状況である以上、どうしても税金で守ってやる農業になってしまった。生産構造に消費構造を合わせることも一案です。ゼロ円リゾートというのは、農場を開放することによって、消費者が農業に馴染みを持ち、生産構造のほうに歩み寄ってくれないかという試みでもあるのです。

次に、地域農業に対する私の思いなのですが、地域社会の縮小と地域経済の膨張、東京は日帰り圏という時代が来た。また、国際化、インターネット時代で、瞬時に物事が動く時代と考えるならば、広域農業企画・調整システムが必要ではないか。そうしますと、広域旧村、旧農協を単位とした営農システムという概念が必要ではないだろうかということです。そのなかには法人もあれば家族経営も、兼業農家もあれば、自給農業もいる。その役割分担を明確にして、提携を図る必要がある。

そして、その広域営農集団に対して先ほどの「六次化」を図り、流通システムを組み、都市農村交流を仕掛け、その広域規模で循環・リサイクル社会への対応をプランニングするというのが私たちの思いなんです。

そうしませんと、東京から北では集落規模が百戸から二百戸ぐらゐるのですが、西日本は一集落が十七戸ぐらゐ、十五ヘクタールぐらゐしかないわけです。コメを取ろうと思つたら八俵しか取れないような地域では、集落営農をやるうとしても、われわれもお世話しようがない。旧村単位だつたらわれわれもお世話できるんです。五百ヘクタールぐらゐのなかに兼業農家、専業農家があつても、一緒にやつていく役割が見えてくるんです。こういうシステムでない限り、なかなか経営体としては規模的に成立しないと思います。

最後に、土地利用については、営農区域を「経営農地」、「自給農地」、「交流農地」、「環境農地」に区分した利用体系を考えたい。この「環境農地」については、デカップリングというか、都市の皆さんが来て自給農業をする場としてはどうでしょうか。そしてプロの皆さんは経営農地、兼業の皆さんは自給農地というように、そうそうスキリとはいかないかもしれませんが、用途別に区分していかないと、耕作放棄地の解消と農地の効率的利用の担保はできません。これも、今の集落規模では西日本ではほとんど不可能で、旧村単位ぐらゐに結ぶと、振り分けが可能になります。ですから、農業経営にとつて「旧村単位」はこれからのキーワードではないかと思つていきます。

◆二リーグ制で農業再編を

安達 私は坂本さんの農場を三回も訪ねているのですが、それは坂本さんが卓見を持つておられるからで、その意見も抽象的なものではなく、四十年の実績に基づいたものです。

ご持論の「一掛ける二掛ける三」で、これからの農業は第六次産業というのも最初は語呂合わせのキャッチフレーズかと思つていた。ところがやつておられることを見ると、そんな疑念は雲散霧消した。

一つの鍵は、一九六〇年以降日本の農業はずいぶん変わったということ。言うなれば国が変なふうに変えたのです。コメは余つてしまうがないので、四割減反、一千万トン以上はつくるなどということである。それなのになぜコメの価格が高いのか。

たとえば、新潟の有機米は六十キロ四万円以上で売られています。もちろん市場経由でなく安全を望む消費者に直売しているからです。政府米は六十キロ二万円弱ですから自流通米との間で倍違う。主食の価値が倍違うというのも異常なこと。学者は市場の諸法則を言いますが、消費者は何を欲しがっているかで結局は決まってしまう。その点は日本では、坂本さんが言うように生産と流通と消費がミスマッチである。これが日本の農業のいちばん大きな問題であつて、それをうまく

マッチングさせれば、食糧自給率はもつと上がるのです。消費者が本当に欲しいもの、すなわち安全でおいしいものをつくれれば、外国のものは買わないのです。

米山 経営農業と自給農業とに農政を整理すべきであるというところで、セ・リーグとパ・リーグを例に出されましたが、もう少しご説明いただけませんか。

坂本 政策も団体も一本化しようとするから、両方だめになつていくんです。もっぱら農業を営む農家を国の施策のなかで経営農業者と位置つけるだけでなく、兼業農家にも頑張つてもらわなければならない。プロの農業者だけで日本の農業を守れる時代ではないんです。二リーグなり三リーグ制に整理して、それぞれの目的において農産物をつくり、また地域農業のなかで協力していくというシステムができないかという思いなんです。

自給農業ですが、売り上げが年間百万円以下だったら、利益は十万か二十万と見ると、生産者としては通用しますが、経営者とは呼べないと思うのです。でも、決してそれが無用のものだとは言っていないんです。

そして、われわれプロが、パ・リーグとしてでもセ・リーグとしてでもいいですが、本格的な農業を営む。

米山 投手力も増強する(笑)。

坂本 そうすると、自給農業者のほうも非常に活性化するんです。

米山 経営体としての農業と、生きるための生業、なりわいとしての農業とに再編するということですね。

坂本 土地の利用率は半々ぐらいでいいのではないかと思う

んです。

また、消費者にも一畝ぐらいはどんどん使わせてあげて、というのが私の持論です。農地付き賃貸住宅というかたちはどうでしょうか。

家はどこかに構えて、今年も鳥取、一年ぐらいいたら次は山口、さらに沖繩へというように賃貸住宅でホビータ的な農業をしながらあちこち転居する。楽しいし、村も活性化します。最近はやっていますが、私は都市住民の田舎への定住は賛成ではないんです。村の溝掃除、消防の問題、治安の問題などたいへんで、村にとってはお客様ぐらいがちようどいいと思うんです。

舛田 関連してですが、ご報告のなかで「農業Ⅱ家業Ⅱ相続継承」という概念がネックになっているというお話がありましたね。相続というのは何回も発生するわけで、個人としても、村としてもたいへんな問題になっているわけです。い言われたいような農地付き分譲住宅というかたちで土地の流動が可能になれば、継承問題がかなり変わってきますね。

◆思想改革としての脱農本主義

佐々木 お話を聞きまして、ご経験がもたなくなっており、たいへん説得力があることに強い印象を受けました。これは、ある種の思想改革の話として位置づけられるべきではないでしょうか。農家、農業、農地の継承、というように根本的な思想の

話になっているのです。

お話のなかでも非常に重要なのは流通の話と経営体の話で、これがほぼ結論になっています。先ほど安達先生が言われましたが、日本の農業は伝統的に消費というものを考えてこなかった。旧来の農本主義以来の思想でやっているから、消費に対応できなくなっているんです。大学の農業経済学の先生方の議論も農本主義に由来している可能性が高いですし、われわれもそれで教育された。このように日本は農本主義一色ですから、今日のご提案も思想改革とはつきり位置づけておかないと、広域企画、経営者集団の話も従来の生産者の概念とはまるつきり違うものだとということが曖昧になってしまふ。

また、広域農業企画・調整システムということで話された部分ですが、経営者集団の農家ともう一つの自給農業集団があって、その二つは峻別されるものだとしながら、それをまた一緒にして地域のなかへ入れてしまうのは、新しいシステムだとしてもちよつと矛盾があるような気がします。

坂本 先生、さすがと思いますが、私のいちばんの問題点をお突きになっているんです。私の限界で、本当に迷っています。

米山 そのあたりがご苦労なされたコミュニティとの摩擦問題に関係してくるわけです。

私の感覚では、旧村単位というまとまり、古いコミュニティ、自然村というものは、いわば動物的本能で続いていると思うのです。DNAのなせるわざというべきでしょうか。

人間は本来群れをつくって生きており、基本単位は家族、それが集合して村などに定着し、一万年來生活を営んでいるのですから、一万年の伝統はいくら頑張ってもなかなか壊せないという部分もあつたのです。

坂本 水は一緒ですし、習慣も旧村はだいたい一緒です。

米山 それは壊せないものだと思つておいて、そのなかでどういふふうにいじれるかを考えたほうがいいのではないかと思います。

加藤 消費者が農業を変えろという先ほどの安達先生のお話でしたが、法人化しなくても今のインターネット世界ではかなりの可能性があるのではないのでしょうか。

たとえば、ヤマイモというキーワードを入れて検索しますと、百件ぐらい出てきます。茨城県何とか村誰さんのホームページにアクセスすると、ヤマイモ三キロいくら、箱詰めでゆうパックで送ります、と詳細が出ています。加工プロセスなしですから、「一掛ける二掛ける三」の「二」を抜いたものですが、トマトですと検索すると三百件ぐらい出てくるのです。こういう展開も今後の戦略として考えられると思うんです。

坂本 私の持論は農家が六次産業をやれという意味ではないんです。コメをつくるだけでいい、という精神ではいづれ農業者はまた搾取されてしまうという、闘いの一つの旗印として六次産業を掲げているんです。加工・販売の二も三も、われわれが積極的にアタックして奪取しなければという姿勢なんです。

インターネットの一つの問題点は大量のアクセスがあった場合、どう対応するかということです。インターネットはそこをよほど慎重にやらないと、注文に応えられないと激しい非難の標的になるというケースがあるからです。消費者が成長してくれば、半年待とう、来年を待とうということにもなるのです。

加藤 ページを開いて、品切れですと出てくると、消費者は満足しないでしょうね。

坂本 「農業は生命産業だから待ちますよ」と思ってくれる消費者が半分ぐらい出てくれば、日本の農業の自給率はぐっと上がってくると思います。

消費者教育はそう簡単にできませんが、農場開放はその意味でも効果が出ているんです。われわれのグループには年間八十数人面接に来るのですが、そのうち十五人ぐらいは、ゼロ円リゾートの農場体験組の子どもたちなんです。何が何でもこと決めて、面接にやってくる子もいました。ですから効果が出るには十年ぐらいはかかりますね。

◆「村の厚み」を回復する

須藤 中山間地のお話が出ましたが、最近よくあるイベントとして、棚田を持っている村々が棚田サミットといったかたちで議論を重ねたり、都市と農村の交流を通じ、都市の人たちを

耕作に招いたりしていますが、なかなか苦勞されているようです。

その点で、坂本さんのご提案のうち経営農地とか自給農地、交流農地、環境農地という区分をして利用体系を確立するというのは、非常に面白いなと思いました。棚田の管理はいわゆる景観保全の面から強く望まれますのですが、現場でやっている方々は非常にたいへんです。労力と採算が合わないのだんだん崩れていってしまっ、それを周りが惜しんでいるというのが一般的です。ここを坂本家で解決できそうに思うのです。

坂本 区分を明確にすれば国民の皆さんのほうである程度許してくれると思っています。消費者に、「この土地を見てください、あなた方の協力がなければ守れないんですよ」という話をすべきです。

須藤 これは、私のところは営農地、私のところは環境農地というように自己申告制を考えたらいいですね。

米山 環境農地というのは、国土保全農地にしたらいいのではないのでしょうか。

坂本 自己申告というのはなるほどだと思います。ただ、環境農地候補地には兼業農家も散在しているわけで、たとえばうちのところも三十ヘクタールで水利が三十に分かれているほどバラバラなんです。兼業農家ほど農地を不動産と意識しており、また、不在地主の方ほど不動産志向です。相談しても簡単にはいかず、難しいところです。

佐々木 農地法を変えるのはたいへんな理論武装が必要ですね。

宮本 今のお話のように生産物や土地の管理という視点から見てもそうなんですが、結局、村の厚みというものが戦後、薄くなってしまっていることです。どこも単純な、同じような集落になってしまっている。

その意味で旧村という括り方を提唱されていることに「ああなるほど」と思ったと同時に、今の区分利用体系のお話もそうですし、農業法人をつくって六次産業化というご提案も、すべて本来の村というものの必要な構造、厚みを回復しようという狙いと考えられますね。

坂本 そういうことなのです。私の親父たちがやっていたのは「六」だったのです。漬け物をつくって、東京の仲介なしに地域に流通させていたではないですか。まさに親父の農業に戻るといふことなのです。

宮本 お父さんの農業よりも少し前かもしれませんね。

しっかりと親方の地主がいたりして、彼らが、もつと大きな地域外との関係を取り結んだり、個々の農家では消化できない周辺の生産等を担当したりという時代、ですね。それを、世の中の事情に合わせて、もう一回新しいかたちで地域づくりに適応しようという、具体的なやり方としてお話を聞いていました。

坂本 それほどわれわれは深く考えていたのではなく、「生

きてきたらここに来た」というのが実感です。これを皆様方に理論つけていたいただきたいですね。

宮本 まさに、生きてきたから「あるべき姿」をおつくりになったのだと思います。

坂本 表1を見ていたできたのですが、この人数、男女比、年齢構成、これは仕掛けたわけではないんです。私が仕掛けてこんなことはできません。計画が狂ったり、辞めたり、失敗して、三十年やってきたら、年齢も男女比もこうなったということです。だからこそ持続的なのもかもしれません。この構成は恐ろしいぐらいです。法人なんです。男性も女性も、じいちゃんもいるし、若い者もいるしという点で、一軒の農家として“生きて”いるんです。

(第四十回 二〇〇〇年五月十三日)

表1 船方農場グループの就業者の現状

①グループ就業者数	55名(男33・女22)	
②出身状況	農家出身 16人	非農家出身39人
③年齢別就業者 (平均年齢45歳)	20代 20人	
	30代 8人	
	40代 9人	
	50代 11人	
	60代 7人	
	合計	55人

「日本の村の将来」研究会 全リスト

開催年月日	回数	テーマ
1982.3.5	第7回	講師／加藤秀俊 学習院大学教授 日本の村の将来※ 対象地／岡山県美星町
1982.1.12	第6回	講師／高柳栄、若林良知 学習院大学学生 カツオ一本釣漁の将来※ 対象地／鹿児島県枕崎市、高知県土佐清水市
1981.7.5	第5回	講師／阿南透、鶴飼正樹、酒井直広 京都大学学生 祭りから見た山村の将来―京都北山の火祭り―※ 対象地／京都北山、花背八軒町、広河原、久多、雲ヶ畑、鞍馬
1980.12.4	第4回	講師／小林亥一 中学校教員 青ヶ島の話※ 対象地／東京都青ヶ島
1980.6.6	第3回	講師／舛田忠雄 山形大学助教授 漁業から見た村の将来※ 対象地／山形県鶴岡市加茂
1978.1.12	第1回	講師／神崎宣武 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所事務局長 吉備高原の村について※ 対象地／岡山県美星町

21世紀フォーラム掲載号
※冊子形式レポート

開催年月日	回数	テーマ
1985.2.16	第13回	講師／降幡賢一 朝日新聞記者 "米"について※ 対象地／秋田県
1984.11.17~18	第12回	講師／安達生恒 社会農学研究所所長 農村の変化と農業経済学 第十八号(一九八三年十月掲載)
1984.5.11	第11回	講師／宮田登 筑波大学教授 アメリカの日本民俗学研究 第十九号(一九八四年一月掲載)
1983.9.19	第10回	講師／高橋潤二郎 慶應義塾大学教授 より良い生活空間の創造のために―日本の農村の存在証明― 第二号(一九八四年六月掲載)
1983.6.11	第9回	講師／神崎宣武 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所事務局長 岡山県美星町の式年祭をめぐって―現地調査報告― 第三号(一九八五年二月掲載)
1982.6.11	第8回	講師／神崎宣武 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所事務局長 村と祭りの今後 第二四号(一九八五年五月掲載)

21世紀フォーラム掲載号
※冊子形式レポート

* 本冊は開催当時
** 第2回は部会メンバーによる検討会

1989.7.18	1988.12.19	1988.7.19	1987.12.3	1987.2.3	1986.3.31	1985.7.12	開催年月日
第20回	第19回	第18回	第17回	第16回	第15回	第14回	回数
<p>講師／佐藤守 岩手県藤沢町町長</p> <p>深みある町づくりをめざして―岩手県藤沢町の実践―</p> <p>第三八号（一九八九年八月掲載）</p>	<p>講師／高橋良藏 農業作家</p> <p>農業に明日はあるか―秋田県羽後町貝沢集落の取り組み―</p> <p>第三七号（一九八九年四月掲載）</p>	<p>講師／神崎宣武 宇佐八幡神社禰宣</p> <p>宮本常二の民俗学と農村振興</p> <p>第三五号（一九八八年八月掲載）</p>	<p>講師／竹田廣次 山形県長井市商工会議所会頭</p> <p>地域経営の理念と方法</p> <p>第三三号（一九八八年二月掲載）</p>	<p>講師／叶芳和（財）国民経済研究協会理事</p> <p>日本の農村の蘇生</p> <p>第三〇号（一九八七年三月掲載）</p>	<p>講師／高橋裕 東京大学工学部教授</p> <p>日本の河川と生活文化</p> <p>第二七号（一九八六年四月掲載）</p>	<p>講師／仁科英磨 公営企業金融公庫資金課長・前国土庁地方振興局過疎対策室長</p> <p>過疎対策の現状と展望</p> <p>第二六号（一九八五年十二月掲載）</p>	<p>テーマ</p> <p>21世紀フォーラム掲載号</p>

1993.1.9	1992.9.24	1991.11.8	1991.6.5	1990.11.4	1990.7.23	1990.1.23	開催年月日
第27回	第26回	第25回	第24回	第23回	第22回	第21回	回数
<p>講師／山本源一 静岡県松崎町町役</p> <p>漁業と観光のはざまでの町づくり―伊豆・松崎町―</p> <p>第四七号（一九九三年四月掲載）</p>	<p>講師／加藤秀俊 放送教育開発センター所長</p> <p>村の将来と日本人</p> <p>第四六号（一九九二年十二月掲載）</p>	<p>講師／宮田正植 秋田県大湯村村長</p> <p>情報発信地としての農村―秋田県大湯村の村づくり―</p> <p>第四四号（一九九二年三月掲載）</p>	<p>講師／中西通 丹波古陶館館長・兵庫県篠山町商工会会長</p> <p>生活の器としての町づくり</p> <p>第四三号（一九九二年十月掲載）</p>	<p>講師／高橋彦芳 長野県米村村長</p> <p>土着の精神に根ざして―秘境 秋山郷はいま―</p> <p>第四二号（一九九一年五月掲載）</p>	<p>講師／清野美智夫 山形県朝日村企画課博物村センター係長</p> <p>夢と誇りの持てる―山形県朝日村のイベント地域づくり―</p> <p>第四一号（一九九〇年十一月掲載）</p>	<p>講師／森部賢一 福岡県朝倉町農業組合次長</p> <p>博多万能ねぎと地域活性化―福岡県朝倉町の試み―</p> <p>第四〇号（一九九〇年六月掲載）</p>	<p>テーマ</p> <p>21世紀フォーラム掲載号</p>

1996.6.24	1995.10.21	1995.7.19	1995.2.18	1994.7.20	1994.2.19	1993.6.22	開催年月日
第34回	第33回	第32回	第31回	第30回	第29回	第28回	回数
<p>講師／渡部忠世 京都大学名誉教授</p> <p>イネから見たアジア</p> <p>第五八号（一九九六年九月掲載）</p>	<p>講師／岸三郎 兵衛 林業家 渡部俊治 大工職人 栗田和則（署らし考房） 主宰</p> <p>ふるさと金山町に生きて</p> <p>第五六号（一九九六年三月掲載）</p>	<p>講師／岸宏一 山形県金山町町長</p> <p>水清き杉のふるさと——山形県金山町の町づくり——</p> <p>第五五号（一九九五年十一月掲載）</p>	<p>講師／宮本慶一（有）グリーンラフ代表 鶴山正行 AGCA T農園</p> <p>農業に新しい風を</p> <p>第五三号（一九九五年三月掲載）</p>	<p>講師／田上隆一 農業情報利用研究会事務局長</p> <p>情報化による農業の再生</p> <p>第五二号（一九九四年十二月掲載）</p>	<p>講師／岩原昇 福井県宮崎村村長</p> <p>土と炎と緑のふるさと越前陶芸村——福井県宮崎村——</p> <p>第五〇号（一九九四年四月掲載）</p>	<p>講師／安達生恒 社会農学研究所所長</p> <p>過疎山村の再生</p> <p>第四八号（一九九三年八月掲載）</p>	<p>テーマ</p> <p>21世紀フォーラム掲載号</p>

2000.11.24	2000.5.13	1999.10.16	1999.3.15	1998.6.20	1997.12.18	1996.11.16	開催年月日
第41回	第40回	第39回	第38回	第37回	第36回	第35回	回数
<p>講師／福田アジオ 神奈川大学教授</p> <p>民俗学のこれから——柳田国男から宮田登、そして今後は——</p> <p>第七七号（二〇〇一年三月掲載）</p>	<p>講師／坂本多旦（有）船方総合農産代表取締役</p> <p>激動期の農業と農村を見つめて——第六次産業の創造——</p> <p>第七四号（二〇〇〇年七月掲載）</p>	<p>講師／織田寛嗣 石川県立白山ろく民俗資料館館長</p> <p>白山ろくの農民の知恵と樹皮文化</p> <p>第七一号（二〇〇〇年一月掲載）</p>	<p>講師／安達生恒 社会農学研究所所長</p> <p>柳田国男の『農業政策』をめぐる</p> <p>第六九号（一九九九年七月掲載）</p>	<p>講師／村田柴太 岩手県議会議員・元大迫町町長・株エーデルワイン代表取締役</p> <p>神楽とワインの里——岩手県大迫町——</p> <p>第六八号（一九九八年十月掲載）</p>	<p>講師／佐々木高明 国立民族学博物館名誉教授</p> <p>「焼畑」——森林文化を考える——</p> <p>第六四号（一九九八年三月掲載）</p>	<p>講師／杉原昇 岡山県美星町町長 神崎宣武 宇佐八幡神社鎌宜</p> <p>星と神楽の里——岡山県美星町——</p> <p>第五九号（一九九七年一月掲載）</p>	<p>テーマ</p> <p>21世紀フォーラム掲載号</p>

対象地一覽



関連年表

1980-89 昭和55-63 平成元	1970-79 昭和45-54	1960-69 昭和35-44	1950-59 昭和25-34	1940-49 昭和15-24	西暦 元号	
<p>82・6 東北新幹線開業</p> <p>81・3 神戸ポートピア開幕・赤子ローカル線77路線廃止決定</p> <p>80・8 地ワインによるワインブーム</p> <p>80・3 記録的冷夏</p> <p>80・3 手取川ダム完成</p> <p>79・1 第2次石油危機</p>	<p>78・5 成田空港開港</p> <p>78 「地方の時代」提唱</p> <p>75・7 沖縄国際海洋博覧会開催</p> <p>75・3 山陽新幹線開業</p> <p>75・11 第1次オイルショック、狂乱物価</p> <p>73・2 円、変動相場制に移行</p> <p>72・5 日本列島改造論(田中角栄著)</p> <p>72・2 沖繩返還</p> <p>72・2 冬季オリンピック札幌大会</p> <p>70・3 日本万国博覧会開催</p>	<p>64・10 東海道新幹線開業・東京オリンピック</p> <p>63・1 黒四ダム完工</p> <p>62・2 農業人口が、全労働力の3割をわる</p> <p>61・9 第2室戸台風・御母衣ダム完成</p> <p>60・10 NHK・民放カラーテレビ放送開始</p> <p>60・9 自民党、高度成長・所得倍増政策発表</p>	<p>59・9 伊勢湾台風</p> <p>57 岩戸景気始まる</p> <p>56 なべ底不況始まる(58末)</p> <p>53・2 NHK・民放テレビ放送開始</p>	<p>49・8 キティ台風</p> <p>45・8 広島・長崎原爆投下、終戦</p>	●国内のできごと	
	<p>77・10 第3次全国総合開発計画(三全総)決定 — 人間居住の総合的環境の整備 —</p> <p>74・6 国土利用計画法成立</p> <p>74・6 生産緑地法成立</p> <p>70 減反政策</p>	<p>69・7 農業振興地域の整備に関する法律</p> <p>69・5 新全国総合開発計画(新全総)決定 — 豊かな環境の創造 — — 地域間の均衡ある発展 —</p> <p>62・10 全国総合開発計画(全総)決定 — 地域間の均衡ある発展 —</p> <p>61・12 農業基本法公布</p> <p>60・6 新日米安保条約自然成立</p>	<p>52・7 農地法公布</p>	<p>47・5 地方自治法公布</p> <p>46・11 日本国憲法公布</p> <p>45・12 GHQが農地改革を指令(49・3)</p> <p>42・2 食糧管理法公布</p>	●地域振興・国土計画関連法制度等	
<p>80・9 イラン・イラク戦争勃発</p>	<p>78・9 キャンプデーレット会談 (エジプト・イスラエル和平合意)</p> <p>75・4 サイゴン陥落ベトナム戦争終結</p>	<p>73・10 第4次中東戦争勃発</p> <p>71・8 米ドル防衛策発表(ドルショック)</p> <p>70 日米貿易逆転(対米黒字の増大)</p>	<p>69・7 アポロ11号月面着陸に成功</p> <p>64・4 OECD加盟</p>	<p>57・10 スプートニク1号打ち上げ</p> <p>56・12 国連加盟</p> <p>55・10 GATT正式加盟</p> <p>51・9 日米講和条約締結</p> <p>50・6 朝鮮戦争</p>	<p>45・8 第2次世界大戦終結</p> <p>45・7 ホツダム宣言</p> <p>41・12 太平洋戦争勃発</p>	●国際的なできごと

●編集後記●

「日本の村の将来研究会」現地見学会では、掲載した記録の他にも、さまざまな人々との出会い、また、多彩なエピソードに満ちている。その一つをご紹介します。

平成2年11月、紅葉の秋山郷で、秋田マタギの系統をひくくマ撃ち名人の話とうかがったのが印象深い。田舎裏を囲んで、クマや山の話、子供の頃に狐の嫁入り行列を見た話など座は盛り上がったが、「終戦の玉音放送をどんな状況で聞かれましたか」という問いには、「山以外のことは知らね」と毅然として答えられたのに、山人の矜持を見た思いがした。翁は、迎えにきたお嫁さんの運転で夜道を集落へと帰って行かれたが、先ほどの厳しさから一転して好々爺然としたその姿は、激動の時代、また過酷な生活環境を生き抜いた先の、家族に暖かく仕えられている幸福な山人の老後であった。(K)

●政策科学研究所とは●

1971年、現代社会の諸問題、諸課題に取り組むシンクタンクとして、学界と産業界の連携、協力のもとに発足した。民間非営利、政策志向を旨とし、また、現代の優れた知性をネットワークとして擁していることに強みを持っており、21世紀フォーラムもその一環である。研究対象は、経済社会システム再構築問題、エネルギー・資源・環境問題、地域振興・国土計画・都市問題、技術政策・技術経営・人材問題の4領域をフィールドとしている。

21世紀フォーラム

特別号「いま、地域に生きるということ」(第78号)

発行：2001年3月31日

発行所：(財)政策科学研究所

東京都千代田区永田町2-4-8東芝EMI永田町ビル5階

〒100-0014

tel 03-3581-2141

fax 03-3581-2143

E-mail forum@ips.or.jp

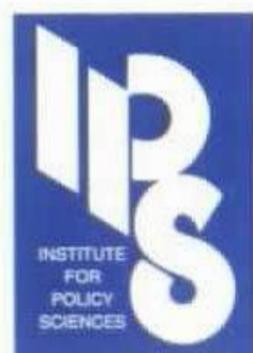
URL <http://www.ips.or.jp>

編集：小浜政子、藤澤姿能子、高取明香

編集協力：(有)文字工房燦光

印刷：(株)アサヒコーポレーション

Printed in Japan © (財)政策科学研究所



■21世紀フォーラム「いま、地域に生きるということ」(第78号) 2001年3月

ISSN 0914-0840